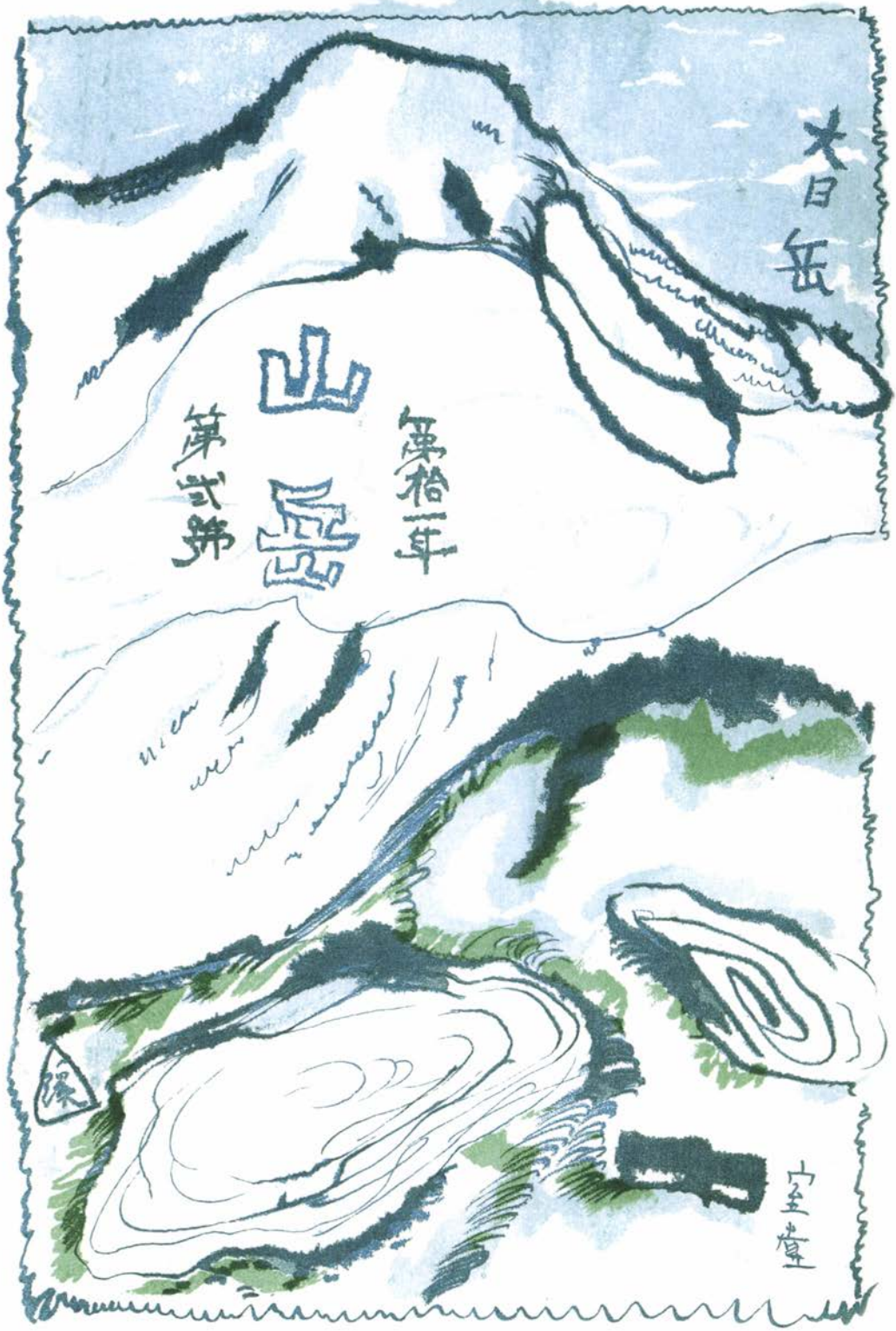

大日岳
山岳
第拾一年
第弐號
深
宮澤

三窓の雪霽
宵十二月
茂

山岳

第十一年第二號

大正五年十二月

目次

（大正五年十二月廿八日發行）

表紙……富田溪仙氏筆
卷頭畫……三窓の雪溪……（コロタイプ）……茨木猪之吉氏筆

挿圖

山に登る人三人……茨木猪之吉氏筆……六四頁
エリオットウェンクリよりフィンシュテラールホルンを望む……辻村伊助氏撮影……八八
シュレックホルンのクーロアール……同……上……九六
遭難の後……同……上……一〇四
ヒルテルフィンゲンよりニーセンを望む……同……上……一一二
トゥーンネルゼーの夕（ベヤテンブーフよりシュトックホルンを望む）……同……上……一二〇
ブリュームリスアルプホルン……同……上……一二八
エッシネンゼー……同……上……一三六
長次郎澤にて……同……上……一五二
つるぎ澤にて……同……上……一六八
女學生の登山振り……夕陽丘高等女學校登山部……一九二

本欄

岩井谷と藥師ヶ岳……冠松次郎……一頁
尾瀨の事ども附至佛山……沼井鐵太郎……一七
日光遊行雜記……理學博士武田久吉……二八
霧島の山々……明石國助……四八
槍ヶ岳から日本海まで……文學士田部重治……六〇
スウィス日記（四）……農學士辻村伊助……八三
黑部川奥の山旅（中編）……木暮理太郎……一三五

雜錄

○淺間山より男體山まで（木暮）○嘉陵紀行（木暮）○遭難記（中村孝三）○秩父遭難に就て（木暮）○秩父遭難の原因（甲藤新）
○山案內者に對する批難に就て所感（はひまつ）○立山溫泉の新設備（岳雄）○伊藤君へ（木暮）

圖書紹介

○日光の栞（H、T、）

各地山岳會彙報（四）

○一高旅行部○二高山岳會○三高山岳會○慶應義塾山岳會○京都府立第一中學校山岳會夏期旅行○臺灣登山會○大阪府立夕陽丘高等女學校登山部近況

雜報

○燒岳と淺間山○御嶽山○赤城山中の遭難○涼樹閑話

會報

○信濃鐵道割引乘車券發賣の事○山岳寫眞展覽會○會員登山報○高山深谷第八輯の豫約募集○第九回大會豫告○編輯係より○訂正
○新入會者

岩井谷と藥師ヶ岳

冠　松次郎

雲煙もなく晴れ渡りし夏の眞晝、富山の平原より打眺めし、雪の隈取目覺ましき、立山連峯、五色ヶ原に連らなる大鷲、奥大鳶、越中澤の三山の右に踞高せる、藥師ヶ岳の大いなる山の姿に恍惚たる折、試にひき連れたる人夫にその山の名を問ひし處「あれは立山の前山です」とのみ事もなげに云はれ、何時もながら山民の山に對する興味の貧弱なのに、啞然として返す言葉も出なかつたのはもう去年になつた。

實際越中で藥師ヶ岳と云はれて、人毎にうなづくのは、その山懷の有峰の村民か、飛驒の有峰寄の住民位のもので、芦峅寺あたりでも立山の名は勿論有名になつてゐるが、藥師ヶ岳の名は甚だ著はれてゐない。六年以前に辻本氏の登られた時も、今も差したる相違はない樣だ、只五色ヶ原の方へ縱走する羚羊の樣な山客が殖え、絶巓の雅びた白木の宮が、風雪の爲に吹き仆されては根氣よく建て替へられ、曾て山頭を飾つてゐた二等三角點が、何時の間にか伐り仆されてしまつた位なもので、眞川の川筋に巢くつてゐた側師の群が居なくなり、その溪水は益々深刻に、岩井谷は年々荒蕩として常願寺川の水源地に荒くれてゐる。そして高い〳〵その源頭に蟠まつてゐる藥師の大嶺は、つい鼻先の水昌山（黑岳、信州呼稱）や黑部五郎の嵩岳と相鼎坐して、幾千年も同じ樣な鬚面を撫でて、黑部源頭の碧落に嘯いてゐる。

從來知られて居る藥師の登路は、有峰から太郎兵衛平を經て行くのと、水昌山の方から祖母平（雲の平、信州呼稱）を經て藥師のドウから登るのか、或は上の岳から越中澤岳の方向へ縱走する道筋で

あつて、眞川方面岩井谷の登路がまだ探られてゐないのと、東京から有峰を經て登るよりも、立山温泉へ出で五色原の方から行くよりも、近い筈に思はれた爲、自分は今年岩井谷を登山路に選んだ。

芦峅寺―眞川の出合

妙高山麓の高原を單めて、しと〳〵と降りしきつて居た春雨の様な朝雨も、糸魚川邊まで來ると日本海上の雲が處々綻び初めて、西の空が何時しか淺黄色となり、滑川驛に着いた時分には全く快晴になつて、ハガネの様な大空に、きら〳〵と光る强烈な夏の日となつた。

立山鐵道に乘つて五百石で降りると、平藏が迎ひに來てくれたので、荷物を托して、夕方芦峅寺へ着いて、一年越しでなつかしい山村の客となつた。

七月十八日、(大正五年)午後七時出發、空は晴れてゐるが浮雲が繁く往來して、何となく心許ない。去年は藤橋に茶屋が一軒しかなかつたのが二軒にふえ、砂防工事の事務所と掛札のある新しい建物が二軒と、人夫小屋が三軒程出來て、何となく賑やかになつた。温泉道は去年の荒れで隨分崩壞してゐるので、多數の人足が入つて路を修繕してゐる。石を割るタガネの音や、ダイナマイトの響が山路に不似合な感じを與へる。生憎と午前九時頃から豪雨になつて、途中の木挽小屋で二三度雨休みをして、午後零時過になつて、漸く眞川と湯川の出合の少し上で湯川を渡り、對岸にある人夫小屋に着いた。雨が歇みさうもないので荷を解いて、濡れた衣服などを焚火に乾かし、晝食を使つて休んでゐた。立山温泉を廻つては道が大分損になるので、此處から眞川へ降り、岩井谷へ行く豫定だつたが雨が降つては前進はむづかしいから、愈々歇まなければ今夜はこの小屋に厄介にならねばならない。

午後三時頃から空が晴れかゝつて來たので、一度解いた荷物を纏めて、眞川へ向つて出發した。小屋の傍の崩れを越して、楊や虎枝の茂つた苔豐かな石逕を降つて河原に降り、眞川の落ち口に懸つて

ゐる粗末なつり橋をひろつて其右岸に出て、絶壁と大石を昇降して行くと、九十九折の舊道に架けられた、眞川の大橋の受木が兩岸の崖の上に寂しく名殘を留めてゐる、約一時間程亂石の間を彷徨して、徒渉の出來さうな處をあさつたけれども、眞川の水量は案外饒大にして、滔々として流れるその水勢は到底徒渉を許さない、大骨折つて漸く斷岩をへづると、其處が瀧になつてゐるので避易して、又元の釣橋に戻り、左岸に出で、荷を卸し河原の平砂地を選んで夜營の仕度をしたが、まだ思ひ切れず、平藏を促して左岸の樣子を探らせにやつた。四十分程經て歸つて來たが、兎に角話しの樣子では左岸は猶惡さうだ、懸崖をへづらうとして杖を先へ渡して置いたのに、足場が惡く危險なので杖だけ置去りにして戻つて來たとのことであつた。相談の結果河原傳ひを斷念して、又夜營の仕度を撤して、午後六時過に先刻の小屋へ戻つて、其夜は殘念ながら小屋へ泊ることゝした。

この小屋には二十五人程の若物が泊つてゐて、毎日温泉道の方へ挽き上げた材木を運搬してゐる。燃料が充分な、風當りの少い大きな小屋で、親切な小屋の取締が蒲團を幾枚か貸してくれたので、可なり安樂な夜營をすることが出來た。この附近は尾根上から大きくそがれた一面の大崩壞の跡で、樹木などは全くなくなつて荒廢を極めた殺風景の處だ、然し西方常願寺川の川筋を、幾筋もの襟をかき合せた深綠の色美くしく折れ重なつた尾根の間に、茜さす夕榮の空を眺め入つた景色は何とも云へぬ快さがあつた。

眞川―岩井谷上流の落合

七月十九日朝快晴、小舍の人々に禮を云つて午前六時十五分出發、河原の方へ行かずに尾根を横ぎつて數合谷に出る豫定で、背後に續く尾根の一番左の凹を目がけて、水の少い細溪を登る。十五分程上り振り向くと先刻の小舍は小さく見え、湯川の向ふの崖道を材木を横一文字に背負つて行く人夫共が

隊を爲して、三々伍々溪を横ぎり森林に隱見して行くのを見ると畵の樣だ。

こゝで道を探す爲に平藏と春藏が前方の森の中に入つて行つたので、自分は岩の上に腰を掛けて暫くの間その音づれを待つてゐた。約三十分たつて平藏が右の繁みの中からひよくりと現はれた、話しの樣子では道はなさそうなので、詮方なしに方向を定めて密林を分けて行くと、少し許りの平地に山毛欅や樺の大木の伐り株が狼藉として、それから暫くの間木を伐り出す爲の路が付いてゐた。その內に春藏が歸つて來たが、森が深いので道はとても分らないと云ふ。九十九折の舊道へ出たが其先は全く人跡を認め得ない。欝々たる密林丈なす雜草の繁み押し分けながら、喘々焉として登つて行く氣持はあまり好いものではない。何時の間にか平藏が見えなくなつた。オーイと呼ぶと、暫くたつて思ひがけない方向で返事が聞える、その方へ手探ぐりに行つて、又聲を掛けると今度は反對の方で返事がする樣だ、何んだ八幡の籔しらず見たいだと一人言を云ひながら登つて行く內、だん〳〵尾根上近くなつて、一寸北方が開けると、奧大日岳が阿彌陀ヶ原の上からそのイガグリ頭を突き出した。

白樺・みづ木、山毛欅、山エン樹等が欝葱として、桂の大樹に樹が假松の樣に横倒しに生ひ延びてゐるので、歩行が非常に困難になつた。加ふるに尾根近くは一面に連續してゐる岩穴で、苔むす巨岩が黑く燻ぶつて、其內を覗くとその深さが底知れない樣で氣味が惡い、此處一帶には大分熊が棲んでゐると云ふことだ。

午前八時二十分もうどの位進んだか一向分らないので、右の斜面を大廻にへづつて眞川向きの崖の上らしい處へ行くと、巨岩の前に少し許りの焚火の跡が殘つてゐる、餘程以前に獵夫でも入つた時のらしい、眞川の水音がさやかに聞えるが河原は見えない、然し對岸に屹立つてゐる崖が見えるので略ぼ方向が分つた。平藏は此處は三枚瀧の上だと云ふ、兎に角隨分な高さまで來た、もうこの尾根側を廻つて谷を下りさえすれば數合へ行ける筈だからと、大きな尾根へづりをやつて、一層陰森な谷の上

へ出た。

尾根の頂きは直きにこの上らしい、餘り疲勞したので暫く休んで、午前九時十五分降りにかゝる、五十度近くもある峻急なこの谷を降るのは、谷を下ると云ふよりも崖をずり降りる樣な心地がする。生憎樹木が疎らになると、却て雜草がうるさく生ひ茂つてゐるので、手足のかゝり場の具合が惡い、つるべ落しに降つて行く一行三人が無性に辷る樣は見苦しいものだ。そして運惡く行くと岩の間隙へ落ち込んでしまふ、自分の樣な荷のないものは樂に上れるけれども、七八貫目もある荷を負ふてゐる春藏なぞは一寸くら上つて來られない。隨分降ると勾配が緩くなり、大木の切株が所々に見え出して漸く人跡を認め得られる樣になつた。遙か左下に眞川の河原が可なりの廣さに彎曲して、數合谷がそれに落合つて、クリーム色の川原の中を、流水が白絹の縺れの樣に美くしく光つて行く。

午前十一時二十分、やつと斜面を降り切つて平坦な草原に出ると、雜草の茂りの中を流水が縱橫に流れ迫つて、川楊や白樺なぞが繁つてゐるなつかしい河原近くの風情となつた。山裾に付いて右折して正午數合の落口に辿りつき、磊々たる大石の河原に荷を下ろして、氷の樣な溪水に嗽ぎ、身體を拭き顏を洗ひなどして漸く人心地がつき、一呼吸つくと三人申し合した樣に顏を見合せて、酷い降りだつたなあと云つた、振返つて眞川の急流を見下すと、兩岸に連らなる懸崖が廊下の樣に狹まつて、昨日間誤ついてゐた絕壁などは直き近くに見える。河原傳ひに來るともの丶一時間もかゝらずに通れる處を、水の多い爲にいやな尾根を半日もかゝつて、然も非常の努力によつて昇降して來たのを思ふと怨めしくなる。

中食を了り暫く午睡を貪る。遮蔽物のない亂石の河原に、皮膚を刺す樣な强烈な夏の日射しを受けてゐても、眞川や數合の水上から吹き落ちて來る冷風を身に浴びると何となくのんびりした氣持になる、谷上の碧空の面をむら〳〵と縺れ合つてゐる白金の樣な色の夏雲を仰ぎ、轟々とうなりを生じて

落ち込んで來る數合の瀨音を聞いてゐると、夏の自然の森閑たる氣分が迫つてくる。

午後一時少過發、河原の直ぐ後ろの繁みを押し分けて少し上ると村杉平の道に出る。平と云ふけれども急坂續きの立派な山道で、三ッ程ある平地が山坂の間に狹まれて、眞黑な灰の樣にぶく〳〵した土の面を堀つて小川が幾筋も勝手氣儘にのさばつて行く。熊笹や蕗、大虎杖が一面に森林の下を埋め、溝の樣な石道には、ちよろ〳〵と清水が流れ、マイヅル草、岩鏡、岩黃耆が、ふつくらした青苔の上に夥しく繁殖してゐる。數合からこの平の頂き迄は道も付いてゐるし、嶮岨な處もなく、至極樂だ、そして周りの自然が如何にも原始的で、人跡の稀薄なことを思はせる。

頂上は可なり廣い草原になつてゐる。伐採の入つた爲林が疎らになつて、そして杉の大木が四五本原の中に寂しく立つてゐる、村杉平と云ふ名はこの杉の爲に名づけられたので、この附近一帶にはこの外に杉は全く見當らない。

降りにかゝる、左に廻りながら暫しの間急な降りを行き谷の上へ出ると、絕壁に突き當つてしまつた。其中程に道が付いてゐたのが、山崩の爲に著しくそげとれて危險の樣に思はれた、平藏が足がゝりを作る爲に一人で先へ行つたが、幸に別段心配する程のこともなく、どうやら通り拔けて、栃の大木の根方に來ると、大きな猿の足跡が幾つもぬかるみに印されてゐる、その主はもう先刻人間の侵來に驚いて姿を隱したらしい、「また野郎こゝに（棲んで）居やあがるな」と云ふ樣なことを云ひながら、平藏が左の藪の方へ切れて行く。又暫くの間急坂を駈け降りると一面の茫々たる草原に出た、羊齒、大虎杖、薊などが一丈餘も生長して、道の跡など全く消え失せて分らない、僅に足でさぐりながら草を押し分けて行くのだが、濃霧の中を行く樣な心地がして其苦しみは豫想外だつた、そして午後四時頃になつて眞川の河原に降りたときは、夜が明けた樣な氣持がした。

この邊の眞川は河原が二三町の幅に廣がつて、一面の砂と小石の原になり、楊が所々に集團して、

溪水が河原の中程を彫つてゴウ〳〵と流れて行く、前方を見るとヌズカズ附近から岩井谷の落口の下あたりまで、峻直の絶壁に溢られてゐた溪水が、飛瀑の樣な奔川となつて落下してゐる。

日はまだ高い、杖を振りながら森閑たる河原を氣まかせに行く、砂原の上に羚羊の足跡が無數に印せられて、鶺鴒が二羽程川楊の間を縫つて石の上を飛び廻つて居る。左岸に骨ばかりの小舍の壞れを二つ程見る、左の崖を上り川添の森林の中を行くと道はよく付いて居る、午後四時二十分、岩井谷の落口の上の山嘴に出ると、黑檜や唐檜などで組立つた、五間と七八間位の立派な小舍が建てゝある、家根は大分破れて居るが、まだ立派に宿泊が出來る、小舍の隅に四角な大きな枠が二つ立掛けてあるが、秋になつて、獸を取つた時その皮を晒すものらしい。

重荷を負ふて居る春藏は、大分疲勞れたと見えてもう泊りたい樣な顏をした。今考へると假令眞川が徒涉出來ないとしても、未明に芦峠を出て河原寄で尾根のへづりをすれば大概この小舍までは來られる、そして翌朝も早く出發さへすれば藥師の頂上を極めて太郎兵衛平迄は出られると思ふ、然し何れにしても眞川の水量の多い時は餘り樂な方ではない。

二十分程休んで、左折して岩井谷を右下に見て、崖上の杣道を上つて行く。自分はこゝまで來て岩井谷の立派なるに驚いた、その谷幅は數合谷の倍以上もあるし、水量も遙に多い、恐らくは本流眞川に比して遜色がない位だと思ふ、未だあまり伐採の入らない兩岸の森林は蓊鬱として、その樹幹は高く網代の如く青空を蔽ひ、十數丈下を淵に渦卷き岩に激し、白泡を吹いて淙々と流れ落ちて行く、その溪水は見るから淸冽純美なものだ。

山毛欅、栃、朴、白樺、黑檜などの大木の下を、熊笹や石楠を分けて行く、何時の間にかおく露で下半身びしよ濡れになる、道は兎に角付いてゐるのに、だら〳〵登りで至極樂な處だ、谷向ふに尾根の裾が重なつて、その下に骨ばかりの小屋の屋根がつぶれて居る、有峰から立山溫泉へ通ずる道は、

此尾根の凹を出て、谷を越し崖を上つて今來た小屋へ出るのだと云ふ。暫く行くと道の兩側に大木の切株が所々に見えて、崖下の森の内に黑檜の枝が切り卸されて居るのが堆くなつて居る、近頃この谷に人が入つたらしい、或はまだ上流の方に其人がゐるかもしれないと、これからいやに人跡計り注視する樣になつたが、遂に何人にも遭はなかつた。崖側を二時間程歩き、二度谷に降り、又崖を匍ひ上り、そして河原の彎曲部に突き當り、榛の木の小枝に縋つて三丈程の崩れをずり降て又河原に降つた。

此處は岩井谷上流の出合（陸測五萬分一圖に岩井谷と鳶谷との落合になつてゐる、）の一山嘴を隔てた直き下に當る處で、落合附近は夜營地に不適當の爲、此處に夜營することに定めた。岩井谷の水は對岸の絶壁の方へ傾いて、孌々と流れて行く、左側は巨岩と砂原の平になつた可なりの廣さがあつて、崖上の草の中にみすぼらしい小屋の廢趾がある。

午後六時二十分、焚火を始める、天幕を張る、床の代りに破小屋の家根になつてゐた薄い板を敷き詰めて、夕飯の仕度にかゝる、夕靄が四方の山隘から叢つて、淵のやうに流れて行く溪水の上には寒煙がスーイ〳〵と傳はつて行く、大分高くなつたので非常に底冷がして來た、手足の先が冷たくなつて、川筋から吹落してくる夕風に皮膚が縮むやうだ。

夜は星空の面を薄絹の樣な霧が烈しく去來してゐたが、時々藥師の上の方で雷鳴が響く、夕立雲が濛々として、すさまじく谷を駈け降りて、ばら〳〵と少時の間大粒の雨が天幕を叩いて居たが、軈て又星が處々に光り始める、東の山の端から二十日の月がひよつくりと顏を差し出して、朧の光を溪谷になげかけて、乞食の樣な生活をしてゐる山歩きの、寂びしい天幕を照らす。

七月二十日、宵の中はよく寢られたが、午前二時頃からまじ〳〵として少しも寢つかれなくなつた。漸く東が白み始めたので顏を洗ひに澁に行かうとすると、後ろの森の中から郭公が一聲鋭く叫んだ、空は薄曇りでなんとなく生温い風が谷を渡つて來る。

午前六時十五分出發、直前の藪を分けて山の鼻を横ぎると間もなく岩井谷の落合に出た、右のが本流で左の方が陸測五萬分一圖に鳶谷とあるものだ。谷幅水勢共に伯仲してゐるが稍本流の方が大きい樣に思はれる。鳶谷と云ふ名の出所はよく知らないが、今迄人跡のあまりない谷のことだから、支流が幾つか流れ込んでゐても別に名を付けられてゐない、芦峠寺や有峰あたりでは只をしなべて岩井谷と云ふてゐるばかりで、鳶谷と云ふことは聞かなかつた、數合谷に落ちる大鳶山の下の鳶谷はそれとうなづかれるが、岩井谷の本流になつてゐるものが藥師の支尾根から流れ出るのに、却つてこの所謂鳶谷は、藥師本岳直下附近の水を束ねて、深邃豪宕な溪谷を爲してゐるので、我々の樣な只山好の素人は若し相當の根據がないならば、鳶谷などと云ふよりも、寧ろ岩井谷の右俣左俣とでも名づけた方が適切の樣に思はれる。

落合から先は道全く絶え、溪谷のみに嚙り付いて行くので、先づ人跡未踏と云ふてもよい處だ。芦峠寺の者の話しでは二三年以前の三月頃、積雪の中を一日で、岩井谷の落口の小屋から藥師まで上下した者があると云ふことだ、けれども果して行つたか、又道をどう取つたかも分らない、殊に滿山積雪の裡を通過したことだから、谷の模樣なども殆ど夢中に通り過ぎたこと丶思ふ。

道を左溪に取る、行く手を見上げると豪壯な花崗岩質の巨岩大石が層々相重なつて、溪谷の中央に高く長堤を築き上げ、溪水が奔放の勢を以て逃げ場を探しながら急湍となつて飛躍して來る、もう此處からは深谷が益々荒廢して石が高い爲登攀の努力が一層だ。兩岸の崖側が屹立てになつて、隨分下の方まで濶葉樹林が美くしく繁茂して、その奥の方から駒鳥の聲が斷え間なくリン〳〵と響き渡る。

午前七時十五分、谷川の中央にのさばつてゐる六七間もある大岩に突き當り、左を廻つてその上へ出る、今迄間近の尾根で遮られて遠望がきかなかつたが、急に視界が遠くなつたので知らず〳〵前方の高空を打仰ぐと。

◎岩井谷と藥師ヶ岳　冠

暗赭色に連らなつた波濤の山その頂きが旭日を浴びて金色に煙つて、三つの大隆起が溪谷の行く手を壓して東の空に奔馬の如く立て廻されてゐる、自分は何の譯もなくその中央の山濤を、藥師の絶巓ときめてしまつた。そして暫く佇立したまゝ、醉つた人の如く恍然として行く處を知らなかつた。

隨分高い山だ、そして又實に深い谷だ、まだ〳〵あの上までの行程は非常なものだ。幾つも〳〵搔き合された尾根の襟が、追々と遠ざかつて行くに從つて、蒼黑、深綠、鮮綠色と、色彩の優麗を盡して、その行き詰りは滴る樣な新綠が、谷と云はず尾根と云はずぺつとりと初夏の色を漲らせて、大雪溪が一筋、秋水の樣に横たはつてゐるのが、燦として中央の山頭に深く喰い入つてゐる。何と云ふ深邃な谷だらう、私は岩井谷に滿足した、そして藥師の山濤を仰いで、その高邁の山姿、その奥深い岳影を見入つて、知らず〳〵涙線を濕した。

一昨日暑さに苦しめられた辛さも、昨日尾根で閉口した骨折も、何處かへ吹飛んでしまつて、身の内に清新の氣が溢れて、巨岩を昇降したり、奔流を横ぎつたりする努力が、却つて痛快に感ぜられて來た。この谷には淺瀨や砂原になつてゐる樣な悠長な處などは全くない、深谷がづん〳〵と伸びて行つて、絶巓迄は呼吸もつかせない程急峻な登りとなる、岩井谷とは好き名をつけたものだ、岩石の壯大にして奔川深淵の盛んなこと、この谷の如きは日本アルプス中其比が少い。

午前八時、顧みると西方が著しく霞がゝつて、陽炎の樣な影氣の中に、低山脈が幾筋ものうねりを長閑に曳ひて、東笠ヶ岳の圓頭が椀を伏せた樣な形をして、靜かに群山を拔いてゐる。

午前八時二十分、七八丈程の瀧に出る、山の樣な大岩が三つくの字なりに並んで、その右に溪水が壓し縮められて、立派な瀧となつて、轟々として落下して來る、僭越ながら三ッ岩の瀧と名づける、先刻遭つた一ッ岩はその上へ觀音樣でも安置して、一ッ岩の觀音とでも云ひたい處だ。

もう谷の兩側にずり落ちた殘雪が、埃の樣な色をして所々にこびり付いてゐる、大分登つた、そし

て藥師の山胸が近く目睫の間に迫つて來た。午前九時二十分、第一回の中食を認める、谷が稍右折して右方から來る一支流の落口が瀧となつて落下してゐる。この流を溯ると、藥師の西微南に當る高原狀を爲した尾根、二四九五米突の三角點のある附近へ、樂に出られる筈だと思ふ、崖側は兩面とも絕壁を爲してゐるが、流は穩かでそして其上方が細い雪溪となつて、靑いベルベットの色美しい高原に入り込んでゐる。自分は始めこの流を登る積りだつたので、美くしいこの小谷を見上げた時には一寸登りたくなつた。然し今一行の行先を見ると山頂の方から走つて來る大雪溪の末端が、直く鼻先まで垂れ下がつて、その雪の前驅が氷山の畫を見る樣にボロ〳〵に谷中へ亂堆して、溪水がこの雪塊にしぶきを掛けて落下して來る。一行はその間を水を除けながら少し行くと、立派な雪溪の上へ出た、そしてその上を一年振りで、大理石の廻廊でも歩く樣にめづらしげに辿り始める。

谷が急激なのに大岩の爲に幾層もの段を爲してゐるので、頻々とクレバスに遭遇する、追々と雪溪が急峻の度を增すと、カンジキなしなので辷りさうだ。午前十時半、大きな雪の間隙を隔てゝ瀧に行き詰る、雪溪が瀧の爲に二段に折られて、四五丈の棚を爲して、幅廣い瀧が雪と岩の間から迸つて、淵となつて又雪溪の下に沈んで行く。

已むを得ず、左上の崖へ匍匐い登つて、愈々急峻な崖へずりを始める。雪解の跡で石英粗面岩が砂の樣にザク〳〵に分解して、足を載せるとづる〳〵と辷る、稍緊かりしてゐると思ふ處でもボロ〳〵に剝がれ落ちるので足場が頗る惡い、手がゝりになる熊笹や榛の木などが稀少なのに、崖が殆ど直立に近いので、もし踏みはづさうものなら二三丈の雪溪の下へもぐり込んでしまう。一行逡巡として進まない、漸く雪溪へ降りて、暫くの間その上を稍左曲して行くと、二流の落合に出たが、又雪溪が割れて大きな間隙をなして、溪水が左右兩崖の間から瀧となつて奔放して來る、兩岸が著しく狹まつて右溪の雪が四十度以上の急角度をなし、左折して白龍の如く遙に天涯に懸つて居るが、その先は霧がも

くもくと浮動して樣子が更に分らない、取付が惡いので左の崖側を二ヶ所ばかりはいずつて行く內に何時の間にか左溪の方へ入つてしまつた。

先へ行つた春藏が呶鳴つて居るが、溪音で分らない、間近に行くと荷を卸して立つたまゝ指差をしてゐる、大きな岩續きを廻つて、其處へ着いて先方を見上げた時私は驚いた、そこには兩岸の崖がもう三四間位に狹まつて、天柱の樣に聳立してゐるのが高い〳〵尾根の上まで絕壁を爲して居る、其中を一筋の瀑布が素絹を垂れた樣に直下して、其下の雪がとんねるの樣に堀じくられて、瀧壺が釜を爲してゐる、瀧の落口に碁盤の樣な形をした、赤黑い大磐石が一つ橫たはつて、その兩端から水がたらたらと垂れてゐるが、その上はもう何も見えないで遙に天際を限り、蒼々たる碧空が澄み渡つて、その奧から煙りの樣な霧がぽつ〳〵と動いて來る。

雨が降らないでよかつた、こんな處で降られるものならそれこそどうしようもないと、平藏が云つた、實際私もさう思つた、始め一行は右溪の雪上を登る積りでゐたのが、とりつきの惡い爲にこの左溪へ廻り込んでしまつたが、もう崖が高くなつてゐるので、右溪へは中々出られなくなつた、先刻の大裂罅を降りて雪溪を上つて行けば、この路よりも或は遙に樂に尾根上にとりつけたかもしれないと後で思つた。然し不思議なもので、こう云ふ險惡な處へ來ると、却つて一種の好奇心や反抗心が起つて、いやでも應でも瀧の上まで上つて見たくなつた。何かその水上に自然の秘密でも藏されてゐるやうに。

日は既に午を過ぎた、正午迄には藥師の頂上へ出る豫定だつたが、未だ二三時間位は優にかゝりさうだ、瀧壺の上の崖に寄りかゝり、雪を嚙りながら道を造りに行く二人の行先を眺めてゐたが、瀧のしぶきがかゝるので、少し休んでゐる內服が濕める、身體が冷えてうすら寒い。

平藏が先に立つて瀧を溯り始めた。そしてぐらつきさうな岩を下へずり落して、足場を作りながら

登つて行く、約三四十分たつて戻つて來たが、見ると二人ともびしよぬれになつてゐる。兎に角荷さえ繩で揚げれば、どうやら登れる樣だと云ふ、それからなるべく水のかゝらない樣な處を選んで、岩へかじり付いて、梯子の樣な石階を登り始めた、一ヶ所とりつけない所があつたが、平藏に引上げてもらつて漸くにして瀧の上へ出たが、それから先は石が崩落するので一歩毎に冷々する、私が手を掛けた二尺程の石が崩れ出したので、暫く足で冰へてゐたが又一つくづれて來たので、思はず足を上げると二つともがら〳〵と落下し始めた、顧みると丁度平藏と春藏とが助け合ひながら登つて來るところだ、あつと思つた瞬間、幸に平藏の腰から五六寸の處をかすめて、走り落ちたのでホッとした。

一休みして溪水の中を行くと、右の崖に瀧がかゝつて居るがもう水は少なくなつて、間もなく峻急な岩崩の山坂を、匍匐ふ樣にして直た登りに登る、まだまだ尾根までは大分ある、そして如何にも山懷が廣いので、霧が下りて來ると方向を失する恐れがある。

何方を見ても嵬峨たる山稜が叢立して、その赭岩がぼろ〳〵になつて四方に堆高く、見るから荒廢を極め、裏山傳ひと云ふ樣なうら寂しい感じがする處だ、前方の尾根に濃霧がかゝり始めたので、右上に見られる筈の絶巓附近がまだ見參に入らない、長大なそして急激な崩れを二時間も匍匐ひ登つて、東方間近の支尾根に縋り付き、偃松の緣を傳はつて登り詰めると、まだ先の方に高い奴が霧の中からぬーつと頭を擡げてゐる。四ッ葉鹽釜、小岩かゞみ、梅鉢草、深山きんばい、がちらほらと咲き亂れ、岩梅などが見えて來た。

眞川の谷底の方で雷鳴が聞えてゐたが、顧みると何時の間にか谷も山も悉く雲霧が渦卷いて光景頗る凄愴になつて來た。午後三時四十分、漸く一岩峯の凸端に登りつめたが、一向に五里霧中だ、黑部谷の方から吹き上げて來る烈風に齒の根も合はず、話しをしようと思つても、身體がぶる〳〵して聲さえも碌に出し得ない。偃松の枯枝を拾ひ集めて、西側の岩の下で焚火を始める、炎が山風に煽られ

てゴウ〳〵と凄じい音を立てゝ、霧の中から時々大粒がつぶての樣にばら〳〵と衣を叩く、合羽を出して焚火の傍にちゞこまりながら晝食の殘を食ふ。

尾根へ上つて東を見ると、丁度黑部谷の方の霧がはげて、其中から芙蓉の花の樣な美くしい白雪に彩られた、藥師東面の大カールが展開された。雪は少い樣だがまだ中央部には隨分殘つてゐる、それが四方から搔き均らされた樣になつて彎曲して、東北の一隅で具合よくつゞまつてゐるのが、黑部峽谷の上まで來るとぷっつりと切れて、絕壁から落ち込んでゐる、その落口を見つめてゐると、如何にも幽遠な、引き入れられる樣な感じがするので、降りて見たくなつたが、時間がかゝるので止めてしまつた。東方黑岳山脈の上にはまだ濃霧が重く冠さつて、其下から峻急な縱谷が幾つも深谷に向つて放射されてゐるが、雪は少しも見當らない、北方の霧が深いので立山の方面は全く見えない、霧中から大きな洋館の甍の樣な針の木岳が、ぽーつと赤牛岳の左に高く焙り出されたが、間もなく又搔き消されて見えなくなつた。

漸く頭上の霧が薄らぐと、その絕間から碧空がずん〳〵延び廣がつて、右上に藥師ヶ岳の絕巔が高く天球を摩してゐる、愈よ來たなと思つた、もうさう休んでも居られなくなつたので、幅の狹い巉岩の山稜を傳つて、二つ程の小隆起を越して、午後五時藥師頂點の祠前に立つた。

今一行が登り付いた尾根は、北藥師岳（前稱岩井谷の頭。私は假に上の如く名づけておきます、もつとよい名稱があれば御敎示を乞ふ。）と本岳との中間、稍本岳寄になつてゐる所で、それから可なりの突起を隔てゝ、北藥師の尖頭がその後から高く聳えてゐる、岩井谷の頭に當る處は藥師西微南に派せられた高原狀の山稜で、藥師本岳の下からは鳶谷（陸測五萬分一圖一行登攀路）が流れ出るので、北藥師岳西面の水は岩井谷よりも、却つて數合の谷の方へ多く流れ落ちはしまいかと思ふ。

絕巔の西方直下にも小さなカール形の窪地がある、一面の石原には山草が黃に白に美くしく點綴し

て、丁度漏斗（ジョーゴ）を半截した様な形で、溪谷に向つてなだらかな傾斜を爲して、その落口が矢張大カールのもの丶様にぷっつりと切れ込んで居る。私等が登つて來た上流の落合を、左溪に曲らないで、右溪の雪上を攀ればこの下に出ること丶想はれる、然し雪溪とこの窪地を連結するものは、大方絶壁か瀧の連續だから、さう容易い譯にも行くまいと思ふ。近い内に是非もう一度岩井谷を溯つて、この小カールの落口から匍ひ登つて見たいものだと思つた。

俯瞰すると岩井谷の山川は歴々として指呼の間にある、そしてその清流は十重二十重の積翠の底を、遙かに銀線を流して行く。夜營地附近の崩れが赤くそげて、そこ迄は窺き込む程峻急な角度をなして居る、眞川の谷底から海程二千九百三十六米突の藥師岳の絶巓まで登るのには、その過程として是非この位な溪谷が必要だと思つた。

山岳美は溪谷の美を待つて始めてその深秘を盡し、溪谷美は山岳の美を併せ得て、その高邁を誇ることが出來るものとすれば、山稜の縱走旅行は展望に勝る處があるとしても、平板單調に失する恐れがある。

私はふと劔澤を思ひ浮べた、あの夥しい千古の白雪を集めて、立山の奥に喰ひ入つて居るその深谷の下流が、斷崖連續の間を瀑布奔川と爲つて、黑部の大谷に流れ落ちて行く、その谷の行衛を想像して、縹緲無限の思ひに耽つた。

降りにかゝる、藥師の頂上を境として、北方は幅狹き峨々たる一縷の山稜となつてゐるのに、南西の方面は、なだらかな尾根が幾つか派出されて、何處も皆青草原が連亘して、山と思へない程悠美な高原を形ち造つてゐるので、自づと心が緩かになり、氣まかせに行ける樣になつた。

直ぐ左下に大殘雪が黑部谷に向つて傾斜してゐる、黑岳山脈の上の雲がとれると、赤岳、水晶山、赤木岳が連塀の樣に連らなつて、その後ろから野口五郎岳の大きな頭が、灰色をして拔け出て居る。

當面に黑部五郎岳を見る、蒼黑の肩壁威かめしく、懷に白雪を鏤めて、峨々として獨聳してゐる、この山の雄姿は久戀のものであつた、赤城岳、上の岳が穩かな山の脊を連ねて、太郎兵衛平の高原が、ふつくらとした綠の中にくるまつてゐる。

雙六谷から沸騰して來る怒濤の樣な雲霧が、黑部五郎岳と蓮華岳との間の鞍部を押し分けて、黑部谷へ續々となだれ込んで來る、丁度騷擾の時に無數の群衆が小路へでも我れ勝に闖入する樣に、それが祖母平の上へかゝると、砂塵の樣に朦々と叢立つて、水昌山の前に五色燦爛たる虹が顯はれた。

もう午後六時半になる、漸くなだらかな尾根を降り切つて、平坦地に出て少し行くと小谷に出る、暫くの間疎林の中を溪水を踏んで降り、左の林をわけて小さな草原へ出た。

この邊は可なり夕立があつたと見えて、樹木も草原もびしよ濕れになつて、その中を行くと雫が落ちるので氣が惡い、日本海の上空に夕陽が血の樣な色を流してゐたが、軈て落日が層雲の中に沈んで行くと、夜氣が沈々と迫つて來て、夜營地は急に寒威凜烈となつた。

木が濕つて居るので焚火が中々燃え付かないで、午後八時過に漸く夕飯を終つて眠りに就いた。今日は一番疲勞したので、三人共ぐつすりとよく寢られた。夜半目が覺めたが天氣が心配になるので、天幕の窓から東を窺くと、空は朧になつて居るが星がちらほらと其奥に光つて見え、片破月の光が鈍つて、その周りには大きな雨暈を着けて居る、双六谷の方は一面に濃霧の世界となつて、灰白色の怪物が山谷を甜め盡さん勢でのたくつて來る、然し里の方はよく晴れて居た、富山灣の海岸線が夜目にもほの白く大きなカーブを畫いて、神通、射水の兩川が朧にくねり、その右方常願寺川の滸にちらちらと光つて居るのが上瀧町の電燈の光だと云ふ。

二十一日は天氣模樣が氣遣はれるので、朝ゆつくり起き、午前八時半頃に結束して出發した。一溪を越して太郎兵衛平に出で、上の岳の方へ廻らうと思つたが、天候が惡くなつたのに、東京に殘して

來た要事の都合もあるので、思案の末有峯降りと極めて了つた。

遙か下に眞川の上流を見て緩かな高原を降る。右方常願寺の谷を隔てゝ、阿彌陀ヶ原が長大な緩坂を曳いて、今しも雲の大軍が枚を啣んでひた〳〵と立山を目がけて押し寄せて行く、古綿の樣になつて重苦しく層なつた雨雲が、一杯に西空を罩めて、日本海がその下で陰欝な光を放つて居る、急激な小谷を下つて午前十一時半眞川を渡り、靜寂な峠道を急いで午後零時四十分有峯に着いて、今年の山旅を了つた。

秋の有峯。四周が多く濶葉樹林で圍繞されてゐる、この高原の深秋の色は、何んなにか美くしい事であらう、滿山錦繡の裡に白紗を織りなす淸川、眠れる如き太古のまゝの山村が點在して、近く東天に悠座せる藥師ヶ岳の新雪が、朔風に閃めき、その榮光が私の網膜に浸透し來たるとき、恐らくは私の憧憬心も、燃燒の域に達することであらう。

尾瀨の事ども

附至佛山

沼井鐵太郎

大正三年八月の十二日朝に上野を起つて岩越線猪苗代驛に下りた。この日は湖畔で遊び夜八時半押立(オッタテ)温泉に着。木賃を拂つて泊りに來る田舍者の多い、いやしげな温泉宿で、硫黃氣の多い湯はきたなく、殊に蟲入りの飯と蚤蚊の多いのには閉口する。盤梯山登山往復の案內賃は七十錢、もし檜原迄行くとすれば途中一泊して一圓五十錢と言つた樣に記憶してゐる。十三日は雨風烈しくつひに豫定を變

更して、翁島驛に下り、若松迄汽車に乘り俥を雇つて飯盛山をまはつて東山温泉に行つた。實は盤梯山から檜原に下り、喜多方に到り、飯豐山に登山してこの東山に來る筈であつた處、意外な暴風雨の爲、豫定大變更の止むなきに至つた。

八月十四日の午後から、一寸の霽れ間を再び若松市に出て、田島街道を進む、その間にまたも降られた。芦ノ牧温泉新湯に一泊。崖ぞひの狹い家で、湯は、河原の岩の間に湧く。出水の爲この奇拔な湯にははいれなかつた。芦ノ牧新湯宿料金四十五錢也。

八月十五日。この日も時々雨が降つた。芦ノ牧から一里で大川橋に出る。出水の爲、橋梁の四分之一向ふが落ちたので、間に合せの太柱を注意して降りねばならなかつた。大川橋から一里ばかり、川の景色がよい。一寸飛驛の白川を思はせる所だ。湯ノ上温泉新湯にて中食。此の湯も水の爲役に立たず。又田島街道を進んで名ばかりの伏見公園に入る。栗林をぬけて川岸に出ると、向岸に七つばかりの奇岩柱を見る。すなはち塔の峯（ツリ）であつて、その下部は凹み、路になつてゐる。辨天堂にそつと名刺を差上げた。兎に角、田島街道を歩く内せひ見なければならないのは、塔の峯である。この他刈合せの峯も見たが前者に比ぶれば何でもない。田島町丸山旅館に一泊。（宿料、五十錢）田島町は兎に角南會津郡第一の町である。相當の旅行準備も出來る處である。若松から十三里。俥も通へば、自轉車も走る。街道は、殆ど平らで、飛驛に入つたものがその道路のいゝのに驚くと同樣の感を持たせる。

八月十六日。田島町から檜枝岐に出るには湯ノ花温泉を通過して行くのが一番近い樣だ。但し、四度も峠を越さなければならないから、檜枝岐まで樂に行きたい人は針生を通つて伊南川の山口に出で、沼田街道を上つた方がよからう。そしてマス捕りの光景でも見て行つた方がいゝであらう。その路順の興味如何は私は知らない。私は湯ノ花通過にきめてしまつて、羽鹽から日光街道に分かれ瀧ノ原部落から中山峠に向つた。中山峠の近くに七ッ嶽（標高一六三九、六米）が聳えてゐる鋸齒狀を表はし

はした尾根で、未だ見ぬ甲州アルプスの鋸岳を思ひ通はせた。つひでに一寸登つて來ればよかつたと今でも後悔してゐる。中山峠（一一五五米）は急いで越えた。馬も越せる峠路で疎林の間の路はよかつたが、頂上の何かの小屋の中で團飯を食べた時は、虻と寒さにいぢめられた。頂上から少し下りた所に茶屋があつた、日本武尊（？）の御通りになつたとかいふ高杖原の笹原路をとぼ〳〵下つて八總に着く。咽のかはきをとめに水一杯の所望をと森戸のとある農家に立寄つたが、養蠶に急しいので頭からはねつけられた。此日湯ノ花温泉龜屋（龜齡館）に一泊。（宿料四十五錢）

山の中の温泉だが、押立の温泉の樣に氣持のわるい事はない。前には碧い谷川が流れてゐる。食事も相當。湯は上、中、下の三つに分れ中湯が最もあつい。湯水は青く、且透明で甚だ氣持がいゝ。貼紙にナトリウム、カリウム著名、クロール、硫酸、硅酸、カルシウム多量などと書いてあつた。水の良いせいか、例の山袴はく女等の容貌も好かつた。温泉はなほ此他に石ノ湯といふのがある。私は試みに宿帳をひつくりかへして見た。多少眼についたのは男爵一名、東京鑛業夫二名、浪花節語り一名で、學生は大正元年來私が始めてゞあつた。此に一つ注意したいのは、田島から先は湯ノ花、檜枝岐とも卷煙草のなかつた事である。米、味噌は大丈夫あるが、煙草のないのは、私にとつて一の苦痛であつた。卷煙草はおろか、刻煙草でさへ、雨が降り橋でも落ちては一寸得られない。交通の不便な事は、檜枝岐から出したハガキが、野澤に出てぐるつとまはつて五日目かに東京の自宅に着いた事でも分かる。

八月十七日。五時過ぎに起きて入浴し、曉の霧立ちこむる山中の景色を眺めつゝ朝食をすましてしまふと客來があつた。檜枝岐出身の仲丸（？）氏で、宿の主婦から私が尾瀨へ越すといふのを聞いて訪ねられたのである。色々尾瀨の話など聞き、なほ尾瀨沼畔に住む平野長藏氏への紹介狀も貰つた。此と共に、長藏小屋が今年の春に沼尻から峠路の傍に移された事を聞き知つた。仲丸氏は此度田代山に上り弘坊堂を修築する爲に今日此をたゝれるのださうで、今迄注意してみなかつた田代山に就て寫眞な

ど持ちそへて話をきく事が出來た。寫眞で見ると田代山は頭の平たい山で、山腹は森林おほひ、その中に狹くもない切り開けがある。高山植物は餘りないさうだ。氏は木賊から西根川を上つて田代山に登るやうに言はれた。思ふに、湯ノ花温泉は帝釋山脈の田代山、帝釋山等に登るべき一の出發點ではあるまいか。もつとも、準備は米、味噌等の必要食料品の他は得られまいと思はれる。又、案内者に就ても斷言し兼ねる。

七時半仲丸氏及宿の人達にわかれて谷川を渡り、暫らく畑を通つて山あひにはいつた。一尺幅の小路で可成急な山路と思はれた。八時十分に唐澤峠の頂に着。樹木の爲、山も何も見えない。休んでゐる内に寒くなつたので峠を下りかけた。里人がすれちがひに上つて行つた。西根川の山あひに下つて熊野神社に行く路をさがしたがわからない。そこで灌木のヤブを押し分けて谷川を渉つたが、流れは急であつた。急坂を上つて森の中の暗い社に來た。何となく神々しくなつて汗がつめたい。名刺を置いて又元の通りに歸る。有るかなしかのさびれた道を木賊に辿つたが温泉らしい姿も見えぬ。道をきかうにも人影更になく、仕方なしに小路を拾つて行くと、川の分岐點に來た。地圖を頼りに右にはいつて或はかやの原を横ぎり、草路にすべり、やうやく森の中に入つたかと思へば、小さい澤に落ちる。其でも、どうにかして羊齒類の多い毒菌の美しいくの字なりの山腹の長い〳〵小路を上りつめたのが午前十一時頃。時計もとまつてしまつたが腹がすくので、着胡蓙の上にすはつて握飯をほうばつた。峠路だけ切あけで、右左は喬木林、大林區署の札が新しい。是が小峠で、之を下るとすぐに谷川あり、又すぐに急な上りになる。上つてしまへば小擊峠の頂上。一坪餘りの平地がある。つけまとふ虻を着胡蓙で拂ひながら向ふを見ると壯大な山が高く横はつてゐる。その山肌の色のよさ、尾根のなだらかな事、私は會津駒ヶ岳に違ひないと思つた。何しろ此時は時計はとまつてゐるし、一人旅で定かでない幾つもの峠路が限なくさびしかつたので、すぐに下つた。すると此に澤がある。路はこの澤を下る

ものらしい。傾斜は可成急で、水は瀧の如く落ち、岩石は角立つてさびしい内にも面白かつた。私は寂寞を辿つて感情の流れるまゝに、山の水の命と自己を思ひ、ラスキンを遠く慕つて、せきれいのやうに澤を下りて行つた。そしてやつと道にめぐりあひ、大きい谷川ぞひの街道に走り出た時、ほつとして今下つた澤のあたりを見上げた。さびしさと、疲勞とに打負けて、今日尾瀨まで行くのを見合はし、檜枝岐の丸屋といふ宿にもぐりこんだ。二時半頃であつたらう。

岩代國は大きい山國である、その内南會津郡は一郡として他の國内にも少い位な大きい郡である、その内南會津郡の内でもこの檜枝岐村は一村として、大きい計りでなく、人口も極めて稀薄である。是れ村内に峻高の山地多く、又最も僻邑である爲であらう。村人の集る處、唯一の檜枝岐部落あるのみ。他は、悉く部落の人々の臨時出張所ばかりと言つてもいゝのである。私はこの山中にあつて、丸屋の二階から檜枝岐川を眺めてゐた。その山は高く、谷の深い境地は私を滿足させた。檜枝岐は蕎麥の名産地ときいてゐたので、夕食に註文したが、今日は出來ないといふ。私の希望もあだとなつた。

夕食後、煙草もないので只遊んでゐると、客があつた。隣家の星大吉氏で、目下福島縣安積郡喜久田尋常高等小學校々長をしてをられる。初對面の挨拶がすんでから來意を話された。其は矢張り私が尾瀨に行く事を耳にされて、是非行を共にしたい、其と共に、尾瀨ヶ原の先の至佛山には未だ何人も植物採集に行つた事がない樣だから、もし私が行くと言へば、是も一所に登らうと言はれるのである。私は尾瀨に就ては不案内であるし、又、數日の一人旅に連れもがなと思つて居た矢先、かういふ益ある相談を受けて、一も二もなく承知の旨を申出た。其處で、準備は簡單にし且、星氏に御まかせして、種々山の話など語りあつた。氏は今休暇歸省中であつて、毎日谷渡りをして岩魚を釣つて歩かれたさうである。尾瀨から歸つてから直ちに喜久田に歸られるのだ。氏の話によると、檜枝岐は平家の子孫がすんで今に到つたと言はれるのも確かな證據のあるわけではない。尤とも村内には、星（丸屋の主

人も星姓である)平野其他一姓がある計りで、血族關係は密接であり、平野姓が平姓に何とかこじつけられるが、まあそんな事はないでせうと言はれる。氏の祖先に就ても聞いたが、さういふ方面に趣味のない私は、いつのまにか忘れてしまつた。そして檜枝岐では米がとれないので、三食の内二食は蕎麥を食べるさうである。それ故蕎麥の料理も他より進歩してゐるとて一々例を擧げられたが私は是も忘れてしまつた。蕎麥かきならば尾瀨から歸つて後御馳走しませうと言はれる其れが樂しみであつた。

八月十八日。私は置くべき荷物を丸屋に置いて、雜嚢の中に團飯、地圖、米一升、味噌少量(二錢分)(米一升は二十七錢)木製辨當箱、水呑位しか入れてない最簡單な輕裝になる。星氏は風呂敷包を首にまき、胴籃を下げて居られる。二人共、着胡蓙をはおつて檜枝岐を出發する。沼田街道を上つて行く間、私が穗高、鎗等の話をすれば、星氏は會津駒や燧岳を語られる。麒麟手を通り、檜平へ入る所で實川の谿流を渡るとそろ〳〵上り道となる。氏は、流のある度に岩に立つて、持つて來られた釣竿から擬餌のついた針の絲を垂らされたが、一二尾しか捕れなかつた。上りの路に植物の名前やその効用など敎へられる。アツシを作るオヒヤウネリ。トチ、クロヒ、ツガ、ユメツガなどがある。抱返り坂といふロマンテイツクな名の坂あたりがブナ帶、シラベ帶の分れる處で、シラベ帶の匂がかんばしい。ミヤマオダマキ、トガクシセウビンなどが咲く。ダケカバにサルオガセがたれ下がり、路傍には胃病の藥だといふミヤマリンダウがある。その頃の私は花は美しいのを見て名前などどうでもよかつたが、今となつては惜しい氣もする。殊に至佛山などは、何の爲に行つたのか、今思へばうたゝ氣はづかしい。

沼山峠の上には間もなく着いた。頂は二三町平らな處がつゞいてゐる、其切れはしの處から光る湖が見えた。思つたよりはあかるい尾瀨沼の眺めは私を喜ばせた。緩傾斜の草地の路を駈け下ると間もなく沼に近づく。小さな澤がさら〳〵と流れてゐる。そのみなかみは大江山である。星氏は又もや釣

絲を垂らされた。そして打ちかへし〳〵澤を上つて五六尾の岩魚を釣りあげられた。大さ約八寸位。一尾一尺二三寸のものを見つけたが逃がしてしまつた。捕つたのはヤナギみたいな灌木の小枝にさして私が持ち歩いた。い丶加減釣つて、澤を下り、濕地に出て、十町ばかり歩く。長藏小屋を訪ねたが主は不在であつた。で、再び濕地を歩いて燈岳を仰ぎながらその裾をまはる。廣く長い濕地の草原には有名なナガハノマウセンゴケが簇生してゐた。此の手前で、私等は遙か彼方のツガの枝から白い鳥が二羽そろつてとび立つのを見付けた。長い嘴に長い足、飄々と風に乘る者は正しく鶴であつた。後で平野長藏氏から聞くと其は何處からかやつて來た夫婦鶴で人がよれば飛んでにげるとの事だつた。其後尾瀨沼に遊んだ二三の友人に聞いて見ても、見なかつたと言ふから、私達は、誠に珍らしいものを見る事が出來たわけである。是だけは、內地で野生の鶴を見たといふ事は、今でも私の誇りとして居る所である。

尾瀨沼尻から尾瀨ヶ原まで針葉樹林中の熊笹の道は隨分つらかつた。熊笹は脊より高く茂り、路もさだかならず、折々上り下りの苦しさ、熊笹の莖の向脛をうつ痛さ。それでも、今年行つた人の話をきくと餘程歩きやすくなつたらしい。森林を出切ると一條の小流があつて、其處に二三の掘立小屋が立つてた。是は檜枝岐から尾瀨ヶ原の川に岩魚を捕りに來る者が立てたのだ。小屋の前には茫々たる尾瀨ヶ原が平らに展開してゐる。日暮れにはまだ二三時間あつたので二人は荷を置いて釣りに出かけた。原を二分してゐる沼尻川に出て絲をうちこんだ。私は其を見たり、平らな原にもか丶はらず、急流する川の岩石や、川ぶちを何處迄もつゞる灌木の列や、廣い水平な草原などを眺めたりした。沼尻川が只見川の大峽谷となる處、此に三條瀧がある。小屋より往復約一日を費し、その壯觀は華嚴以上だといふ。而して只見川大峽谷は未だ測量もされないひどい處で、人跡は全く未到ださうである。たつた一度農商務省の技師だか技手だかの人が檜枝岐の人夫を連れて右岸の峯をつたつた所、豫定よりも意

外なる日數を費し危く餓死しやうとしたといふ。日本アルプス高山深谷の探險も昔話になりつゝある今日、只見川峽谷の探險などは目下の急務ではあるまいか。檜枝岐の獵師は冬時積雪を踏んで只見川にゆくにはゆくが、峽谷は斷崖絕壁、瀑布多く且兩岸の峯はいと高くして近づき難いさうである。

日暮れに小屋に戻つたが、小屋の主は未だ歸つてゐなかつた。待てばきりのない事だから、鍋を借りて米を炊いだ。捕つた岩魚を串ざしにして燒いて味噌をつけて夕食をすます。其美味は口では語られない。其内に小屋の主が歸る。暫らくは打解けて歐洲戰亂の話などして眠りについた。がた〳〵の板敷の上に熊の皮しいてまるまつてゐるのだが、とろ〳〵としたかと思ふと眼がさめてしまつた。岩魚捕り（たしか平野姓であつたと思ふ）は今岩魚をいぶすやうに列べる仕事が終つたものか、燃ゆる火はあか〳〵として一向消えないでゐる。白樺の皮に火をつけてラムプ代りに表に出ると星明りに尾瀨ヶ原が見える、物凄い。川の遠音。他の小屋には今日檜枝岐から燧岳のうしろを通つて出て來た若い岩魚捕の二人がつけ殘した火が洩れる。私はしばらくねられなかつた。

寒い宵を夏シャツ夏服ですまして明くれば十九日の朝。原を眞深かに霧が包んでゐる。飯を食つてからいよ〳〵至佛山へと向ふ。じめ〳〵した草原を路通りに進むのだが、何といふ水の多い原であらう。踏む所からじく〳〵と水が湧き出て、歩くか歩かないかに甲掛けはぬれよごれてしまふ。時々力を入れすぎてどかと落ちこむ。歩く度にぼん〳〵はづむ。だから歩きにくい事甚だしい。幾度も川を渡つたが、中には水面に接せんばかりの一本の細い丸太の橋を、輕業師の身振りで渡らねばならないのもあつた。その川や他二つ三つの小さいのは、山が垂直で而も深く、流れはゆるく、とても物凄かつた。沼尻川の西方には川の他幾多の小さい池があつて其が皆落ちこんだ樣に岸は垂直に、水は深くなつてゐる。其中には浮島ではないかと思はれる泥土と草の枯死した物の塊が浮きヒツジグサ(?)が咲いてゐた。私は此特異なる地形に驚きもし注意もしてみた。尾瀨ヶ原の成因を調べて見たかつた。

なほ私にはこの原が原、湖水であつて其が何かの原因で、段々に今のやうになつたらしく思はれる。川や池の岸の垂直なのも問題としたい。原の表面からどれ程下まで水草の死體があるものか、眞の岩床は原の表面から何米下部に存せるものかを知りたい。かの日光戰場ヶ原を擴大した如き、この水平な、ふしぎな水濕の草原は二里餘りも續いてゐる。この上をはづんで歩くのは、鋸齒の如き尾根を上下するよりも一層氣味わるく、その疲勞も其以上であつた。私は其意味に於ても尾瀨ヶ原を忘れられない。

其頃、私の地圖の讀方は粗漏だつたので至佛山の登路の位置も判然と定めるわけに行かない。猫川の支流川上川の原と森との境あたりと思はれる。上州から岩魚釣に來てゐる者の小屋が一つあつて、其處から一つ二つのカラ澤を越え、小さい澤を上つて針葉樹林のおほふ急な尾根に取付き、そのまゝ登つて灌木帶を通りぬけ、偃松を泳いで御花畑から後は容易に山頂に達した。登山には三時間を費した。私の登つた尾根は五萬分一地形圖藤原圖を見ると 1500.1300,etc. の標高の數字が書いてある處の尾根であらうかと思はれる。上つた澤はその右方の極く小さい者でちよろ〳〵と水が流れてゐる位の者であつた。此山の偃松の海はさうひどいものでもなかつた。寧ろそのすぐ下の小さなツガや何かのヤブを上下する時、木の根や幹の曲りくねつたのが縱横に身體を沮んで自由をきかせなかつた方が苦しかつた。山麓から山腹にかけては熊笹にいぢめられた。私はこの偃松の下方のヤブで双眼鏡を落した。父がベルリンで求めたオペラグラス物だがいゝレンズであつた。その時はつひに見當らず、今でも發見されないでゐる。もし至佛山に行かれる方があつたならば、見つかり次第御知らせ願ひたい。平野長藏氏には村人が發見したら、長藏小屋に置いて、尾瀨に遊ぶ人々の用にあてたいと言つておいたが。

至佛山登山の記錄は有るかないか私は知らない。測量部々員は山頂に三日間とか野營したさうだ。野營地としては吹きさらしで無理であらう。水も得がたい。もつとも山頂から少しく下つて偃松帶の

際まで來れば、ちよろ〳〵と幾らかの水は流れてゐるから絶對に野營不可とは言はれない。天幕を張る地もさがせば得られるであらう。最も安全なのは川上川附近河原か林中に天幕をはる事である。至佛山の利根側は傾斜急で攀づるも難い事であらう。如何にしても野營は尾瀬側でしたいものである。

山頂附近の御花畑も、大した數ではない。しかし、密林とヤブとに苦しんだ眼は高山植物の花がたとひ疎らに咲かうとも慰められるに十分なのは當然である。星氏は二三の珍種があるといつて喜んで居られた。

山頂は裸出して、僅かな平地の上に三角點(二二二八、一米)が雄々しく立つてゐる。そしてこの山頂からの眺望は寧ろ燧岳の其れに優つてやしないかと思ふ。私が其處に立つた時は、稀れなる快晴で見ゆる限りの山々が四方に見えた。尾瀬附近山岳の盟主たる燧岳はその美しく急なる圓錐形を會津駒ヶ岳の右前に聳えしめる。景鶴山、大白澤山、ス丶ヶ峰、赤倉岳が見える。燧岳と反對の左側に遠く殘雪輝く山岳を見て、小澤岳下津川山あたりかと思つたが、其は、魚沼の中ノ岳、駒ヶ岳あたりであつたのだらう。更に前面を凝視すれば日光火山群、男體山、奥白根は殊に著しい。私は、至佛山頂の眺望に醉つてしまつた。殊に雪溪かゝる越後境の山の美に恍惚となり、利根水源の谷の雄大にして複雜なるに驚いた。星氏と私とは山地として第二流以下なる尾瀬越後奥山、會津奥山、利根峽谷にもなほほこるべき幾多の價値が存してをると語りあつた。二人は山頂から利根川谷を見下して、一度は尾瀬から利根川まで越して見たいものだなどと言ひ合つた。

山頂で握飯をかぢつて、星氏が採集してゐる間晝寢してゐた。起されたのが一時過ぎ。下山は登路をそのまゝ下つて約一時間、後に尾瀬ヶ原を縱斷して小屋に戻つた。一休みして尾瀬ヶ原に別れたが、例の熊笹路で雨に降られてひどい目にあつた。長藏小屋に一泊。星氏と平野氏とは友達なので私まで優待された。濕氣の爲に多少身體のぐあひが變であつたが、貸してもらつた長藏氏の掛ぶとんのおか

げで翌朝はなほつた。

二十日。朝の尾瀬沼にはすてがたい趣があつた。沼の水で顔を洗つて、燧岳に向ふ。湖心にはその影が沈んでゐる。此には多くの人が行く事だから、私は說明すまい。此日はゆつくりと出發して再び檜枝岐に戻つた。(檜枝岐一泊宿料五十五錢)

二十一日。一人旅はいやになつたので三度豫定を變更して鐵路に出る最も近路を取る事にした。即ち、星氏と共に檜枝岐を發して帝釋山脈の引馬峠を越える。檜枝岐から峠路にかゝる澤の間が分りにくいが、之を越せば後は長いだけで容易である。引馬峠の頂上あたりから雨に降られる。鬼怒川の峽谷を右に見て栗山村川俣温泉に下つた。此迄八里。温泉に入つて、始めて卷煙草に有付いた。都合上鬼怒川を渡り山坂を上る事なほ三里西澤金山の宿泊所に着いた。この宿泊所は思召であつた、私達は六十錢やつた。

二十二日。西澤金山から日光戰場ヶ原に出で中禪寺より日光町に下つて汽車に乘じ、宇都宮で星氏と別れて東京に歸つた。

尾瀨はもう一度行つて見たい處である。かの燧ヶ岳至佛山尾瀨ヶ原より平ヶ岳、中ノ岳、駒ヶ岳のあたり、熊笹、草原、高山植物、雪溪、峽谷、岩魚となほも想像は限りがない。(大正五年十月)

尾瀨附近は多數の岩魚を產する、故に食糧品等も出發の際に輕減する事が出來やうと思ふ。其から蕎麥も檜枝岐に多く出る事だから、是も食糧品の中に加へたらいゝ。私は蕎麥かきと蕎麥まんぢうを試みた、まんぢうは蕎麥粉をねつてまるめ中に味噌を入れたもので、豫め燒いて置けば長く持つ事が出來る。長藏小屋に宿泊するには、今年あたりは一泊五十五錢取られたさうである。

日光遊行雜記

武田久吉

大正五年の九月初旬、八年ぶりで日光へ行くことゝなつた。日光から中宮祠へ十年目で上つて見た。此處迄來ると湯元へ行つて見たくなる、そして十二年目で湯本に逗留して、金精峠をこえて、上州利根郡の丸沼まで遠足した。山らしい山には登らなかつた。二〇二四米と註さるゝ金精峠の頂上が自分の達した最高點である、おなじみの女峯さへ特に斷念した。

日光も久しぶりで來て見ると大分變つたことが目につく、停車場も大そう立派になつた、電氣鐵道があの狹い町を走つて居る、出來ることなら大谷川へそうた方へなり、又は山側へなり新しく道をつけて、そこへ電鐵を通じて貰ひたいと思つた。

山内（サンナイ）が大層よくなつた。道路もあるきよくなり、所々に道しるべが出來て、不案内な人でも地圖か案内記位をあてにして一人であるけるのは有難い、又一般に清潔になつたのは何より心地よい、山内には專用の電氣を起して、神社佛閣街路を初め、寺院住宅に之を用ゐ、洋燈を一切廢したのは結構なことである。只何やら有難味のうすくなつたのは、輪王寺の衆徒なる圓頂黁衣の人々が肉食妻帶をなし、般若湯などゝ云ふ隱語を用ゐるに及ばなくなつたことで、この方が自然なのではあらうが、慥に佛よりも人間に近くなつた證據である。

東照宮や二荒山神社の寶物を持寄つて、寶物館と云ふ特別な建物の中へ陳列することにしたのはわるい考ではあるまい、しかし土足で上る可く出來て居る床の上を素足や白足袋のまゝあるかせられるのには些か閉口せざるを得ない。そしてあゝいふ特種の建物を造る位なら、退屈顏な女看守のかはり

に、事情に通じた案内人を置いて、丁寧に説明したらよささうなものだ、尤も案内記を賣つて居るのだから、それを求めてよく番號と引くらべて見たら會得出來る筈なのであらうが、隨分面倒な仕事だしそれに短時間に見終らうと云ふ人々の爲めには不適當である、それも經費や人選等の點から行ひ難しとなら、品物に一々詳しい説明をつけたらよささうなものだ、現在の番號札と、燈籠へ「燈籠」と云ふわかりきつた札をつけたり、精々極簡單な説明數行を附けただけでは如何にも不親切である、例へば日光强飯の式の一部を示す人形の説明などは、强飯の何たるかを知つて居る人にはよいが左なくば納得しにくいだらう。人形の製作者の名などはなくもがなだ。多分當事者は常に人からほめられてのみ居て、苦言を呈する人に出遭はない爲めあれでよい事と思つて居るので、何も惡意があつてあの樣なやり方をして居るのではないのだらうが、改良の餘地は充分にあると思はれる。

西町即ち入町の方は兵隊で一杯であつた。其他日光到る處巡査で充滿して居て、うつかり散歩にでも出るとわるいことをしないのにひどく叱られる、田舍巡査の癖で只々横柄な言辭を弄したり、理由もないに人民を叱つたりすれば自分がえらくなるものと心得てか、時には横暴な擧動さへ目につくことがある、あゝいふ輩は充分に訓戒して巡査の職の何たるかを敎へ、それでもわからぬ奴は免職にでもして呉れなければ、第一人民が迷惑すること一通りではない、兎角日本の巡査は人民を保護することをせずに只威張るのを本職とでも心得るのか、人民を虐げることのみ考へて居るには困つたものである。

日光の町は右の樣な譯で、散歩もおろ〳〵出來ず、名所を訪はんにも兎角に通行止めの厄難に逢ふので、避暑の爲めに留る人の數は從つて少い、寧ろ涼しい中宮祠に登つて汗をかゝずに自由の空氣を呼吸した方がましである。

日光では瀧へも行かず山にも登らず、只折を見計つてそれでもビク〳〵もので、瀧ノ尾と本宮とを訪

ねたにすぎなかつた。是等は共に二荒山神社の別宮であるが、近來は社務所で少しも修繕に意をそゝがない爲に、見る影もない有樣である、瀧ノ尾に昔からあつた多寶銕塔を寶物館に移して「國寶」などゝ云ふいかめしい札をうつてあるが、それが元入つて居た堂宇などは荒れ次第、床は落ち軒は傾くと云ふ次第で涙の催すを禁じ得ない。

植物公園が佛岩から蓮華石に移つたので一度は是非行つて見たいと思つて居たが、これも通行止めとなる恐れがあると、ある人から忠告されたので、雨天の日を選んでこつそり見物に行つた。望月直義氏は元氣益々盛で、日光山植物近況を物語られた、同氏は男體山上にカウシンサウとムシトリスミレとを多量に發見したと言はれたが何の邊であるか一度自身檢分したいものだ、同氏の言によると男體のツガザクラは今は一本もないさうで、又女峯のハヒマツも小いのは絶無になつたさうである。

昔は中宮祠へ行くといつては中々臆劫なものであつたが、今は電車で馬返まで行かれる樣になつたので、一寸下駄ばきで遊びに行かれるのはさても便利な世の中である。明治三十五年より四十年と引つゞき洪水があつて、大谷川へ沿ふた新道の大部分が破壞された爲め、今は通路も電車路も概して舊道を走ることになつて居る、從て裏見へ行くにも清瀧へ行くにも便利になつて好都合である。電車の終點は舊の馬返の一二町下方で、そこに數軒の茶店が出て、着いた人々を呼び込むに忙しい。

電車で馬返に着いた自分は、荷物を「つた屋」に托して馬で旅店まで送らせることゝし、徒歩中宮祠に向つた。此の邊も道が大そうよくなつて、自動車を通ずる計畫さへあるさうであるが、未だ其運びに至らないのは大に慶賀せざるを得ない、日光の人間がいくら物質的になつたとて、中宮祠へ自動車を通ぜんと計畫するなど實に以ての外な話しである、飛行器が便利だからとて（日本では未だ中々さうは行くまいが）自分の首へ凧をいはひつけて大風に乘じて飛んで見る樣なものだ、世の中には馬鹿な人間も數多あるが、中宮祠へ乘合自動車を通ずる樣な考を起す奴は、鬼怒川へでも飛び込んで死ん

だ方がまだ社會の爲めになるだらう。

馬返を出て數町行つて、前二荒の風穴の下あたりから、路は一寸大谷川の右岸を通ることになる、從つて俗に謂ふ旭瀧のしぶきにぬれる患もなく、更に左岸にうつり、深澤をこえて深澤の茶屋に着く、これは大體大昔の路のつけ方にならつたやり方で、自分はこの方がすきだ。此邊の崖に稀品シラヰヤナギの若い木が二三本あるのを見かけたのはうれしかつた。

深澤からの登りも樂になつた、木蔭で凉しいのに、一歩一歩今迄に比しては急に上るので有難い。地藏堂俗にいふ女人堂が改築されたのもうれしかつた。やがて方等般若の二瀑の見える茶屋に着く、向つて右の小なのが方等、左の大なのが般若と日光山志には出て居るが、五萬分及二十萬分の地圖等には逆に出て居る、どちらが正しいのか自分は斷定することが出來ない。

所謂劍ヶ峯も樂なものだ、中ノ茶屋迄の距離も短いので骨の折れぬ内に御小休と云ふことになる。中ノ茶屋は今馬返の「つた屋」で經營して居るので、こゝにはトラキチランの發見者なる神山寅吉が居る、昔よく山へ連れて行つたことがあるので尋ねて見たが、かけ違つて逢はずにしまつたのは殘念であつた。

中ノ茶屋からモー一と息登ると何とか云ふ茶屋がある、不要な所なのでついぞ休んだことがない、それから僅かで大平の入口に出る。近年こゝの路の左の小高い峯に茶店が出來て、見晴の茶屋と銘打つてある、茶店は其名にたがはず實に見晴しのよい所で、是非登つて見る必要がある、眺望は一寸丹青山上のそれに似て居る（丹青山については本誌第一年第一號にある梅澤學士の記事を參照されたい）。馬返から此處まで三四十分で達することが出來る。此茶屋の地所は二荒山神社に屬して居るので、同社で道をつくつてあとは地上權を入札で貸すので、借權者が家を建てゝ商買して居るのだと云ふことである。

大平の入口から右の方の山中に入る路が明について居るのを認めた、或は地圖の所謂方等の瀧の水源の方へでも下る道かとも思つたが、生憎之をたしかめる機がなかつた。大平の本當の味を知らんと欲する人は、男體へ寄つた方の本立の中へ入る必要がある、實に深林と云ふことを感ずることが出來る、而も數町歩いて道路に出れば直に身は俗人の間にあると云ふ所の對照が面白い。

中宮祠は近年燒けてから旅店が山側の方へ建つたのは衛生上結構なとである。以前湖水にさしかゝつて家があつた頃は洗ひものにも煮物にも湖水の水を用ゐたので、自分の樣な神經質の者は中宮祠では何も食ふ勇氣がなかつたものだ。今では燒殘つた家の外は皆山側にあるだけでも心持がよい、二階三階立の立派な旅店が軒をならべてあるが、何だか奥まで見すかされる樣な伽藍堂式なので、自分には斯樣な所に逗留する氣にはなれない、處が幸米屋が歌ヶ濱へ行く道で湖水の大尻から二町半許りの地にある元のロシアの大使の別莊を買ひ込んで、これを多少改造して旅店を營んで居るので、人通りは少く閑靜で而も見晴しのよい此處が大に氣に入つた、目下新築の三階も略完成して多數の客の宿泊にも便利となつた。九月の初めのことで丁度客も込合つて居ない時なので、二室占領して一を居間に一を寢室に用ゐて、ゆる〳〵滯在が出來たのは好都合であつた、それに日光と違つて無暗に通行止がないだけも氣がのび〳〵する、巡査の顏を見ないだけでも心持ちがよい。

米屋の二階に出て眺めると、正面には白根山が屹立し、右には湖水からぬけ出でたかと見へるまで、整然たる三角形の黑木立の男體山がそびえて居る。白根の左には其外輪山のつゞきの錫ヶ嶽と更に其の南にはズット低い宿堂坊山が見える。或る朝のこと、前夜着いた客の一人がこの景を見て番頭を呼んで種々の質問を發して居たが、奥白根の爆裂の痕跡にひどく驚いて、恐ろしくひゞの入つてる山だなあと嘆じて居ると、ハイ左樣でハイ、と調子を合せる番頭の切口上もふるつて居た、ひゞもあゝひどく入つては一寸かなはない。

湖水では毎日ヨットが數隻出て風のまに〳〵走る姿は美しい。和船で出かける客も往々ある、名所廻りと號して、中宮祠より歌ヶ濱に出て立木の觀音を拜し、それから八町出嶋を見て寺ヶ崎に上り、慈覺大師の創造に係ると云ふ藥師寺に詣で、それより上野嶋に到つて男體山を拜して歸るのである。中禪寺湖の名所は未これのみでなく、白岩、赤岩を初め、西方千手入の方には種々見る可きものがある。舟を艤して湖を東西に縱漕するのも面白い、白岩の西に梵天石と云ふがある、これは昔船禪定の時梵天を立てた古跡であるさうなが、五萬分の地圖には梵字石と記してある、又日光山誌には弘法大師が梵字を點じたからだと云ふので同じく梵字岩と出て居る。俵石と云ふのは俵の樣な形の石で、昔は大黑天を其上に安置したさうだが、今は何もない、赤岩と云ふのは火山岩らしい赤色の岩が露出して居る處で、たしか紅葉の名所とか覺えて居る、千手の觀音堂は千手の入の南隅に位し一寸勝形の地である、其の側に觀音清水と云ふ清水が湧出して居る、一寸した川の樣になつて流れ出るのだが、極近所から湧出るのである、千手の砂利と云ふのは觀音堂の下の岩石（石英斑岩？）が露爛したもので、北岸の火山岩と大に趣を異にする處から人の注意する處となつたのである。千手の北隅に冠石と云ふのがある、これは三角形の小石が水際にあるもので大して目に立つ程のものでもない。

千手の入りには柳澤、外山澤等の小流三四あつて、湖水に注いで居る。外山澤の落口に山師數名小屋がけをして住ひ、近傍を開墾してソバ、ダイコン等種々のものを作つてあるが、成績は可なり良いとか、一寸見たところ出來ばえもよい樣である。元來この邊は笹原であるのを、開墾を業として居る者を雇つて兩三年前此の如く畑地にしたのだとか、其開墾專門業の者は大抵夫婦連れの共稼ぎと云ふ調子で、夫は重い大きな先が兩方へ折れた、凵形の鍬を打振て笹の根を一尺位の深さに掘り起すと、妻がそれをふるひ分けて根や石を除き、忽にして廣大な面積を開墾し終るのだと云ふことを聞いた、而も其の料金は極めて廉なもので、一坪十錢位とは驚く程安値である、それで一日六十坪を開墾し終

るとは早いものである。

千手の入りから尙奥へ入ると千手ヶ原と云ふ小平地がある、この邊を一に薊平とも云ふさうである、それを半里も進んで中山の蔭へ出ると西ノ湖と云ふ小湖がある、四邊山で圍まれて幽邃の境である。湖の一隅に沮洳の地があつてスゲの類やイトキンバウゲなどが生じて居る。水は淸く中にはアカハラやマス等も放つてあるさうだが、舟はなく漕ぎまはつて遊ぶことの出來ないのはもの足りない氣がする。湖の水は柳澤となつて中禪寺湖に注ぐのであるが、減水すれば少しも流れず、全然隔離された水溜りとなり了るのである、そして大岳の方から流れ出て柳澤に合する澤も水が全くなくなることがあるが、それでも柳澤の落口には可なり多量に水がある、つまり地下を水がくゞつて來て意外な處で湧出して川となつて湖水（中禪寺）に注ぐことゝなるのである。西ノ湖の岸の一部には僅許りアシが生じて居る外あとは笹か樹木が生じて居る、オホズミの大木やシヲヂがある、又此邊にはニレの大樹が澤山オホナラに交つて生じて居るが、北海道にあるニレとは枝ぶりが大分異つてしだれて居ない。笹の間にはゴマナが澤山咲いて居た。

外山澤に沿ふて立派な林道が出來て居て、夏は地橇、冬は雪橇を用ゐて外山澤の奥から材木を出して居る、地橇とはつまり地上に用ゐるもので、林道に一二尺置にころがしてある丸木の上をすべつて動くもので、材はオノヲレの如き丈夫なものを用ゐ、其下面に荏ノ油を塗つて滑動するやうにして用ゐるのである、西ノ湖に行くには、この林道について數町進み、やがて外山澤に大きなナラの一本橋のある處からこれと別れて、彼の橋を渡り林中を眞直に進むので、少し行くと左から來て右に行く一小徑があるがこれは柳澤から來るものとかである、それにかまはず眞直に行けば一軒の百姓家があるのを過ぎて、柳澤の上流を渉り、復林中を少し行くと左に湖水を見るのである、目下は外山澤から菖蒲ヶ濱に出る立派な道が出來て居るから（自分は此の道は通過しなかつた、只其一部を望見したのみ

である）これによつて中宮祠から全然陸路によつて西ノ湖に達することも出來る。或は菖蒲ヶ濱から舟を賃して行くのもよい。菖蒲ヶ濱の沖からは太郎山も見えて景色がよい。

中禪寺湖に舟を浮べて見て特に感ずるのは、其四周の山に生じて居る密林の美しさである。箱根湖の周圍が主としてハコネダケの生せる山で目にたつ程の森林がないのは葦ノ湖の價値を下げること一と通りでない、それと反對に中禪寺湖の四周の山の密林殊に常綠樹は、景にどれだけの風致を添ふるであらうか、この密林ありて初めて中禪寺湖は生きるのである。その常綠樹も今や漸く跡を絕たんとして居る。足尾から吹きよせる毒風は湖の南岸の山の頂を已に坊主にしてしまつた、阿世潟峠の上などは殊に悲慘である、社山、黑檜岳の方面は山が高いだけに、毒風の達する量も少い故か、枯木の數もやゝ少いが、それでも肉眼で明に枯木や瀕死の樹木が見える。此ゝゝで進めば今後十年したら中禪寺湖の南岸は一樹の影だになくなるであらう、そして男體の下部も追ては此の毒霧毒風の爲めに到底とり返しのつかぬ赤裸にされてしまふのだ。其頃には清瀧附近の山は無論足尾の現在の狀態と選ぶ所がなくなり、日光山の眞の美點は何處に求めることが出來る樣になるだらうか。水害は益々起り、山はくづれ、人家は流れ貴重だとかいふ人命は一抹の水泡と共にきえるのである、其時になつて人の子は自ら植ゑた罪の爲めに亡さるゝのだ、そして喜んで成佛するのだらう。此の如く自然を虐げても我慾を逞うせんとする者が、自分と同じく、少くも形態學上から、人類として取扱はれ、社會や國家をなす分子であるのかと思ふと、もう一刻も早く人間をやめてしまひたい。そして靑空を翔る白雲とでもなつて殘忍な人類の面上に天から唾してやりたい。

中宮祠附近で外に遊びに行く所は近くでは歌ノ濱の觀音、寺ヶ崎、阿世潟などで、健脚な人は男體山へ登るもよからう。湖水を匝つて阿世潟へ行く路は、歌ノ濱を通過するもので、歌ノ濱から先きは細徑或は湖に入り或は崖に上りなどして、初夏にはツバメオモトの白花をふみ、初秋にはヤマトリカ

ブトの紫花に導かれて行く、昔ながらの山道が何となくなつかしい。寺ヶ崎は通例舟で訪ふ所であるが、陸路強いて行かれぬでもない。但し路らしい路もないので、往々湖中の岩石をのり越えたり又は荆莉をおしわけて行くより致方がない。男體山へは中宮祠から直上三里と號する、毎年舊曆七月一日より七日までは禪定と稱へて、數萬の賽者が白衣で山へおし登るので、登山料は一人金三十五錢を徵收する。それで差引少くも二十五錢は純益となるので、二荒山神社は優に數千圓の實收がある譯であるが、それでも末社攝社は申すに及ばず、女峯、太郎等の山頂の社は荒廢にまかせてあるので、金が餘つて困る位ださうな。

湯元に行くには舟で菖蒲ヶ濱まで行くか、或は全然徒歩によるか、或は一部なり全部なり人力車を賃するかであるが、昨今は四人乘の實に見すぼらしい、どこぞの掃溜めからでも拾つて來た樣な馬車が湯本に往復する、乘車賃は一人片道四十五錢とか五十錢とか聞いたが、斯樣な乘ものを利用しやうと云ふ篤志家があるかと思ふと、世間は廣いものだと感ずる。

湖の北岸に沿ふて菖蒲ヶ濱へ出るに徒歩一時間許を要する、相變らず心持のよい路で、ひどく暑くもない木陰を行くのは愉快であるが、西澤金山行の馬が盛に通るので粗野な馬子に出會ふのは決して有難いことではない、しかし舟行は晴天には可なり暑いことを覺悟せねばなるまい。

菖蒲ヶ濱には帝室林野管理局の養魚場がある、謹で拜觀を願つたら、隨意に見ろと云ふ係員の御言葉なので仰に從つて隨意に見ることにした、池が澤山出來て居て、地獄澤から引いてある清水が始終流れて居る間を、大小數百のマスが泳いで居るのも見事である。此外には西澤金山で用ゐる電氣の發電所もある、近々之を擴張して、金山まで鐵索を通じて貨物の運搬を開始するのだとか、多數の工夫が入り込んで戰場ヶ原の三本松の邊には何とか商會の出張所などさへ出來て、黃金崇拜家をして欣然たらしめて居る。

菖蒲ヶ濱から三四町も行くと地獄の澤に出る、立派な橋が出來て舊のと二條かゝつて居る。地獄の茶屋の向ふにチョイと登ると直おなじみの龍頭の瀧で、小亭が出來て居て觀客の休むに便利である。龍頭の瀧について坂路を上ると復一茶亭の舊跡とも稱す可きものがある、一時龍雲ノ瀧などゝ號して客を呼んだものだが、今は癈れてしまつた。

これから朝なら日を背負つて暑い道を登るのだ、昔はこの邊から戰場ヶ原の入口まで一帶にオホナラ等の林であつたのだらうが、今は無殘な跡を止めて居るにすぎない。

湯元道で一番自分のきらひなのはこの龍頭瀧の上の登りである、景のよい戰場ヶ原も炎天には日陰はなし、それに工夫、土方、馬子、俗客の群に出會ふのが如何にも苦痛なので、別路を考へて居たのだが、フトしたことから小田代の原を經て湯元に出る路を發見したので、これを次に紹介することにする。さつきの龍雲ノ瀧の茶店から少し上ると道の中程に二三十坪程の平地があつて、もと小屋掛でもして木を挽いたらしいあとがある、こゝから左の方に細徑が通じて居る、嘗て菖蒲ヶ濱の發電所へ湯川から水を呼んだのかと思はるゝ樋の殘骸がある、その向つて右にある細徑を進めばよいのである。龍頭瀧の上流を左に瞰て行くと色々な形をした岩石の間を水が流るゝの狀は慥に一覽の價値がある、川は或は狹まり或は廣くなるが、數町も行くと、兩岸が漸く相近づいて橋がなくとも樂に岩から岩へとび移つて彼岸に達せらるゝ所がある、現今では立派な粗朶橋が架してあるから馬さへ自由に通ずる程である、こゝで川を渡らずに行けば戰場ヶ原の入口の茶店の所に出るが、路は變も奇もないらしい。川を渡つて行けば一寸草原でまだ若いカラマツなどが立つて居る、漸く進むと間もなくオホナラの密林に入る、オホナラに交つて百尺亭々たるカラマツが多少あるが、概して巨大なオホナラで、純林と稱してもよい、地は概して平坦で僅に上下あるのみである、林中風は透さぬが日陰を行くので炎天よりは餘程樂である。此のオホナラの純林は戰場ヶ原の西に連つて、やがては湯本の湯瀧の下一帶

の地に及び、それより戰場ヶ原の四周に續いて居るのだが、此邊は其最美なるもので稀に見る處のものであるから、森林の趣味を有する人や修學旅行の際などには特に來て一覽す可きものと思ふ、これも數年内にまた人の子の手にかゝつて伐採さるゝかも知れない。

林の中を概して西北指して行くと十數町で、一寸北に向つて進むと小さな坂路を上ることになる、路が二本あるが何れを行ても直に合するから心配するに及ばない、これを上つてだら〳〵と右手に下ると、こゝで初めて路が二岐する、左のを取つて山の裾について復西北から西の方へだら〳〵降りに進むと三四町で、木の間から小田代ノ原が見える、林を出離れてパッと明くなつて原が直目の前に開展される、前面には前白根の續きの山が蟠まつて左の方に錫ヶ岳の一角が現れる。少し行くと路が二岐する、左のを行くと直に復二つに分れる、眞中のは眞直に行つて小田代ノ池に入つてしまふので水が乾いて居るにあらねば通行は出來難い、左のものは池のふちを周つて其對岸に近い所で外山澤からの道に合する、池の水は增減があるので、池を匝る路は時に池水に蔽るゝことがある、それで時には左方の小高い草原や笹の中に入る處もあつて、知れにくいが通過には左したる困難はない、殊に池畔にミヅゴケなどで足を陷れる樣な所は皆無であるから心配はいらない。小田代ノ池は五萬分の地圖には池らしく記してないが、大雨の後に少し水の溜る位な所を立派な池の樣に印してある點から考へても、此の池はモチット池らしく取扱つて貰ひたいものだ。外山澤からの路に合して暫くは草に蔽れたる細徑をたどるのだが、やがて立派な道路となつて、山の裾を通つて東北に走るのである。後に立戻つて前述の三本の内の右の徑はどうかと云ふと、これは小田代ノ原の東の緣を略北微に西に走つて、林の端の草の中に通じ、やがて十町程で前記の外山澤からの路に合するのである。時間に餘裕のない塲合又は池をめぐるのがいやな時にこの路を行けば距離は大に短縮する譯である。此邊は近年御料局でカラマツの植林をやつて居るので、後來立派な林が出來るだらう。道も其の爲め昨年頃かよくした

と云ふ話である。

これから再びオホナラの林に入つてだら〳〵下りに東北指して行けば、數町で泉門に出る、これは路の右方の崖下にあつて清水が絶えず湧出して居る、飲用に差支はない樣に見受けたが崖から降るに一寸臆劫である。此處から右に戰場ヶ原の一部糠塚の後方が見える。泉門を過ぎ、だら〳〵と下つて一寸した橋を渡り復數歩上つてオホナラの林に入り左にまがつて少し降りぎみになつて進むと、間もなく湯川を渡る橋に出る、兩岸は巨木枝を交へ水は靜に流れ、景もわるいとは決して申し難い。これから川について左に少し行つて小坂を上ると前面は開けて、こゝにも森林亂伐の慘狀を物語つて居る。一軒の百姓屋の前をすぎて行くと、日は遠慮なく照りつける、笹や雜木の繁つた所を行くと二三町で湯元道と湯瀧道と別るゝ所へ出る This pass leads to Yumoto through Yudaki Waterfall と云ふ奇拔な道しるべが怪しげな字で書きつけてある。

此處から湯元に行く道は別段申すにも及ばない、只昔から見るとサルヲガセが著しく減じたのが目につく。

湯元には現今主な旅店が五軒ある、本誌第一年第一號で御紹介して置いた番頭の居た山田屋は餘程以前につぶれ、近年吉見屋が其建物を板屋に引取られてから、あとは南間、米屋、釜屋、渡邊旅館で、餘は三流以下のもの二三にすぎない。贅澤を望む人は南間がよからう、左なくば板屋は居心のよい家で而も驚く程安直である、一體日光町は知らぬが中禪寺でも湯本でも、信州の諏訪などに比較すると遙に安價で而も取扱がよく女中などでもわかりがよい、尤も諏訪や長野の樣な所は信州以外にはたんとあるまい。

湯元附近には散歩に行く所がないと苦情を言ふ人もある樣だが、出懸ないから惡いので、少しまめな人なら雨天でゞもなくば退屈することはあるまい。湯湖に舟を浮べるもよし、湯瀧を訪ふも面白いし、泉

門あたりは散策には丁度よい距離である、又は古賀谷から光徳あたりへ行くもよからうし、遠路をいとはぬ人は西澤金山へも行ける、山路を恐れぬ人は蓼ノ湖、切込、刈込を訪ひ、或は白根、太郎に登り、又は金精峠をこえて丸沼あたり迄行くも面白からう。次に其二三のものゝ道筋をザット紹介する。

湯元の北隅自在湯の元の傍を通つて細徑を上る、初め少し急で上り切ると山腹を横に行く、笹が可なり茂つて居るが大して歩きにくゝもない、數町で左方に水が見える、細徑をたどつてこれに下ると蓼ノ湖の一端に出る、緑を周つて對岸に出ることも出來る、元來此處は四方山で、取まかれた山中の一小凹地で、俚人は此地をタテと呼んで居る、湖は山より落つる水の溜つたもので落口もないが乾き上るともなく、冬は堅氷に閉されてしまふのである、魚類としては多少のマスが放つてあるのみである、湖の緑にはタデノウミノコンロンサウがある、其他スゲの類なども生じて居る。

蓼ノ湖のタデは日光强飯の句にもあるが、これは果してタデの種類であるか或は全然斯樣なものはないのかも知れない、同じ句にある御花畑の唐辛なるものはどうも實際にあらうとも思へぬ、しかし中禪寺の木唐皮や霧降のゴキノミ（ツクバチのこと）が事實あることから思ふと、强て想像を逞うして或はクリンユキフデの如きものでも言つたのではないかとも推測出來ないでもない。つまらぬことだが清盛の死因を診斷（臆斷？）しやうと試る人のある世の中故、この位なことに數行の餘白を費しても編輯員から抹殺さるゝ樣なこともあるまい。

蓼ノ湖から舊路に立もどつて、尙前進するとやがて一寸峠とも云ひさうな所に出る、之を下るとやや原野とでも言つた樣な平地を澤が縱横に荒れ狂つた所に出る、此邊を大野又は大野ヶ原などゝ稱へる、此の原の入口とも云ふ可き所の道の左側に一小池がある、淺い池で中にはミクリの一種が一面に生じて居る從來名がないものであるから新にミクリノ池と云ふ稱呼を與ふることにした。五萬分の地圖に 1707 と記してあるあたりである。

大野原を縦に走つて刈込湖に注ぐ大きな澤が地圖に記してあるが、此澤は平常は無水である。或は木立の中を或は笹の中を多少上下して行くこと數町で急に澤に下つてそれを横斷することになる、此邊は去る卅五年の大暴風雨に荒れた處で、今でも當時の凄愴な狀態が思ひ出でらるゝ。地圖には立派に橋が三ッも記してあるが實際は一ッもない、が其の三ッ目の橋のあたりで澤を渡りかへして復木立のうす暗い中を暫く行くと切込湖の一端が目に入る。切込、刈込の二湖はつまり蓼ノ湖の大なる樣なもので落口のない湖である、そして二湖は細い水道でつながつて居て、兩湖の水面は同じ高さである、五萬分一の地圖には大なる方即ち先づ目に入る方のを刈込とし他を切込としてあるが、これは却て反對ではないのかと思はるゝ疑がある、目下之を云々するに充分の材料を持たぬから只疑を存して博雅の士の敎を乞ふことゝする。（臆斷を試みても抹殺は致しませんでしたのに。編輯員）

湖について少し行くと小溪の左より來りて湖にそゝぐものをこえ復數十間樹林を行つて更に澤が左の山からおしだした處に出る、此二溪は水が絶えぬ樣であるが、地圖には一向に記してない。此の荒れ出した澤をこえると茶店の廢趾がある、泥土が四邊に飛び散つて、洪水當時の如何に悲慘であつたかを語るに足るのである。

地圖の所謂切込湖の方へは林中路なき所を第一の湖について辿れば達することが出來る、湖は共に深さうでフナが棲息する他魚はないと云ふ。

此二湖を過ぎて尙上れば一八七三米の金田（かねだ）峠に出る。頂上の眺望は鹽原方面の山岳より磐梯山まで見えるさうだが、自分は晴天に此上に立つたことがないので如何とも申し難い。峠を越ゆれば西澤金山へも、或は栗山の川俣へも出られるので、金山からさきは現今は道路もよし通行自在だと云ふことである、只金田峠の路は去年は一度笹を刈つたさうだが、今年は草木繁茂にまかせてあるのでやゝ困難を感ぜざるを得ない。

白根登山に關しては言ふ迄もなく諸君の熟知せらるゝ處であるが、從來の登山客は大抵白根澤を上つて前白根に出る月並の道を上下するにすぎない。湯本から登るとすれば先づ金精峠を登り其頂上から左に折れて尾根傳ひに前白根の一角に出ることも出來る、但途中笈岩の所を上るのが難場だと言ふがそれも充分用意して行けば絶對に不可能なことはないのである。奥白根の頂上から大爆裂口を經て上州に下るのは必ず興味あることゝ思ふが、自分は未だ之を決行する機會のないのを遺憾に思ふ。此路によつて下山すれば地圖に所謂遠鳥居とある白根の一の鳥居の處に下るので、路は隨分荒れて居ることゝ思ふが、一の鳥居からは一ノ瀨に出る舊道を清水に戻り、萬一行き暮れたらこゝらに一泊するか、左なくば第一日に五色沼の附近に野營して二日掛でやれば充分である。

二千米突以上の峠で金精峠程の立派な道のついて居るのは多く見ぬ處である。現在では九尺幅の石さへゴロゴロして居ない誠に樂な道である。湯元を出て一時間許りで金精神社に達する、社は倒木におしつぶされて哀れな有樣であるが、それでも一錢銅貨一個と五錢白銅一個が賽してあつたのは御利益に變りのない證據であらうか。社から頂上まで半時間とはかゝらぬが、休憩時間を入れて全體で一時間半と見積れば湯元から金精峠の頂上迄達することが出來る。峠の上州側は割合に水害を蒙らないので昔ながらの路である、三十分乃至三十五分で清水に着く、此處は清水ノ沼の東俣の端に當る處で、前には沮洳の地があるし、又道を横切つて清冽な水が湖にそゝいで居る。景も惡くはないから小憩地としては適當である。

昔は五萬分の地圖に線點を以て示してある路によつて一ノ瀨まで無人の境を行つたものだが、近年千明氏が丸沼で養魚を初めて新道を造つて以來立派な路が開かれて通行には極めて便利である、只慾を言へば今少し低く湖に沿ふて道をつけたのなら更によいだらうと思はれる。

新道によつて進むと十餘町で沼の北俣が木の間から見參に入る。此處で一寸此湖の名稱について一

言する、昔は何と呼んで居たのか知る由もないが、嘉永二年版逸見豐次郎著增訂大日本輿地全圖には、此邊に一湖を記してタウラ沼とか呼んであるのがおぼろげに見える、此れが三湖の何れに當るや又全部の總稱にや不明であるので、之を考證の資料とはなし難い、割合に近年發行のものでは陸地測量部の二十萬の地圖に笈沼と記してあるが、五萬のには菅沼とある、菅沼なる名は震災豫防調査會報告第二十七號にも出て居る、近年一般此名を以て呼ぶが土人は依然として清水ノ沼と稱して居る、其理由は前記の東俣の頭に清水が流入するので此處を清水とでも呼びそれから清水ノ沼と云ふに至つたのではないかと云ふ臆說もあるが自分は否と答へるより致方がない、此湖は五萬分の地圖にて見る如くY字形をなして居るので其の東方に向ふ腕を東俣と稱し北方の腕を北俣と云ふ、此北俣なる名は可なり古いもので一八八三年出版の Handbook for Japan 第二版にも載つて居る、又此部をハス沼（斜沼の義）とも呼ぶものがあるが餘り廣く行はれては居らぬらしい、笈岩なる名は笈沼にちなんで命じたものかと云ふ說もあるが、日光のものは此名を用ゐず、若しこれが上州の名だとすると笈岩の見えぬ方面の人間が此の如き名を附けるのは一寸會得出來にくい。此他猶地質調査所の地圖を參照する必要があるが、生憎手元にないから他日機會があるまであづかりとする。

北俣の沼が見えてから程なく右に入る細徑がある、これについて行くと少し下つて湖畔に出る、此處に小舍があつて据風呂抔の轉がつて居る處から考へると滯在にも事を缺かないらしい。こゝから少し左手の山中に入り左から來る細徑に合して右に曲ると復湖畔に出て、それから水際を傳つて湖水の落口に出る、清水の湖頭から四十五分程はかゝる。此處で清水ノ沼の水は三百米突も下つて丸沼に注ぐので、其途中上部に八町瀧と云ふ見る程でもない瀧が懸つて居る。此れから細徑は恐ろしい急な山坡を降つて丸沼畔に出て、千明養魚場に達するのである、そこまで八町瀧の上から三十分許りはかゝる。

養魚場の建物の主部は往年此の山奥の湯澤の湯を引いて温泉宿を經營せんとしたのが、浴客がない

ので終に廢業の悲運に立到つた其の廢屋を修理し安全の位置に移したもので、これに隣て新築の物置や孵化場がある、此處は去る明治卅八年に尾瀨の歸途ネバ澤から山越しで下つて來た所で自分には舊知の地である、今は養魚場であるので終歲人煙絶えざる有樣であるから一ノ瀨へ出る道路も從來と異つて立派に營まれて山人には好都合である。

丸沼と其次の大尻沼との關係は猶切込と刈込との關係の如しだが、只丸沼の水が大尻沼に注いで、やがて小川の源をます違があるのみである。

丸沼から本道を清水まで戻るのは中々倦きる道である、可なり急いで歩いても一時間半はかゝる清水から金精をこえて湯元に達するには二時間あれば餘る、金精峠の頂上は大分木が倒れた爲め眺望が從前よりもよくなつた、湯湖の一部を見下し、其向ふに男體の雄姿が聳えて居るのは惡い景ではない。

明治卅八年に湯元の「勝」、あの詐欺を兼業とでもして居るのではないかと某氏が評した宮川の「勝」にひどい目にあつた自分は、其後當分白根登山を斷念した位で、湯元に暫く登らなかつたのも其れが理由の一つであつた、十二年後の今日でも「勝」は依然人に嫌はれながらも山案内をするさうである。が、外に適當な案内者はないかと搜した勞空しからで、長岡多一と云ふ男を見付け得た、大正五年に三十九と云ふからまた〳〵山歩きは向十年保險付きで、大がらな逞しさうな男で極めて着實さうで、又山の樣子も中々詳しい、高山植物の名も可なり知つて居るさうだがそれはどうでもよい、自分は此好案内者を得たのを喜んで諸君に推薦する。同人は日光の諸山は大抵知つて居る、機があつたら尾瀨へ行つて樣子を見て來ると言つて居たから追ては尾瀨の案内にも役に立つ樣になるだらうと思ふ。附近の山の案内料は前白根金一圓、奥白根金一圓二十錢、太郎山金一圓七十錢、男體山志津廻り中宮祠降り二日路にて金二圓と云ふ事である。此人間なら案内者手帳を與ふ可き資格があらうと信ずる。

湯元から中宮祠に歸るのには戰場ヶ原を通過するのが便利で且得策だと思ふ。湯坂を下りて古賀谷

の一ト口水迄は上るよりも下る方が餘程樂だ、殊に古賀谷から少し湯元によつた所は大層道路が修理されてあるが、元來日光地方の路普請と云ふのは澤や湖から砂利と砂とを採つて來て只道路にぶちまけるだけなのだから見かけはよいが、歩きにくいこと請合だ、それで餘計手をかけてある湯坂の下方などは上りにはなる可く避けた方が得策だ。湯元へ行くに小田代を通つて行くと此點に於ても利益がある、路は少しまはりになるがそれでも菖蒲ヶ濱から二時間半かけたら充分湯元の旅舍まで達することが出來る。

古賀谷の邊は逆川(さかさがは)が推出したので驚くべき川原となり風致を損じた事一通りではない、しかし勝道の一口水の依然湧出して居る。古賀谷で橋を渡つて少し行つて左へ小徑を傳つて十二三町も行くと光德の沼へ出る、昔は一廉の沼で鴨が降りたりしたが、三十五年の大荒れ以來年々御澤(おさは)がこゝへ推出して、沼は爲めに大半うまつて逆川の一部が少し膨んだにすぎぬ見すぼらしいものとなつた、五萬分の地圖にある程の大さはとてもない。

戰場ヶ原の本道から光德の方へ入る間道の入口の側に牛小屋が出來て、近所に牛が澤山放牧してある、湯元の旅舍の南間の經營して居るものとかで、よい思付きである、山中の高原に牛の群が徘徊して居る景もわるくはないが、せめて首にクラリヨンでもつけたら尙よからうと思つた。

戰場ヶ原の本道は乘合のガタ馬車が通る位だから、幅も廣くなり、其他の點に於てもよくなつた樣だが、寧ろ馬の通る位の程度にして置いて、日光山志の繪にある樣な細徑を通じて置く方が適當だと思ふ、無暗に道を廣げることが必じも常によいとは言へまい。

三本松の茶店も金山の爲めに繁盛する樣だ、金山が盛大になるのはよい事かも知れないが、黃金の前には自然とか風致とかの感念をおし氣もなく打すてゝしまふ人種の住んで居る國では、こんなことは盛にならない方が國の爲めに結構だと思ふ、戰場ヶ原へ鐵索をかけて、鐵屎を運搬されては到底たま

るものではない。こんな手合にかゝると、誰かゞ男體山の底は鉛で出來て居るとでも言はうものなら、坑道を堀るなんて手ぬるいことはして居ないで、ダイナマイトで山をふきとばしても、其鉛を採らうとするのだらう、そしてそれが國家に功勞があると云ふので勳賞の一つも貰ふと云ふ世の中だ。拜金宗のかたまりだと云つて、日本人がけなす米國に、ナショナルパークの設があることを知つて居る者は日本國中に何人あるだらう、そしてさういふことを聞かぢつても眞似をしやうとする奴もない。此頃は兎角わるいことで、猫も杓子もサンフランシスコ邊迄洋行して、日米騷動を起さなければ、碌でもないことばかりを直輸入するのが關の山で、よく眼光を紙背に徹して歐米の眞相を捕捉して歸る者が、所謂洋行歸りと崇拜さるゝ者の中に幾人あるだらう。

久しぶりで戰場ヶ原をよく見ると、葉の細いスゲの一種が夥しく繁茂したものだ、其の爲めにツルコケモヽやヒメシャクナゲなどは大に壓迫されて、僅に生殘つたミヅゴケの間にちゞかんで居る。近年はツルコケモヽの實を拂下げて、兩に二升位な價で盛に賣出すと云ふことだが、その位ならツルコケモヽの保護をして、その繁殖を計つたらよささうなものだ、自然に相當の保護を加へて之を利用するのはよい事だが、自然を虐げても限りなき人慾を滿たさうとするのは奬勵すべき事ではない。

湯元の方から來て戰場ヶ原を出はづれる所に、五萬分の地圖には赤沼と云ふ可なり大きな沼が記してある、十餘年前こゝに堤を築いてコヒだかフナだかを飼養した人間があつたが、不成功とあつて今は全く中止し、堤もなくなつて今は平地に水がチョロ〳〵と流れて昔の夢のあとを語つて居る、其頃だとて此池は地圖上に記してある程の大さではなかつた。五萬分一の地圖の瑕瑾の一は、小形の池沼の大さが餘りに不正確なのと、年中水を滙ゆるものと、單に沮洳の地をなして居るものとの區別が、餘りに實際に遠ざかつて居ることがある。序にモ一つ苦情を言ひたいのは、澤や山やの名で古來俚人にだけでもよく通じて居るものが、あまりに多く省略されて居ることだ。しかし大體に於て誤の少い

此圖が吾人を益することは實に莫大なものである。男體圖幅でモ一つ言て置きたいのは、外山澤の出て來る外山の位置が少し違ひはせぬかと思はれる、前白根山を記してある山の字の少し下で、外山澤が二岐する其中央にある小峯を、俚人は外山と呼んで居る、これは近くへ行かなくなつては到底見えぬ山である。序に言ふが此外山澤の奥、殊に其左の方の上流には可なり立派な瀧があるさうである、赤岩の瀧とかいふのはこれだかと思ふ。

戰場ヶ原の本道は、再びオホナラの粗林に入つてやがて龍頭瀧の所を過ぎて菖蒲ヶ濱に出で往路を戻つて中宮祠へ歸る譯である。

中宮祠附近の山あるきをするには、米屋へ賴んで案内を雇へばよい、自分は小平留五郎と云ふのを使用したが可なり此邊の山川に明い樣で、而もおとなしい人間である、それでも稀には不正確な事がないでもなかつた。

日光も一通り奥まで歩いたから、再び歸路につくことにする、途中は一足とびにして日光町迄辿りついたことにする。さて小倉山、萩垣面方面乃至鉢石などへ散歩して見た、特記するともないが稻荷川に一見立派な釣橋が出來る最中であつた、これが完成したら霧降方面へ行くに便利なことだらう。鉢石も昔と大同小異であるが、Fine Art on the upstairs だとか Peppermint first made here in Nikko などと云ふ奇拔な招牌が大分增えた樣だ、產物として鬻ぐものは相變らずの日光羊羹、日光唐辛を初め、下らない箱根細工の玩具や、コクハの蔓製の不恰好な杖位にすぎない、あれも何とか改良することが出來さうなものと考へられる、殊にコクハの杖に至つては在鄕の兄いでさへ用ゐられたものではあるまいに、それより蔓を截らずに其實を採つた方が得策だらうと思ふ。

日光山と云ふとあまり人口に膾炙して居る故か、平々凡々の所の樣に思ふ人がある、初歩の登山家なら知らぬと、天狗連や雷鳥の申し子などの行く可き所ではないと考へてる人もある樣だ、併し此頃

なまものじりの奴等の間に流行する樣な何々アルプスだとか、何とかライン抔と云ふ馬鹿氣た名をつける病氣に感染しないで、昔ながらの樣子のある所が何となくなつかしい。恒雪がないからとて、カールとかゞないからとて、山岳研究者が度外視する山ではあるまいと、賴まれもせぬ提灯を持て置く。

霧島の山々

明石國助

今年の夏、私は九州の火山に登りたいと思ふて七月廿一日京都を出發した。元來九州は非常に火山に富むで、其數に於ては全國に其比を見ない位である。私は火山を見たさに九州へ行つた、そして標式的に火山の全部を具有して居るのを見た。就中興味を覺えた霧島火山に就て少しく書きたいと思ふ。

霧島火山登攀の記錄は從來刊行せられたもので私の知つて居るのは古くは橘南谿の西遊記、近くは田山花袋氏の「日本一周」と河東碧梧桐氏の「日本の山水」抔が詳しく、其外種々あつても簡に過ぎて要領を得ないもの、又西遊記の燒き直しの机上登山記などが頗る多い樣である。「大日本地誌」卷八には可なり詳しく書てあるが登攀記としてゞはない。高頭先生の「日本山嶽志」のは古今の記錄を輯め頗る有益であるが現狀と大分相違して居る。其他地質、地震の各學者の專門的研究報告も大分あるが、それは私達の所謂登山の全部ではない。

花袋氏は日向宮崎方面から高千穗峯を越られ、碧梧桐氏は大隅方面から韓國岳より縱走して高千穗まで行かれたので、何れも三四年前のことだと思ふ。私は碧氏と同じく大隅より韓國、新燃、高千穗と別々に登攀して日向の方面に出たのである。地圖は參謀本部陸地測量部の五萬分一の地形圖「小林」に

依つた。

七月卅日　昨日櫻島岳から歸つてから鹿兒島測候所の前田所長の厚意で既に十回以上霧島山を實地調査したと云ふS君に詳しく樣子を聽て遲く寢た爲め、朝食も食はないで漸く五時三十五分發の滊車で鹿兒島を出た。顧ると錦江灣の中央に櫻島岳が朝暾を受けて半面を眞赤に染めて居る。昨日踏むだ新噴火口から頂上へかけて水蒸氣が渦を卷いて含むで居る、何と云ふ秀麗な形だらう。鎗の穗先の樣な溶岩が全山を埋めて居樣とは到底想像のつかない秀麗さである。

鹿兒島方面から霧島に登るには二つの道がある、一は國府から六里の道を霧島神社に出て高千穗峯に登るのとは一は牧園驛から四里の道程を經て霧島溫泉に出て登るのとである。鐵道の便が開けてからは溫泉が賑ふので牧園驛から行く者が多い又便利である。私が牧園へ着いたのが七時十分。寒驛なため赤帽が居ない代り驛前の霧島溫泉案內所から荷物を運んで呉れる。暫く休憩して五人乘の圓太郎馬車を雇つて行く。此邊は自炊制度の湯治客が一切の所帶道具をウンと積み込むで行くのが多いから可なり朝早く牧園へ着いて馬車を雇つた方が好い。霧島溫泉の下まで一人前四十七錢である。馬車は山道を曲り曲りして中途の中津川字寺原（てらばら）で一休みする、急坂になると馬一匹では重荷過ぎるので尙ほ一匹馬の先引きをやらせるのは一寸奇觀である。

中津川（二百五十米突）から鹿兒島縣種馬所（五百米突）邊迄來ると既に高原の感が漂ふて來る。鈍平な圓頂の丘陵が幾重りも幾重りもする中に幹の太い雄松が思ひ出した樣に處々粗林をなして生えて居る、丘と丘とは深いV字形の谿谷を作つて韓國岳から源する中津川が流れて居る、其谿には川の水際まで杉、檜が繁茂して居る。前面には霧島の山々が或は圓頂を、或は倒鉢形を或は圓錐形をして眼前に連亘して居る、高千穗峯の下の御鉢からは朦々と水蒸氣を噴いて九天に冲して居る。草の上には遥しい種馬所の馬が放牧してあつて閑々と夏の日蔭に嘶いて居る。何處からとなく硫化水素の臭氣が

して來るので温泉の近い事が分る、そと谿間を見下すと所々板小屋があつて女抔が裸になつて居る、それは温泉なので、栗川湯、殿湯などはやゝ大きい。谿を堀れば、ベタ一面に温泉は出來ると馬丁は言て居た。温泉の饒多なのが分る。

霧島火山彙の有名なのは烏帽子岳（九八八米突）新燃鉢岳（一四二一米突）大幡山（一三五三米突）大幡池岳、夷守嶽（一三四四米突）御池（三〇五米突）高千穗峯（一五七四米突）矢岳（一一三二米突）中岳（一三四五米突）獅子戸岳（一四二八米突）韓國岳（一七〇〇米突）大浪池岳（一四一二米突）甑岳（一三〇一米突）栗野岳（一一〇〇米突）白鳥山（一三六三米突）其外の山々であるが私達は常に飛驒山脈の壯大なのを見なれて居るから左程迄崇敬の感を起らないにしても、それでも其のスカイラインには多樣な優美と火山獨特の重々しさを持て居る。

馬車は温泉の下の岐路で止る。そこに温泉宿の人夫が居て十四五錢出せば荷物を五町或は八町も上の温泉宿へ送り届けて呉れる。私が榮之尾湯に着いたのは十一時であるから四里の路を三時間餘り費した事になる。

私達は霧島温泉と一口に言へど其數は非常に多い、普通は榮之尾湯、硫黄谷、明礬を霧島三温泉と云て居る、各一二町を距てゝ存在して、設備も可なり行屆いて居る、就中榮之尾湯は三温泉中設備は不完全であるが頗る山海の風光に富むで居る、座敷から居乍ら烏帽子岳を前面に錦江灣を一望の中に納めて居る、櫻島岳が聳立する左の肩に典麗な富士形の開門岳が長く裾野を引いて居るなど一寸比類のない好い眺である。其外私の見た温泉の名を列擧して見ると横瀨、壺湯、栗川、殿湯、關平湯、手洗、鉢投、栗野岳、新湯、湯之野、カサ湯、蝦野湯、安樂、鹽浸であるが、總數は二十六七個所もあると云ふ事だ、一個所に三十近くの温泉を湧出する鹽浸等は他に類例がない。設備は皆改良の餘地がある樣に思ふ。

私は其日は附近の温泉めぐりに半日を費した。夜中は雨が降つて居た。

七月卅一日　朝は頗る好い天氣であつたが、雲が多くて遠雷がして居た。榮之尾湯の山猿と稱ばれて居る案内者松方嘉左衛門は小柄な四十五六の男である。私の寫眞機と飲料と食料とをフゴに入れて背負つた。宿を出たのが六時半。榮之尾の泉源である、爆裂火口に沸騰する二坪許の熱池を右に見て密林の中に入つた。林はイスの樹、クヌギ、樫、檜が多い。雨に朽ちた人の踏まない所を飛び飛びして登つた。三十分すると其の喬木帶を脱した、萱が私の背よりも高く密生して居る中を私達は杖を斜にして手袋をはめて溝道をグン〳〵登つた。萱がなくなると今度は腰迄の熊笹だ。萱も笹も昨夜の雨で十分濕り切つて居るので私達は十分と經たない中に全身濕れ鼠となつた。鬼薊が強い刺で時々脚をチク〳〵刺すには弱つた。七時頃其の熊笹も少なくなつて處々灌木がある、案内者は這の樹だと云ふ、山毛欅の一種だ可憐な實を附けて居た。それからしばらく行くと大浪池岳の火口壁に達した。大浪池は完圓に近い火口湖である、私は南の方の缺け口から湖畔に下りた、火口壁から湖邊に至る三十乃至垂直に近い經壁には物凄い程喬木、灌木が密生して居る、私は濕潤な凄慘な、湖邊に長く彳むでは居られなかつた、湖水は死の水の樣に寂として一波も寄せない、直徑七百米の湖を今にも埋めんと許りに火口壁が衝つ立て居る。湖面の標高一二三九米突。

再び火口南壁にもどつて來た時は風が大分出て來た。韓國岳が眞北に湖の上に歪形三角形の頂に白雲を去來させて居る。脚下から霧が起つて來た。私は火口壁の最高點（一四一二米突）を經て一里に近い池の堤を右に半周し初めた。私はそこから南望した、私の眼を遮るものは今は烏帽子岳のみだ、櫻島、開門、金峰山塊などは霧の間々から詩の樣に出沒して來る。國府の町も加治木も、鹿兒島も此處から見れば皆錦江灣の美を飾る象眼に過ぎない。東の方は牧場の樣な綠につゝまれた新燃や獅子戸が紫色の高千穗峯と相對して夢の樣に置かれてある。半周を終ると案内者は下り初めた、時に八時半。

這の樹と立交つて霧島躑躅が多い。大きいのになると私の十五インチの頸程の太さのものもある、下れば下る程多い。花時の美觀を案内者から聞かされて誰人も繰返す憧憬れの眥を擧げて韓國岳へ取りついた。喬木帶を少し下つたと思ふと案内は九折してヒタ登りに登り初めた、大浪池と同じ樣に道のない所を遮二無二登ると云ふ格恰である。躑躅の素敵に澤山ある中を通つて草木帶に出た、途を急に右手に取つた案内者は、早く來いと私を招いた、そこは韓國岳の最高點である。韓國岳は古來から高い割合に名高くなかつた、それは登るに不便なのと、山に奇がない爲め單に襲の山として顧みなかつた樣だ、然し韓國の名稱は碧梧桐氏も云た樣に躑躅の爲めの唐紅から來た名稱だとは登つた人の直ぐ想像される事柄である。

舊火口は眼まぐろしい程深い、到底火口底に下りる事の出來ない絶壁である。大浪池岳の樣な水は更に無い三百米突の深さだと言ふ事だ。この岳の最高點（一七〇〇米突）は霧島山彙中の最高峯である。そこに立つて四望すると限りない興味が起つて來る。先程の灌木帶を出る時分から催した雨は顏に斜に當つて來る。霧の晴間を縫ふて南から東を見渡すと大浪池は勿論、直ぐ脚下の琵琶池（一六〇〇米突）新燃、御鉢、大幡池、大幡山が皆各々ポクリ〳〵と大きな噴火口を其頂上に孔け人を馬鹿にした調子に見える所はとても下から見上げた感とは打つて變つたものである。それが峨々たる飛驒山脈の樣な岩山ではなくて頂上迄綠の草が毛氈か天鵝絨の樣な柔かさを以て生へて居るのだから面白い。其中に在つて只一つ强い色彩を出して居るのは不斷の煙を御鉢から吐いて居る紫の高千穗峯である。其の吐いた煙が峯全體を被ふたと思ふと、忽ちにして遠くの山々から刷毛でなすられた樣に私の眼界から消失してしまう。時に十時。

私は今朝起きるとから斯う決心して來た、それは高が六七千尺に滿たぬ草山だから韓國岳から直ぐ新燃、中岳、高千穗と縱走をしたいと思ふて昨夜宿の主人に話したら、到底その樣な冒險に御同導する

案内者はないのみか、此様に草木が繁茂し切つてる時期には不可能だと中止させ様とした、私は碧梧桐氏が既に十一月頃に、尾根傳ひに高千穗の麓迄出た事を知つて居るから、今日韓國の頂上迄行つて俄かに尾根傳ひをしやうと言出して見様と決心した。それを今案内者に話したら、案内者は身振ひをして言下に其の不可能を説いた。十一月頃は既に草も木も枯れて或は行けるかも知れぬが、現在此の頂に來る迄にすら萱や笹が如何に繁茂してるかゞ分る、其上途抔は藥にしたくもないし蛇や蝮が多い、そして天候が險惡だからと付け足した。私は此の際、此企を放擲するより外に途がなくなつた。

岩の上に露出して居る私達は小雨の爲め寒冷を覺えて居る、冷飯とサイダーで空腹を滿たして如何はせんと思案に暮れた。地圖を見ると北方には御池（ミイケ）が極く近くにあるが今は見えぬ、せめて見える所まで北に降らうと、澁り勝の案内者を促して道を火口壁の下を北へと降りた。雷が切りに鳴り出して來た。雨が急に激しくなつて來た。萱がなくなると針葉の密林へ入つた、此山には珍らしい溶岩の露出に足を阻れながら間もなく草原の見える所へ來た。幸ひ小降りの雨の間から些かづゝ北方が透いて來るのを見渡すと、自分の位置より高く甑岳が整形な火山體を作つて右手に座し、白鳥山が半ば火口湖を露出して左手に位して居る、その中央には兩山よりやゝ低く御池（高千穗峯東麓の御池と混同する畏れがある故私は寧ろ西御池と言た方が好いと思ふ）が火口壁に圍まれて横はつて居る、眼下には少さい乍ら完全に圓形の不動池が見える。矢張り噴火口跡だと云ふ。

私は先程から切りと嚏が出る、雨は合羽を透して私の褌にまで浸入して來た。西御池に登るのを斷念して終に趾を返す事にした、韓國岳の最高點まで戻らず斜に大浪池岳の方に出た。濶葉樹林を拔けて、大浪池の堤に出たのが十二時前であつた。霧と雲の爲め何物も見えない。脚下の大浪池すら辨じない、只私の歩む數間のみが辛うじて見られる計りだ。同じ道を引返すのも藝當がなさ過ぎると思つて今度は火口壁の西方を半周した。其間に私は毛毫苔と一つ葉と深山人參を發見して採取した。下山の道

も明礬湯の上方に出る樣に磁針路を選むだ。此方面の密林は妙である。私達が盆栽で貴重し賞美する栂や眞柏は非常に多い。其の林の天然の枝振りの見事さ、其數の饒多、其幹の太さ、躑躅と交錯亂生して居る樣は曾つて見た事のない痛快である。此處に庵を建てゝ住むだらなどゝ他愛もない事に想像を走らせて居ると先に立つた案内がオーイ〳〵と人を呼ぶ聲に私は自分に返つた。私達から半町も向ふを和服の男二人が素足に傘を杖にして霧の中から隱見する。近づいて見ると脚や手は所々血に滲むで居る。下の湯治客が徒然の儘今朝案内も賴まず單に名稱と方角を聞いて少々見縊つて大浪池へ出かけたのだ相だが密林中、不知案内と霧とで途を失して數時間途方に暮れて居た處であつたのだ。其人達は蘇つた樣に嬉んで繰返し繰返し禮を述べて居た。案内者の言ひ草が面白い「一圓そこそこの金を出し惜みをして命を捨てる馬鹿が有るケン、御岳へ入つたら出て來ないなどゝ知らぬ人が言ひ立てるのでゴワンス、御岳へは案内セイ賴めば何處なり共行けるのでゴワス、そいで案内と云ふものが置いてあるンジャ」と山中の失索者、行衛不明者の爲め頂門の一針だ。歸京後甲武信岳の學生危難の報を讀むで轉た愴然たるものがあつた。

同行四人は明礬濱と云ふ所に出た、硫黄採礦所の跡を通り拔けた、碌々の山の中腹を削り切つた個所に遊離硫黄が岩石に附着した儘露出して居る、私の下つた此道は碧梧桐氏の登つた道だと氣付いた。私は試みに拳大の硫黄を手を以て堀り起した、私は突然掌に非常な熱さを覺えた、それは硫黄を堀り起した爲め地鰒より水蒸氣が噴出した爲めであつた。道理で私の足部も草鞋を透して熱さを覺えて來た。明礬湯で一休みして榮之尾湯に歸つたのが午後一時半頃であつた。

八月一日晴。昨日の雨で風邪を催した樣で今日は靜養する心算で居たのが、起きて見ると大變天氣が好さ相なので兎に角地圖を懷にして草鞋を穿いた。案内者に聽いても道に迷ふ事はないと云ふので新湯を經て新燃に登らうと思ふて出た。明礬温泉の上の道を登つた、霧島神社に通ふ細道なので可成り

廣いが急だ。半里も登りつめると平坦な草木帶に出た。眼前には直ぐ新燃や大浪池岳、その陰に韓國岳が昨日は苦しめてやつたと云ふ樣な微笑を漏しつゝ日光を浴びて綠の快調を誇つて居る、岐路に來た、地圖に從つて左を選むだ、例の萱が火山灰の上に一面に密生して居る中をドン〳〵下つた。阪が急に九曲する樣になつた、見下ろすと萱はなくて赤土ばかりで雄松や杉などが茂つて居る谷だ、谷と云ふより峽だ、大浪池岳、新燃岳、韓國岳の狹間だ、硫黃の臭がする、即ち新湯だ。溫泉は慘憺として荒れて居るが眺めは頗る好い。繪でよく見るスッイデンの牧場の樣な景色だ、寫眞機を持つて來ない代りにスケッチなどをした。

新湯から道は細くなつた、濶葉と針葉とが交錯して處々に群をなして居る一高一低の萱原を一里餘も行くと又登りになる左は密林で右は萱原だ。韓國と大浪池と新燃との裾が丁度合し逢ふた小高い處で道が二つに岐れた。左は韓國の麓をめぐつて夷守(ひなもり)岳の方へ、右は新燃の北麓を獅子戸(しゝた)岳の間の叢林に沒して居る。私は右を取つて進むだ。新燃岳は南及び西から望むだ如き頂上に大岩石の聳立した奇怪な山容は東の方からは見られない、至極ゆるやかな傾斜を以て獅子戸岳、矢岳に連らなつて居る、私は這の木が岩陰に罩橫列を作つて生へて居る所から萱原を踏むで頂上へ向つた、目測で大浪池と同じ位の高さまで來て今數町で頂上に達すると云ふ所で栂の立樹の間から私は高千穗を見る事が出來た。昨日は紫に見えたあの山は今日は赫色だ。荒々しい溶岩流が鬼の口の樣に山の一部分を引裂いてタラタラと流れ出て綠の高原に强い岱赭の色彩の磧を現出して居る。御鉢から矇眛として煙を噴いて全山を渦卷いて居る。それが遠い所のものを見るのでない。只ッイ眼前の眺なのだ。

頂上は大浪池や韓國岳と同じで完全に近い圓形の噴火口で岩壁が痛快に瘤起して居るのが面白い。眺望は大浪池岳と同じ位の程度である。碧梧桐氏の韓國から縱走したのも此道らしい。獅子戸岳は一名丸岡(マルカ)山と云ふ、丸い山と言ふ意味らしい。萱原は兎に角、迷ひ易い栂林を畏れて私は元の道を可成

り苦心しつゝ發見して歸途についた。若し私が磁針を持て居なかつたら、實際と少しづゝ違つて居る五萬分一の地圖を懷にして大分無駄骨を折つたらうと思ふ。

今日費やした時間は宿を出たのが七時半で歸つたのが一時少し前であつたから約五時間であつた。

八月二日。可なり好天氣だ、例の嘉左衛門を案内に立てゝ六時半高千穗峯に向つた。新燃の見える草原迄は昨日と同じ道だ、それから右に岐れて、標高千米突餘の峠の頂上まで來た時谿の下に霧島川が音を立てゝ奔流して居る、それから湯之野温泉まで下つた、此間の眺望は開達な好い景色の連續だ。湯之野に小憩してそこを出たのは八時。霧島川を一つ渡つて直ぐ左の細道に分け入つた。それから一時間位は、一寸沒趣味な丘麓をぐる〳〵曲りして行く。所謂東襲山（ひがしそのやま）村に屬する山地だ。新燃の南麓を一直線に東へ東へと行くのである。至る所段丘があつて規則正しく薄抔が生えて居る、松林など隨分深いのがある處々折れて倒れて居るのがある、落雷の爲めだと云ふ。昨日もあの邊に落ちた相だと眞南の圓丘の中腹を指した。谿流を二度渡つた、平素は水は少ないが雨の翌日は徒渉は可なり困ると案内は云ふて居た。此邊は定まつた道と云ふのが無い、處々に分れ岐があつて、到底案内なくては——測量部の地圖だけでは——途に苦しむに相違ない。進めば進む程萱と薄とが繁茂して來る、突然溶岩の混じた火山灰の溝に出た。私は前面を見て思はずアット叫むだ。それは私達が今斯くも近くに多年憧憬した高千穗峯が不可侵の態度で朦然と御鉢から煙を擧げて居るのを見る事を豫期しなかつたからである。時に九時十五分。一木一草も生じない赤裸の整正な火山標式の御鉢の噴煙の間々に隱見出沒する高千穗峯を背景に、鬼の口の裂目から今食た許りの生血がタラ〳〵と流れ落つる樣な溶岩流が深い噴裂罅から流れ出して、それが私達の脚下まで續いて居るのだ、否なズット下迄も續いて居るのだ。そして他の山々は素知らぬ顏して綠の衣を着て衝つ立つて居るのだ。何と云ふ沈默な壯嚴であらう。居る事久しうして溶岩流を傳ひ初めた。幾何の以前だか、十里四方を灰にした此峯が今はたゞ自個の山

とその溶岩流に往年の權威を誇つて居るのに同情し乍ら、頭を沒する萱原を分けたり、鬼薊に脚を痛めたり、溶岩の尖鋭につまづき乍ら、處々馬鹿にした樣な、超越した樣な松が三四本又五六本綠の草、白い砂に圍まれ乍ら砂漠の沃地めいて孤立して居る樣は又なく俳味がある。

行くこと三十分弱、既に萱も松も這の樹も薊もなく私達は御鉢に攀ぢ登る可く他に途のない所にイむだ。岩角は脆くて取りすがるに力とする事が出來ぬ、足溜りにする草もない、拳大の褐色の石は一歩毎にズル〳〵と落ちる、四十五度或はそれ以上の阪を杖一本に身を托し喘ぎ登る、四百米突か五百米突をひた登りに三十分近く費した樣に思ふ。御鉢の西口に低所の龜裂のある大溶岩に腰を下してホッとした。十時十分。

御鉢は見るから愴然たるものがある、直徑はそれ程大きくはないが何分屏風の樣な岩層が、褐色赤色黑色の火山砂礫が段層をなして垂直に火口底に落込むで、口底から遠雷の響に地鳴りを立てゝ硫黃氣を交へた蒸氣が脈々と立昇るのである、一種の恐怖と好奇とは私の心を震はせた、火口底へは下りられると云ふ事を測候所で聞いたから、案內者の止めるに關らず西から南の方へそろ〳〵下りて見た。風の都合の好い時を選むだ爲め、思つたより樂だ、五十米突許り下りた所は少し平坦だ、氣を落付けて見ると、煙――水蒸氣に硫化水素を交へた――は間歇的に出る樣に思ふ、火口底に靑く濁つた水が溜つて居るのが見える、眼の下に梯子が掛けてある、往けるだらうと思つたが風向が惡くなるのと上から呼ぶ聲が切りなのと、それに鉢の中に居るからか響が先より大きくなつた樣なので、恐氣が付いて急いでかけ登らうとした、所が實に急な阪なので登つても登つても滑つて行く樣に思はれる、火口底にめり込む樣に思はれる、全體汗みどろになつて藻がいてやつと元の所に歸つた、顏が蒼いと案內者が注意して呉れたので飲物を取つた。

案內が呼むだのは霧の襲來なのだ、霧島とは名詮自稱晴れたかと思ふと直ぐ霧だ。錦江灣の眺望は

既に沒してしまつた、霧の中を馬の脊越にかゝるのは浮雲いと急いで、歩き出した。馬の脊越はどの記行を見ても空恐しく記てある、南谿も霧の多い事、馬の脊越の危險を筆を極めて誌して居る、碧梧桐氏も寧ろ命の脊越だと稱して居る、案内からも可なり危いと言はれて居た。然し實際を言ふと私はそれは旅行者の一種の誇大ではないかと疑問を持つて居た。私はその疑問の解決と云ふ私自身に取つては非常に面白い問題を一歩の眼前に控へて居るのだ。成程、左手はどこ迄あるか三角定規の眞直線の樣に岩鋒や砂礫が四十五度以上の角度で續いて居る、右は一足外は垂直に近い噴火口だ、自分の歩む所は馬の脊の樣な一尺内外の岩角だ、萬一噴火口から今にも大噴出があつたら、何處に脱る可き、且つ霧が來て居て數間の先は見えぬ、それに風が吹いて孤立した私達を噴火口に投げ入れ樣として居る。斯う並ぶれば間違もなく命の脊越に違ひない、文字通りの命懸けだ。然し私は平氣で居た。初めて高山に登つた人の經驗より言へば非常な危險も私達に取つては常飯事だ、初めて活火山を見た人には大なる驚異も私達に取つては感歎だ。私は馬の脊越は文字通りの恐しい處だが、文字以外に面白い所だと解決したい。記事は餘談に渉るが往年大町桂月氏が天下無二の惡道だと罵倒して下つた中禪寺から足尾へ出る道を、私はその數年後下駄で足尾から中禪寺へ出て道の事を忘れて絶景に恍惚とした事がある同曲異巧ではあるまいか。

馬の脊越十餘町も事なく過ぎて、少し下つた。それからいよ〳〵高千穗峯に取つくのである、恰も御鉢に取りついたと同じ樣な道だが草が少々生へて居る、深山人參梅鉢草などである。霧の高千穗は實に豪壯なものである、スル〳〵と地を這ふ霧が全身を被ふたと思ふと體も衣服も濕めつて來る、一歩前の案内者の姿が分らない、頂上に辿り着いたが四面朦昧、更に何物をも見えない。地圖を開いて方角を定め、四方の山々に想像を浮ぶるより術がない。御岳の霧の晴間はホンに少ないとは案内が繰返し繰返し云ふた。時に正十一時。霧島温泉より道程四里强と稱す。

頂上（一五七四米）には所謂天の逆矛なるものがある、各人の記行に載せたのと形狀は相違なく天狗の面を表裏に刻し其鼻が劒の鍔となり長さ三尺位の靑銅製の怪物、古來傳へられたロオマンチイックな神話とは似てもつかない中古物、御互に頂上まで登つて茶にされた感がする、折角噴火口の雄大と壯嚴に緊縮された氣分が何處へか飛び去つた。都城の一狂人が此れを引こ拔いて麓へ下ろしたとの事で今は、あたら神聖の山の頂に鐵柵に守護されセメントで堅く根付けせられたのを見ては長く止る事を欲しなかつた。

日向方面に少し下つた草原で中食した、霧が少しづゝ晴れて行く、眼の下の御池も日向高原（タカバル）の村々も隱見する樣になつた、十二時出發。草が少しづゝ多く生へて居るので歩行に樂だ。やがて私達は一大難所に出て來た。案內は此處が霧島一の難場だと云ふて居た、それは絕壁の樣につき立つた急坂だ、右を見ても千尋奈落の谷底だ、木はあると言ても脆くて力にする事は出來ない、私は十町前後の途を下るに或は匍匐つたり、或は滑つたり、私の有して居る凡ての方法をつくして下つた、三十分以上も消費した樣に覺える、景色は旣に私のものでない、案內も私を省みては呉れない。馬の脊越の名稱は御鉢より奪つて此處に附すべきものだ。案內も馬の脊越だと言つて居た。花袋氏もこの道で大分弱つたらしく記載してあつた。二つ石を過ぎた私達は下山を急いだ。御池（三〇五米）は霧島火山彙最大の火口湖である、直徑は千米突もあるかと疑はれる樣な圓形の池だ。私の脚は一上一下の丘と、道々の草とで草疲を覺えたので御池には登らずそのまゝズッと霧島神社の神前に額いて、蝮や蛇に驚き乍ら躓き勝ちに秡川の町に入つた。時に二時半過ぎ。今日中に高原（タカバル）につきたいと思つたが、大分遠いのと馬車が居ない爲め、秡川を出て狹野に向つた、そこで宿を取るつもりなのだ。

廣々した道路を歩む每に此間中から歩き廻した岡々の道なき道を記憶から呼起さざるを得ない。振り返つて見ると新燃、韓國は見えないが二つ石と高千穗の峯が昨日見たと同じ紫色を塗つて煙に包ま

れ乍ら突き立つて居る。私はこれで多年の宿望を成就したのだと思ふて喜むだ。（大正五年秋記）

槍ヶ岳から日本海まで

田部重治

初めて藥師岳へ登つた時の方が、立山へ登つた時よりも、少なくも私には深山へ來たと云ふ心地がしみじみと味はれたのである。既に有峯へはいると云ふこと其事が、私には深い山奥へはいり込むだと云ふ感じがしたのであつて、そこから更に深林を分けて登つて下つて眞川を渡り、又も深林を分けて登ると、左右には藥師岳と上の岳とがあらはれて來る心持は、何とも表現出來ない奥ゆかしさをもつてゐるのである。其内に雄大な太郎兵衛平が開いて來て、それを登り切ると私等が傳説的に色々きかされて居た黑部川の溪谷を隔てゝ向ふには、小供の時から有峯の奥には水晶の出る山があるときいてゐた黑岳や、越中地誌で讀んだ黑部川の源である鷲羽ヶ岳があらはれ、更に其向ふには槍ヶ岳の峯頭がかすかに秀でゝゐるのであつた。太郎兵衛平から藥師の頂上に達した時、私はまなこを信州へと向けて、今迄想像してゐたよりも遙かに多くの雄大な峯頭が齒立してゐるのを見て、私の心はたゞただ信州へと馳せた。それから歸つて私はどうかして越中から信州へ拔けて見たいと云ふのが、私の希望であつた。しかし私は其時有峯から信州へ拔けられるかどうかを有峯で聞きたゞすことなくて東京へ歸つて仕舞つた。それから私は山を想ふたびに、太郎兵衛平、黑部川、鷲羽ヶ岳、槍ヶ岳の雄々しい姿が霧の間から見えかくれするやうに、私の目の前に絶へずちらつくのが常であつた。

しかし私は越中から槍ヶ岳までの縱走を種々の事情で果すことが出來なかつた。翌年は有峯から信州までを決行しやうとしたが、有峯に案内者がないことが分つて、せめての思ひやりに藥師岳に登つて更に有峯へ歸り、それから立山温泉に向ひ、更に針ノ木峠を越えて信州に至り、それから白馬に登つた。其翌年大町から今神田に書店を開いてゐる岩波君や、安倍能成君や、市河三喜君など、烏帽子から黑岳を經て赤牛岳に登り、東澤に下り平の小舍から立山温泉へ行つた。斯くの如くして、私は槍ヶ岳と越中との間を二三年間連結せしめないで其儘殘して置いた。そして其間は槍ヶ岳を絶へず夢みてゐたのである。

大正にならうとする八月、私は初めて上高地を音づれた、そして伊勢の大北君と共に多年の憧憬となつて居た槍ヶ岳に登攀したのである。此時私は今迄通つた山々を、初めて人生の長い行路を振りかへるやうな氣持でつくづくと眺めた、そして今度は是非槍ヶ岳から蓮華、黑部五郎、上ノ岳、藥師を經て五色ヶ原に至り、それから日本海までもと云ふ願望が油然として起るに至つた。

東京へ歸つてから私は此希望を木暮君に話した所が、同君も大賛成で、出來るなら案内を連れずに二人だけで行つて見たいと云ふことであつたが、何とかして荷物を一人に三貫位ですます方はないだらうかと云ふことで、それから一年間の問題となつて頭のなかを往來した。先づ最も目方になるものはテントであつて、此の重量を半減することが出來れば、目的の半分が殆んど達せられるのであつた。普通今迄用ゐ來つた八人入と云ふのが二貫目以上あるから、私等二人はいれる程度のもので一貫目以内で出來れば非常に好都合だらうと思つた。京橋の片桐へ行つて相談して見ると、三人入が一貫目位で眞中の棒を杖に使へるやうにすれば、事實は七百目位のものでしやうとのことで、大喜びで早速註文して來た。それから私は糧食や服裝のことを考へた。米は仕方ないとして、私は鑛詰と云ふものがあまり役に立たないことを今迄につくづく經驗した。第一に目方が重くて、一たび開けば無くして仕

舞はなければ、衛生上から云つても、始末をする上から云つても厄介である。その點から云ふと味噌が一番少ない分量で最も役に立つ、そして成る可く鹽辛い方がよい。鰹節はけづり下して袋の中へ入れるとして、外にワカメを少しもつて行かなければならない。奈良漬はどうしてももつて行かなければ晝食の時に困る。ウイスキーを一びんに、氷砂糖はかゝすことは出來ない。喰物はこれだけときめた。そしてこれだけは、私等は今迄案内を傭はずにあるく時に、缺かしたことのないものなのである。私はいつも山へはいるには、なるべく山にふさはしいものが好きにならなければならないと云ふ考をもつてゐる。そして少なくも私には、山では海の物を喰つても甘くないことは、海岸で山の物をたべても甘くないと同じである。私は山をバタ臭くしたくないと思ふ程度は、日本アルプスに雷鳥を少なくしたく無いと同じ程度に於て願はしいことゝ思ふのであつた。草鞋は私は寧ろ東京出來の固く編んだものを選ぶことに決定した。それは今迄の經驗から云ふと、一番永くもつからであつた。そして私は上高地から立山温泉までを約五日と見て、是非六足で足らせたいと思つた。着物は二枚つゞきの毛布に、メリヤスのづぼん下一枚に、メリヤスのシャツ二枚以外に夏の洋服ときめた。私は大體上高地から立山温泉までの日程を五日と見て、外に三日を餘分に見て八日の糧食があればよいと見た。そして米は是非三升餘り携帶しなくてはなるまいと決心した。

しかし此の計畫を中村君に話した時、中村君は是非劔へ御供したいから、五色ヶ原に野營して晝をかいて私等を待つてゐるとのことで、御蔭で立山温泉まで行かなくともすみさうになつて來た。それにモ一つ此縱走に有難い保證となつたのは、藥師岳の下の眞川のガハ師の小舍の存在であつて、私は二度までも有峯からそこを通つて登つてゐるので、五色ヶ原まで行く内に糧食が足りないやうなことがあれば、そこへ下り込むと云ふ便宜があつたのである。私は念の爲め飛驒の高山の住君の所へガハ師の小舍が以前のやうにはいり込んでゐるかどうかを問ひ合せた所が、住君の所からガハ師の小舍は

あるにはあるが、以前の所から稍々下流へ降つたと云ふ通知があつて、其ありかを書いた精しい地圖さへも送られた。そこで私等は四日間の行程さへ甘く行けば、あとは餘り危險がないと云ふ確信が得られた。

それから出發する七月の二十九日までは、閒暇さへあれば私は地圖を擴げて、私達の通るべき道筋を考へた、そして私の想像した双六の池や、五色ヶ原や、劔澤の雪溪が終始私の面のあたりにぶらついてゐた。其内に中村君は未だ梅雨の終らぬ内に富山の方から芦峰寺に向ひ、私は何物も手につかない二週間を送つて七月の二十九日に愈々出立すると云ふことになつた。

七月三十一日の夜十一時に新宿へ行つて瀧車の來るのを待つてゐると、三十分の經過は中々永い。リュックサックにはいり切らない草鞋や飯盒を腰のまはりに結び付けた恰好が人の注意を惹くことがおびたゞしい。汽車は愈々來た。木暮君が相變らず窓から首を出してゐる。木暮君の荷物は、第二號のリュックサックに一パイになつて、蝦蟇の腹のやうにふくれ返つてゐる。氣が立つてゐるので中々寢られさうもないが、それでも夜が明けてからうと〳〵とする。蒸暑いのと八ヶ岳の裾野を驅る汽車の丶ろさとで疲れること甚だしいのでさめては又寢る。

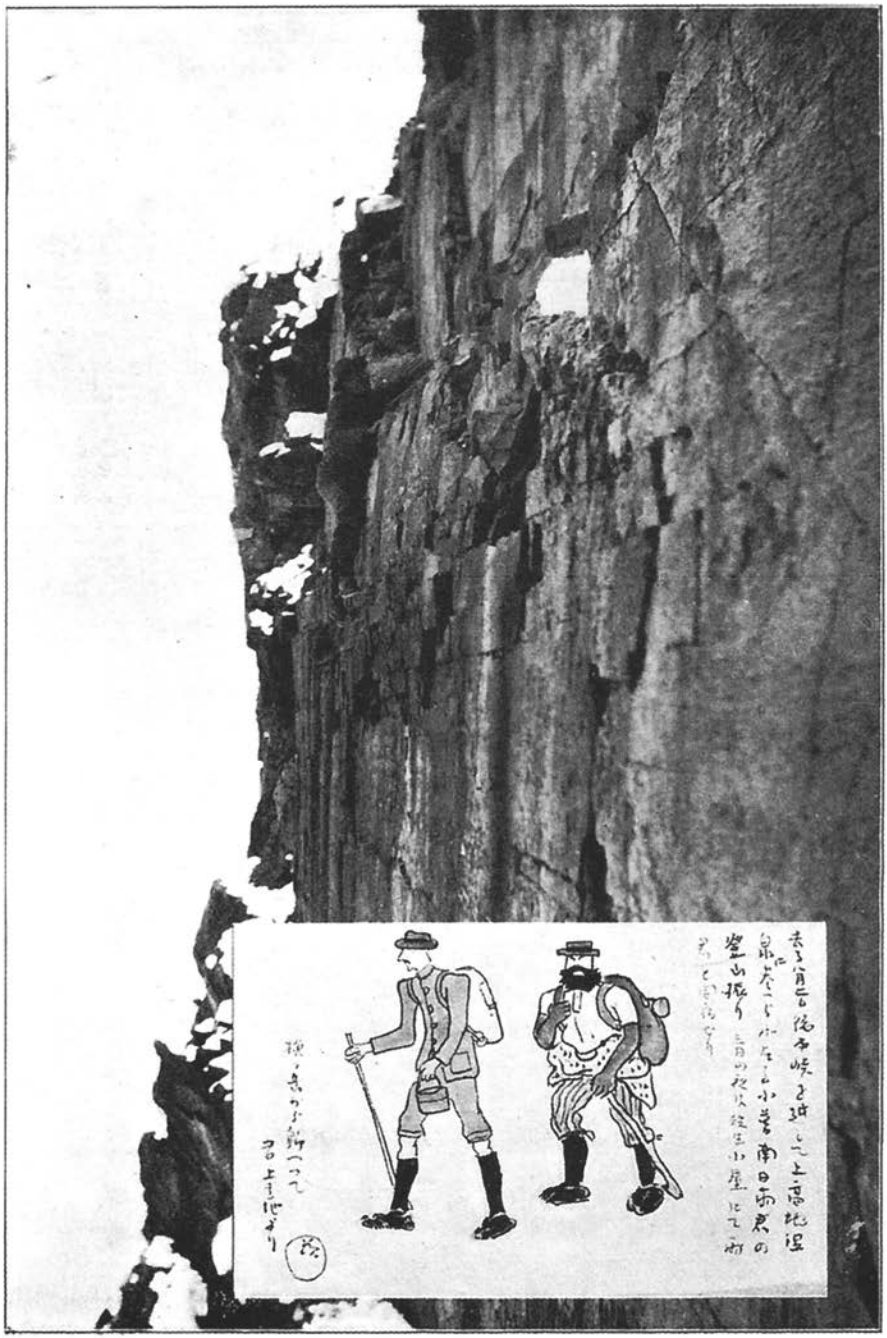
十時過ぎに松本で降りて着茵座を求めて、馬車の待合所で休んで晝食をたべる。どうせ島々泊りと思へど馬車はよくかける。途中の官林を經て梓川を見るともう心は水源へかける。途中すれ違ふ馬車の御客の上高地からの歸りらしき人を見る度に胸の鼓動が高まる。三時過ぎに島々へついた。もうここへ來ると山らしい氣分があたりに充ち充ちて、洗面所の水の冷たいのも嬉しい。夕暮大町の人夫細野が烏帽子から槍ヶ岳まで案内して此處に泊り合せたのに會ふて、鎌尾根で暴風に會つた話などをきく。(此時荷物は出來るだけ輕減したのであるが五貫目近くあつた、リュックサックに荷物をつめる前、丁度四貫目あつた小兒を入れて背負つて見たが、後に荷物を肩にした時の方が餘程輕かつた、天幕、

米、防寒具が其中の最も重い者であつた。木暮）

明くれば八月の二日七時頃に島々の宿を出で丶島々谷に沿ふて登る。元氣はあるが、荷物が重いので中々時間がかゝる。桂の茶屋についたのは十一時頃であつたらう。それから上は益々登りが急になるので、小休みしては行くので何れ峠の頂上まで三時間位もかゝつたやうに思はれる。今日は穂高の姿が冴えるほど雲に被はるゝことなく露出し、梓川の河原が白く其裾をうねつて居る。峠を向ふに少し下ると、常念山脈の物凄い色彩が右の方にあらはれて來て、降るにつれて上高地の潤ほひに富む深林の冷氣のたゞ中に分けてはいる。あちらこちらの草原の牛が、不思議さうに私等の異樣の姿を見て、思案顏にたゝずんでゐる中を早足に通り行くと、程なく德澤へ向ふ林道と、温泉へ行く道との分岐迄に達する。そこから間もなく牛小舍があらはれて、温泉へはもう一里とほつと一息をつく。柳や、梓や、梨や、落葉松が限りなくあらはれて、若々しい綠りの色の間にひゞく流の音さへ綠のひゞきがある。幾度か梓川の綠近くなつて、今も早や河童橋に來さうで、又しても落葉松や小梨や楡の間へはいる。

河童橋は愈々あらはれて來る。うるはしい水の色と、穗高の裾をうねつて來る流が、岳川の入口で落葉松と白樺とのすき透るやうな色彩の間を拔け出て來る有樣とは、何うして見遁がすことが出來やう。そして行手には燒岳がさびしい噴煙をあげてゐる。私等は疲れた足を引ずりながらも、此うるはしい、幾度見てもあかぬ河童橋の美に打たれながら行く。橋詰から右手の熊笹の間に一團のうるはしくさける柳草の紫紅の花に見とれてゐると、向ふの方から茨木君がやつて來る。思はぬ面會に、畫をかきに來たのを其儘に温泉の方へと私等の道連づれをする。温泉へついた時分は彼是れ灯ともす時分であつた。

私はからだが元來よくない所へもつて來て、重い荷物を背負ひ乍ら景氣よく峠を登りすぎて（南日



山に登る人三人

君はいつも初日に體を使ひ過ぎる傾がある、自分が苦しくなつて休んでも一向平氣で登つて行く、下りは尙更であつた、膝を痛めたのは寧ろ下りの時であつたらしい。木暮）少しく膝の關節を痛めたので、温泉で懸命に温めたがよく癒らなかつた。此の痛めた關節は、此旅行に終りまでつけまとふて、特に早月川降りの際にひどく私を惱ましたのであつた。茨木君からは此夜昨夜十時頃燒岳の爆發した話や、岡君滯在中の面白い話をきいた。人は初めて見た印象は、其以後をあくまで支配するやうに、私は前年のなつかしい印象をうけた此地に二三日の滯在をしてしみじみ此土地を味はいたいのが山々であつたが、中村君が五色ヶ原で私達を待つてゐる事が氣懸りなので、明日の而も朝早く出立する事に決した。そして茨木君が外の連三人と共に槍ヶ岳へ明朝登る計畫だつたので幸の道づれと思つた。

二日。午前七時島々出發、十時三十五分桂茶屋、晝食。十一時出發、午後一時峠の頂上、一時三十五分出發、四時上高地温泉着。（木暮）

八月の三日。木暮君と私とは午前四時半頃に温泉を出立した。私の其日の考は今から考へると實に無謀であつた。つまり一日の内に上高地から槍ノ背を乘越えて、其日の内に鎌尾根の水のある所に野營すると云ふのであつた。しかし私は今迄に只一度作太郎に案内して貰つて槍へ登つてゐるに過ぎない。そして一度あるいた所は大抵あとでは暢氣に其道程を近く勘定するのが特に私の癖であつたのである。特に私は今日は案内者の役を勤めなければならない。荷物は重いのと冷たい水とで又しても昨日痛めた關節は災ひをした。それでも出來るだけの我慢をして歩行いて行くと、横尾河の落合あたりで茨木君一行の姿がうしろの方に見えて來た。何しろ向ふはから身の上に案内者があるのだから、苦もなく追ひ越されて仕舞ふ。二ノ俣の落合で嘉門次の隱居さんの釣竿を背にしてやつて來るに會ふ。「どうでせう、今日中に、槍の向ふの泊れさうな處まで行けませうか」と問へば、隱居さん「えゝ行けますとも」と暢氣に答へる。私等は大に隱居さんに見上げられたと云はざるを得ない。（實は此時隱居

さんは二人切りで何處まで行くのかと聞く、立山まで行くのだと答へたら、通つたことがあるのかと心配さうに尋ねる、通つたことはあると口から出任せに答へると、夫なら大丈夫だといふたのであつた。木暮）それから赤澤の小舍までもつと近くあるべき筈なのに、或は通り過ぎたのではなからうかと、とんだことを考へて赤澤の手前で二人は荷物を下して晝飯をたべる。

それからあとしばらくにして赤澤の小舍へ來る。そこでは小休みもしないで急ぎ行く。幸ひ今年は雪が多い。行くこと數町で殘雪が溪谷をうづめて居る。以前に大北君と一所に槍へ登つた時、何でも赤澤の小舍から二時間半位で頂上へ達したと云ふことがすつかり頭の中へはいつて居て、未だ其暢氣さが忘れられないので、今日は荷物があるから先づ三時間以上のものだらうと高をくゝる。雪溪が中中長い、背ろを見返つては、早くも赤澤岳が足の下になるやうにと急ぐ。雪溪を左にしてしばらく偃松の間を分けて行くと又々殘雪があらはれて、今度は槍の頂上が見えて來る。しかし未だ中々遠い。右の方の高い所に人夫が偃松を切つて居る姿が見える。そして今頃は登つて降りて殺生の小舍にはいつて居るだらうと思つた茨木君の一行が、未だ肩の下にゐる。私等はまだ槍のこちら側で泊らうと云ふ氣がないので、荷物を背負つたまゝ登る。槍の肩へついたのは五時頃であつた。そこに荷物を置いて、槍ケ岳へ第二回目の登山をする。見渡すかぎり一點の雲もないと云つてもよい位によく晴れた今日は、中央は云ふに及ばず、南アルプスも遺憾なく冴え渡り、私等のさして行く越中方面には遮ぎるもの何もなく、豐富な殘雪を帶びた諸峯が齒立してゐる。頂上の滯在が約二十分計りで降りる。槍の肩へ來て遙か鎌尾根を見やると、硫黃澤の頭は中々遠くて、とてもこゝから二時間や三時間で行けさうもないので、今夜は茨木君の一行と共に殺生小舍へ一泊するに決する。しかし折角背負上げた荷物を下ろすのも馬鹿馬鹿しいからと云ふので、米や味噌や草鞋を石の間へ入れて、兎のはいらぬ樣にしてから殺生の小舍へ下る。小舍は僅かに四五人しかはいれぬのに、案内者を入れて八人の同勢がはいつ

たので、身動も出來ないが御蔭で蒸し暑い位に温かゝつた。しかし焚木が生の偃松なので、いぶし殺されさうに苦しい、水は無論無いから雪を融かす。私は足が痛いのと荷が重いのとで疲れすぎて、あまり食慾が無いのを東京から携へて來た味噌汁の御蔭で腹へ流しこむだ。私等は只天氣が氣にかゝるので、案内者に問ふと四五日は無論大丈夫でしやうと云ふ。それは先づ大丈夫として、私は今日の苦しかつたのに驚いた。これから先鎌尾根から黒部五郎へかけての間を考へると、多少氣にならぬでもなかつたが、糧食は大丈夫であるし、小さながらもテントはあるし、木暮君はあの通りに頑強なのであるから、要するに私さへしつかりして居ればそれでよいのであると云ふ考が大に私を慰めた。そして其位のことだけは立派にやつてのけなければならないと云ふ考が、大に勃興して來た。そして私は思つた。今日は辛かつたに相違ないが、綿入をきて五月末に金峯から雁坂までを縦走した時の難苦に比したら何でもないと。

三日。午前四時四十分上高地温泉出發、七時二十分横尾谷の合流點の上にて茨木君の一行に追越さる、九時十分一の俣、十一時半赤澤の小屋の手前二町許の處にて晝食、午後一時雪渓に達す、四時三十分槍の肩、四時五十分頂上、五時半殺生小屋歸著。（木暮）

明くれば依然として上天氣であつた。今日は愈々鎌尾根を過ぎ、甘く行けば、蓮華を過ぎて黒部五郎の下あたりで野營しなければならない。六時頃茨木君の一行と御別れを告げて、二人は又肩を目がけて上る。足は全然直つては居ないが、未だ通らない箇所に足を踏み入れると云ふ好奇心は、私に勇氣を與へた。肩の上で昨日隱して置いた荷物を整頓して居ると一高の登山隊が下の方からやつて來た、今朝赤澤の小屋を立つたのだといふ。私等は愈々肩から鎌尾根めがけて下りかけた。下りは中々急であつて、石が鋭いので、草鞋が切れる。下り切る迄に二足を切つて仕舞ふ。もうあとに三足しかないので大に心細くなる。これからあとは餘り鋭どい石が無かつたが、それでも草鞋をきらすまいと思つ

て歩くので木暮君にずつと後れる。硫黄澤の頭を通り越し、笠ヶ岳につゞく嶺々の分岐點を過ぎてやがて双六の池を下に見る。此の時は午後四時前であつた。

双六の池！私は今迄其名は屢々耳にしてゐたが、これ程までに美はしいフレッシュな、生々した感じを與ふるものゝ名であるとは知らなかつた。幅五六町の平らな柔らかい感じの飛驒方面へ傾むいてゐる長さ十數町計りの平たい高原の一方に、周回二三町の藍のやうな色をした池が、微風にかすかな波をたゝよはせてゐるのであつた。私等の日程は、こゝに滯在することを許さないのであつたが、私はこゝに泊りたくなつた。木暮君に話すと、大に賛成だと云ふ。そして木暮君は云ふ「何に、早く泊れば早く出立出來るから同じだ」と。私達は池のほとりで荷物を下して、先づテントを張る。木暮君は手斧をもつて假松を切りに出掛け、私は御飯の用意をする。池の水は幅二尺ほどの細い流れとなつて、平原の中をうねつて谷の方へはしつて行く。殘雪うるはしい鷲羽ヶ岳は、此原から座して見ることが出來るやうに近く頭をもたげて居る。(此時笠岳方面に遠雷あり、左股から盛んに雲が湧き上つた、六時頃には蓮華方面に移つて笠の方は晴れる。今にもザアツと來るかと心配したが、終に降らなかつた。本暮)夕暮はあくまで靜かで、火は盛んにもえ、ワカメの味噌汁に御飯が非常に甘くたべられる。塲所が高いので、眞夜中は中々寒く、時々ポケットからウイスキーを出してのむ。それでも今日は時間に餘裕があつたので、樂しい一夜を暮すことが出來た。

四日。午前七時出立、茨木君一行と別る、七時半槍の肩、八時十分出發、午後一時硫黄澤の頭(二六七四米突)、三時三十分双六池畔野營(木暮)

八月の五日、今日も亦危なげない空模樣なので、五色ヶ原までは降ることが無からうときめ込む。池のほとりで飯の仕度をすると、水は切るやうに冷たく、朝風はかみそりのやうに頰をなでる。六時過ぎに出立する。池の上の雪溪のなだらかな所をよぢて行くと、足が昨日よりか樂さうである。雪溪

を上り切ると、小川がさゝやかな音して流れてゐる平らな處がある。(上双六平、野營地としては少し寒いかも知れぬが好い處である。木暮)それから間もなく双六の頂上につく。頂上からは双六谷の方へかなり長い嶺をつき出してゐるので、霧でもかゝつてゐれば間違ひさうな所だと思つた。蓮華は眞近くに見えるので、こゝで悠々と休むで前進する。しばらくにして蓮華に達する。九時頃であつた。頂上の三角標石の上に、近藤君から私に宛てた紙の切れが小石で壓へてある。其手紙の文句は、鷲羽乘越附近にゐるから遊びに來い、中村君からの言傳もあると云ふのであつた。近藤君は劔岳に攀ぢてから、五色ヶ原で中村君と一所に奥木挽に登り、それから藥師、黑部五郎を經てこゝまでやつて來たのである。私等は鷲羽乘越の方を見て、テントを見分けやうとしたが、それらしいものが分らないので、聲を限りに呼ぶとォーイと云ふ返事が幽かに聞える。(始の豫定では鷲羽黑岳に登り、此附近で近藤君と一所に野營し、大に御馳走になつて大に騷ぐ積りであつたが、日程が遲れるので黑岳も終には鷲羽も拋棄した爲に、後で近藤君から惜しい事をしたと言はれた。木暮)しかし私等はどうしても、こゝから降りて鷲羽乘越へ行くことは、時間の都合上許されなかつた。私はノートの切れに遺憾ながら面會することが出來ない事情を書いて、そこに置いた。

私等は荷物をこゝで下してゆつくりと休んだ。双六谷の雄大、黑部川の溪谷の怪奇、鷲羽ヶ岳、黑部五郎、藥師岳等の雄峯が今まであこがれて居たが、愈々今日こそ其内に取卷かれて其内の人となつたと云ふ感じが痛切に浮んで來た。そして私は日本に斯の如き境地のあるのを知らずして、所謂自然の美の極地を汽車の窓からのぞき得る位のところに置いて居る人々を憐れだと云ふ月並の感じが、最も痛切に味はれたのである。

これから左に折れて山稜を辿つて行くと、黑部五郎の方は俄然として低くなつてゐる。丁度兩山の間が低くえぐりとられたかの樣に、兩山の聯絡が可笑しくなつてゐる。降り口の足跡が幾つもあつて

何れも下へ行くと消えて無くなつてゐるので、可なり間誤ついた揚句、ガムシャラに一の窪の雜木を突破して低地のじめじめした所へ降りると、處々丁度彌陀ケ原で見るやうな池がある。これから黒郎五郎は今迄降つた丈け登らなくちやならないかと思ふとうんざりする。初めは草のある斜面を登る。しかし永らく渴望して居た處だけに、好奇心が動いて大分勇氣が出る。途中殘雪のある處に小休みして晝飯を喫して又登る。盛んな巖石がそろ〳〵あらはれて來て黒部川に向つた方面の殘雪が、目さめる程に鮮やかである。頂上はもう前に見えて居る。此時はじめて出發以來未だ經驗しなかつた霧が、濛々として湧き出して來た。頂上に達した時分は、もう山は一面に取卷かれて仕舞ふ。岩燕は耳をかすめて空氣を切る音がすさまじく、あたりの風物が威嚇的になつて來た。しかし私等は別に驚きもしなかつた。今迄の天候のよかつたのは、過つて居たので、之は當り前なのである。しかし進むべき前途は全く分らなくなつて仕舞つた。慥かに嶺は續いて、前の方にのびて居るが、其彎曲が餘りに急に黒部川へ向ひすぎて居る。國境はモ少し大きくゆるく、飛越の間をうねらなければならない筈である。此點は兩人とも一致してゐる。しかし其大きくゆるくうねる國境は、どこにあるだらうか、霧の間を私等は國境の標木を岩の間に見出して下つたが、餘り下り樣が激しいやうに思つて頂上に引歸して、どうもこゝに相違ないと亦下つて見る、そしてまた引歸す、後で考へるとそれは間違つてはゐなかつたのである。せめて近藤君の靴の跡をと云ふので、荷物を脊負つたまゝ霧の間を上り下りして見る。少なくも黒部五郎から赤城や上ノ岳へつゞく嶺は、ひどく低下してゐるに相違ないことが考へられるが、霧の間ではいづれも平等に谷へ降りると同じ感じを與へる。若し誤まつて嶺へ取りつくことが出來ないで、谷へ降りつゝあることがあまり遲く氣が付いたらどうだらうかと考へた。私等はかくの如くして霧の間を二三時間も續け樣に登り下りして道を探つた。遂に四五町下つて樣子を見やうと云ふ事に決した。私等は下りながら霧の運動や其時々の變化に深く注意しつゝあつたが、二町も下つたと

思ふ頃前面が薄らいだ。そして前方には山らしいものゝ連なりが見えて、それと私等との間が餘り低くない窪みであることが分つたので、私等は猛然として其方面へ進んだ。慥に向くべき方向がそれに相違なかつたのである。處々偃松が切り開いてある處を行くと平たい傾斜地へ出る。あたりに適當な野營地を探ると、少し向ふの小高い處に殘雪から幅二寸ばかりの流水が走つてゐるので、そこで野營することに決する。此時は六時過であつた。兎に角難關が切り拔かれた樣な氣がして一安心する。私は草鞋がもうあとに二足しかないので、如何にもして、今はいてゐるのをもう明日一日命を延ばせやうと種々麻で手入をした。霧が追々はれて來て、星が輝やいて居る。私は明日は遲くも藥師を越えなければならないと思つた。そして明日こそは私の最も親しい最も得意な土地を通るのであると思つた。私は糧食を調べて見たが、毎日の天氣の御蔭で、此樣子ならば眞川へ下る必要はないと心の內に喜んだ。

五日。午前六時半双六池出發、七時半双六岳頂上、九時半薬師岳三角點、十二時五郎の池、午後三時黑部五郎頂上、三時十五分下山、霧の爲に二時間を空費し、六時十分黑部五郎と二五七七米突の峰との鞍部に野營。(木暮)

次の朝も亦好晴である。起きて朝飯の用意をしかゝると、水はすつかり凍つてゐるので何とも仕樣がない。何處かに水を見付けやうと思つて、飯盒に米を入れたまゝ谷の方へ下つて見ても一向水がない。仕方がないから雪でも融かさうと思つて歸つて來ると、太陽がそろ〳〵當つて殘雪が少しじめじめして來る。暫らく待つて居ると少しづゝちよろ〳〵流れ出す。それを巧みに受けて、やつと御飯をこしらへる。双六池以來食慾が著しくついて來たやうに思はれる。一つは荷物が段々輕くなつて運動が輕快に出來るやうになつたのにもよるのであらう。昨日迷つた方面をふりかへつて見ると、五郎の嶺續きは黑部川の溪谷へ向ひ、上ノ岳の方へは全く途中が低くなつて居るので、上ノ岳の方面から五郎へ向ふ時には大した間違が無ささうだが、五郎から上ノ岳方面へ向ふには霧でもかゝつて居る時には、昨日のやうなことがあるのは無理がないことゝ思つた。(此朝餘り霧が深く風が勁いので暴風雨になり

はせぬかと心配して、南日君に笑はれた。木暮）

これから先は小さい峰頭が幾つもつゞいて、偃松が深い中を切分を辿つて行くのである。赤城を踰え、上ノ岳に行くと、頂上には奇麗な小石に經文を書いたのが落ちてゐるので、恐らくは行者の仕業だらうと思つたが、後に三枝君が奉献したのだと云ふとをきいた。上ノ岳から太郎兵衛平へ向ふ時、辻本君の注意が頭にのこつてゐるので、頂上から農商務省の三角櫓のある峯まで行き、其處から雪溪を傳つて下りて、途中で向ふ岸から下の方へ斜めに偃松の少ない所を選んで登り、尾根に出て又偃松を分けながら下つた、それでも可なりの困難であつたが、難なく切り拔けて望洋たる太郎兵衛平へ出る。雄大なる藥師を縱に見て、眞川の向ふ岸の一帶の山が深林を以て黑く茂つてゐるのが、手に取れるやうに見える。そして藥師の左には大日嶽が長く末垂れに連なつて居る。眞川へ行つて米を買ひ求める必要もないので、二人は廣々とした高原を思ふ存分に足をのばしながら藥師へ向ふ。

愈々藥師へかゝつた。先づ小さな溪流に沿ふて登ると、小高い所に達し、そこには針葉樹があるので、右の方へ迂回するやうに道がついて居る。やがて迂回して黑部の溪谷に向ふ殘雪を見ながら可なり登りになる。これから上は、殆んど全部疊々たる岩石で、登つては、黑部の溪谷に向ふ美はしいカールを見ながら休む。斯くして大體登り切つて馬の背を行く樣に嶺の上を行くと、平たい處に神社があつて、そこが頂上であつた。周圍には奉納の鎗が立つてゐる、近藤さんの名刺が神社の目につく處に置いてあつた、三度目の今日の登山に、初めて私は飛驒方面から信州方面、または黑岳、赤牛岳を遺憾なく見ることが出來た。そして太郎兵衛平から眞川の溪谷にかけての地皺の具合や、森林の模樣、鍬ケ崎、東笠、西笠に至るまで見逃すことなく見ることが出來た。只私等の向ふ方面は未だ未だ遠いやうな氣がして、中村君に會ふ迄には未だ幾多の峰を越え、幾度かの黑部五郎であつたやうな困難をして行かなければならないのでは無からうかと考へた。これから先は亦、二人共未知の境である。最も面倒

な偃松や、塲合には身動きさせぬ針葉樹の中へはいらなければならないと思つて出掛ける。頂上から眞川側へ降りて、岩井谷の頭に向ふ。岩石は益々立派である、直ぐに見えて居ながら頭へ登る迄は隨分時間がかゝる。しかしこゝでも、私等が普通一口に藥師と云つてゐる峰の半分しか來て居ないわけである。それから段々下つて行くと、三角點がある。こゝも未だ普通藥師と稱して居るものゝ一部なのである。それから益々下つて行くと、周圍がすつかり偃松で取圍まれた間に窪みがあつて、上の方に殘雪があつて、水が盛んに流れて居る。誰か野營した跡らしく、焚火の跡がある。(三枝中村二君の一行と近藤君とが野營したと書いた標木が立つてゐて、此處に泊らないと叱られさうに思はれたので、私達も謹んで其後塵を拜して泊ることにした。木暮) 毎も焚火の跡があると、何となくゆかしいやうな、自分の野營する塲所が正當と認めて貰ふやうな氣がするので、未だ時間は早いが、向ふへ行つて甘い塲所が無いと困ると云ふわけで、此處に野營するに決した。焚火が拵らへられ、飯の仕度に取りかゝると、木暮君が明日どの方向へ行つてよいか道を見付けて來ると云つて出掛ける。全くこゝからはどちらを見ても偃松の海なので、霧でもかゝつたら、全く途方に暮れなければならないのであつた。暫らくして、やうやう道らしいものが見付かつたと云つて歸つて來る。こゝは低いやうだけれども、二千二百米突以上の鍬ヶ崎が下に見える所を見ると、二千四百米突以上はあるだらうと思はれる。今日は水が豐富なので、萬事好都合に運んだ。荷物は大分輕くなつたと云ふものゝ、未だ二三日は大丈夫である。明日中には五色ヶ原へ行つて中村君を驚かしてやらう。しかし五色ヶ原に中村君は果して居るかどうかと思はないこともなかつた。

六日。午前七時半野營地出發、九時上ノ岳頂上、十時太郎兵衛平、十一時藥師南麓の溪流にて晝食、十一時半藥師に登り初め、午後一時半頂上著、四時半野營地著。(木暮)

明くれば又好晴である。今日こそはいやでも五色ヶ原へ行けるかと思ふと嬉しくて堪らない。昨日

はあんなに景氣よく流れて居た水が、矢張り今朝は凍りついて、流れがすつかり止まつて居るので、焚火をしながら流れ跡の溜り水を星明りに探して飯の仕度を終つた。偃松を背て切分したらしく思はれる處に沿ふて分けて行くと、段々山は下る一方で、偃松は無くなつて、草を分けながら立木の間をうねりうねり行く。薄汚い水のある小さな池が二つ三つあつた。中村君も辻村君も此邊で熊を見たと云ふことを聞いて居るので、餘りいゝ氣持もしないで急ぎ行く。時々草の斜面や小笹の上を降りなければならない時に、又々足が痛み出す。其中にやう〳〵數河乘越へ下り着いた、焚火をした跡がある。木の繁つた岩の多い山が前に聳えて、登りが中々急である。どこ見ても切分がありさうにもない白槍の密林の間を、二人は無暗に分けやうとしても、體がとてもはいりさうにもない。偃松ならば幹傳ひも出來るが、これには全く何とも致し樣がない。右の方へ廻ると近藤君の分けた跡があつて、少しは木がまばらである。其間を無理に分けて行くと、偃松があらはれて來る。偃松の方が白槍の密林よりは餘程有難いが、それでも何度も何度も跳ね返されて、私が持つてゐたテントの棒がすべつて木の間へ落ちる。やう〳〵拾ひ上げてふり返つて見ると、未だ一町も登つて居ない。此山の登りには二人とも全く苦しめられて二時間餘を費した樣に思はれる。頂上に著くと越中澤岳が向ふに見える。右の方の草原をすべり下りた少しの平地に、三枝中村二君の一行が野營した紀念の杭が立つて居る。小さい突起を一つ踰えて越中澤岳の登りにかゝつた。登りが可なり急で、山の右側を偃松を分けながら行くと、切分けがあらはれて來るが、同時に岩も多くなつて油斷がならない、又吉の落ちたのは此邊である樣に聞いた。それを登つて行くと越中澤岳の頂上は少し左の方に見える。私は頂上が見えない時分には殆んど歩く力もない位に關節を痛めて居たが、頂上が見えてからやゝ元氣を恢復した。頂上へ來ると、五色ヶ原は谷を超えて遙か向ふに横はつて、中央の殘雪が白々と見える。中村君のテントが何處だら

うと目を見張ると、慥かに殘雪の少し手前に一點の白い物が見えて、それが少し雪とは異つてゐるやうに思はれる。しかし未だ充分にそれとは斷言することは出來ないのであつた。これから道は下りかける、そして水々しい平原に出る、此平原を越えて、切分けを辿りながらまた登つた。此登りが飽々する程長い、はじめは樂であつたが少し左の方へ向つた頃から急に登つて、一の頂上へ立つと右の方に三角櫓のある峯が現はれる。此峯から少し下ると五色ヶ原へ出るのであつた。私等は此峯に著いた時、先の白い一點は慥かにテントであることを慥めた。そして二人で聲を合せて怒鳴つたが、二聲目に向ふで呼ぶ聲がするのみか、黑い長い姿がこちらへ叫びながら動いて來るのが見える。木暮君が先へ行く。私は氣が急くが、足が痛いので、思ふ樣に驅ることが出來ない。愈々五色ヶ原へかゝつた。中村君はもう私等と殘雪を隔てゝ下へやつて來てゐる。私は足が痛いので、恐る恐る殘雪を降りて三人で健康を祝し合ふ。中村君は人夫春藏に、大きな聲で山もちをこしらへるやう命ずる。私等は近藤君の手紙の話や、黑部五郎で迷つた一段を語り、中村君は五色ヶ原の厭かなかつた滯在を細々と話す。大鷲岳も今日の内に登つて置かうといふので其儘三人で登る。中村君が荷を背負つてやらうかといふ。別に之と云つて登るでもなく、只自然の原が高まつてゐるのみである。日本海、立山温泉、常願寺川の溪谷はそこからはよく手に取るやうに見る事が出來る。三人はゆるゆるテントの方へ行く。テントは雪溪から三十間位手前の、最も氣持のよい處に張られて、横と背には丈の高い偃松が無盡藏にあつて燃料に不足がない。水は殘雪から川になつて流れてゐる。日は未だ二時頃なので荷物を置いて身輕になつて、中村君に連れられてあたりを散歩する。のびゞしした原、咲き亂れた高山植物、殘雪が流れてやがて形造る溪流等は、仔細に味へば、十日間見ても盡きる事は無からう。テントへ歸つて寛ろぐと、こゝからは奥木挽、藥師、黑岳、赤牛方面や立山一帶の山々は坐つたまゝに見ることが出來る。山もちは出來上つた。ダケ蕨の味噌汁を喰ふ。此時初めて私はダケ蕨をたべて、山ではワカメでも喰

はなければ仕樣がないと云ふ考を捨てることが出來るやうになつた。其後私は山へはいるごとに、ダケ蕨を想ひ起さずには居られなくなつた。しばらくすると、ザラ峠の方から高等學校の制服を着た左雙君と上野君が三四人の人夫をつれてやつて來て、私等の附近に野營をする。もう五色ヶ原の野營も今夜限りで、明日は立山温泉へ降りなければならないと云ふわけで、春藏は切つて置いた偃松をどしどし燃やすので、テントの中は今迄になく温かい。中村君の說によれば、五色ヶ原は二千五百米突近くの高原であるにも拘はらず、隨分温かいとのことである。仰向になると、窓の口から星がきら〳〵と輝やいて居る。かくて五色ヶ原の一夜は最も樂しい夢を結ぶことが出來た。

七日。六時三十分出發、九時數河乘越、午後十二時二十分越中澤岳頂上、二時二十分奧大蔦三角櫓著、五時頃左雙君の一行來著す。(未暮)

明くれば今日は愈々温泉下りである。春藏を先へやつて、私等は暢氣に一日がゝりの積りで八時半頃原を下りて行く。二里と云へど中々遠い。ひどく荒れた溪谷を右左にうねつて行く。温泉に着いたのは午後一時であつた。久し振りで落葉松の座敷に熊の皮の敷物は、何よりも嬉しかつた。劍岳に同行の約が出來て居た長次郎がやつて來て久濶を叙する。中村君は五色ヶ原でかいた畫を荷造りして東京へ送るのに忙がしい。私等は明日早く温泉を出て、淨土から別山までめぐつて、別山の下に泊り、其次の日に別山から山傳ひに劍山へ登らうと云ふ豫定を立てた。

次の朝私等が飯を喰つてゐる時に、春藏が來て、長次郎はどこにも居ないと云ふ。私は氣が氣でなく砂防工事の人夫小舍へ行つてさがして見たがどこにも居ない。仕方がないからほつて置けば何處からか來るに相違ないと云つて私等は五時頃出掛ける。春藏もあとへついて來る。私等はどしどし先へ行く。松尾峠からは藥師岳は鮮やかな殘雪を帶びて、仰ぐばかりに高く聳えて居る。追分の茶屋で駄菓子を喰ひながら春藏を待てど待てど來ない。先へ行つて焚火をしながら待つて居ると、午後一時頃

春藏がやつて來て、長次郎があとから來ましたと云ふ。あまり待つて、今日の淨土から別山行は駄目になつたので、少し腹が立つたが、元來向ふが暢氣な好人物なので、申譯がありませんと云はれると可愛相になつて胸がなだまる。何うして遲くなつたと云へば、昨夜は少し飲み過ぎて温泉の二階で寢過したと云ふ。春藏の荷を分けて背負はせて行く。室堂へ著いたのは午後四時であつて、もう登山はとても六ヶ敷い。堂の中は大勢の人で、周圍の汚らはしさは言語に絶する。特に便所の設備が惡いので、汚穢物は雪溪の上になだれかゝつてゐる有樣は、天下第一の傑作であらう。私等はとてもこんな處には居たくないので、必要品を買つてから大急ぎで別山の麓へ向ふ。途中あちらこちらに糞が轉がつて居るのに、頗ぶる辟易した。池のほとりから向ふへ下つて溪流があるが、皆室堂の便所の影響をかうむつて居るので、別山のすぐ下の雪溪のほとりの草が柔らかさうな處にテントを張る。こゝは人間が容易に來さうもなく、且つ水が純なので野營には屈强な處であつた。其晩は依然としてダケ蕨をたべる。

明くれば八月の十日、私等三人は別山から淨土迄の縱走を試みた。テントから出て向つて左の方の裾に沿ふて登る。嶺の頂上を登り切ると、向ふに劔澤の雪溪が雄大な姿を見せる。私等は暢氣に右の方の頂上へ向ふ。頂上には小さな宮があつて、傍には殘雪の融けて出來た池があつて、附近には燃料が割合に豐富なので、野營の跡がある。私等はこゝで腰を下して、頻りと信越國境山脈の眺望に耽けつて居ると、劔澤の方から二三人づれの人が登つて來る。誰だらうと思つて居ると、中村君は一人は慥かに又吉であると云ふ。呼んで見やうと云つて呼べば、其内の一番大きな一人が、雪溪をのこ〳〵私等の方へ登つて來る。見れば慥かに又吉である。榎谷君の御伴をして劔岳へ登つて、今歸つた所で、今夜は淨土山あたりで野營する積りだと云ふ。暫らくすると榎谷君が來る。初めて面會して色々の山の話をきく。劔山は割合に樂な山で、誰でも登れますと又吉は云ふ。一足先に失禮すると云つて榎谷

君の一行は淨土の方へ行き、私等は暢氣にあとからついて行く。立山へ行つて宮のある處よりか慥かに別山の方へ少し寄つた大汝の岩の方が高いと云ふ事に決定する。そして立山は三千五六米突は慥かであると云ふことに決する。淨土へ登つて、それから龍王へ行かうとすると、榎谷君の一行は、野營の用意をしてゐる。淨土から室堂へ來るともう夕暮に近い。それから一目散に別山下へ驅けつける。テントへはいると、もう飯の仕度が出來て居る。相變らずのダケ蕨に御飯が非常に甘い。

十一日の朝、今日は愈々別山から劔までの縱走を決行すべき日である。七時前に一行五人が晝飯の外すべてをテントの中に置いて出掛ける。朝霧は立ちこめて居る。長次郎は今まで劔澤から長次郎谷を廻つて劔山へ登つたのであるが、近藤君及び平藏は嶺傳ひに別山へ來られるとを此夏證據立てたので、私等も是非嶺つゞきにやつて見たいと云ふのであつた。昨日登つたやうにして別山嶺から雪溪を斜めに絡んで劔めがけて行く。雪は固くなつて、氷のやうになつてゐるのを、長次郎はカンジキをもはかずに眞先に足塲をこしらへて行く。雪溪をすぎると柔らかい草山を越すことが約二つ、綺麗な水の流れてゐる處がある。そこに荷物をすつかり殘して行く。長次郎が眞先に立ち、春藏は殿がりを勤め、私等は其間へはいつてゐる。それから先は或る時は絶壁のやうな處を傳ふことがあり、上を通れない時は更に急な雪溪を絡む。絶壁を傳ふ時思はず上の岩につかまらうとするとぐらぐら動き出すので止める。長次郎は一々此石につかまれ、此木につかまれと命令する。雪溪を絡む時、最後に居た春藏の降りる際に大きな石が轉がつて、木暮君の肩にぶつかつたが、幸に大した怪我がなかつた。今度登る時は、長次郎が先へ登つて、綱を下げる。三人ともかはるがはるつかまつて子供のやうに引張り上げられる。こんな事が二三度もあつたあとで、長次郎はもう頂上へ近いと宣告したのでほつと一息つく。頂上へ近くなつてからは案外樂で、只大きな岩傳ひに進んで行くと頂上に達する。今日は朝から眺望がなく、頂上では何も見えなかつた。初めて來る處をこんな天氣に、道も違はずに私等を連れ

て來た長次郎の腕前には大に感じ入つた。未だ時間が早いので、霽れるのを待つて見たが、晴れさうにもないので、元の道へ引き返す。下り道は流石に樂で、登る時よりもつとよい處を選んで、木暮君に石がぶつかつた處へ降りずに行く。御飯を置いた處で飯を喰ふ。そこでしばらく休んだ後で出掛ける。草山の間の雪田を越える時すべつて、私は大事のテントの棒をすべらす。幾ら尋ねても見當らないので思ひあきらめて行く。雄大な劔澤の雪溪を登つて、別山嶺に出るともう下にテントが見える。我家へ歸つたのは五時頃であつたらう。今日は眺望は無かつたが、永が年の目的は完全に遂行することが出來たので何よりもそれが嬉しい。夕飯を喰つたあとで、明日の歸り途が問題となる。室堂から富山へ出てかへる平凡な道は、てんで問題とならない。針木峠を踰えて歸るのは、もう誰も通つて居るので、好奇心を滿足せしめることが出來ない。只地獄谷から大日嶽と別山との乘越から早月川を降つて行くことは、私が一度通つてゐるだけで、皆の好奇心が非常である。私自身ももう一度通つて見たいと云ふ考がある。長次郎に話すと、一度通つたことがあるから、雜作は無いが、雨でも降ると危險だと云ふ。しかし其天候はそろ〳〵怪しくなりかけて居た。今迄天氣は餘り永く續きすぎたのであつて、降つて來る時機に追々向ひつゝあつたのである。今日の劔岳登山は毎もほどに晴れて居なかつた。夜になつても星が出て居ない。不安な心持で寢りについた。

十一日。午前四時四十分出發、七時別山劔間の最低鞍部、草山一つ越えて九時此處に荷物を殘し、劔に登り初め、十時二十分頂上着、十一時五分出發、午後一時二十五分荷物を置きし地點に歸着、二時出發、四時別山乘越、岳蕨を採りながら五時半野營地着。(木暮)

明けて見ると盛んに降つてゐる。テントの中へ雨が流れ込むと云ふさわぎだ。大急ぎに朝食の仕度に取かゝる。私は心中早月川は遂にあきらめなければならないか知らんと長次郎の顏色を窺つて居た。朝食を大急ぎにたべた。雨は少し小降りになつて來る、長次郎は大急ぎに出立の用意をする。私は早

月川下りはどうだらうと云つた。長次郎は例の暢氣な調子で、何、大丈夫行けると云ふ。荷物をとりかたづけるとテントが雨で重くなつたのを長次郎は己れが背負つて行くと云つて背負つて仕舞ふ。何しろ後るれば後れるほど危險なので、行動が石火のやうである。午前七時、サア行かうと云つて立ち上ると、雨は少し小止みの樣子である。長次郎は「大丈夫晴れる、晴れる」と云つて先頭に立つ。しかし長次郎の大丈夫晴れるは有名なもので、嘗て針ノ木峠を踰えた時、越中澤の小舍を出ると、雨が盛んに降つて朝から雷鳴がして居たのに「晴れる、晴れる」と云つて、大町までづぶ濡れになつて行つたことさへある。いつでも樂天的で、いつも鼻歌をうたつてゐるのが、此男の特長であらう。劔岳へ私等を連れて行く時も鼻歌は離さなかつた。地獄谷の向ふの溪流を渡つて乘越に登る。其昔、伊折で硫黃を取つて居た時分は、伊折から立山へ參詣するのは、道の近い點から云つても、眺望のよい點から云つても、遙かに芦峰からよりは優れて居たので、非常に盛んであつた。其時は地獄谷で取つた硫黃をこゝから二里の處で精製し、バンバ島と云ふ更に二里の處へ運び、そこから更に三里向ふの伊折へ運ぶのであつた。何でも五六月頃はこの乘越から二里までも全部橇に乘つてすべることが出來たと云ふことである。其後此事業が收支つくなはなくなつて、早月川から立山への道がすつかり荒れて、伊折の案內者でさへ立山行を拒むやうになつた。其後此溪谷に熊が多いと云ふので、芦峰寺の獵師が這入り込んだが、二年間續けざまに雪崩のために死人を出すに及んで、それも止めて、今や此溪谷は全然熊、羚羊の爲すが儘に任せてある。私は硫黃採取を止めてから一回、此時から四五年前に、此溪谷から攀ぢ登つた。其時私等は伊折村で立山行を思ひ斷つやうに切に勸告されたのである。

早月川は斯の如き荒川である。今日は私等は連日の旱魃のため減水してゐて呉れゝばよいと云ふのが唯一の願ひであつた。乘越から少しは急な草の斜面を下ると、雪溪はあらはれて來る。雨は霽れては又降る、しかし降りやうが多いと云ふことはない。雪溪はいつまでも續いて居る。そして大日嶽か

ら澤山の雪溪がはいり込んでゐるので、恐らくは此溪谷を溯ぼる人には、どれが早月の本流であるかを見分けがつかないだらうと思はれる。春藏は今迄こんな長い雪溪を見たことが無いと云ふ。只劔岳方面から落ちて來る石や土のために雪溪が黑くなつてゐる。

約一里以上で雪溪が無くなつてゐる。これから先は溪流の徒涉をやらなければならない。河は全部瀧と云つてよい位に急峻である。兩岸の大イタドリの林は見るからに物凄く茂つて、其間に熊が縱橫にかけちらした跡がある。大きな岩室が二た處計りにあつて、かまどの設備が其儘になつてゐるのは、立山道のあつた時分の名殘か、それとも獵師の野營の跡か。昔し此河のほとりで無殘な死を遂げた人人の話は語られてゐる。二人連の學校敎師が道をふみ迷ふて、一人は大日嶽への雪溪へ迷ひ込んで死し、一人は地獄谷附近でやつと救はれたと云ふ事も遠からぬ以前のことである。あたりの風物や、山相や、花崗片麻岩のすさまじさは、慥かに威壓的であるのに、流れが瀧の樣になつてゐる有樣は、尙ほ更恐怖の念を抱かしめる。長次郎が先頭に立つて淺さうな處を見わけて私等を色々手傳つて呉れる、そして深い處は橋をかけて行く。水量は增すばかりである。一たび足を失すれば、それこそ命がない。硫黃精製の器械を据付けてあつた下で、もう正午になつたので、河原で飯をたく。もう之から下は餘り困難の處がないと云ふわけだからである。雨が又降つて來る。私等は岩の蔭にうづくまつて飯をたべる。此の雨は霽れることは無いが、又烈しく降ることも無ささうである。こゝまでは立山からは三里に充たぬ位のものだらう。これから先は未だ四里はある。そして糧食はこれで最後である。私等は飯を喰ひ終ると直ぐに飛び出した。もうこれで大體危險區域を通過した。河はまだ渡りもしたが、危ないことはなかつた。河原は開いて來た。長次郎は向ふを指さして愈々バンバ島は近いと云ふ。私等はそれに力を得てやつと命拾ひをした氣がして、河原傳ひにそこへついた。此處には小舍があつて、以前私が來た時には、藥草を取りに來る人が一パイ泊つて居たが今日は誰も居ない。此處をバンバ島

と云ふのは、早月川の本流と支流とが合して丁度島のやうになつてゐるからだと云ふ。これから先は、伊折まで立派な道がある。長次郎はもうこれから先は大丈夫だから先へ行けと云ふ。春藏は針木峠よりか何倍辛かつたか分らぬと云ふ。私等も此の位危險な思ひをしたことが今迄になかつた。恐らくは日本アルプス中の人間の行き得る範圍内で、最も威壓的な物すごい壯絶な處は何處と問はるれば、私は斷じて早月川だと答へたい。

それからすこし行くと、大きな河が左からはいつて來る。これは大日嶽から來るもので、其上流は大きな雪溪をなしてゐるのが、遠くからよく見える。恐らくは岩の大きさから見ると、此溪谷が隨分急峻だと思はれる。それから先は左は草地であつて、やがて田圃が現はれて來る。此の前來た時にはバンバ島から伊折へは雜作ないと思つたが中々ある。伊折村について酒井長作氏の宅へはいつたのは午後六時であつた。雨は盛んに降り出して來た。私等は熊の皮を敷いた部屋に入れられた。酒井氏は伊折の有志である。私等の立山から來た事を驚いて、近來は山がすつかり荒れて、誰もはいる者が無くなり、近年は獵師もはいらないので、春先になると、田圃のほとりを熊がさ迷ふてあるくのが頻々として見らるゝ位に、年々殖えて來たと云ふ話であつた。晩飯には早月川でとれた魚の御馳走があつた。私等は愈々人里へ出てたと思つた。

明くれば今日は愈々明るい内に私等は滑川へ行かなければならない。木暮君と中村君とは東京へ其日の内に汽車に乘り込み、私は一人富山へ行くのであつた。伊折から出ると、早月川は物凄い音がして石が轉がつて居る。私等は早月川に沿ふて蓬澤、蓑輪、大浦を經て、私の母の生れた大崎野へ行く豫定であつたが、不圖道を間違つて、中村の方へ出て仕舞つた。そして新道が滑川へ開鑿されて居るのを通つて、途中トンネルが未だ完成されて居ない上を越えて行つた。見廻せばあたりはすつかり殘山、滑川から手前一里位の茶屋で駄菓子を盛んに喰ふ。劔、立山、大日あたりは曇つて居るが、東笠、

西笠、鍬ヶ崎方面はすつかり晴れて居る。滑川へ行つて、停車場前の茶店で休憩して御別れの宴を張つて、久し振りで、海の肴をたべる。先づ富山行の瀛車が來る。私が乘る。長次郎と春藏とが輕便鐵道で上市へ、中村君と木暮君とは東京行へ乘るのは、それから一時間位後の豫定であつた。

附記。伊折からバンバ島を經て立山へ行く道は、此頃再び硫黃採集の爲め造られて、約五箇處に架橋せられ、バンバ島から半日にして立山へ達することが出來ると云ふことである。

スウィス日記（四）

（千九百十四年八月一日―九月廿七日）

辻村伊助

グロースシュレックホルンの頂上

私は仰のいて、冷たい山の空氣を思ふがまゝに吸ひ込んだ。海拔四千八十米突の尖峯を、更らに高く覆ふ大空には、塵ばかりの曇りもない、そしてこのドームのまはりには、ひた〳〵と寄せたアルプの山又山が、たとへば、氷洋の波の、泡だつまゝに凍つたやう、幾重とも知れない渦を卷いて、山は永しへに脚下に眠むり、氷の上にはつたと投げた、四個の陰影は、寂として動かない。

見まはすと、西の地平線上に、うね〳〵したモンブロンから、エギュイユへかけて、一きわ高くせり出したオーサヴォイの群山から右手へ曳いて、ユラ山系が書き割りのやうに續いてゐる。南獨逸の平原は、縱の梢であらう、もう雪は解けて、たゞ眞つ黑になすり付けた、シュワルツワルトの丘のむ

かうに薄がすんで、東はティロール、眼まぐるしいほど、重り合つた山の名は、さすがのガイドも知らなかつたが、そこからなそひに南へかけて、ヴァレイの山脈のうしろには、ロムバルディヤの雪の山の、重たさうに、ポツリ、ポツリと、頭をもたげた、あの邊が北イタリヤの國境であらう。

晴れも晴れた、雪あがりとは云ふものゝ、此の頃には珍らしい、冬の日に似た透明な空に、かうして三度オーベルラントの山上に立つて、三度、私はアルプの全山を、隈なく眺めわたした。

トゥーネルゼーの水の果に、前山の上に、半空に舞ふ「二羽の白鳩」と、遠く眺めた白い點(フレック)、麓の人は、"Die verdammten Seelen"などゝ、薄氣味わるく思つてると云ふ、その殘雪は、頂上から西北へかけて、缺いて落した、斷崖の眞下になつて、そのトゥウーンの湖水は、入り込んだ緑の山の間に、遠く小いさく、ぴかつと冷たい蒼色を埋めてゐる。オーベルラントの人達は、この殘雪を"Die Augen"と呼んでをる、實際、うそ寒い日の暮れ方に、ほんのりと薄あかるい空をくぎつて、眞つ黑に隈どつた、いかつい山の膚に、物の精でもゐるやうにぽつっと二つ、何か知れない、生きものゝ眼でも光るのか、夕闇の中に、くつきり白く取り殘されたのを見たら、"Die verfluchten Nonnen"などゝ、怖がるのも不思議ではない。

私は眩んだやうになつて、氷の上に寢そべつた。瞰下ろすとクラインフ゜ーシェルホルンの空に、「や！、鷲(アードラー)！」が、ゆつたり輪を畫いてゐたのも、今思へば、靜かな幻に過ぎなかつたらう、そのオックスから、左へかけて廻らした、薄いアレトの背ろには、四千米突をこえた山が、四つまで思ひ切りよく、空につき出してゐるが、さすがに、フィンシュテラールホルンは群を拔いて、アガシホルンからフギザッテルへかけた山稜は、氷の冴えたのも、まるで刄物のやうに思はれる。

かうしてゐる間にも、旅程は、その山々を指しては、氷の上にひろげた地圖と首つ引きで、くりかへし〳〵研究された。實際、山は、私達の希望のとほりで、一度達せられる瞬間に、もう更らに高い

ところへ移されて、心はいつまでも、果す折のない望みを懷いて、どこまでも〳〵さまよはなければならない、そしてその努力が、何とも云へない樂みである。

明日登る筈のグロースラウテラールホルンは、アレトの岩が曲線を畫いて、眞つ黑な壁に、鋭い氷の褶の獅嚙みついてるのが、手を延せば屆くくらゐに見えるけれど、こゝから、日歸りは無論、尾根づたひにも行けないので、矢張り朝は一時に起きて、今朝の通り、こゝからは氷壁（アイスワント）の眞下になつたから、もううつむいても見えないが、あのクーロアールの直下まで來て、右へ別れて、西むきの雪につ付くんださうだ。

寫眞も充分撮し、景色も思ふさま眺め、烟草も冷たい舌の痛くなるほどふかして、かれこれ頂上に一時間はゐたらう、雪は柔かなり、まともにうけた午後の日は強し、下山のほども氣がゝりと云ふので、頂上を發つたのは、かれこれ十二時半を少し廻つた頃、エリオットウェンクリの急なアレトは、登りと異つて足がゝりが惡いから、みんな、たつての苦しみで、びく〳〵しながら先づそれでも無事に、荷を殘して置いた、雪の上まで戻つて、二度目の晝食をすませて一と休みすると、もうかれこれ午後の二時。

氷河の通過には、一番危ない時刻だとかね〴〵聞いてはをるが、と云つてこの山では、別にどう仕樣もない、登りだけで八時乃至九時間、今日は雪の調子で、九時間半までかゝつたが、扨て下りはと云ふと、この通り切つ立てな雪では、かへつてそれ以上に手間どるかもしれない、それだからオーベルラント第一の嶮山で、何と云つても外に方法はない譯だ。午後になるのがいやなら、登らないだけのこと、そんな話は一同初めつから承知の上で、ガイドもそのつもりで僉議の上、雇ひ入れた譯なんだが、今までの登山者の中にだつて、かすり疵一つしないで、無事に下りたのもゐるんだから、危險と云つたところで、皆がみんな、死ぬと相場の極つた譯でもなし、どうしても助からんと云ふのなら、

麓にうろ〳〵してゐた日には、きつと大病ぐらゐには取っつかれてしまはう、えゝ危險があるなら、どうとも勝手にして見やがれなんて、心掛けの至極いゝのが揃つたし、それに今朝の登りでは、あまり大事をとり過ぎて、かへつてアレトの岩で、小ひどく惱まされた經驗もあり、それには第一、遠廻りなんて時間はないので、誰の發議ともつかず、エリオットウェンクリのはづれから、薄いアレトを右に切れると、雪にのしかゝつたまつ黑な岩に兩手を掛けて、逆か落しに、眼も眩むやうなクーロアールに取っついた。

クーロアール

私は今まで、時々取りはづしては撮すのに便利だから、寫眞機は、右の肩からはすっ掛けにぶら下げて、その上にリュックサックを背負つてゐたが、かうなると、邪魔になつて〳〵仕方がない、それにもうクーロアールにかゝつては、寫眞どころの騒ぎではないから、今度はサックの中に仕舞ひ込んで、シャツの上にはスウェターコート、ローデンの帽子とスウェターは、眞ともの日に熱くて耐らないから、これもその中に押し込んで、しつかと背負ふと、先づ樂々と、氣のせいか、空ら身よりもかへつて氣强いくらゐ身輕るになる。

が、登りとちがつて、岩の角からうつ向きになつて、一足クーロアールへ足形(ステップ)を切ると、何がさて眼が眩むやうな楯一面、眞つ白ろに辷り落ちる雪の壁に、這ひづった先登はヘッスラーで、奴の鼻が私の踵につかへるばかり、すぐ上の近藤君は、肩のところでアルペンシュトックを突つ張つてると云ふ物騒なありさま、後殿のフォイッなんかは、どうしてゐるのやら、仰ぬいて見るほどの餘裕などは更らに無い。左の手には、杖(シュトック)の柄と一緒に、珠數つなぎになつたロープのたるみをやけに握つて、一足、一足と段を作つて、靴のつま先を雪の中に突つ込んでは、そろり〳〵と這ひ下りる、で、その雪

が、また意地わるく、思つたよりも柔かい。

何しろ、背ろむきになつて這ひ下りるんだから、足もとは惡るし、雪の急斜で手掛りはなし、重くはなかつた筈のリュックサックまで、いやに意地惡るく脊を曳いて、氣のせいか、もんどり打ちさうで氣味がわるくてならない。一足、一足、爪先が痛くなるほど、雪の中へ靴を突つこんで、そろりそろり這ひ下りてゆく。クーロアールは西向きで、午後の太陽をまともに受けた雪の反射で、ぴつたりくつ付けた顏や手先は、爛れるばかりにひり〳〵痛む。

が、まづ〳〵どうやら無事に、一時間ばかりかゝつて、クーロアールの眞ン中に、まつ黑に甲羅を干した、一枚岩のとつつきまで辿り着いたが、見ると岩のはづれは、わんぐりと雪がゑぐれて、もう下りて行くことは出來ない、もとより腰は下ろせず、矢張り背ろむきになつたまゝ、雪の絶壁と、にらめつこをしたまゝの珠數つなぎで、一息ついたが、今考へてもあまりいゝ格恰ではなかつたやうだ。おまけに晝過ぎのせいなのか、尾根ほど風のあてないためか、帽子(ミュツツエ)の緣をつたはつて、殘念ながらどうも冷汗らしい奴が、頰にじと〳〵滲むのが、顏の皮に稀硫酸でもぶつかけるやうにひり〳〵する。

どう考へても、此の岩からは下りられない、兎も角も、一枚岩を横に這つて、東のはづれまでこぎ付けると、遙かむかうに、今朝登つた足跡が、立て掛けた梯子のやうに望まれた。あれまで行けばどうとかならうと云ふんで、何しろ今ゐるところは、危くて耐らないから、岩を離れると、又雪の壁を横にからんで、東へ〳〵と足形(ステツプ)を切つた。

でゆつくりと氣を落ちつけて、側き目もふらず、杖をふるつて路を刻みつけながら、その雪の幅は、一町あまりもあつたらう、縱板のやうに走つたクーロアールの眞ン中を、かれこれ中ほどまではとつついたらう。新しい雪は、晝過ぎの日に泡のやうに水づいて、いくら杖を突つ張つても、柄は手ごたへもなく、そのまゝづぶ〳〵はいつてしまふし、靴は海綿を踏むやうで、足がゝりは惡いし、一同、

途方にくれた氣味で立ち止つてしまつた。

と云つて、じつとして居れば、一寸二寸とひとりでに足が沈んでゆくから、ぼんやりしてをるわけにもゆかない、先登のヘッスラーは、もう眼が据つて、物を云つても返事もしない。

近藤君は、さつきからしきりに、頭痛がするつて弱りこんでる。

「おい、御山に酔つたね、しつかりしないか、見つともないぜ。」

「笑談じやない、さうぢやない雪焼けだよ、どうも頭痛がして、それに顔が火のやうにほてつて耐らないんだ、君は何ともないのかい。」

「はゝあ雪焼けですか、上品な皮膚だから、さう云や眞紅だぜ、それで這ひづるんだから、先づ蟹さね、それにしちや餘り足が長いが。」

などゝ、こうしたなかでも、相互に口だけは、人並みにきけたんだが、ヘッスラーの奴は、苦い顔をして欝ぎ込んでる。

アヴァランシュ

二言、三言、早や口にフォイッと話しあつてゐたが、そんな中にも元氣よく、さあ出かけやうぜってんで、たつた、一足踏みだした刹那である……

私は二年後の今日、八月一日、この「山岳」の原稿を書きながら、まだ鼓動の高まるのを覺える。

この時、誰とも知らないが、わつ！といふけたゝましい叫び聲を聞いた、どきつとして振りかへるとたんに、私と近藤君の間に、雪の塊が二間ばかり頭の方から、烟をあげて、湯瀧のやうにどつと崩れ落ちるのを認めた、が、それは一瞬間で、もうその時、私達はアヴァランシュの上に乘つてゐたのである、夢中で杖(ストック)を打ち込むだまゝ足を下にして、非常な加速度をもつて、うつむきになつたなりで

エリカッツトウェンクリより
フィンシュテラーホルンを望む

辻村伊助氏撮影

一直線に、雪の楯を辷つて行つた。その時、昔、針ノ木峠の殘雪で、足を辷らして怪我をした時の有り樣が、燒き畫のやうに頭の中に渦まいたのを今も覺えてをる、……と、急に腰に結んだロープがぐつと引つぱられて、目に見えない、もの丶力に吸ひとられたやうに、空を切つてもんどり打つたのも覺えてゐる……、もう駄目だと觀念した時に、づしんとばかり、肩先からやけに雪の中に叩き込まれた、占めた！助つた！と思ふと同時に、また空を切つて、私の身體はつぶてのやうにはふり出された、その時夢中に握つてゐた杖（シュトック）が、何ものにかもぎ取られてしまつたのを覺えてゐる……。かうして、邪見にクーロアールを跳ね飛ばされては、また叩きつけられて、雪崩（アヴァランシュ）の中に卷き込まれつ丶、轉々として行く間に、粉雪が湯氣のやうに、口の廻りに渦卷いてゐるのを見た、……もう駄目だ……まだ生きてる……まだ生きてる……お丶まだ生きてゐる……、と刹那々々に頭にくりかへされた時に、このま丶生きながら、クレヴァースの底に落ちこんで、もがいても叫んでも、永久に出ることの出來ない、氷の壁を見上げるのかと、咄嗟の間に、頭の中に閃いたのを、私は今もよく記憶してをる……。

かうして、次第に意識は不明瞭になつて、只、何ものとも知らない大きな力にもてあそばれて、山崩れの石塊のやうにころがされていつた時、ずる〳〵つと、何かに摩擦されたやうに、速度が弱つて、身體を埋め込んだ雪の山が、そのま丶じつと動かなくなつたのをぼんやりと覺えてゐたが、それを最後にして何分かの間は、私の日記に、私自身すら書き入れることを許されない、白紙が計らずも挿まれてあつたのだ。

私は最初に氣が付いたと思つたが、それより前に、雪崩の中からもがき出た近藤君は、フォイッと、肩から下は雪に埋まつたま丶、身動きもしないヘッスラーとをちらつと認めたま丶で、夢中になつて、辻村！辻村!! 辻村!!! とどなつても、私の影は見えなかつた、そしてとう〳〵殺してしまつたのか！と氣

がつくと、凍えた頭にかつと血の上るのを感じたと、あとでくりかへし話して呉れた。

暫すると、雪をつかんで、私の半身が表はれたさうだ。

雪の上に無理やりにもがき出ると、さつきと同じやうに、世の中の明るいのに氣がついた、眼の前にはヘッスラーがたふれてゐる、左にはフォイツと近藤君が立つてをる、私は周りを見廻して、みんなの無事な顏を見ると、なかば夢中でグリュックリッヒ！と絶叫した。

すると、まだ雪に埋まつたまゝの、ヘッスラーが太いバスで、

「Ach ! nein, gebrochen !」

と云つた、彼の右脚は、ゲイトルをつけたまゝ、三ツに折れ曲つてゐた。

「おい！どうした、」

「何ともない、君は、」

「大丈夫だ、何ともない」

私達は御互に、生きたまゝ雪崩の上に取り殘されたのに氣がつくと、すぐ取り留めのない頭に、人間は死なうと思はなければ、決して死ぬものぢやないと思つた、同時に、あゝ面白い經驗をした、いい土產話が出來たと無闇にうれしかつた、そして最後に、妙に滑稽な感じが起つた、もしヘッスラーが、苦い顏をして、雪の中で呻いてゐなければ、私達は無遠慮にも、此の偉大なものゝ力に反抗して、大聲をあげて笑つたに相違ない。丁度小供の時分、惡戲をして、よその叔父さんに追つかけられたやうな氣分であつたと思はれる、そして最後に、不思議にも落ちついた、冷靜な態度を回復し得たやうに感ぜられた。

と見ると、二人のガイドは、云ひ合せたやうに懷中からウィスキーの平壜を取りだして、喇叭を極めると、すぐそのまゝ、大事さうに仕舞ひ込んでしまつた、別に飲みたくはないが、むら〳〵つと癎

癪が込み上げて來た。ふりかへると、切つ立てになつたクーロアールからは、すぐ頭の上にたつた今築き上げた、雪崩の岡をめがけて、まだざら〳〵崩れ落ちて來る、幸に私達は、雪崩の上の方にゐたために、深くも埋もれずに、その堤防のやうに盛り上つた雪をはね飛ばされて、二條の廣い氷隙（クレヴァース）の空を飛び越してしまつたと見える。然し、今ゐるところが、クレヴァースの上に假りに積つた雪かも知れないと思ふと、それに一としきり止んだアヴァランシュは、思ひだしてはざら〳〵崩れ初めるので、こゝにゐてはまたどんな眼に逢ふか知れないと氣が付くくらゐに、私は意識が明瞭になつて來た、そして矢張り、落ちついたつもりでも、隨分上つてゐたと見えて、グレッチェルグラスが、どうして損はれなかつたものか、樣の金具は折れ曲つてゐたが、眼鏡も硝子も無事に、妙なはづみで、額にくつ付いてるのに漸く氣がついた。

スウェターコートのかくしに手を入れると、さあしまつた、山刀（メス）が無い、折角頂上で撮したフィルムを三卷入れといたサックが無い。

「おい！メッサー、メッサー、繩（ザイレ）を切らなきや危いぞ、メッサーつたら、早くよこさないか！おい！」

ぼんやりしてゐたフォイツの小刀を引つたくつて、身體にぐる〳〵卷きついてゐた繩を、づた〳〵に引つたぎつて、四人とも離れ〳〵になつた、近藤君は足が少し痛むつて、鷺のやうに片足で立つてゐる、見ると右の手先からポチ〳〵血がしたゝつて、雪の上に散つてゆく、私は今まで、頸に卷いてゐた手拭—高野君が物好きに、わざ〳〵小包で伯林まで贈つてよこした、幸四郎の手拭を破つて、取り敢へず繃帶をしてやつたが、血を拭くと肉が破れて骨が白く表はれてゐる。

「杖紐（シュトック）が卷きついて、振りちぎつたものだから……いゝやそんなに痛かない、」

こんな際だから、まさか負け惜みでもあるまいが、骨が出てるのに痛くないなんて、先生餘程面喰つたと見える、ふと氣がつくと、人のことは云へない、矢つ張り隨分面喰つてゐたんだ、今迄ついぞ、

氣にもとめなかつたリュックサックは、雪解け水でづぶ〳〵に濕れたまゝ、まだ振り切れずに、脊中にしつかり喰つ付いてゐる、早速とり出して、寫眞機のレンズを更めると、幸に疵もついてゐない、フィルムは撮し殘りがたつた二枚あるだけで、あとのロールはどこかに振りとばしてしまつた。取り敢へずその二枚で記念にすぐ撮影した、が、あわてたと見えて、二枚とも同じやうな位置で撮したのは、今思へば少々氣がきかなかつた。時間はと思つたが、腕時計は無論めちや〳〵に損れて、針が折れてるから遭難の時刻も、大凡三時半ぐらゐとは思はれるが、本當のことはわからない、然しもうこの時には、日は次第に、淡い氷の紫だつた、アイガーの空に傾いて、無事な身體でさへ、小屋までの崖路と、水づいた新雪の下山は、一通りなことではなかつたのである。

フォイッと近藤君は、大聲をあげて麓をのぞんでは、助けを呼んでゐる、叫び聲は背ろに脊負つたクーロアールに反響して、物凄く聞えるが、私達が瞰下ろすシュレックフィルンには、墓原のやうに氷塔の入り亂れたのを見るばかり、聲は徒らに消えて、生きたものゝ答へは聞かれない。私はふと、太洋の波に沈まうとする舟人が、帆綱の端にかぢりついて、誰を呼ぶといふあてもなく、狂ひ叫ぶ樣子を思ひ浮べた、どうせ助からんのなら、どなつて見るのもよからうが、今の私達は麓に殘して來た小屋があるのに、下らない叫び聲に力を費やすのは馬鹿げてゐると感じた。

「おい、よせよ、駄目だ！呼んだつて聞えやせんったら！」

然し、一分間に六回と云ふ、山岳會規定の危險信號を、二人は血聲をしぼつてくりかへしてゐる。小屋へはまだ三時間もかゝる、假令私達の聲がどうかして、そこまで屆くとしたところで、今朝は誰もゐなかつたその小屋に、折りよく登山者が來てゐるかどうか疑問である、幸に誰かゐるとしたところで、又、幸に、聲を聞きつけたところで、何處でわめいてるか分るとはとても思はれない、萬一、幸に小屋に人がゐて、幸に私達の聲を聞きつけて、そして幸にも、何處と立派に見當がついたとした

ころで、小屋からこゝまでは登り三四時間、五時半、六時半、七時半、八時半……日が暮れてこの身體で、しかも杖なしでガックの岩が下りられるか、四方はヴィクザックの氷と雪で歩けなければこゝに助けを待つて、そしてこのまゝ、死なゝければなるまい。

「駄目だつたら、よさないか、そんな馬鹿なことをして！聲を涸らしたら肝腎な時に役に立たないぞ、僕等が下りなきや助かりやしないよ。」

然し脛が眞つ二つに折れて、雪の中に横たはつてるヘッスラーを見ると、實際、可愛さうで、大きなことは云へなくなる、然し氣の毒でも、可愛さうでも、大きな事が云へなくつても、どうしても誰か人里までこぎ付けて、助けを求めて來なければ、此の際わめいたつてどなつたつて、自分で始末しなければ、誰もどうして呉れるものではない。取り敢へず總がゝりで、ゲートルをはづして繃帶がはりに、ぐる〳〵巻きつけて見たが、折れ目がごり〳〵いつて、そのたんびに唸るんだから、どうにも手が付けられない、でその方はフォイッに仕せて、ずだ〳〵に切り離したロープを結び合せると、近藤君とフォイッと三人、杖はいづれも先刻御取りあげになつたから、劍を盜まれた軍人みたいな身すぼらしい有り樣で、身體をくゝる程には長くないロープを握ると、先づ懲役人と云つた情ない形、恐る恐る氷河の上を下り初める。ヘッスラーも、さすがにガイドの端しくれだ、足は折れても、兩手で這ひずつて、兎に角私達のあとにくっついて來た。

近藤君は、右足が痛み出して歩けないつて云ひ出す、私はまた何ともない筈だつたのが、左の腕は、肩の付け根から、まるで感覺が無くなつてぶらんと下つたまゝで、別に痛くも痒くも無いが、他人の腕でもことづかつて來たやうで變でならない、そして、二足、三足歩き出すと、腰がづき〳〵痛み出して、右手で膝頭に突つかい棒をしなくては、立つてることも出來ない始末、今まで握つてゐたロープは足に巻きつくから、思ひ切りよく捨てゝしまつて、二人で手を曳きながら、フィルンをはづれる

と、右は氷河の底に、崩れ落ちるシュテーアヴァランシュの跡ばかり、堀りかへした墓場のやうに覗かれるシュレックフィルンの崖の上を、左にはシュトラールエックの尾根づたひ、この麓はガックの嶮のあると云ふ、その雪路をよろめいて、死ぬんなら一所にと云ふので、近藤君と並んで、フォイッのあとを辿つて行つた。

が、二人とも身體は利かず、雪はぶく〳〵水づいて、一足、一足、拔くたびごとに、膝より深く入り込むので、やつとガックの上に出た時は、もう日はアイガーの肩にかくれてしまつた。岩にかぢり付いて、雪解け水に咽喉をしめすと、汗にびつしよりなつた身内がぞく〳〵して、もうこのまゝ死ぬんではないかと思はれた。

そして一度岩の上に腰を下ろすと、もう氣が遠くなつて、そのまゝ他愛もなく、寢てしまひたいやうな氣持ちになつた、然し流石に近藤君は、かうなると强情に私を引つぱつて、無理やりに崖の上から下り初めた。私達は十足と歩くと、もう耐らなくなつて、片頰を岩にくつつけて、蛭のやうに雪解け水に吸ひついては、また思ひ出したやうに、ふら〳〵と二足三足下り初める。

何時間かゝつたか分らない、ガックの絶壁を下り切つて、小屋の背ろへ引くフィルンの上に下り立つと、眞夏の日もとうに沈んで、空は暗く、雲は灰色に變つて、少し離れて跛足ひき〳〵、波にたゞよふ形のフォイッまで、いかにも影が薄く思はれた。

「もう駄目だ、歩けない」

近藤君は雪の中に座つてしまつた。私もそのそばにぼんやり座つてしまつた。すると近藤君は、また起き上つて動きだした、私も影のやうにぼんやりあとについて行く、かうしてどこまでフィルンを歩いたか知らないが、私達は三人とも、いつのまにか、ばら〳〵になつて、フォイッも近藤君も、どこへか見えなくなつてしまつた、そして私は、フィルンのはづれに横る、中ノ島の上まで、どうにか、

かうにか辿りついた、近藤君を呼ぶと、後ろの方で、いかにもたよりの無い返事が聞えた。

岩山のはづれはまた雪になつて、遠く向ふに、今朝發つた小屋が、薄くらがりに將棋の駒のやうに、ぽつっと雪の間に望まれる、私は小屋が見えると思つたら、もう筋が拔けたやうに、そのまゝぐつたりと腰を下ろして、後になつた近藤君を待ち合せることにした。

昨日、今日と、二日かけて踏みかへした雪路は、どんよりした夕闇の中にも、でこぼこに入り亂れて、今下りて來たガックの方から、小屋を目がけてまつすぐに走つてゐるのに、と見ると、たつた一筋、掃いてならした積雪を渡つて、飛び〳〵に岩山のすぐ下から右へ切れて、だら〳〵にやゝ小高く盛り上つた、フィルンの陰に消えてゐる。

はてな、誰か來たのかしらん、シュトラールエックはあつちでは無いが、と、變に思ひながら、靄を被つたやうな夕闇に見すかすと、すぐ下のアイスメーヤの氷河の上に、たしかにあちこち動いてゐた、一むれの人影を認めた、おやつと思つて見なほすと、影はクレヴァースの間にじつと止つて動かなくなつた、私は引き息氣で、すつくと立ち上る、と胸の鼓動が割れるばかりに高まるのを覺えた。

確かにあの邊で動いてゐたが、何だらう、妙なところに居ると思ひながら見つめると、思つたより近い氷の間に、横に大きくひゞ割れたクレヴァースの上に、のしかゝるばかりに重り合つたものゝ影に氣がついた。

「や、あすこに居る、」

見るといづれも、淡い衣の色は、もとよりくらがりで分らないが、着物の着こなし體つき、確かに女だ、クレヴァースを夾んで、右に二人、左側に三人、なかには爪立つばかりに氷の端をつかんで立つてるのもあり、蹲んでゐるのはクレヴァースにのめる樣で、一人はその肩につかまつて延び上りながら、じいつと底の方を指さしてをる。

はて、何をしてゐるんだらう、誰かクレヴァースへ落ちたのか知らん、聲をかけたものか……それとも……耳がかつと鳴つて、頭は火のやうに熱い、そして襟から脊筋へかけて、氷でも注がれたやうにぞく〳〵寒氣がする、考へながら見なほすと、どうも耳こすりでもしてゐるのか、どれとは無しに動くらしい。

いまにふり向くか、どうも何か捜してゐるらしい樣子だが、誰か落ちたに違ひない、氣になつて〳〵たまらないから、身體の怪我も忘れて、ふらふらと二足三足、歩いては立ち止り、見なほしては又ひと足、とう〳〵雪の小山の上まで來た。

もうとうに暗くなつてゐたと見えて、衣物の色は灰色の氷と見わけもつかないが、寛やかなガウンかシュミースばかりでゐるらしく、ことによると尼達ではないかとも思はれる、その中でもクレヴァースに、指の爪をひつかけて、覗き込んでる女が、いかにも薄氣味わるく思はれた。

フィルンを廻つて崖を下りれば、下はすぐアイスメーヤの氷河である、や、アイスメーヤの氷の上だ、確かにクレヴァースの上だ、あ、あれが人間の居るところか、しかも女ばかりで此の暮がりに、思ふとたんに總身に冷水を浴びたやうに飛び上つて、ぶるぶるつと身ぶるひして棒のやうにつっ立つた。私は夢中で近藤君を呼んだ、同時にはじき飛ばされたやうに、雪の中を岩のはづれまで逃げかへつた、ふりかへるとクレヴァースはどれか、もう見わけもつかないくらゐ暗くなつて、確かに居た五人の女は、すつと消えてしまつたらしい。

私はまた息氣を切らして助けを呼んだ、そして周りを見まはした、岩を圍むシュレックフィルンは、一樣の灰色で、幻映か、氣味の惡るい物の形はもう見えない。

二聲三聲、死に身の聲をふりしぼつて、近藤君を呼びながら、何かに追ひかけられてゐるやうに、息せき切つて逃げだした、岩をはづれると、踏みかへした雪路で、でこぼこに堀りかへした靴のあと

影撮氏助伊村辻　　ルーアロークのンルホクッレュシ

を、泳ぐやうな足どりで、振りかへつては何か追ひかけて來るかと、暗闇の奥を見つめながら、やつと、堤のやうに築き上げた、雪を乘つこすと小屋の裏手に、雪崩のやうに逃げ込んだ。

「誰だ！誰だ!!や、フォイッか、誰か來たか、」

小屋の入口に固まつた黑い影は、先登のフォイッであつた、彼は、近づくと兩手に顯をさゝへて、身動きもしないでナイン！とたつた一言答へたまゝ、まるで呼吸が無いやうに默つてしまつた。

駄目だ、小屋には私達の荷が番をしてゐたゞけで、とう〳〵誰も來てゐない、こりや四人のうち、きつと誰か死ぬなと直覺すると、仰むいて、今辷つて來た雪路に近藤君を呼んで見た、返事はない、又聲を絞つて近藤君を呼んだ、返事はない、私はフィルンの端にかぢりついて、延び上つて三度近藤君を呼んだが、矢張りしーんとして誰も答へるものはない。私はそのまゝぐつたりと雪の上にたふれて、フィルンから滴り落ちる、水溜りに口をつっ込んで、犬のやうに冷たい水を吸つたのを、今だによく記憶してをる。

遭難の夜

何だか、がや〳〵騷々しいんで眼が覺めると、周りに裸蠟燭があちこちと動いて、荒くれ立つた男が、大勢私の側でしやべつてゐた、氣が付くとどれも見知らない顏ばかりで、起き上らうとする身體を支へてくれたが、身動きする度に、骨が軋むやうに痛い、私はいつの間にか寢床の上に寢かされて、近藤君も入口の方に倒れてをつた。何だか頭が妙になつて、そのまゝ眼をふさぐと、室の中の騷ぎが急にはげしく湧き上つて、床を蹶る音や、杖を突くひゞきが、ぐわんと後腦に泌みたと思つた。

眼を開くと、大勢の男にかつがれて、眞蒼な顏をしたヘッスラーが入つて來た、一人は素的に英語がうまい、其筈で、後に聞くと亞米利加人だつたが、私の額に手をあてたり、脈膊を數へたりして、

やがて角砂糖にコンニャックをそゝいで、口に含ませてくれた。

意識はまた次第に朦朧として、夢とも現ともつかず、いろんな人が出入りするのが、閉ぢた眼の瞼を透して、見えるやうな氣がしたが、その後のことは今は全く氣憶にはない、醫者が來て、咽喉のひりつくやうな水藥をくれて、ことによると、有り合せのブランデーを生一本で注ぎこまれたのかも知れないが、咳込みながら眼をあいた時は、もう夜はとうに明け放れてゐたものと見えて、北むきの寢室が、眩しいくらゐに明るかつた、側には近藤君が起きかへつてゐた。

醫者はヘッスラーの折れた脛を繃帶して後、ぶらりと垂れ下つた私の左手をぐる〳〵廻して見たり、足をひつぱつて見たり、散々いろんなことをやつた揚句、片腕をくの字なりに折り曲げたまゝ、胸へかけてぐる〳〵卷きに繃帶してしまつた。

誰だかコッフィーを持つて來てくれた、見廻はすと、私達は婦人室に搬れてゐて、ネイルドブーツだけは誰かぬかせてくれたと見えて、昨日のなりで、床の中に寢かされてゐたのだ、だん〳〵落ちつくと、腰と踵がづき〳〵痛むし、繃帶された左の方は、手首から先が氷のやうでちつとも感じがない。

樣子を聞くと、昨夜あれから、近藤君がたつた一人で小屋に着いた時、フォイッはやつぱり、入口にぼんやりしてゐたさうだ、私を搜しに室を明けると、腰掛の下に俯伏せに倒れてゐたと云ふ、詳しいことは、近藤君の記憶にもないといふが、間もなく二組の登山者が、本當に運よく、小屋へ入つて來たのだ、一組は、獨逸人二人にガイド一人、一組は、米人と和蘭人で、ガイドが二人、この連中が手分けをして、一人はグリンデルワルトに醫者と人夫を呼びに行き、一組はヘッスラーの搜索に、あとは小屋で私達につき添つてくれたのである。

夜通しグリンデルワルトへ下りた人夫は、醫者と十二人のガイドを引つぱつて、小屋へ着いたのが今朝の午前十時、白ら〳〵明けに村を發つて、ベールエックで朝飯をたべてやつて來たのだ。

その中に、誰だかカフェーにパンと腸詰（ウルスト）を持つて來てくれた、考へて見ると、昨日の晝飯をアレトの雪の上で平らげてから、水の外には一口も食べなかつたんだが、その割合に甘いとも思はなかつた、近藤君はカフェーが濟むと、早速シガーをくわへ込んで、パクリ〳〵煙を吹くのが羨しくてならない。

「ドクター、どうだい、煙草でも喫はないか、シガー上げやうか」

「シガーはいやだ、パイプが飲みたいんだが、アヴァランシュの騒ぎで何處かへ落しちやつた、村へ出るまで禁煙だ、ひどい目に逢つたよ、煙草はなくすし、折角撮したフィルムもすつかり落しちやつたし、」

「僕は金入れをなくしてしまつた、正金の信用狀と現金が少しばかり入れてあつたんだが、後で捜しに遣らなきや、村へ出ても一寸困るから……パイプはそこにあるよ、」

占めた、パイプがあれば、二日や三日は煙草を食つても生てられる、早速近藤君を累はして、刻みをつめて貰つて、一寸西洋の御大名みたいだが、片手では詰められないから、是も已むを得ない、マッチまで擦つてもらつて、一口喫ふと、昨日の騒ぎで逃げ出した魂が、やつと宿元へ戻つたやうに生生とする、見廻すとヘッスラーの蒼い顏が見える。

「ヘッスラー、どうだい、痛むか」

「否、じつとしてればそんなではござりましねえ」

「山を下りたらどうする、グリンデルワルドで療治するか」

「いゝえ、ウンテルゼーエンのシュピタールが一番いゝだでね、山から來る衆は、みんなそこに行かつしやるだ、一日六フランだで、さう大してはかゝりましねえ、」

「近藤君どうする、ベルナーホーフに行くのも氣が利かないし、第一不便だから、兎に角病院に入らうか、山から來る衆がみんな行くんなら大丈夫だらう、」

御醫者の病院は無論だが、ガイドも切りにさう云ふし、此の時はまださう大した怪我だとは、御互に氣がつかないでゐる時分だから、二人で散々相談して、それでは兎に角、一先づ病院に這入つて見て、居心地がよければそこに定めるし、さもなければベルナーホーフに宿をとつて、通つてもいゝと云ふことになつた、日本の病院の經驗があるから、餘り氣がすゝまない、酒は一切いけません、煙草は禁じてあります、それでは先生に伺つて……を、毎日くりかへされた日には、白面な者だつて、終ひには病人になつてしまふ、どう考へて見ても、病院は私の性に合はないけれど、何にしても身體の調子を確めてからでないと、餘り我儘も云へない譯だ、それに近藤君の長い脚は、確かに折れてると宣告されてゐるんだから、是れは一と先づ病院に落ちついて、然る上善後策を講じた方がよからうと云ふことになつた。

近藤君が遭難の時なくしたのは、信用狀で八千五百圓、外に英佛とりまぜて金貨で、六百圓ばかりであつた、すぐ一人捜しにやつたが、とう〳〵見當らなかつた、後に私達が病院に入つてから、二度人夫をだして見たが、フォイツの杖と近藤君の帽子が見つかつただけで、とう〳〵わからず仕舞ひである。

天氣は相變らず申し分がないが、かう成つてはかへつてそれが癪の種だ、跛曳き〳〵北側の窓から首を出すと、グロースシュレックホルンは、頭の上から相變らず、小屋を瞰みつけてゐる、一枚岩の中腹には、うつすらと雲が這ひ上つて、蒼空と氷とくつきり分れた、エリオットウェンクリから南の方は、前山の雪でかくれてゐるから、昨日の場所はこゝからは見えない、まあ頂上迄登つたのがせめてもで、斯うなつたらあきらめるより外に仕方がない。もう一つの窓からは、フィンシュテラールホルンが見える、日に向ふから眩しくて、ぼんやり一樣に眞つ白ろに光るなかに、氷のぎざ〳〵が、一きわ白く浮き出してるだけで、此のまゝ、山が半空に融け込んでしまふんでは無いかとも疑はれる。

全體ならば、今ごろはグロースラウテラールホルンの頂上で、思ふさま寫眞でも撮してる頃だが、フィルムの十六本が、三分の二も殘つてるのに、片腕利かないので、この天氣にも撮すことさへ出來ない、そのうちに、後れて村を出た人夫がやつて來る、小屋はがや〳〵騷々しくつて、ちつとも山の中らしくない、晝飯なんか、食つたんだか拔きにしたんだか、今もつて思ひ出せないくらゐに逆せ上つた。

そのうちに人夫も揃ひ、支度も出來て、いよ〳〵出發となつたが、小屋には擔架が二つしかない、足の利かないヘッスラーと近藤君がそれに入れられて、私はフォイッと一緒に、ゆつくり歩いて下ることにした、そこで皆より少し早や目に小屋に別れて、から〳〵の石の上に出ると、もう腰繩で、荒くれたガイドが繩尻を握つて附きそつた所、どう慾目に見ても罪人、これからシベリヤに流し者ぐらゐにしか受け取れない。私には二人ついてリュックサックと寫眞機も脊負つてくれたし、誰のだかアルペンシュトックも借りて來たが、かうやつて見ると無疵な人間は幸福だ、只さへ歩きにくい岩路を下りるのに、片手はまるで感覺がないのに、上からぎり〳〵繃帶されてるから、胸が壓されて息苦しくてたまらない、この邊に倉庫でもあるんなら、肩の付け根から挽ぎ取つて、直るまで一寸預かつてもらひ度いやうな氣がした。

ネイルドブーツで、ゴトリ、ゴツリ、歩くよりも落ちる方が適當な形容詞なんだから、シュワルツエックに來るまでに、もう冷汗びつしよりで、小屋の入口に腰を下ろすと、眼が眩んで、一寸の間は口もきけないくらゐになつた、ガイドの持つて來たウィスキーに咽喉を濕して、汗をふきながら一服喫ふ、昨夜出っかした女のことを聞いて見たが、別に登つて來た樣子もなし、第一、女ばかりでゐたなんて、どうも變だ、こゝかシュトラールエックより外に、泊りどこは無いんだからなどゝ、話してゐた。然し不思議だ、確かに動いてゐたが、今だに私には、時々幻のやうに眼に映つる。

クレヴァースの遠くには、蟻のやうに一群の人影が點ぜられた、それは擔架に附きそつた連中である、シュワルツエックからの急阪は、人一人やつと通れるだけだから、危險を冒かして氷河の上を渡つて行くのだ、時々大きなクレヴァースを廻つてゆくらしく、蟻の群が左右にうねつてゆくのがよく見える。

一休みして小屋を發つと、阪路は次第に急になつて、腰は痛むし、踵がづきづきして力足が踏めないから、借り物のシュトックもガイドの一人に渡してしまつて、身體を縛つた繩に垂り下げられて、下りるより下ろされると云ふ體裁だから、骨の折れることは一通りではない、同じ賃金で働いてるのに、私の掛りになつたガイドは散々な目に逢ふと思つたらう、然し彼は忠實に、私が今まで經驗した最良の人夫と斷言出來るほどの勞力をもつて、いつも少しも變らずに世話をしてくれた、彼の名は、ペテル、ブルゲナー (Peter Burgener)、グリンデルワルトのガイドの名簿には、同じ名が二人見えるが、これは四十ばかりの、丈は私より三寸ぐらゐ低い男である。

岩山には、雪解け水がじとじとして、只さへ辷り易いのに、身體は利かないから、今考へると痩我慢を張り通したのだが、人間は外に仕方がないとなれば、どんな事でもやつてのけられると思ふ。ゴツリ〳〵岩角にぶつかりながら、下りて行くのが、一足〳〵腦天迄泌み渡るくらゐヅキ〳〵痛む、後で見るとあれ程、しつかり打つたチイルドブーツの釘が曲つて、三本までどこかに無くなしたくらゐで、時間は自分ながら呆れるほどかゝつたが、それでもどうやらベーニセックの岩山を登り下りして、草原に雪のなだれた、斜面までこぎ付けた。

登山の前と違つて、いさゝか意氣消沈の氣味だが、早く村に出て、ビールでもチトローネンワッサーでも、一杯飲みたいと、此時は、そればかりが望みだつた、氣が付かずに、近藤君のパイプを持つて來てしまつたのが望外の幸福で、山の空氣でカサ〳〵に乾き切つた刻を、何度もふかして居た。

もう日暮に間もあるまい、四時間餘りの途のりに、彼これ七時間も費して、ベールエックのとっつきの、牛小屋まで辿り着くと、今迄いやに薄ぐらく、頭の上に覆ひかぶさつてゐると思つた夕雲が、いつの間にかオックスからアイガーの裾へ擴がりかゝつて、そのうち、どつと細引のやうな大雨になつた。

フォイッの奴は、大した怪我ではないと見えて、ガイドの連中より先に、ベールエックへ行つてしまつたが、歩けない私は、仕方がないとして、附きそつた二人のガイドは、帽子からヅボンまでづくづくに濡れながら、それでも厭な顔もせず、根氣よく私を引つ張つてくれる。

空は眞つ黑に搔き曇つて、いつの間にかすぐ下の氷河も見えなくなつた、その暗い谷合を、斜に截つて落ちる大雨は、殆んど鋼鐵のやうな光澤がある、私は雨足に射すくめられたやうに頸をちゞめて、ギクリ、ギクリ、痛い脚を曳きずりながら、ベールエックさして濡れて行くと、岩の角から、擔架に付いて行つたドクターがやつて來た、ヘッスラーと近藤君は、擔架のまゝグリンデルワルトへ運ぶ手筈になつてをる、然し貴下はもうとても歩けないから、ベールエックへ泊つて、明日の朝村まで御下りなさいと云ふ命令だ、此の時はもう誰が何と云つても、ベールエックから先に動くものかと、腹を据へてゐた時で、無論ドクターの仰のまゝに從つた。

私は召集されて明朝國境へ行くのですから、こゝで失禮をってんで、握手がすむと、すぐまた岩の蔭に下りて行つてしまつた。

軍隊式は差し支へないが、あとで受け取つた先生の勘定書に、二人とも一寸驚ろいたが、成る程醫者はいゝ商賣だ、少しばかり繃帶をして、シュトラールエックまで散歩に來たゞけで、大枚二百五十フラン、これは戰爭中でなくても、餘り安い診察料ではない。

漸くベールエックの宿の前へ出ると先に着いた擔架は、岩のむかうをなそひに下りて、雨の中をし

よぼ〳〵濕れてゆく樣子、私はふとパルシファルの舞臺をおもひ起して、杖にすがつたまゝじつと見送つてゐた。ガイド達に階段を押し上げられて、此の間、近藤君と泊つた室の寢臺にたふれると、もう生體もない位ぐつたりして、づぶぬれの着物を脫がせて、醫者の命つけで、娘の持つて來たコンニャックワッサーの、熱い奴をぐつと飲むと、あとはたわひもなく寢てしまつた。時々、苦しいんで眼がさめる、宿の娘は深切に附きつ切りで、氷河からかいて來たらう、氷をタホルに入れて、頭を冷やしてくれる。

着いた時には、誰だか蠟燭を持つて、先きに立つてゐたから、彼れこれ夜の八時過ぎだつたらう、雨は二階屋根が流れるほどな土砂降りで、陽氣のゆるんだせいか、アイガーグラートあたりの、近いところでくり返されるアヴァランシュが、その度毎に頭にこたへる、とまたうと〳〵眠つてしまふ。

ふと眼を開くと、例の娘が、紅茶にロールを持つて來た、頭を上げるとビン〳〵痛むから、横むきに寢たまゝで熱い紅茶をすゝる、ベルネリン型の丸顏で、丈の低いのがいかにも山の女らしい、戰爭のうわさは、こんな山の奥まで擴つたと見えて、今朝の白ら〳〵明けに、私達を助けに來たガイド連が、下の食堂へなだれ込んだのを聞きつけて、村で戰が始つたと早合點して泣き出したといふとだ。

紅茶の御かげで氣分も大分よくなつた、ことによると空腹のせいであんなに苦しかつたのかも知れない、夜中にまた熱でも出るといけないと云ふので、フォイッを呼んで貰つて、同じ室の隅に寢かしたが、これは横になるともう大鼾で、邪魔になるばかりで、何の役にも立たなかつた。

雨は思ひ出してはどつと降り、と、またぱつたり止んでしまふ、夜は次第に更けて、アヴァランシュの遠く近く土の底から響くのが、もの寂しくもなつかしい。

腕から肩へ卷いた繃帶が胸を壓して、寢苦しくて耐らないのに、フォイッの鼾がまた底意地わるく耳について、いま〳〵しくてならない。

遭難の後

辻村伊助氏撮影

たつた四日前に泊つたこの室に、今夜、私一人歸つて來て、たとひ連れ立つた人達に、非常な怪我があつたにしても、御互に命生きて麓へ歸る今となつては、幸にもグロースシュレックホルンの絶巓を極めて、しかも九死に一生を得たと云ふ、不思議な經驗が、いくら考へてもうれしくてならない、人は恐らくさうであらう、生の執着に、よし多少の厚薄はあつても、ふり返つて身の上を思ふには、餘り馬鹿氣てゐる、此の偉大な山岳の間にあつて、又人の恐れる死の刹那の、餘り急に、餘りに不用意な瞬間に襲はれて、知覺する暇もない間に過ぎ去つたこの經驗は、たゞ感謝の眼を以て迎へる外はない。幾年の後、あるひは幾十年の後、この八月一日を思ひ出して、あゝ幸に助かつたと喜ぶ折もあらう、或はふとあの時、一と思ひに死んでゐたらと、悲しく思ふ時があるかも知れない、然しいづれにしても、人としていつか滅びるものと定められてある以上、私個人としては、此の後、幾百十年生きのびたとしても、此のアルプの雪に埋めらるべき、八月一日ほど、快い死に樣を、或は恐く求めえられまいと、殘念にも思はれる。

かう思ひかう考へてゐる間に、風につれた山の雨は、いく度となく窓を叩いて、終夜暴れつゞけた、明方近くうと〳〵して、ごとり〳〵床板を踏む、フォイッの足音に、ふと眼覺めた時は、枕に近い小さい窓には、朝靄が浴場の玻璃扉のやうに渦まいてゐる。風は落ちて、しつとり濕れた山の宿に、夜はほの〴〵と明けてゐた。

氣分は極めていゝが、身體の痛みは昨日よりも又更らにはげしい、片手わざで顏を洗ふ間も、脚には釘を打たれるやうな疼痛を覺える。簡單な朝飯を食べて、七時頃、表のテレースで一ぷく喫つて、ベールエックに別れを告げた。朝靄はいつとなく裾から晴れて、空にはところ〴〵蒼空さへ仰がれる、赤く崩れたアイガーの嶺には、まだ眞白ろな霧がねばついてゐるが、麓の谷合には、綠の牧に、絹のやうな薄日のさすのさへ望まれる、私はグウェヒテンの裾に、紅色になすりつけられた、アルペンロ

ーゼンを眺めながら、ぼんやりと立ちつくした、そして手足の怪我のなほり次第、またこの同じ徑を登つて、今度はグロースラウテラールホルンへ登らうと決心した。

山の朝はいかにもうれしかつたが、昨日のガイド達の朝飯を合せて、總計八十フランの宿賃には、いさゝか一驚を喫せざるを得ない。宿のアルペンシュトックを借りて、グリンデルワルトに向ふ、フォイツは私のリュックサックは持つてくれたが、まるで賴みにならない、途は昨日と違つて、樂には相違ないが、雨上りの岩角が、力のない足には何より苦しい、一歩〳〵曳きずるやうに足を運んで、麓をさして下りてゆく、そのうち後で女の呼び聲がする、ふりかへると、宿の娘で、何か忘れものかと思つたら、ウィスキーの小壜を持つて來て呉れたのだ、有り難く懷中におさめて、ベールエックの岩山を下りる。

タンネの森はもう脚もとに、すく〳〵と梢を並べてゐるが、途は雨の中を登つたこの間より、思つたよりも遠い、右の踵がづき〳〵痛んで、殆んど十歩と歩きつゞかれない、僅かな途に、二時間の餘も費して、前に、カンバヌラの花を摘んだ、森の木蔭に來て、倒れ木の幹に腰をかけて、例のウィスキーをあほる。

誰か登つて來るなと思つて見てゐると、二人づれの英吉利の女がやつて來た。「貴下ですかアヴァランシュで怪我をなすつたのは、」人の顏を見るより先に聲をかけた、食堂では、貴下がたの評判と、戰爭のうわさで持ち切りですなんて、人を馬鹿にしてゐる、それでも紙づゝみを擴げて、チョコレイトとボンボンを分けてくれて、手が利かないから、錫箔(ティンフォイル)をはがして呉れたりした。

またそろ〳〵歩きだすと、途の曲り角で、また二人の女に逢つた、これもやはり英國人で、今度はレジンでテルモスの御湯を飲ましてくれる、その次に逢つたのは佛蘭西人、これは何にも呉れなかつたが、煙草の火をつけてくれた、身體が達者なら、ろくに挨拶もしまひに、山では怪我はするものだ

と、心中いさゝか滑稽な感が湧く。

然し、氷河の終りに近い、千鳥掛けの岩道に辿りついた時は、身體は綿のやうに疲れ切つて、總身は水を浴びたやうに汗にぬれた、フォイッは依然としてうつむいたまゝ、少しも頼りにならない、もう意地づくで、眼の眩むのを我慢して、一足一足ずり下りる、が、ベールエックから五時間もかゝつて、漸くリュチーネの流れのふちに辿り着いた時には、路ばたの草の上に仰むけに倒れたまゝ、もうどうしても動けなくなつた。

フォイッは仕方なしに、流れに渡した小橋を渡つて、野良仕事でもしてゐたらしい男を頼んで、村まで馬車を雇ひにやつた、その間、もう蒼空に日の強い、眞晝の日影を、七葉樹の葉かげにさへぎつて、私は草の上に、身動きさへ出來なかつた。

半時間ばかりで、一頭立の馬車が來た、それに運ばれて、林檎の間を丘を登つて村路に出ると、とつつきのレストランの前に馬をとめて、たてつゞけにシュタインでビーヤを浴びて、漸く人心地がついた、村ではもう評判になつてると見えて、いろんな奴が馬車の廻りにたかつて、遭難の樣子をたづねる、なるたけ馬車を急がせて、グリンデルワルトの停車場に着いたのが午後一時、發車にもう間のない頃で、國境を固めに出る兵士が、私達の着くのを見ると、ばら〳〵つと客車から飛び出して、荷物を運んだり、私を抱いたりして、室の中につれ込んで呉れた。

若い連中が大勢やつて來て、一人々々握手して、無事を祝してくれる、日本の汽車の中とは格段の相違で、私は故國では、とても味へない悦ばしさに充たされた身體を、この室の中に横へることが出來た。そして、汽車はリュチーネの流れに沿うて、白樺の林を走るのであらう、折り〳〵瀨の音も高く響く車窓に近く、積み上げてくれた外套の上に脊をよせて、親友に告げるやうに、悉しく私達の經驗を話した、山を理解してくれる此の人達と物語るのは、たとひ汽車の響が絶えず疼痛を與へるにし

ても、私には非常な幸福と感ぜられた、趣味もなく、理解もない人を、同じ國民と呼び交はすよりも、むしろ國を異にし、語を異にし、又習慣に何等の差あるにしても、今こゝにある人々の間にをることの、遙かに愉快なのを、私はつひに忘れることが出來ない。

汽車は話の間に、二三の停車場をいつの間にか過ぎて、インテルラーケンのオストバーンノーフに着いた、同室の兵士は、一組は仲間のものゝ荷物を搬んでやつて、その間に他のものは、私を助け下ろして、馬車の來るまで身體を支へてくれた。此の間にフォイッは、停車場に店を出してる娘のところに行つてしまつて、馬車が動き出すまで、歸つて來やうともしない、私はくりかへし彼の行爲を見て、スウィス人らしくないと感じた。

車はホヨーエウェークの大通りを西に向ふ、街は戰爭のためであらう、往來の人達は昂奮しきつて、中には伊多利亞の勞働者の、晝日中酒に醉ひしれてるのさへ二三見うけられる、いろ〳〵な工事が急に止められたとばっちりであつたらう。煙草屋の店先きには、弟のグルンダー君がゐて、非常に驚ろいてをる、私は車の上から手短かに話したまゝ、車を急がせる、バーンノーフ、シュトラーセの角で、ベルネルホーフの主人を呼んで、預けて置いた荷物のことを賴んでると、ひよつくりニクレス老人に會つた、近藤君の事は誰も知らない、昨夜の終列車に間に合はないで、二人はグリンデルワルトから馬車を仕立てゝ、夜中に病院へ着いたのである、リュチーネを下つたその夜の路は、私は今でも羨しい。

往來は線路とアーレの流れを渡つて、ウンテルゼーエンの古塔の下を左に切れると、靜かな路に、果ものゝ樹の蔽ひ茂つた村路に沿うて、ベッィルクス、シュピタール (Bezirgs Spital) に入る。

病院生活

病院は、静かな村から更らに奥深く離れた、石造の洒灑た三階建てゞ、前庭は芝生を覆うて、一かかへに餘る林檎の樹が茂つてをる、人氣もないくらゐ、しーんとした玄關側に車を止めると、白衣をつけた看護婦が待つてゐた、私はもう下りることさへ出來ない、そのうちに、看護夫が二人やつて來て、玄關側の階段をつれられて二階に上ると、一面に敷きつめた人造石の廊下に、ネイルドブーツの足が辷つて、終ひには自分で足を動かす力さへ無くなつて、三人につかまつたまゝ、東側の角にある、三十五號に助け入れられた、突き當りのベットには、シガーをくわへて仰むけに、近藤君が寢てゐる、然し私は暫くの間口もきけなかつた。

身體は汗に濕れてぐつたりしたのを、すつかり拭いてナイトシャツに着かへさせてくれた、繃帶を解くと、借り物みたいな腕は、付け根からだらしも無くぶらり下つて、我がものながらどうも氣味が惡くつてならない、漸く仰むけに寢かされて、何だか知らない藥を飲まされてから、やうやく少し落ちついた。

「ドクター、どうだい、少しはいゝのかい、」

「どうも閉口したよ、君はどんなだ」

「今朝診察を受けて、レヨントゲン光線で折れたところが分つた、かうしてゐれば別に痛くはない、ドクター、この病院はなか〳〵居心地がいゝよ、酒も飲まして呉れるし、煙草も許しを得て置いたから、」

「そりやいゝや、途中散々考へたよ、窮屈なんぢやないかと思つて、室も中々いゝね、周りも廣いし、ホテルに居るより綺麗でいゝや、時にヘッスラーはどうしたい」

「彼奴は診察の度に悲鳴をあげるんでね、それにかみさんや娘がやつて來て泣き出すし、うるさくつていけないから、君と同室の約束だつて、さつきあつちの室にやつてしまつた、」

「そりやいゝ都合だ、君、煙草をもつてないか、刻みをすつかり飲んぢやつて」

「パイプをなくしたと思つたら君かい、御蔭でひどい目に逢つた、」

二人とも丁字に對ひ合つたベッドの上に寢たまゝ、それからそれと、別れたあとの話を語り合ふ、一日の行程を擔架の上で搖られるのは、よそで見るほど樂では決してないさうだ、クレヴァースの上を越す度に冷や〳〵したが、一番弱つたのはザク〳〵の氷河の上を曳きずられて、ヅックを通して衣物もシャツも雪水に濡れたことだと云ふ、成程さう云へば、風邪でも引いたと見えて、少し鼻聲になつてゐる。

そのうちに、ナースがコッフィーとロールを持て來た、私はあとで考へると、一時何分のグリンデルワルト發に乘つたんだから、午後の御茶だと氣がつく筈だのに、何しろ日本で育つた御蔭で、病院とは陰氣で、まづいものばかり食はせる所の總稱ぐらゐに心得てゐたから、おや〳〵貧弱な晝飯だ、これぢや三日と我慢は出來まいなんて、心の中は大いに不平で、君、三度三度こんなものばかり食はせるのかと、念の爲め近藤君に聞いて見ると、中々御馳走があるよ、どうしたんだい、君、これは御茶ぢやあないか、餘程どうかしてるぜ、此の男はってんで、頭から呵られてしまつた。

誰かノックすると思つたらグルンダー君だ、弟に聞いて驚いて驅けつけて呉れたのだ、然し私達の、相變らず暢氣な樣子を見ると、よほど安心したらしく、ゆつくりと腰をするて、ナースに賴んで御茶を餘分に取り寄せた上、又山の話に夢中になつた、その中、醫者の廻診があつて、一時自由をゆるされた私の身體は、また繃帶でぐる〳〵卷きにされてしまつた、どうも息苦しくて耐らない。

醫者が歸ると、診察の間席をはづしたグルンダー君が入つて來て、いろ〳〵の相談や、山の話に花を咲かせた、ガイドの賃金やグリンデルワルトの醫者の會計も、まだそのまゝなので、萬事グルンダー君をわづらはすことにする、私達はフォイツの行動に對して、不快に感じてをるので、悉しくいろ

いろの出來ごとを打ちあけた。グルンダー君は非常に憤慨したが、ヘッスラーは兎に角、フォイツ不信任には、いさゝか驚ろいてゐたらしい、更らに賃金の問題に立ち入つて、此の際、彼等にはガイドとして傷害保險がついてをるから、規定の賃金の外、少しも支拂ふ必要はないと云はれた、保險と云へば近藤君は、笑談半分入つて見た傷害保險が役に立つた譯だが、アヴァランシュの騷ぎで、金入れと一所に證書までどこかへ落したのは滑稽だ。とにかくグルンダー君と相談して、グリンデルワルトのガイドをやつて、遭難の場所をもう一度さがさせることにした。

君が歸つた時、間もなく日は暮れて、ナハトテイッシュの上に電燈が輝きはじめる、夕ぐれは眞夏と思はれぬくらゐうすら寒い、晩餐はもとより寢たまゝで、酒はニューシャテル、ルージュ、白酒（ブロン）は頭に來るから、晩餐には赤い方がいゝでせうなんて、親切な注意もうれしかつた。何しろ二人とも、氣分にこれと云ふ變りはなし、山で食ひ物にかつえてゐた揚句だから、フルコースは瞬く暇に平らげて、リキュールが欲しいなんて、どこまでづう〳〵しいのか性が知れない。じつとしてさへ居れば、別に痛みもなし、山登りの疲れも手傳つて、夜は靜かな寢室に落ち〳〵と眠むつた、病室は非常に閑靜でいゝ。

翌る日も快晴、一たいなら今日あたりは、フィーシェルホルンあたりだが、直つたら早く登りたいなどゝ思つたが、朝飯がすむとすぐ下の室につれて行かれて、レヨントゲン線で、肩、腰、足と、幾度も寫眞を寫されて、二階に歸ると、また繃帶だから、身體の自由は利かず、もうかうなつては淺ましいが、三度の食事と煙草ばかりが樂みになつた。グルンダー君は、毎日かゝさず見舞ひに來てくれる、そして店を出る前に、きつと電話をかけて、買ひ物や用達しを聞き合せて呉れた。

近藤君の右足は、今日ギップスで卷かれて、足の裏には、ゴムをつけた燭臺みたいな物が付いてゐる、然し乾くまでベットの上に窮命仰せつけられて、退屈まぎれに煙草ばかりふかしてゐる、廊下を

◎スウィス日記(四)　辻村　一一二

通ると遠くから臭ふさうで、ナースが來るたびに窓を明けては風を通す、醫者が廻診に來て、鼻をクス〳〵やつてるから、どうです一本、こゝは喫煙室ですとうは手に出たら、何とも云はずににや〳〵つと笑つた。

私の怪我はさつぱり埒があかない、全身打撲で、無事なのは顏と右手だけ、脊中や腰に紫色の斑が大分出來てる、X線の結果、とにかく骨に傷は見えたが、別に折れてるのでは無いさうで、塗り藥でじつと經過を待つ外はない。二日三日は晝寢ばかりして暮らしてしまつた。その四日目は、うすら寒く空は時雨れて、朝靄の晴れぬうち、いつかしと〳〵と小雨になつた、東の窓はヴェランダにつゞいて、蔓薔薇のからんだ欄干の上に、樅の梢が少し見える、床に起き上れば、晴れた日はウンテルゼーエンの村の屋根をこして、雪の光る遠山が望まれる、それは左の窓にせまるハルデルの峯から、湖水の北を走るブリエンツェルロートホルン、更らに小さくウリロートシュトックの尖峯が遠山の上にぬけ出てゐる、シンニゲプラッテの北側の急斜は、樅の林のまばらになつた岩山の裾を見るだけで、その外はベットからは眺められない。

ベットに近い窓からは、ハルデルの絶壁が、青葉の梢にのしかゝつて、今日は尾根は密雲に深く鎖されてゐる。ホテルのポルティエが私達の荷物を届けて來た、ベットのそばに、畫葉書專用のスートケイスを擴げて、朝から山の寫眞ばかり眺めてゐる、雨の日の暮れ方、こゝに着いた日グルンダー君に届けて貰つたフィルムの現像が出來て、ニクレスの娘が持つて來てくれたので、これからは二人ともフィルムばかり見てゐる、そして退屈すると歌を謠つたり、伊多利亞語の試驗が初つたり、病院だか何だかさつぱり分らない、看護婦がやつて來ると、極東生れのカルーソを聞かせたり、終ひにはスウィスの最高峯の標高如何、ユングフラウの最初の登山者の姓名と年代だとか、シュレックホルンの字義如何など、知りさうもないことばかり並べて牛耳つたりした。

ヒルテルフィンゲンよりニーセンを望む

影撮氏助伊村辻

室附きのメイドに、マリー、マルタと云ふ二人の娘がをる、から山出しのお轉婆で、用のない時はいろんなことを云つてからかつたものだ、菓子なんかやると、獨佛を交ぜこぜにメヤッシー、フヰールマールなんて云ふ、おいメヤッシーてどこの言葉だつて聞くと、獨逸語ですつて澄したものだ、それから今度は調子にのつて、御前の言葉は文法が異ふ、こう云ふんだらうなんて、一々混ぜかへすと、確つかりした根底はないんだから、散々考へて、やつぱり妾の方が正しいやうですなんて、少々心細い返事をする、年はそれでも十七か八だらう、日本の女でこの年頃といふと、人がものを云つても、見ず知らずの男には、ろくな返事も出來ないから、人間だか何だか、不注意なものには一寸見たばかりでは氣がつかない位だが、病院生活にはこの二人がほんとにいゝ相手だつた。

ナースをせびつて、時々ビーヤを持つて來て貰ふ、町に散歩に出る時頼んで置いた、ヴェネディクティンとコンニャックを枕もとに置いて、食後には必ず祝杯をあげる、グルンダー君が毎日來てくれるんで、煙草にはことかゝず、これで時々散歩にさへ行ければ、申し分はないとさへ思つた。

十日ほど經つと、廊下に出てもいゝことになつた、近藤君がコツリ〳〵燭臺で歩き初めたのは、是よりもつと前の話しで、二人とも起きられないうちは、南の窓からアイガーまで見えるだらう、いやユングフラウとメヨンヒだけだなんて、毎日々々想像して居た景色を、室の前のテレースから正面に見渡した時は、何とも云へないうれしさであつた。

シュピーツから汽車で、インテルラーケンに行く人は、ワイセナウの崩れかけた城あとを見る頃から、廣ろ〳〵と左に開く草原のはづれに、一きわ繁る青葉の間から、シュピタールの白い建物を望むであらう、また、もしトゥーンの水を渡るならば、外輪の船が、ゆるやかなカナールの水を切つて、まつすぐに東へ、ある時は、岸の若葉と船べりが擦れ〳〵になるくらゐになるあたりで、水に近く植ゑたポプラの並木の枝ごしに、赤瓦の屋根が、時々左のはづれに見えたのを覺えてゐるだらう、私達

のいつもソーファにもたれて、本や雜誌を讀みながら、のんびりした朝日を浴びたテレースは、その建て物の右のはづれにある、瞰下ろすと、後庭の花園に、ダーリヤやスウヰートピーの咲き亂れたすぐむかうは、綠の草野とポプラの群で、遠く一列に行儀よく並んだ並木の蔭に、白い湯氣を吐いて、折り〳〵、汽車と、そして、蒸汽船は上甲板と黑い煙筒だけが、木がくれに靜かに動いてゆくのが見える。そのむかうは、すぐアーベントベルクの絶壁になつて、そことシンニゲプラッテの間には、ルーゲンバルクの眞黑な縱の木立の後ろに、奥深く入り込んだ、うす暗いラウテルブルンネンのつき當りに、彼のユンクフラウの三山が仰がれる。

朝は、かうしてソーファの上に倚りかゝつてデジューネーを終つた、十時の廻診に室に戻つて來ると、留守の間にキチンと掃除が屆いて、餘り根氣よく取り散らすのが、氣の毒なくらゐ整然としてゐる、晝になつても、眞夏とは云へ、雪を圍らした山國は、テレイスに花の香をつたへて、微風はいつも氣もちよく眠りをさそつてくれる、覺めると日は、左の窓に藤の葉影をうつして、やがて御茶の時刻になる、そして日盛りに白いシャツ一つになつて、大きな草苅鎌をふるふ百姓達は、裏庭につゞく七葉樹(ウイルトカスタニー)の蔭に集まつて小休みをする、晩餐はかゝさずテレースの卓を圍んで、斜に夕日を浴びたユンクフラウを眺めながらニューシャテルをくむ、その終りには、三山のアーベントグリューンが仰がれて、そして間もなく、室のカーテンを漏れてまつ白ろな電燈が斜にさすと、卓上に殘されたリキュールグラスは、琥珀のやうに輝いた、テレースの空は黑く、まだ淡く雪の影つるユンクフラウの肩には、ピカリと星が光り初める、と私達はいつも口癖のやうに、欄干にもたれて、

Da scheinest du, oliebliclster der Sterne,
Dein sanftes Licht entsendest du der Ferne;
Die nächt'ge Dämm'rung theilt dein lieber Strahl,

Und freundlich zeigst du den Weg aus dem Thal.

とくりかへすのを常とした。夜は膚寒く、ナースにうながされて電燈の眩い室に歸ると、熱いチトローネン、ワッサーを飲んで、漸くのことで床に入る、晝寢の罰で眠れない時は、ナハトウァッヘを呼んで、乳を持つて來させて、菓子など食べながら暇をつぶしたりした。

雨の日の曉け方はうすら寒い、洗面の御湯をもつて來て呉れるナースの手を取つて、ラ、ボヘーメのロドルフォのやうに、

Che gerida manina,
se la lasci riscaldar,
Cercar che giova?
Al buio non si trova.

と歌ふことさへあつた。私達は甦へつて新しい生活に入る前に、夢ともつかず、現ともつかぬ靜かな日を送つてゐたものと見える。近藤君は、ある日のこと、卓上の紙にかう記した。

"These days of ours here are glad days of nonsense unredeemed, of unbroken idleness and contentment, of dreaming wanderings from mountains to mountains and from friends to friends. All that was serious in life we had left behind."

實際病院生活を煎じつめれば、この日記の外には何ごとも殘らなかつた、私達がかうしてゐる間に、歐洲の戰爭は次第に擴大されて、その日〳〵のブントやフォルクスブラットの通信は、何のかけかまひもない旅人の心にも、折り〳〵に不安な思ひを運んでくる、インテルラーケンの町と離れたウンテルゼーエンの村から、更らにかけ離れたこのシェピタールにも、いろ〳〵な通知が、世の中は今渾沌たる有り樣であると、絶えず〳〵おびやかしてゐた。山に圍まれたインテルラーケンは、もとより一

つの城郭である、戰が近づけば、そこにあるホテルの全部は、病院となるべく指定されてあつた、曾て千八百七十一年の戰爭には、國境からなだれ込んだ佛蘭西の敗兵のために、またそれを追ひかけて來た獨逸人との間に、ブレヴィンの附近は、計らずも戰場となつたのである、スウィスはいち早く中立を宣言はしたが、國民は獨佛の兩方面に分れてをるし、兵力の全部をこの國境に集中して、最後まで中立を確保するとしても、單にその決心だけでも、非常な努力を要するのであつた。

新聞は、佛、獨と、その發行所の近い位置に從つて、勝手な都合のいゝ報告ばかりもたらせた、此の間に、比較的兩方面の樣子をつたへたのは、ミラノ發行のコリエル、デラ、セルレ、であつた。私達は二三の新聞が、いち早く、グロースシュレックホルンに於ける私達の遭難を傳へたのを切りぬいて、暢氣な旅に於ける出來ごとが、決して夢でなかつたと云ふ證據にしやうとした。

最後にグルンダー君に見舞はれた時は、氏は召集されて、カンデルタールを守りに出征するところであつた、氏はかなり强度な近視である、しかしスウィスの國民には、殆んど文字通りに、皆兵主義が行はれて居るのだ、私達は日の暮れ方、裏手の原で野良着のまゝ二三人つれ立つて、步調をとゝのへて居る鼓手を見かけた、または、たつた一人、青葉の蔭に立つて、喇叭を吹いてる男もあつた、彼等の野良への出かへりに、聲をそろへて歌ふ國歌には

Heil dir Helvetia!

が力强く耳に響いた。

八月も半ばを過ぎて、こゝに着いた初め、刈り取られた草原は、いつのまにか、また青々と茂つて來た、飲みかけたリキュールグラスには、朝起きて見るといくつも蜜蜂が群れてゐる、蔓薔薇の紅い花はもう終つて、室は掃除の度ごとに、新しくスウィートピーに飾られてをつた、私達は、少くも私は、倦きたといふほどの心持はなく、たゞ心の充たされた後のものうさを感ずるやうに、靜かに病院

の生活を味うてゐる、ベルンに注文したいろんな詩集や小說をひもどいたり、マツリーに借りた民謠をみんなで歌つたり、時にはドミノーやカードに日をつぶす折さへあつた。

月の半ばには小雨が降つて、二日も三日もうすら寒い日ばかり續いたが、雨上りの山の色は、暗い日の生活のわびしさを一掃して、ゆるやかな、然し寂しい心もちを運んだ、雨雲の晴れてゆくアーベントベルクの頂は、眞夏も白ろく、樅の梢に、雪を頂くことさへある。

またある時は、澄み渡つた蒼空に、ふうはりと根なし雲が浮いて、風のまゝに湖の空を渡つて、ハルデルの樅にかくれるのを仰ぐ。

身は病みぬうす日の窓を開かせて空飛ぶ雲を憶ふ朝かな

と日記にあるのは、その折りのことゝ思ふ。

私はふと咽喉を痛めて、藥を飲んだり、濕布したりしても、咳ばかり出て少しも快くならなかつた、オーベルシュウェステルはヤコニッシンである、餘り話したことは無いが、私の身體を心配して、ヘヤドクターは非常に御弱いやうです、都會にゐては身體がつゞきません、グリンデルワルトあたりの山の空氣が何よりいゝのですがと話したさうだ、私には誰の言葉より一番うれしかつた、今も私の知己の一人である、室に來る醫者の一人は國境に去つて、今殘つてるのは露西亞人だ、餘り出來さうな男ではない、廻診に來ると握手して、二言三言笑談を云つて、クアザールの噂をして、チョコレートをさらつて、シガーを失敬して出て行くを事とする、書生あがりだから、氣の置けないのは事實だが、餘り病氣の爲めにはならない、痰の檢査をすると云ふんで誘はれるまゝ、階下の實驗室に入り込んで、メチレンブラウとカルボールフクシンを取り出して、染色しては覗いて見たが、結核菌は見當らない、今度は隔離室にゐる患者の痰を取り寄せて貰つて、染めて見たりして暇をつぶす、顯微鏡は私のと同じ型のを用ゐてゐた、染料の汚點だらけで、テーブルの汚いことは御話しにならない。

時々簡單な手術がある、そんな時は醫者のエプロンと、護謨の手袋を拜借して、手術室に行つて見物する、手術と云つても、盲腸炎の切開ぐらゐだが、雨の日の退屈まぎれには、目先きが變つて面白ろかつた、そのせいかも知れないが、廊下を通ると患者が挨拶するし、庭に出ると、園丁(ゲルトナー)が丁寧に口を利くんで、少しくすぐつたい樣な氣持ちになる、チティスヽの木蔭には、國境よりまはされた兵士が集つて、退屈まぎれに豆をむく手つだひなどしてゐる、私達は日の強い庭から、いつもこヽに入つて來て世間話をした。

表の芝生に、覆ひ茂る林檎の樹は、鈴なりの果ものが、枝のしなふばかりに生つて、草の上にもいくつとなく、もう色づいた木の實がころがつて居る、私達は更る〳〵杖を振るつて、その實でゴルフをやつて遊び廻つた、しかし三日目には、近藤君は片輪になつた足の力を、やけに兩手にこめて、貸しといた杖を逆にふりあげ、いやつと云ふ程力を入れるとたんに、球はそのまヽ草に殘つて、土と一所に、セヴィラで買つた名木の杖は、敢なく最後をとげてしまつた、もうゴルフも已めにして、今度は芝生で歌の稽古だ。

寫し殘りのフィルムで、毎日々々撮影する、グルンダー氏は、時々端書をくれた、そして氏のかはりに、弟と、親友のホテル、ワイセスクロイツの主人が、更る〳〵見舞に來て、ある時は妻君まで來てくれた、ウェストン氏を知つてるといふ、實家はクライネシャイデックのホテルだと云ふ、ウェストン氏が曾てユングフラウ群峯の登山の折に泊つて、その後結婚してから、夫人同伴でやつて來た時、氏の著書日本アルプスを贈られたと話した。

ある日の朝、うす曇り日のもの寂しいのに、私達は馬車を雇つて、インテルラーケンの町に來た、どのホテルもすつかり戸を鎖ぢて、ろくに人通りもなく、冬のやうにひつそりしてゐる、そのまヽホーエウェークから、アーレの橋を渡つて、ブリエンツの湖水の北を走らせて、とう〳〵湖のはづれ

にあるブリエンツの村まで來てしまつた。こゝも、避暑客一人ゐない、此の前冬來たときと同じ寂れかたで、板屋根を瓦めるばかりに雲の低い、村路を通りこすと、ベーヤホテルの二階に通つて、コッフィーを命じて湖を眺めた。對岸の絶壁にかゝるギースバッハの瀑布から、むら〳〵と湯氣のやうな霧が湧き上つて、ファウルホルンの連脈は仰ぐことは出來なかつた、そのうちに、南の風は水を渡つて、しと〳〵と小雨になつて來た、午後の四時過ぎ、うすら寒い街道を、雨をついて馬を驅けさせると、白樺の葉の風にちぎれて飛び去るのも、水際にキ、キ、と飛んでゆく鶺鴒（ワツセルシユテルツエ）の、うら悲しい鳴く音も、もう秋、山國の黃葉する頃を思ひ出させずには置かなかつた。

幾群の土工が、湖畔に線路工事をやつてゐる、通りすがりに私達を見て、ブオンジオルノと云つた、そして寒いなあと聲をかけると、足早やにあとを追つて來た、國のものと見て、金でもねだるつもりだつたらう、そのまゝ鞭をくれて、一散に驅けて通る、雨はます〳〵はげしく、夏とは云へ、外套は用意してゐたが、湖畔の雨は寒いくらゐである。シュピタールに戻ると、廻診に留守を喰つた醫者が、文句を云ひにやつて來た、今度もシガーで買收する。

その頃、うらゝかに晴れた日の朝、今度はトゥーンの湖に沿うて、馬車を走らせたことがある、ウンテルゼーエンの村路から、廣ろ〳〵と水を距てゝニーセンを望むと、すぐ右に切れて、だら〳〵路を北に廻る、ベヤテンベルクの、裾を覆ふ濶葉樹の森をぬけて、街道は、湖水の北側の崖の上を、トゥーンへ通ふのであるが、折り〳〵、逆か落しにそゝぐ瀑布の響を耳にするだけで、湖水の水はしばらく路からは見えない、一二軒板屋の小屋のあるあたりで馬を止めると、木立ちを漏れて、しつとり濕れた街道に、模樣のやうに葉影のさすのが、何とは知らず私たちの胸をそゝつた、どこまでも木立の中を、右はベヤテンベルクの山の裾で、それについてぐるつと廻ると、坂路になつて、すぐ麓に入り江が蒼く眼下に望まれた。

下り切るとフニクラールの停車場がある、私達はメルリゲンの村を通りぬけて、グンテンまでやつて來た、こゝで湖水に沿うたホテルヒルシェに入つて午餐を命じた、水に臨んだ庭は、七葉樹の木立ちで、葉影の美しく畫かれたテイブルを圍んでワインをくむ、ニーセンの空には、眞つ白ろな眞夏の雲がむく〳〵湧いて、刻々に湖の上へ擴がつて來る、風もない水の面は、冲に白雲を影つした二條の縞の外は、池のやうに平らに冴えて小波も立たない。

ホテルの主婦は私達をとみかうみして、負傷の樣子や戰場の模樣を尋ねたりした、その頃はまだ戰爭の初めで、印度人の加はらない時分であつたが、どこの國民と間違へたかは、今だに二人の疑問になつてゐる。

四時過ぎに、同じ途を走らせてシュピタールに歸る、かう云ふ生活の間にも、私の咳はいつまでも回復しないで、夜通ほし苦しむことさへ度々あつた、然し二人とも少しぐらゐの步行に差し支へなく、いよ〳〵退院を許されたのは、八月も末の二十九日となつてゐた、その折、何よりも私達を喜ばせたのは、感じの餘り宜しからぬ露西亞の醫者と離れることで、又何とも知らず物悲しいのは、此の思ひ出の多いシュピタールに別れることであつた。その前、二三度銀行に行つて、私の持つて居た正金銀行の信用狀で受け取らうとしたが、ベルンにある取引先きの銀行で、ちやんと指定してありながら、どうしても拂ひ渡してくれなかつた、仕方がなしにインテルラーケンのクックの店に行つて、買つて貰はうと思つたが、餘り込んでゐるから、隣りのグルンダー君の店に入り込んで話しこむ、弟がゐた、仔細を話すと、僕の從兄が銀行にゐるから聞いて見やうと云ふので、一緒につれ立つて、郵便局の隣りの銀行に行くと、すぐ金を渡してくれた、この後も始終こゝの御厄介になつて、不便な、私にはもう不信用狀としか考へられなかつた信用狀をもつてしても、尙ほ且つ無事に、金貨を渡して呉れた、この不便は後の日、ミラノ、ジェノヴァ、マルセイユと到るところの銀行でくりかへされた、かう云

夕のーゼルネンーットベヤテンテフーブンテヤベ
む望をンルホクットュシりよトフーブンテヤベ

影撮氏助伊村辻

ふ際にも容易に金貨で拂ひ戻して居つたクックの信用狀の方が、遙かに有効であつたと思はれる。この時私達の非常に嬉しく感じたのは、近藤君の親友、ミラノに居るアザヴェイ氏である、銀行は、みんなかうなつた時に、スウィス、イタリヤ、フランス、英國と、四ケ國の紙幣を千餘フランと買ひ集めて、書留郵便で、わざ〳〵、人を遙る〴〵國境のキャッソまで出して、スウィス領内から投函してくれたので、私達はこれと、まだ私の手元に殘つた、二百五十バウンドばかりの金で、倫敦へ出るまでの餘裕は充分あつた、然しガイド達の拂ひや、病院の會計は、拂へば支拂へたが、此の際どんな必要が起るとも知れず、それにまだ當分は餘り長い汽車旅行は出來ないので、全部あとで支拂ふことにした、いよ〳〵病院に別れる朝、オーベルシュウェステルはすつかり呑みこんでゐて、極めて簡單に、金は全部後からで宜しいと云つてくれた、私達は、取り敢へずシュピタールの用紙二枚に、支拂ひの證書を書いて署名した上、事務のものに殘して置いた、そしてグルンダー君の弟に逢つて、ガイドに關して兄さんに一任して置いたことを話して來た、氏はまだカンデルタールのブラウゼーに居る、多分二三日うちに歸鄉を許されるだらうとの話しだつたが、私はグルンダー君に、その後、逢ふ機會を得ないのは非常に殘念である。

八月二十九日、私達が思ひ出の多い此のシュピタールを去つた時は、空はうら〻かに晴れ渡つて、輕い砂をあげて、音もなく走る馬車の上から、青葉の中に病院の窓を仰ぐと、何となく胸のふさがるやうな氣もちが溪いた。停車場からトゥーンまで切符を買つて、からあきの客車の窓によると、もう汽車は靜かに動きはじめる、と、ポプラのむら立ちの間から、ちら〳〵と眺められるあの建物が、今までは氣にもとめなかつた草原のむかうに、私達には、一生忘れることの出來ない、記念碑のやうにも感ぜられた。

景は次第に移つて、ひろ〴〵とトゥーンの水はのぞまれる、ハルデルの樅の綠も、忘れがたい親し

みを覺える、私達は寥しい心もちで、一言も交さずじつとかはりゆく景色を眺めてゐた。

ヒルテルフィンゲン (Hilterfingen)

シュピーツを過ぎると、トゥーネルゼーは再び窓に近づいて、水路の綾のやうに入り組んだ湖のむかうには、小さくオーベルホーフェンの城跡が望まれる、私達が身體の回復するまでゐやうとする宿は、城に近いヒルテルフィンゲンの小村にある。

トゥーンの町で汽車を下りて、停車場前から馬車を走らせる、街をはなれると、湖水から流れ落ちるアーレの水に沿うて、うち開く綠の牧場や、そのこゝかしこに建てられた百姓家の間を、一筋東に貫く街道を、車はかろく搖れながら、氣もちのいゝそよ風に迎へられて、半時間ばかりでヒルテルフィンゲンに着いた。

宿はホテルシェーナウ(Hotel Schönau)と呼ぶ小ぢんまりした家で、往來から常綠木の間をわけて入ると、湖水に面した庭は、街道よりも一段低くいから、すぐとつつきは二階になつて、下には食堂や喫煙室、階段を上ると、裏手の庭口からは三階にあたる私達の寢室がある。

私は小さい室を、隣室の近藤君はホールを兼ぬるつもりで、湖に面した廣い室に入ることにした。宿賃は三食を入れて、私のは六フラン、大きい室が八フランの約束である、決して立派ではないが、氣もちのいゝ家で、テレイスからは庭の青葉のはづれから、すぐひろ〳〵とトゥーンの水の果てに、對岸のシュピーツとアウセルベルクの深い綠のつゞく背ろには、ニーセンのピラミッドと、左に、ユングフラウとの間に、ブリュームリスアルプの群峯が、手に取るばかりに望まれる。

コッフィーを窓ぎわのテーブルに運ばせて、すゞ風を思ふまゝに味つた、トゥーン通ひの汽船は、シュピーツベルクのむかうを、鷗のやうに輕く浮いて、長が〳〵と尾を曳いた水路は、光線のやうな

光澤がある、女中に聞くと、日に六回うみ岸の小村に寄りみちして、トゥーン、インテルラーケンの間を通ると云ふ、私たちは、近い中にあの船で、湖水をあちこち渡つて見やうと相談した。

宿の表は、往來のむかうから、すぐだら〳〵の小山になつて、東の窓からは、すぐ近く教會の鐘塔が仰がれる。庭に下りると、すゞかけの木の木立ちのうしろは、アムペロプシスの蔓ひかゝつた欄干で、湖水の波は、びた〳〵とその裾を洗つてをる。横手の入り江には、小舟が砂に曳きあげてあつた、私達はそれを浮べて、やがて湖水のなかほどまで漕ぎ出すと、東の端に、彼のグロースシュレックホルンが、夕陽を浴びて物凄く聳えてをる、「白鳩」は、どす黑い岩のひだにくつきりと浮き出して、虛空に光る眼のやうに、孤舟の旅人を見張つてゐた。ひるがへつて思へば、何と云ふ變り方であらう、あの下に、骨をさらすべき二人は、蒼空を綠の中に埋めたやうな、このおだやかな湖水の上にゆつたりと浮んで、二人は離れ〴〵に物を思うてをる。私には、彼の山岳をかういふ靜かな日に仰ぐよりは、嵐の中に泡立つて、渦まく波に搖られながら、まつくらな空にふと擢の手をとめて、眺めやる刹那の感を得たかつたのである、計らずも日ならずしてその折りは來た。

ヒルテルフィングンに着いて、一週間はうらゝかな日ばかりつゞいた、九月に入ると、待ちかまへたやうに、風も野も、空も湖水も秋だつて、朝ごとに枕にひゞく鐘の音まで、木枯の近いうら寥しさに慄へて居る、そして、ニーセンの頂に湧くとすれば、幾團のちぎれ雲は輕やかに羽をのして、湖水の上を、西北に去る、限りなく雲の消えゆく丘のうしろは、幾重の森と小山にかこまれたトイフェンタール、雲の湧く南の空は、タトリスの峯つゞきであらう。ニーセンの西は、シンメンタールの落ち口から、山は一文字に屏風を建てつらねて、シュトックホルンの尖峯が、雪は消え失せた鋭い輪廓を、蒼空に刻んでゐる。

朝は、いつも四時前に床をぬけ出して、入江につないだ艫づなを解くと、私は一人小舟を浮べて、

水うみのまん中に漕ぎ出した、オーベルホーフェンの村は、水にのぞむ城の白堵から仄白く明けて、岸は薄もやだつ青葉の、むら〳〵と重り合ふ丘のふもとに眠むつて、空も水も夢のやうにおだやかである、私はいつも口笛をふきながら、擢をあやつって、あるときは遠くシュピーツベルクの近くまでも、また次の日は、アーレの流れの落ち口にある、シェッツリゲンのそばまで行つた、かうして静かな朝靄が、いつとなく晴れわたると、東の極に朝日を浴びて、彼のグロースシュレックホルンの屹えてゐるのを仰ぐ、と間もなく、ブリュームリスアルプの山々は、斜めに射る朝日に光りはじめて、その影はうすあかく、水の面に文を染める。

風のない湖も、曉け方はうそ寒い、五時、六時、七時と、三時間はかうして、静かな水の上に浮んで、舟底に寢ころんでは、ものゝ本などひもどいた、歸ると、まだ近藤君はゐぎたなく寢てゐるのを常とした、無理やりに叩き起して朝飯にする、それから晝前は、庭の木蔭か、水にのぞんだ東屋で、新聞や本を讀んだりして、晝食が濟むと、一時間は必ず晝寢をする、そして片かげになると、丘の上の野原に寢ころんで、トゥーネルゼーの全景と、それを圍むアルプの雪を、暮るまで眺めつくした。

時には、表の街道をぶら〳〵歩いて、トゥーンの街まで買ひものに行つて來たり、汽船でベヤテンブーフト (Beatenbucht) まで行つて見たり、またある日は、モーターボートを呼んで、シュピーツからグンテンの方まで遊び廻つたりした。その時は、ベヤテンブーフトで舟をすてゝ、そこにあるフニクラールで、サンクトベヤテンベルク (St. Beatenberg) まで來た日である、山の上には小村がある、湖水はもう森の蔭にかくれて、正面には午後の日にうつすらと、モルゲンロートホルンの雪が光つてゐた、私達はホテルアルペンローゼに入つて、南むきの食堂でビーヤを命じた。

村はひつそりして、避暑客らしいのは一人も見えず、大きな宿は静まりかへつて、ものゝ響も聞えない、然し私には、山上の風情ある村と、それをかこむ青木の森の、何となくなつかしいにしても、

ベヤテンベルクは餘り氣には入らなかつた、オーベルラントの山は湖の對岸に見えるにしても、その景は遂にミュルレンの雄大なのに及ばない。村路を東にぬけると、左に小高くせまる山毛欅の林の、うら葉はやゝ秋づいた下蔭に、エリカの花はまだ紅の花を敷きつめてゐた、花にはコケモゝの紅い果や、カンバヌラの紫が混じつてゐる、私達はその木蔭に寢ころんで、樅の間に瞰下ろされる、ウンテルゼーエンの綠野を眺めた。

かうしたうらゝかな日は、ヒルテルフィンゲンに着いて十日あまりもつゞいたらう、西の風が急に吹き初めて、湖水の波は、泡立つばかり渦まいて來た日の暮れから、板屋の軒は吹き飛ぶばかり暴れに暴れて、曉方かけて雨となつた、私はやはり小舟に乘つて、薄くらがりに入江の岸を離れると、漕ぐ暇もなく風に搖られて、またゝく間にオーベルホーフォンの城の棧橋に吹きつけられてしまつた、そのまゝ舟をつないで、シャツ一枚、びしよ濡れになつて宿に歸つたが、暴風雨の湖がおもしろくて、と云つて一人では腕がつゞかず、とう〳〵近藤君をそゝのかして、吹き降りの最中だつた午後三時、また小舟に乘つて、沖をめがけて漕ぎ初めた、風はこの時西北から眞西に變つて、舟は波のまに〳〵シュピーツの沖へ流れてゆく、眞つ黑に搔き曇つた雲から落とす雨あしは、泡立つ水の面を射て、岸には宿の人達だらう、手を振つて呼んでゐるらしいのが暫くは見えたが、舟は忽まち風に追はれて、オーベルホーフェンの沖まで流れて來た、私達は今度は風にむかつてこぎ戻したが、いつまでたつてももとのところで、足の使へない近藤君は、踏ん張りが利かないから役に立たず、仕方がなしに、まともに出城の鼻をめがけて、横波の中をこぎ戻した、ふりかへると、沖には眞白ろに波が騷いで、何とも云へぬもの凄さだ、岸にそうた風淀を、一時間もかゝつて、やつと宿近く來たが、餘りの景色に我慢が出來ず、雫のたれるシャツをぬぎ捨てゝ、舟から湖水に飛び込んだ、水は非常に冷たい、やつと五分も泳いだらう、向ひ風でしぶきを浴びるから、非常に息苦しい、舟に殘された近藤君は、仕方

がなしにオールをとつてゐたが、たちまち逆戻りして、城に近く流され初めた。

十五分も水にゐたら、身體が變になつて來た、漸く小舟に泳ぎついて、裸體のまゝ岸に沿うて、ホテルの横までこぎ戻すと、氣のぬけたやうになつて、岸に着いてもふら〳〵した。宿では主婦さんからポルティエから、御客まで總出で騒いでゐたが、此の邊では餘り泳ぐものはないと見える、久しく泳がなかつたので、翌る日は節々が痛んで弱つてしまつた。

二日にわたるあらしが、拭ふやうに消えると、景色はもう忘れたやうにおだやかに、波の名殘の浮草のしほらしく、ラウベの下に露をあびて、ポプラの梢は一葉も殘さず葉をふるつたのも、秋の寂しさは偲ばれた、アンペロプシスは紅葉して、入日はことに美しい。こゝに着いた日の暮れに、鐘塔の上に仰いだ夕月は、雨の後まもなく、待ちに待つた明月となつた。

ブリュームリスアルプの上に滿月を望んだのは、この月半ばであつた、その日の午後は、シュピーツの親戚のものに訪ねられて、みんなでベヤテンブーフトの森の中を歩き廻つたときである、うす曇り日の、ものさびしい秋の空は、日暮れに近くあか〳〵とさえ渡つて、宿に歸ると間もない晩餐の折は、テレースの軒に、葉をふるつた七葉樹の梢を、殘んの日はうら悲しくも染めてゐた。

食事が終るとモエットの醉に乘じて、待たして置いたモーターボートで、シュピーツまで送つてゆく、湖は暗く、東の山の輪廓は、薄黄の空に月の出をそれと感じたが、岸にせまるアウセルベルクの峯に遮られて、光はまだ水の面にはとゞかない、オーベルホーフェンの、ちら〳〵とまたゝく宿の灯は、入江の波に千々に碎けて、背ろの丘の中腹から上には、もう月の光はさし初めた。

小波をたてゝ、暗い水底にも、どことなく蒼味のある湖を走る、みよしに立てた白十字の國旗に、風は音もなくそよ〳〵とあたつて、醉ひ覺めには少しうすら寒い、半時間ばかりでシュピーツの城の水際に着いて、別れて同じ舟をかへすと、遙る〳〵と見渡される湖水のなかほどから北は、蒼白ろく

ぼうつと光つて、すぐ右手につき出した、ベヤテンベルクの斜面は、草原か、斜めに浴びた月光に、絹帽（シルクハット）を逆か撫でしたやうな光澤がある。

次の日シュビーツの人達に招かれて、また湖を渡つていつた、夕方城の下から汽船に乘ると、遲れて來た近藤君をしきりにじろ〳〵見てゐた英人の宣教師があつた、やがて側に出かけて、貴君は日本の方ですかと尋ねた、そして

「横濱にをるウォルター、ウェストンを知つてますか」

「古い友人ですよく知つてます」

「おゝウォルターは私の弟です……」意外かな、私達はたちまち一つのベンチに集まつて、それからそれと話し込んだ、成程云はれて見ればよく似た面立ちで、氏の名はロバート、ウェストン私は國にゐる時分、度々横濱にウェストン氏を訪ねたが、ある夜晩餐の後、氏の書齋で示めされた繪葉書は、グンテンのバルクホテルで、さうだ私の兄が毎年こゝにゆくと話したのを覺えてゐる、氏は私達を夫人に紹介して、暮れてゆく湖上に、いろ〳〵日本の話も出た、オーベルホーフェンの船つきで別れて宿に歸る、氏はホテルモイに泊つてゐた。

次の日の朝ウェストン氏が宿に來て、晝餐に招待した、私達はそれまで上の丘に散歩にゆく、會堂の裏の坂路を上ると、十八九ぐらゐな娘をつれた婦人がやつて來た、近藤君は帽子をとつてしきりに何か辯じてゐた、ホテルモイに着くと、二人もそこに泊つてゐたが、輕井澤で逢つてよく知つてると云ふ、前米國大使館附武官シップレイ氏の夫人と令嬢とであつたのだ。

食事の後、私達はみんなヴェランダに集まつて、シップレイ夫人も一所に、いろ〳〵な話に時を費した、私はことに、つく〳〵と世間の狹いのに驚ろいた。ホテルモイはオーベルホーフェンの高臺にある、水をへだてゝニーセンが、水際の私達の宿から見るよりは、遙かに高く仰がれる、室や設備も

づっとと丶のつて立派だが、御客の殆んど全部は英米人、いさ丶か窮屈な感がある、居心地に至つては、バンションで一日六フランの、シェーナウには遂に及ばない。

時々ベルンまで買ひものにゆく、九月の中旬には、そろ〳〵倫敦へ發つ仕度を始めたが、戰爭になつてから、急に入用の旅行免狀の裏書、これは露西亞をはなれてからは、何の用事もなく、荷物の底につっこまれてあつた奴だが、まづ英國と伊多利の領事に裏書をしてもらつたり、汽車や汽船の都合を問ひ合せたり、そんな中でも寫眞繪葉書に高山植物の種子なんぞをさがしたりして、ヒルテルフィンゲンに來てから、五度ばかりベルンの街まで出かけて行つた。

ある日のこと、何氣なくトゥーンの停車場から汽車にのると、シュピタールにゐた露西亞の醫者に出っかした、戰爭で急に國に歸るなんて、妙にそわ〳〵して別の室に行つてしまつたが、その時は何とも氣がつかなかつたが、翌る日またベルンに行つて、夕方遲く宿に歸ると、主婦さんがいきなり飛んで來て、私達を自分の室につれ込んだが、何か一大事出來の樣子、聞いて見ると大したことでもないが、シュピタールから請求書をそへて、トゥーンの裁判所から、執達吏が二度まで留守中に飛び込んださうだ。

その晩は、食事のうちにぽつり〳〵降り出した奴が、やがて大雨になつた、近藤君の室で、一人待つてると、やがて午後の八時、約束と云ふ時間に、遠慮深いノックが聞えて、扉をあけると半白の老人が入つて來た。手を與へて握手したが、奴はぶる〳〵ふるへてをる、テイブルの側に席を設けると、口も滿足にはきけないくらゐおど〳〵して、やがて懷中から二枚の仕拂ひ命令を取り出した、その樣子が、時によると氣の早い奴に、ピストル位むけられることが間々あるらしい。

兼ねての打ち合せだが、鹿爪らしく近藤君を呼んで、初て談判にとりかゝる。

一應私達の經過を話して、病院ですでに承諾しながら、何の通知もなく執達吏をよこすとは、餘り

影撮氏助伊村辻

ンルホブルアスリムーュリブ

に人權を無視してゐる、我々は拂はうとすれば、電報で二十四時間内に、ロンドンから取りよせることは容易に出來る、然し戰爭中で、外の人達に厄介をかけたくないし、仕拂ひは後でいゝと云ふから、そのまゝにして來たんだ、いづれ明日は直接病院にかけ合ふから、今晩はこのまゝ御引き取りをと申し渡した。

近藤君の憤慨は、はたで見ても恐ろしいくらゐ、倫敦に行つたら領事館に行つて、いづれ正式に通知する、いやしくも紳士に對してとか何とか、口から出まかせの文句を並べて、正直さうな老人をおどかしてゐた、彼は實に好人物であつた、私は雇はれて居るだけで、何のことかさつぱり知りませんが、御話しの樣子は分りました、それでは明日直接御話し下さいましってんで、いさゝか龍頭蛇尾に、此の一幕は終らうとする。

歸りぎわに、何か御所持の貴重品は、と來た、近藤君はます〳〵たちが惡い、貴重品はこの指にあるマリエーヂ、リングです、外にはネイルドブーツに地圖と書物が少しばかり、左樣ならっ。

私は可笑くつて〳〵たまらなかつた、そして歸りぎわに雜誌の口繪にいれる量見で、その命令書を頂戴したいと思つたが、それはどうしても置いてゆかなかつた、近藤君は實際憤慨してゐた、私だつてもし病院の當事者が來たのなら、喧嘩の一つもやつたかも知れないが、彼の好老人に對しては、且つ職務とはいへ、此の大降りに、どうせ馬車じやない、濡れて來たらう、或は寒さも手傳つて、ぶるぶるふるへながら、ろくに口もきけなかつたいぢらしさを見ては、一寸芝居でゝも見るやうな、可愛さうな氣が先にたつて、憤慨の方はつい二番手にひかへてしまつた、さう〳〵、終りにのぞんで私達は珈琲を呼び、シガーを與へた、彼は漸く安心したらしく、うれしさを滿面にたゝよはせて、そつと熱いコップを唇にふれた、今も尙ほ思ふ、好老爺よ健在なれと。

雨上りに、晴も晴れた、次の日は日曜である、起きぬけに電話をかけて置いて、近藤君一人病院ま

で掛け合ひに出かけた。あとで聞くと、約束の時間に間があるので、グルンダー君を訪ねると、幸、兄さんのエフ、グルンダー君が歸つてゐたが、昨宵の一件を聞くと非常に腹を立てゝ、とう〳〵一緒に病院までやつて來た、先づ、近藤君が一人で會計の係、名はロイベルと云ふのに逢つて、どうせ君のことだから、顏いろを變へて詰問に及んだのだらう、理由はさつぱりとわかつた、矢張り例の露西亞の仕わざであつた、然しいづれにしても、病院の方も紳士に對する行爲でないと云ふ責はあるので、散々あやまらせると、待ち切れなくなつたか、扉をノックして、グルンダー君は會計の面前に表はれた。

私はキビ〳〵した氏の態度を、今も眼先きに浮べる、いきなりポケットブックを卓上にとんと置いて、こゝに僕の全財産がある、僕は此の二人の、一面識もなかつた日本紳士のために、たゞ山岳と云ふ趣味を共にしただけで、ガイドに對する多額の仕拂ひを快諾したのです、貴下は一旦約束しながら、何の理由もなく、執達吏を差しむけると云ふ行爲を、スウィス人として耻かしいとは思ひませんか！請求書を御見せなさい、僕が今即座に拂つてあげます。

ロイベルは行き違ひの理由を話して、露西亞がどこから聞いたものか、ハヾナのシガーを始終ふかして、何の買物にこんなにつかつて、それでも病院の方に拂はないなんて云つてゐたので、と、つい口を辷らした、今度は近藤君が怒りだした、拂はうと思へば電報で取りよせると云つたのを、戰爭の際だからと打ち消したのは病院の方の責任だ、ハヾナを喫はうが何を買はうが、それは個人の日常の生活如何で、仕拂ひを延期すれば、下等な旅宿に泊つて、酒も飲まず、汽車は三等に乘らなくてはならんと云ふ議論がどうして成立しますか、いゝや私達の誤でした、露西亞の言葉を信じてゐたのでと、萬事不在の露西亞の責任になつて、無事に問題は解決されてしまつた。

宿に歸つて來ると大雨になつた、シュピーツの人達は家内中で遊びに來て、近藤君が戻ると間もな

く、日暮れの汽船で歸つて行つた、私達は近くシュピーツの家に移つる事に約束した、次の日も、また次の日もベルンに行つて、買ひ物やら領事館の訪問やらでつぶしてしまつた、九月二十三日、ヒルテルフィンゲンを發つて、私達はシュピーツに行つた、近藤君は汽船で、私は銀行へ用事があるので、電車で一人インテルラーケンに行く、ベルネルホーフで晝食を濟せて停車場に行くと、出合ひがしらに、ロイベルと露西亞に逢つた、ロイベルは少し工合が惡るさうに、目禮したまゝ逃げてしまつた、馬鹿な奴は露西亞だ、にや〳〵愛想笑ひをしながら、握手をしやうと手を延した、私はいきなり右手を後ろに曳いて、貴樣には手を與へんと、此の時始めて喧嘩らしい言葉を使つて見た、そして思ひだせば忘れぬもので、いきなり Schämen Sie sich! と浴せかけた、これは一高にゐる時分、グンデルトと云ふ獨逸人が、疳癪を起すときつと使ふんで、その時は餘り大して氣にも留めず、後で字書を引いて見て、はゝあ怒つたのかなんて、一時間もたつて氣がついたが、今日はなか〳〵有効だつた、露西亞はヘドモドして眞赤になるし、停車場からは何ごとかと驛夫が出て來る、奴はろくに口も利けないで去つてしまつた。シュピーツに着いて話したら、亂暴な奴だつて大笑ひになつた。

エッシネンゼー (Öschinensee)

近藤君は二十四日に、シンプロン越しにミラノへ發つた、私は見送りがてら、レヨッチベルクバーンに乘つて、カンデルシュテークまで行つた、汽車が見えなくなると、靜かな村みちをぬけて、此の冬泊つてゐたヴィクトリヤの横を曲つて、ぶら〳〵エッシネンゼーの方へ歩き初めた、ホテルはすつかり閉つて、シーズンもまだ終らないのに、今年は火が消えたやうな寂れ方だ。

ブリュームリスアルプは、眞冬のやうに氷につゝまれて、村はづれに茂るタンネの森の、暗い梢にのしかゝつてをる、ピルレの裾は草の斜面に、もう秋づいた花も見えて、森を越すと、だら〳〵の丘

はカンバヌラで紫に見える、ふりかへるとカンデルの谷に、牧は夏をそのまゝの緑ながら、流れに繁る樺の葉末は黄ばんで、うす霜の來た山里の秋を憶はせる。丘には山羊を野飼ひにして、ツィーゲングロッケのから〳〵と鳴るのが、澄み切つた空に高く響く、路は花草の中を分けて、やがて、葉をふるつた落葉松(レルヘ)の林にさしかゝる。

と、なそひに向うへ下りて、また樅の木の枝を交はしたあたりから、下草は、昨日か一昨日か、まだらに消え殘る薄雪をかづいてゐたが、湖水にはさすがに氷はない、しかし斷崖の間に、氷柱は、朝の日に解けもやらず垂れ下つて、氷河の上にも厚く新雪を浴びてゐた。湖畔の一つ家からは、細そ〴〵と煙が登つて、まだ宿は閉め切らぬと見える。

登り路に少し汗になつた外套をぬいで、氷にむかつたテレースに息ふと、此の前にもゐた宿の女が出て來た、晝食を命じて置いて、その間森の中を歩きまはる、斷崖の中腹からは、薄い霧が絶えず湧き上つて、ブリュームリスアルプホルンの尖峯は、浪にたゞよふ形に見えかくれする。

名の知れぬ小鳥の群が、森の間に飼をあさるのもうら悲しい。秋空の絶えず晴れ曇りして、どことなく、冷たい影のつきまとふ山の宿に、かうしてワイセフラウに湧きかへる雲を仰ぐと、永く故國に離れて、さまようてゐる寥しさが、なつかしくもひし〳〵と胸に泌みる。食事の間も、スイ、スーイと、沈んだ鳥の鳴く音が、山國の冬らしく耳についた、私は山の雪を仰ぎ、今はシンプロンを越えたらう、眼を閉ぢて靜かに友の旅路を想つた、その日記に „Aufgetürmter Berg gab mir keine Trost mehr!" と記したのは事實である。

その手帳の間に、カンバヌラの花を挿んで、日のビルレの空に傾くころ、靜かに山を下つた、フィルシュトの頂はもう雪に覆れて、直下に指されるカンデルシュテークは、村の煙がほそ〴〵と、まだ住む人のあるのを敎へてゐる、樅の森をはづれる頃、つるべ落しの日はとつぷりと暮れて、ブリュー

ムリスアルプにあか〳〵と、アーベントグリューンが仰がれた。

シュピーツ

ミラノへ近藤君が去つてから、一週間を、私はシュピーツに送つた。泊つてゐる家は、城を斜めに見た草原に、秋草の黄色に白に染め上げた牧場が、庭につゞいて展げられて、ゼーブロムナードのポプラの上に、トゥーンの湖が空色に、その東の極には、グロースシュレックホルン、右にはアウセルベルクの上にユンクフラウの頂が見えて、グリンデルワルトのウェッテルホルンもその左に、岩山の頂が望まれる。ベヤテンベルクの湖水に面した絶壁は、草の色も、もういつの間にか色づいて、南の窓にのしかゝるニーセンには、麓から染め上げて宵ごとに雪が降つた。

この景色を正面に見る客室の窓を開けて、朝はヴェランダにデジューネーを運んで貰ひ、日のうちは、シュピーツベルクから草山の上を、家の人達とつれ立つて歩き廻つた。近い山には夜ごとに淡雪が降り、風につれて、かさこそと枕にひゞく楢の葉はうす霜に凋れて、城あとの、縦に交じる下葉はのこらず紅葉した。

山の雪に、里近く下りて來た牛の群は、夕ぐれごとに村路をたど〳〵と、麓の方へ動いてゆく、風のまに〳〵遠い〳〵岡の蔭から、かすかに響くクラリョンは次第々々に近づいて、あちこち灯のともる板屋の窓の側を通りぬけて、入り亂れた鈴の音は、やがてヴェランダの下を過ぎてゆく、そして木がくれに消えてゆくのが、野を越え山をわけて、私たちの知らない國へ、さまようて行くとやうに、物悲しくもなつかしい。私はうす靄だつ野を前に、獨りぼんやりとこの巡禮を見送つて、いつまでもいつまでも、寂しい思ひにふけつてゐた。

夜はストーヴの前に集まつて、三人の子供を相手に、いろ〳〵な話をする、そして熱いコッフィー

をすゝつて、南側につき出た私の寢室に入つても、クラリヨンは、いつまでも〳〵耳について眠れない。宵闇の空に蒼く、星の光は霜に冴えて、ニーセンの雪は、夜目にも白く光つてゐる。風は落ちて、灯のゆらぐ村路のこゝかしこに、犬の聲が響いて來る。湯たんぽの入れてあるベットに入つても、もう別れる日の近づいた此の頃は、何となく胸がふさがるやうで寢つかれない。

曉け方は、窓硝子にしつとりと露を置いて、抑せば冷たい山の空氣が、草の香をまじへて流れこむ、南むきの菜園に、朝の日は淡くさし込んで、垣にかれ殘る蔓草の、二葉三葉しほらしく紅葉したのも、雪の近い佗びしさを思はせる。

私はいく度も、湖のほとりをさまようた、水際のシルフはうら枯れて、入江の波の、ぴちや〳〵と根を洗ふより外に、ものゝ響は聞えない。私はいくたびとなく、シュピーツベルクの上に立つた、刈草の香のこもる牧には、まばらに白く、クリュムメルが咲きのこつて、森かげに、からころと、ツィーゲングロッケの響くのも、もの寂しい、縱の梢に展げられたトゥーネルゼーには、蘆に似た一葉も浮かず、アルプの雪を覆ふ大空は、湖のやうに靜かである。

かうした日は靜かに明けくれて、シュピーツに來て、早くも七日は過ぎ去つた。九月二十七日、ひとひらの雲もうかず、しづかに暮れてゆく夕空を仰いで、最後にあのプラトーに立つた、あか〳〵と彩どる夕映えの、どこからとなく消え失せて、またしても、いたましいクラリヨンの、かすかにひゞき初めた時、南の空に引き廻らす、ブリュームリスアルプの、ふと火のやうに輝くのを見た、私は草に寢て、ぼんやりと幻のやうに、アルペングリューンを眺めてゐる。

夕闇は谷より湧いて、見るまに淡く、美しいミラージュは消えてゆく、私は眼を閉ぢて、靜かにクラリヨンを聞いた。(終り)

黑部川奥の山旅（中編）

木暮理太郎

五　小黑部谷の入り　中（赤谷山及赤兀白兀）

七月二十八日。午前六時三十分、中の谷の露營地出發。峠に出すして直に南側の谷を登り、七時三十分、山稜に達す。片貝方面より小黑部谷及仙人湯に通ひし古道あり。八時、餓鬼の田。八時三十分、出發。根曲り笹の密叢に分け入り、九時四十分、偃松帶に達して休憩。九時五十分、出發。切明けあり、岩石露出、登攀反て困難ならず。十時四十五分、赤谷山頂上著。正面南に劔岳の豪壯なる山容を仰ぐ。晝食後、午後十二時五十分、出發。二時、白萩山と赤兀との鞍部。稍や大なる池あり。二時三十分、出發。山稜の南側を傳ふて、密林の間を押し分け、强行三十分にして之を通過し、草多き斜面を登りて、四時十五分、赤兀頂上。直に出發。山稜險惡を極む。四時四十五分、白兀頂上二千三百八十七米突の三角點に達す。五時二十五分、出發。峯二つ踰えて右に山腹を横切り、六時十五分、大窓著。峠を稍や西に下りて野營。

賑かな靑蜩の聲を聞いて、毛布を體に卷きつけながらそつと天幕から這ひ出した。見ると、星影のうすれた狹い谷間の空を一道の白氣が黃道光の如く東から西へ流れてゐる。雪溪の雪が先づ其光を吸つて仄に輝き始める。何處かで角笛でも吹くやうな鴉の叫聲が二度三度聞えると、夫が合圖でゞもあるやうに鼠色の衣をすつぽりと被つた『闇』は、木蔭から木蔭に身を潛めて、忍びやかに杳かの谷底――黑部の大谷をさしてぞろ〳〵と下りて行く氣配がある。今度は時鳥が頻りに鳴き出した。大きな焚火を前にして煙草を吹かしてゐると、東の空が遠い火事でも始まつたやうにぽうつと赤く燻り出して、夫が見る〳〵紫がゝつた透明な薄桃色に變つて行く。大蓮華山から唐松岳に至る連嶺が、紫紺の肌を水色の大氣に洗はせて、目も覺むる許り鮮かになつた。

水に不自由がないので、楊子を使つたり復た體を拭いたりして、身拵が濟むと朝飯になる。土地が低い所だけに昨夜は暖かだつたし、割合に能く寢られたので今朝は皆元氣だ。直ぐ側の水楊の林で鶯が囀づる。其聲に送られて茲を出懸けた。昨日下りた雪溪をまた峠まで登つて、あの厭な笹原を潜るのは少し馬鹿念が入り過ぎると思つたので、雪溪の途中から南側の山腹を穿つた急な石瀧を登り始める。峠からは二つ目の澤である。山櫻の咲いてゐるのが餘り奇麗だつたので、よせば好いのについ手を出して一枝折つたが、案じる迄もなく次の休み場所で挿木にしてしまつた。

急な登りが四五町も續いたかと思ふ中に谷が淺くなつて、山崩れのした跡の急斜面に突き當る。左に水の流れ落ちた痕らしいものはあるが、谷といふよりは一つの窪に過ぎないもので、先の見透せない程に木立が茂つてゐる。草に縋りながら斜面を横に搦んで、右手の瘦尾根を登つて行くと間もなく山稜に出た。丁度立山圖幅の千八百六十米突の圏が北に延びた地點に當つてゐる。立派な道が有るので驚いたが、二十年も前に仙人の湯を開いた時のものだと聞いて安心した。此處は山稜が平である爲に、左程荒廢した樣子も見せずに元の形を存してゐるのであらう。南日君の話に據ると、此道は片貝から通じたものであるさうだが、猫又谷を遡つて猫又山の西を搦んで來たものか、或は坂樣谷の落口から右に尾根を登つて其儘中下新川界の山稜を傳つて來たものか、判然したことは知れなかつた。三四十間行くと果して道は失せてゐる。雜木や根曲り笹の茂つた小高い所を越して、背の矮い笹原を蹂りながら狹い山稜を東に行くと、些かな窪地に水の溜つてゐる草原に出た。所謂餓鬼の田だ。水際には纔かではあるが雪も殘つてゐるのに蛙が鳴いてゐる。跫音が近付くとひたと止んでしまふ。どんな蛙か見たいものだと思つて、暫く探したがとう〳〵知れなかつた。東の方を覗くと、脚の下から小黒部の谷へ延びてゐる尾根の中ほどにも小さい池があつて、眞青な水を湛えてゐる。蛙がまた鳴き出した。氣の所爲か何だか私を嘲つてゐるやうにも聞える。忌々しい奴だ。これでも喰らへと側にあつた

影撮氏助伊村辻

ーゼンネシッエ

兎の糞を拾つて、力任せに投げ付けてやる。

此處は低いが四方が開けてゐるので可なり眺望が好い。野營地からは見えなかつた五龍岳や鹿島槍岳が唐松岳の南に頭を擡げて來た。名高い八峯の斷裂は、底が五龍岳の方に抉れ込んではゐるもの丶、斯う離れて眺めては、天魔が巨箭を飛ばしてザクリと射拔いた鏃の痕のやうに小さい。南方の天には劒岳が赤谷山から右に引き下ろした尾根の上に鋭い峯角を覗かせる。大日岳の長大な山稜がガックリ低くなると、雲の海が目も遙に續いて、白山が獨り紺碧の空にふわりと横たはる。長次郎達は双眼鏡で頻りに大黑鑛山の附近を物色して、人が居たとか居ないとか言ひながら、小供のやうに嬉しがつてゐた。

南に向つて同じ草原の山稜を暫く行くとまた笹が始まる。背の低い黑部杉や栂などの生えてゐる下を通る時には、切明けの跡が判然してゐるので、他に迷ひ込むやうな心配は無い。三四十米突も登つたらうと思ふ頃、山勢が一曲して東に向くと笹が少し途切れて、草の生えた窪地に續く。此處も稍や廣い高原狀の濕地で、今は水は無いが、雪解の頃は淺い池であつたらう。附近には毛氈苔が敷物の模樣のやうに其處此處に叢生して、小さな白い花を綴つてゐる。山稜は更に東の方へ延びて、中の谷と櫛倉谷とを分つ尾根となつて、小黑部谷へ低下してゐる。餓鬼の田から瞰下ろした池のあるのは此尾根だ。谷の行衛を趁ふて目を移すと、突き當りに小黑部の大拔けが、裂けた雪の繃帶から生々しい岩骨を曝露して、目が眩むやうだ、何處かで郭公が頻りに物寂しい聲を繰り返して鳴いてゐる。

目指す赤谷山に續く山稜は、此の窪地の西のはづれの根曲り竹や雜木の密生した、夫とも分らないやうな斜面を可なり登つてからでなければ、尾根らしい形を成してゐないから、雨か霧にでも閉ぢ込められた日には、容易に足が出せまいと想はれる。其上連日私達を苦しめてゐた籔は、少しも其勢を弛めない許りか、此處から百二三十米突を登る間といふものは、極度の蔓り方で、矢でも鐵砲でも來

いといつた位の生優しいものではない。昨日猫又山から下る途中『明日は樂だな』と喜んだ立派な切明けは、樹倉峠の草原やだぶ〳〵の水と同じく、何かに付けて樂をしたがるさもしい根性から、血迷つた網膜が勝手に映して見せた幻影に過ぎなかつた。尤も切明けの跡は全然無い譯ではないが、高さ一丈にも餘る根曲り竹の上を歩くことは、人間には出來さうにもない業だ。

又籔に潜り込む。秩父の奥山で散々苛め拔かれて、籔潜りにかけては魚が水を泳ぎ鼈が土を潜るやうなものだと、大に得意になつてゐた鼻先を、青竹の笞でいやといふ程彈き飛ばされて、忽ちへし折られて仕舞つた。右を見ても左を見ても篦を束ねたやうに簇生した篁の中では、眼なんか無くとも一向差支はない、有れば近眼でも遠視眼でも持ち合せの者で澤山だ。唯だ手探りに跪き廻つてよろけた方へ足を運んで行く、誰が何處へ行つたか夫さへ分らない、體が頭から足の先まで汗でびつしよりになる。

漸く笹の中を左に切れて、木立の下の大きな岩に凭れ掛りさま一息する。皆何處へ行つたのか聲を懸けても返事がない。足元に落ち重つてゐる新しい笹の枯葉の上に青葉の繁みから日光が洩れて、豹紋のやうな斑點を染め出す、糸のやうに痩せた蔭草が青白い莖を抽き出して其上を匐つてゐる。小雀（コガラ）に似た小さな鳥がスイー〳〵と葦五位のやうな幽かな細い聲で鳴き交はすのが、妙に寂しいので、何だかあたりが見廻されてならなかつた。

笹の中よりは幾分か登りよさ相に思へたので、木立の中を辿つて見る。それも十歩とは行かない中に復た笹の中に追ひ戻されたみぢめさ。諦めてどうでもなれといふ氣になつて、其處らを足掻き廻つてゐる中に、雜木が次第に殖えて、恐ろしく背の高い偃松が姿を顯はしたと思つたら、うまく切明けに出た、長次郎が休んでゐる。南日君と實君はずつと右寄りの籔の中から、笹葉を背負つた蝟のやうな姿をして出て來た。絶頂も早や間近であらうと思つたので、直ぐ出懸る。傾斜は可なり急になつた

が籔を潜ぐる困しさに比較すれば何でもない。二町許登ると偃松が途切れて、雜木の繁つた窪地のやうな處を左に通り拔ける。半は朽ちて土に化した倒木の横から、五六本の黄色の菌が一塊りになつて生えてゐる。其中の一に妙な蟲が附いてゐたので、手に取つて見ると薄墨色をした蛞蝓であつた。形も普通の種類とは少し違つてゐるやうだ、長さは一寸位で、背の眞中ごろに少し突出した爪のやうな物が附着してゐる。珍らしいので其儘紙に包んで置いたが、翌日劔澤の岩屋に着いた時ふと氣が付いて開けて見ると、干からびて生體も無かつたので、殘念ながら棄てゝ了つた。

突然行手が開けて正面に赤谷山が姿を顯はした。近いやうではあるが未だ二百米突は登らなければなるまい。頂上から西の方へ延びた尾根と私達の居る山稜とに抱かれた谷は、山の名に背かない赭色の大崩れが、絶頂から半圓形を成して剜り取られたやうに長く下まで續く。此尾根の上に押し建てられた一列の嶂屏と見えたのは、藍色の地に銀泥をなすり付けた大日岳の連嶺であつた。谷の空は低く西に垂れて、富山平原の極てに日本海が薄曇のした鏡のやうに光つてゐる。先へ登つて休んでゐた二人と一緒になつて、私達も暫く息を入れる。

西南の風を眞ともに受けながら、大岩の露出した山腹を登り始めた時には、皆晴々した氣持になつた。切明けの跡が偃松の海に一路の波痕を印して緩くうねつてゐる。岩間に根を下ろした米躑躅が旨く手掛りや足掛りを造つて呉れるが、其度毎に枝間に咲きこぼれたつゝましやかな白い花を搖り取つたり、薄桃色の花を蹈み躪つたりするのは、如何にも殘忍であるやうな氣がした。私はいつか先に登つて、脚の下から抉れ落ちた凄まじい赭岩の大崩壞の突端に立つてゐた。小さな測量の櫓が南を限る崖の上に姿を見せる。偃松の枝に縋つて下を覗き込むと、赭黑い岩の膚が强烈な日光を浴びて、火に炙られた肉塊のやうに陽炎が燃えてゐる。蒸れたやうな熅氣が吹き上げる風に連れて時々顏を撫でに來る、汗ばんだ五體から今更のやうに汗が流れて止まなかつた。

絶壁の縁を辿つて頂上へ急ぐ、房さりした禾本科の植物が柔い葉を擡げて、崖の端から一尺許りの間に瑞々しい緑を敷き延べてゐる。草が短くなつて小石交りの斜面に當藥龍膽、ネバリ芒蘭、岩爪草などがポツ〳〵見え出したと思つたら、直ぐ頂上に出た。振り返へると南日君が絶崖の縁に立つて此方を見上げてゐた。

頂上は猫又山ほど廣くはないが、稍や東南に向けて盆狀の高原を開いてゐる。雪が消えてまだ間もあるまいと思はれる原は、岩銀杏が隙間もなく密生して、緑青をぶちまけたやうな平蕪に、珍車、立山龍膽、四葉鹽竈などが鮮かな色彩を點じてゐる。眞中の窪い處は一面の雪田で、盛り上つた雪は緑から溢れて、小黒部の椈倉谷へなだれ落ちてゐる。西北の緑邊は堤のやうに小高くなつて、いぢけた偃松が矮い灌木や根曲り竹の茂つた中に押し竦められて、骨ばかりの枝を突き出してゐる。西と北に小さな測量の櫓がある。下から見えたのは北の端のもので、恐らく之が測量部で建てたものであらう。西の方が一米突位高いかとも思はれた。

黒部の谷の空では、時折り砲丸でも破裂したやうに、眞白な雲の塊がだしぬけに湧き出して、匐ふやうに廣がり始めたかと思ふと直ぐ消えてしまふ。祖父岳から北に連なる後立山山脈の群峯は、眞額から直射する烈日の光に照り映えて、著しく赤味のさした紫藍の肌には物の隈もない。近く眼の前に聳えてゐる毛勝の連山は、雪に和らげられた濃い緑の色が穏かに溢れて、昨日のあの苦しさが早や半は夢のやうな懐しい味に變つてゐる。西の方の低い谷間の空は、山の吐くらしい息が薄白く淀んで、其底には早月川の流が一條の銀蛇となつて、北に走つてゐるのが仄に見られる。大日岳の連嶂から遠い白山の方面へかけては、日本海から湧き上る雲の峰が今將に幾多の大山岳を形造らうとしてゐる當年の地上のさまを想はせた。

この變幻極りなき雲の峰を背にして、南正面に屹立した劒岳の豪壯なる山容を仰ぎ見た時の心地は、

永く忘れることの出來ない印象の一つである。この旅を始めて以來日一日と其麓に近付くに連れて、山の高さは加はり嶮峻の度は增して、曾ては一度其巔を窮めた身にも、自分は果してあの頂上に登ることが出來たのであらうかと疑はざるを得ない程、心の動搖するのを感じた。恐らくこれは此山の見慣れない方面に初めて接した私の神經が、例へば血管內に或物質を注射すると、血液は直に之と對抗す可き特殊の物質を生じて、自己を防衛するのと同じやうに、山の威壓に對して反抗的に起つた神經細胞の動搖であつたのであらう。而も希臘彫刻の傑作に見るが如き貴き素朴と沈靜なる偉大とを兼ね備へた山の前には、私の神經細胞の中に生じつゝあつた少量な醱酵素は、自己を危くするまでに毒素を分泌するに至らずして、旭に消ゆる霜の如くに溶け去るのを覺えた。此時私は山に登りたいと努力精進する人のみが——山岳宗徒のみが享受することの出來る或神來の力があつて、强い心臟の鼓動と共に全身に漲り溢れるのを感じた。そして一瞬時の後には、それが渾身を傾けて山を懷しむ情と變つて行く。私は若し自分が畫家であつたならば之を描きたい、詩人であつたならば之を歌いたいと思つた。然し畫家でも詩人でもない私は、自己の能はざる所を他人が成し遂げて吳れた彼の尊い藝術に依りてのみ、此眞情を滿足させるより外に道はないのであらうか。よし、さらば飄として雲表の仙岳を攀ぢ、暫く我が神を王にせん哉。

荷物を草原に抛り出したまゝ、ぼんやりと其處らを見廻してゐる中、眞先に南日君の汗ばんだ顏が現れて、間もなく皆が登つて來た。雪を溶してお茶を煮、晝飯を濟して、ウイスキーを飲みながら雜談に耽る。初日以來癖になつて、晝食後の休みはいつも長い。日向は暑いし風の吹く處は寒いので、風の當らない木蔭を覓めて、鷹に追はれた雉子のやうに偃松の繁みに潛り込む。こんな時に平氣で何處へでも腰を据えて、人の騷ぐのを鼻の先で笑つてゐるのは、南日君と長次郎だ。惡く言へば至極の不精者で、能く言へば人間界では餘り幅の利かない仙人といふ者に近い人なのであらう。時には小面

憎いほど羨ましいと思ふこともあるが、時には如何かしてやりたい樣な氣のすることもある。今日などは無論引擔いで偃松の中へ放下し込んでやつたなら、どんなに好い氣持であらうと思つた。

此山から尾根は南東に延びて、六七町の先に雜木の茂つた雪の多い一峰を起してゐる。此處よりは六七十米突も高いらしい。何といふ山か名を知らないので、假りに白萩山と命名することにした。其處から東に低下した尾根は急に肩を聳かして、右斜に三つの奇醜な圓頂を擡げてゐる。此處から眺めた所では南寄りの者が最も高く、中央の者が最も低い。この駢立した三峰が早くから地圖の上で其名を知られてゐた所謂赤兀白兀である。白兀の右には二千六百米突に近いと想はれる大窓の頭が、朱泥をなすり付けたやうな凄い顏をして此方を向いてゐる。赤裸の肌にも偃松の胸毛だけが蒼黝い。更に其右には小窓の谷底から躍り上つたやうな嶄岩の列が、執念の手を伸して追ひ縋らふとする雪の前に、美しい綠草の斜面を展開したり、恐る可き崩岩の礫を投げ下したりして、威しつ賺しつ、後ろさまに身を退きながら、爪立ちになつて一齊に覗き込んでゐる。私達は之を小窓の頭と命名した。其上には劒岳の東の肩ともいふ可き三窓續きの更にいかめしい幾多の岩峯が、脚元から千仞の谷底目掛けて頽れ落ちる崩石の群を冷やかに瞰下ろして、斷崖の絕端から絕端へ天斧の削痕尙ほ鮮かなる大尖柱を亂杭のやうに押し立てゝゐる。早月川の谷から力の籠つた而も穩かな山稜の波が遙かの空際をうねつて、この尖柱の森列せる斷崖がなほも西へ延びた突端迄來ると、一躍之を越えて虛空に跳り上りさま、稍や圓味を帶びた空線を描いて、更に東へ向けて掬ふやうに雪崩れ込んでゐるのがわが劒岳の絕巓である。天に近きこと約そ三千米突、額には雪の寶冠が白金の如く輝いてゐる。

二時間餘り無駄に遊んで、悠々と此處を出懸る。尾根は雜木が茂つてゐるので、雪の多い東側を搦みながら行くことにした。雪田が盡きると楓や岳樺の薄暗い木立が待ち構へてゐたやうに私達を抱き込む。反り返つた太い枝が足場のよくない山の斜面に沿ふて、意地惡くのり出してゐる。動ともする

と、口惜紛れに蹈みにじつた枝が跳ね反へる拍子に旨く足を浚はれて、かすみに懸つた小鳥のやうに宙に釣られたまゝ、跪けば跪く程手足が利かなくなつて、果ては遊び飽きた小供の玩具のやうにむざと放り出される。『オイ、如何した』こんな言葉が聞き飽きる程繰り返された。

不意に頭の上が明るくなつて、行手に白いものがチラ〳〵見え出したと思つたら、小黑部の樹倉谷に落ち込む雪溪の一つに突き當つた。其緣に沿ふて二三十間登つてから、幅の狹さうな所を足掛りを刻んで一歩々々に辿つてゐると、一行は長次郎を先に稍や下の方に姿を顯して、苦もなく渡つて了つた。南日君が下から見上げて『オイ、大丈夫かい』と案じ顏の捨臺詞を殘して行く。趾の先が痛くなつたのを我慢して、漸く向ふ側に著くと我ながら素張らしい勢で跡を追驅ける。同じやうな雪溪が續いた、夫を横切つて雪に押し窘められた細い岳樺の蹠に生へてゐる尾根を下り氣味に通り拔けると、白萩山の直下から山稜の方向に極めて緩く傾斜した驚く可き大雪田が目の前に現れて、赤兀に連る鞍部を一面に掩ふてゐる。雪消の跡には岳蕨が今しも永い冬の眠から眼をさまして伸びをしてゐるやうに、其處にも此處にも毛むくぢやらの小さな拳を突き出してゐる。中村君がゐたなら屹度『ヤアー、有るぞ〳〵』とか何とか言ひながら、ヒョロ長い懸聲と共に反り返つたり手を振つたり、其處ら中を跳ね廻つた揚句、『オイ、取らうや〳〵』と言ひ出すのが必定であるが、今の私達にはさうしてゐる程の餘裕は無かつた。

この大雪田は、西側を堤防狀の小高い畝に限られてゐるが、東側は瀧の澤の右股に懸る急な雪溪の上部に續いてゐる。赤谷山の頂上に休んでゐた時、一頭の羚羊が澤を登つて來て暫く躊躇した後、雪田を横切つて木立に隱れるのを見たが、雪に印した蹄の痕は可なり大きなものであつた。此處で私達は羚羊と同じ樣に雪の上に立つたまゝ思案に暮れた。腰が掛けられないからではない、行手を遮ぎる木立の繁り方が餘りひどいので、どう蹈み込んだものかと六つの頭をかしげたのである。流石の長次

郎も此籔ではとても尾根は歩かれないと顔をしかめる。三人は荷を置いて三方に別れながら通れさうな所を探しに行つた。私達三人はつい四五町の先に少し俯向き加減に聳えてゐる赤兀の北峯を、漸く芽ぐんだ岳樺の梢越しに見上げて休んでゐた。風が寒いのでぢきに胴慄ひが始まる。間もなく三人一緒になつて戻つて來た。金作が『池がある』といふ。山の上の池といへば火口湖の外は大抵窪地に水が溜つて出來たものである。今迄見たのは夫であつた。所が此池は岩でこそないが周りを六七尺の切り立つた崖に取り卷かれてゐるので、直ぐ側に有つたのを今迄夫とも氣が注かずにゐたのだ。廣さは十坪位で一間位の深さはある。形は稍や勾玉に似てゐる。其の一端が雪田の方に開いて、其處から滲み出したちよろ〳〵水は、岳樺の根を洗ひながら雪の下に走り入りさま、些かな音を立てゝゐる。

此處から山稜を右斜に横切つて一度谷に下り、更に夫を登つて赤兀の南峯と北峯との鞍部に出ようといふ長次郎の言葉に從つて、雪田から一歩蹈み出した時には、兎に角少しは氣が樂になつた。岩の多い側崖を木に吊り下つて脚掛りを拵へては横に搦んで行く。どうかすると降りた所は立木の梢で、枝から枝を傳つて足を運ばなければならなかつた。さうかと思ふと又蛇のやうにのた打つて岩の間を匐ひ拔けたりした。靑葉に目隱しをされた私達は押し默つてひたすら手足を働かすのみだ。毛布と身廻りの品を少し入れた背嚢までが、脊中で生きた物のやうに跳るのが邪魔で仕方がない。頭の中がカッと熱つて氣もおのづと荒くなる。拳骨で木の枝を撲つたり足で岩を蹴つたりして、飛び上る程痛い目に遭つた。然し重い荷を背負つた山人達の厄介さはどんなであらうかと、跡に殘された身が役にも立たぬ取越苦勞をしたのは、滑稽じみて可笑しかつた。氣までは慥に狂つてゐなかつたらしい。やつと草の生へた急斜面の谷へ出て一休みする。

此谷の上部は赤兀山の頂上附近から大頽れに頽れて、曝露した岩骨の破片が急斜面に危く段を成して止まつてゐるが、少し下ると山側が兩方からひたと押し寄せて、船底を傾けたやうに落ち込んでゐ

る。突き當りは白萩川の左岸所謂辨慶岩の岩壁で、皺襞の錯綜した直立の翠崖が小窓の頭に續いてゐる。私達が籔から棒にひよいと飛び出した所は、丁度其段の上であつたのだ。登りは案外樂であつた。唯時々根なし岩とは知らずに大きな岩に手を懸けて、夫がぐらりと搖いて一行をひや〳〵させるやうなこともあるにはあつたが。長次郎は先見の謬らなかつたことを口に出しては言はないが、温厚な彼の顏にも得意の色が漂ふてゐた。

山稜は凸凹だらけになつて、矮い偃松や灌木の密生した中に切明けが通つてゐる。爪先上りに登つて行くと直ぐのろ〳〵した馬の背のやうな峯頭に立つた。此處が赤兀の南峯であらう。時間が遲いので無駄口も叩かずサッサと下り始める、小黑部谷から舞ひ上つた薄い霧が風に連れて音もなく過ぎ去ると、だしぬけに恐ろしい岩の痩尾根が現れた。右からも左からも熊手のやうな谷が鋭い爪を打ち込んで、山の皮肉を搖り取つた跡には、血が滲んだやうに赤い色をした生々しい岩骨が剝き出しになつてゐる。まるで石塔を打缺いで縱といはず横といはず、手當り次第に積み重ねた塀のやうだ、夫が左の赤兀谷へ少し傾きながら危く倒れずにゐる。其中の小さな岩ほどにも重さの無い人間が一人載つただけで、ガラ〳〵と壞れて了いさうに思へる。脚元に氣を配りながら夢中になつて渡つた、其間にも誰かのアッといふ聲が聞えやしないかと心配でならなかつた。この木も草もない痩尾根は、遠からず五六尺は崩れるであらう、さうなれば今よりはずつと樂に越すことが出來るに相違ない。

山勢が稍や穩になつて、所々の草間に珍車、白山一華などの白い花がチラホラ目に入る。張り詰めた氣が弛み懸ると今度は、登り降りの激しい駱駝の瘤の樣な岩峯が續いた。何とはなしに一種の緊張した氣分になつて、足早に辿り著いた所は、岩の裂け目に喰ひ込んだ大雪溪の上端である。雪溪は急に額を掠めて、山の半面を横なぐりにそぎ落した崖腹にのし上つてゐる。何でも今日は山が手を替へ品を替へて、偶に入り込んだ人間の私達を弄してゐるのではないかと想つた。崖にのり出した西側

の偃松に捉つてグン〳〵登つて行く、見上げるやうな大巖が行手に高く現れたと思ふと、夫は劔岳の頂上であつた。次で間近く小窓の頭、大窓の頭が肩から胸、胸から腰と次第に迫り出して、靑く淀んだ沈靜な大氣の中に、半面に夕日を受けて赭黑い逞しい筋骨が生きて動くかと思はれた。私は四葉鹽竈などの咲いてゐる岩間の短い草原に突立つて、大手を擴げて四十度の熱を患つてゐる人のやうに喚き散らしてゐる自分を見出した。此處がこの年頃心に懸けて忘れることの出來なかつたあの白兀の絕巔なのだ。三日間山の上の苦しい旅を重ねて、明日は愈二年越しの宿望であつた『大窓から劔岳に登る』ことが出來るのであると思ふと、標高僅に二千三百八十七米突の低い山ではあるけれども、單に其頂上を窮めたといふこと以外に、或大きな仕事の準備を遺憾なく仕終せた時の强い意識と滿足に伴ふ快感とを喚び起したのも無理はない。

大窓の大雪溪を瞰みたいといふ希望は、東に續く前山の峯頭に遮ぎられて駄目であつた。對岸の山腹には路らしいものがうねつてゐる、能く見ると何か其上を動いてゐるやうだ。双眼鏡で覗くと果して人であつた、而も洋服を着た者が二人迄交つてゐる。この三四日人影を見なかつた私達は、物珍らしさに帽を振つたり手拭を振つたりして、盛に喚鳴つた。オーイと幽かな返事が來る。小黑部鑛山の發展に連れて、新道が開鑿されたものであらうと想ふ。寂莫無人の境を想像して、私達の胸に秘められた荒らかな、そして美しい大窓の別天地は、其の餘りに人臭いのに少なからず興趣を殺がれざるを得なかつた。突然地の底から大砲でも放つたやうな響が續けさまに二度、谷の空氣を劈いて山から山に遠鳴りした。何だらう、雪崩れだらうかと話し合つてゐる胸先に、不圖厭な考が浮んで來た、山體を破壞し併せて人間の性情を破壞する咀はしいダイナマイトの響。

櫓は切り倒されて、標石だけが草間に取り殘された白兀の頂上を東南に向つて下り始める。左手は絕えずガレが續いて、か細い山稜は偃松を賴みの綱にひゞだらけの殘骸を維ぎ留めてゐる。小高い峯

を二つ越えて、草の斜面を右に降りながら膨れ出した山腹を横に通り過ぎると大窓の底に下り立つた。先に來た長次郎は其處に休んでゐた三四人の鑛山の人夫と話し合つてゐた。立ち聞きした樣子では何でも番場(バンバ)島あたりに鑛山の派出所が新に建てられて、電話も其處まで通じてゐるし、近く鐵索工事に取り掛る筈だといふ。其人達が足早に伊折方面を指して、谷の曲り角に見えなくなる迄後姿を見送つてゐた私達は、寒い風に吹かれたまゝ、寂しさを味ふが如くに暫く立ち停つて四邊を見廻してゐた。

この大窓は其底部の形がV字でもU字でもなく、全く絶大な凹字に類してゐる。山と山との距離は六十間とはあるまい。西側は傾斜が緩やかで、漸く芽のほぐれた灌木の上に白檜などの疎らに立つてゐる斜面が、いつか谷らしい形に移つて行く。東側は急に傾いて、二三間下に厚さ三丈にも餘る雪溪の平な上端が氷のやうに堅い表面を見せてゐる。幾筋かの針金をより合せた太い鋼索が大きな岩に確かと卷き付けて雪溪に垂れ下げてある。夫を手繰つて下を覗き込むと、谷も狹しと擴がつた大雪溪が涯もなく續いてゐる。遙か下の右側に山の肋骨が赭色の大懸崖を押し竪てゝゐるあたり、雪の上に五六の人影が動いてゐたが、間もなく崖の後に隱れた。小黑部鑛山の新道は其邊から雪溪を離れて、横に山腹を辿るのであらう。

峠の道から四五間南に行つて、西側へ下り込んだ處に野營した跡がある、私達も其處へ天幕を張つて泊ることにした。今宵はどうでも雪を溶して用ゐなければなるまいと心配したが、雪溪を少し下つた左側に水を得られたのは仕合せであつた。世の中に何が嫌だといつて、しらあへと雪を溶した生温い水を、さも勿體ない樣にして鍋も米も碌に洗はないで炊いた飯程いやなものはないと思つてゐる。山の旅にしらあへが附物でないことは、私に取つてはせめてもの幸福である。

温かい夕食を濟して、疲れた體を天幕の中に横へた。が、如何した譯か今夜はいつものやうに山と私の心とがしつくり合はないのは情なかつた。山は冷い背中を此方に向けて『知らないよ』と言つて

ゐるやうな氣がする。私の心は華やかな夕榮の色が急に褪せて了つた西の空のやうに暗く〳〵沈んで行つた。

六　小黒部谷の入り　下　（大窓及池の平）

七月二十九日。今日は山稜を傳ひて一日に劒岳を上下せむとす。午前六時五十分、野營地出發。大窓の頭を志して急峻なる山側を攀ぢ、九時、漸く二千五百米突に近き地點に達す。前面を望むに危峰亂立、加ふるに長大なる偃松密生して、登攀容易ならず。右に轉じて一支脈の上に出づ。仰げば峭壁峙立、絶えず崩石あり、到底近づく可らず。九時二十分、小窓の裏なる雪渓に向つて下り始む、綱に縋りて絶壁を下るもの二度。十一時、雪渓に達す。十一時四十分、大窓裏の雪渓合流點。晝食。午後十二時十分、出發。二時、野營地歸着。二時三十分、出發。雪渓を下ること四十分にして渓を離れ、三時四十分、小黒部鑛山事務所。四時、出發。四時四十分、池の平。四時五十五分、出發。四十分にして小窓の雪渓に達し、尙ほ下ること二十五分にして、六時、劒澤の岩屋着。野營。

大窓から大窓の頭を踰えて小窓へ出るには、少くとも五六時間を要するものと思はなければなるまい、荷物があれば尙更である。私達は二時間餘りを費して漸く其三分の一すら辿ることが出來なかつた。偃松が深いのと傾斜が急なのとで、斯くも時間を費すが、通過不可能ではない。小窓から三窓へ出るにも二時間以上を要することは、初めて此處に登られた吉澤君の紀行から推して知ることが出來る。大窓から一日で劒岳を上下しやうと企てた私達の向見ずには、池の平のさんせうをも肝を潰したに相違あるまい。

東雲の光が雪の障子にぼうつと白く映して、大窓の夜は明けた。有明の月が山の端から青白い顏をして覗いてゐる、私の體を藻拔け出た魂のかけらではないかと思つた。今朝元氣の無いのは其所爲であるかも知れぬ。長次郎は厭な夢を見たと言ひながら鍋を提げて米を研ぎに行く。聞いて見ると、何でも誰か岩と一緒に谷底へ落ちたのださうだ。急いで下りて行くと息はあるが、血だらけになつてゐるので、誰であるか分らなかつたとのことである。何にしても餘り吉い夢ではない、今日は少しマヅイなと思ふ。然し何がマヅイのかは私にも薩張見當はついてゐないのだ。

『無用の者入ることを禁ず。大林區署』と張紙して、天幕の中に一切の荷物を殘し、身輕になつて出掛けた。しげ〳〵通行する鑛山の人夫の中には、性質のよくないのが居るかも知れぬ、うつかりすると荷物を盜まれる恐があるので、寶君の發案に從つてちよいとお咒をしたのだ、鎭西八郎お宿の格である。直ぐ急な登りが始まる、最初の中は偃松が矮いので、岩の上も樂に歩けたが、五十米突も登ると蒼黑い偃松の波が急に深くなつて、腰から肩の邊まで押し寄せる。所どころに山の肌が赤くすり剝けて、大きな岩骨を露はしてゐる。其處を目當てに偃松を搔き分けて、次から次へと辿つて行く。私達はこの怪しいガレに導かれて、二時間餘りの苦しい登りを續けた後、一つの峯頭の突端に立つた。

恐ろしい荒廢と盛んなる偃松、この二つの矛盾したものが不思議に旨く調和された行手の光景に對して、私達は暫く默つて眺めてゐた。斯うなる迄には人間の短い一生などは、數限りも無く過ぎ去つたことであらう。そして恐らくは今も尙ほ人といふものを知らないこの大窓の頭こそは、どんなに自然の儘の荒けた姿をして私達を迎へたであらうか。私は日に何度となく谷にこだまするダイナマイトの響を聞いて、風雨氷雪の外には未だ曾て經驗したことのない此山に、更に新たなる破壞力の加はつたことを思ふと、此時寧ろ豫定を變更して其巔を窮めなかつたことが、大なる緩怠であつたやうな氣がしてならない。

横搦みに小窓へ出ることに決めた、ぐづ〳〵してゐては今日中にとても劒を上下することは出來ないと思つたからである。荷が無いので著しく足の早い長次郎達は、偃松の茂みに隱れたかと思ふと早くも右に延びて小さな尾根の上に頭だけ出して前を眺めてゐる。『どうだ、行けさうか』と後から聲を懸けながら漸く追ひ着いた。返事の無かつたのも無理はない、前は底も見えないやうな深い谷が三方を怖る可き絶崖に取り卷かれて、末端からは雪の瀑を小窓裏の大雪溪に奔注してゐる、としか想へない。殊に東の方七八十間の距離に聳えてゐる大窓の頭の最高點は、百五六十米突もあらうと思はれる

大峭壁を、其乳房狀に尖つた絶巓から直に削り落して、まるで赤煉瓦で積み上げた巨大なる殿堂の壁が猛火に燒け殘つた儘突立つてゐるやうだ。登ることは勿論横に搦むことも絶對に不可能であると事が極れば、反て恐ろしくも何ともない。安心して見てゐる中に峭壁の中央目八分の高さで何か動き出したやうに想はれた、瞳を据える間もなく突然大きな岩が拔け出して、其儘まつしぐらに遙かの谷底へ落ちて行く、ドーンといふ凄まじい響が脚の下から起つて、頭の腦天へ突き拔けたやうに感じた。無數の岩塊が跡からも〳〵止め度なく崩れて、谷の中は一しきり速射砲を釣瓶打ちに放つやうな音が鳴り止まずにゐた。『恐いのう、あの下に居たりや生命は無いぞ』、頓興な聲と共に金作は、腰の煙草入れを拔き出して先づ一服と尻を落ち付ける。

雪溪に下りて小窓へ登るより外に途はなくなつて仕舞つた。此處から眺めると小窓裏の雪溪は、上端を小窓の底部に開いて、表側よりずつと急ではあるが登りは樂さうである。然しあの崩石のとばしりが今から心配になる。『ナニ、瀑が幾つもあるから案じはねえ』。長次郎と金作が口を揃へて事もなげに打ち消してしまふ。長い偃松の中を潜りながら、枝から枝へ手足を托して體を運ぶのがなか〳〵厄介だ。硫黄の粉末のやうな黄色い花粉が烟のやうに舞ひ颺つて、息が塞る程苦しい。一度落ち込むと、ふつくり岩間を掩ふた青苔の陷し穽がする〳〵と腰のあたりまで引き入れてしまふ。頭の上では偃松の枝が手早く籠目を組むで、素知らぬ顏をしてゐる。一時間は過ぎ去つてしまつたが、私達は未だ偃松の痛い包圍から脫け去ることが出來なかつた。

これから何でも一の窪を下りて漸く偃松の重圍を脫した後、綱を頼りに崩れ易い側崖の鼻を廻つて、同じ崖續きの中腹に狹いが好い工合に人ひとり通る位は餘裕のある岩襞の上に出た。矮い栂や樺などの密生してゐる所もあれば、禾本科の植物が房さりと生ひ茂つてゐる所もある。岩襞はいつか自づと馬の背のやうな崖を形造つて、私達は其先端に小高く堆積した岩塊の上に立つた。脚の下には小窓裏

の雪渓が大きな熔爐から流れ出した銀の溶液のやうに輝いてゐる。ガラ〳〵した破片岩の堆積を蹈み崩さぬやうに注意して、一歩一歩崖を下り始める、何處を見廻しても赭茶けた峭壁がぐるりと取り卷いて、別に危險が身に迫つてゐるといふ譯ではないが、世を狹めた人の感ずるやうな重苦しい壓迫の手が恐ろしい力を持つて犇と押し寄せて來るやうな氣がした、長次郎はまたしても昨夜の夢を繰り返して薄氣味のわるいことをいふ。途中一ヶ所二丈許崖が抉れ込んで、稍や危險と思はれる塲所があつた、のり出した岩に裂目が多く且つ崩れ易いので長次郎も心配したが、綱に縋つて思つたより樂に下りられたのは嬉しかつた。其時長次郎は下の方に少し傾斜の緩い平地らしい所が見えたので、杖を投げ下ろしたが一溜りもなく下の谷底まで滑り落ちて了つた。

下るに從つて崖の面は岩の凸凹が少なくなり、手掛りや足掛りがなくなつたので、容易に動けない。夫でも長次郎は構はず眞直ぐに下りて行つた、金作と源次郎は左に搦んで少し茂つた木立の間に身を隱した。私達三人は立ち竦んだまゝ聲の懸るのを待つてゐた、暫くすると長次郎の姿が雪渓の上に顯れて、振り仰ぎさま『こつちやだ、〳〵』と呼ぶ聲が聞える、思ひ切つて其方に下りやうとする途端に左の方からも金作の聲が聞えた、どつちが樂さうだと聞いて見る。ひどい處だと答へたのが長次郎で、此方は樂だぞと答へたのは金作である。最初私達が下りた窪が絶壁の下で雪渓をなしてゐるのを見たが、今漸く其下手の横へ出られたのだ、然しこんな急な雪渓にはまだ出遇つたことがない、カンジキなしではとても下れぬ。三人が其處に腰を掛けて銘々に持つて來たカンジキを金作に穿かして貰つてゐると、下から長次郎が鉈で足塲を作りながら登つて來た、『如何だい、ひどい所だなあ』と南日君がいふ、『皆强いでまあ〳〵怪我がなくつてよかつた』と長次郎、金作は頻りに『折角旦那方を案内して來ながら劔へ行けなかつたのは濟まない』と氣の毒がる、『何に構やしないさ、明日また確り賴むよ』と南日君が慰め顏にいふ。

覺束ない足どりで急な雪溪を三十間も下ると小窓裏の大雪溪に出た、最早十一時を少し過ぎてゐる、劒へ登ることは諦めなければなるまい、荷物を一緒に持つて來て居れば、此處から小窓を踰えて劒澤の岩屋へ出るのが道も樂で近く、二時間半もあれば行かれるであらう、惜しいことをしたものだなぞと、身一つを辛くも此處まで運んで來ながら、喉元過ぎて熱さを忘れた私達は早やそんな贅澤なことを考へてゐた。空は何時の間にかすつかり曇つて、薄紫の霧が小窓の方からのろ〳〵匍ひ下りて來る、其中を縫つて高く飛鳴する岩燕の姿が影繪の如く消えたり顯れたりする。

此小窓裏の雪溪は表側に較べると廣さは其三分の一程もあるかなしである、其上兩岸の峭壁は殆んど一列の屏風の如くであるから、打ち開いた壯大の感には乏しいが、荒怪な氣に充ちてゐる。雪溪の下には幾所にか瀑布があるらしく、瓢箪の腰のやうにくびれた隘い口から箒の掃き目のやうな痕を印した雪の瀑をドッとなだれ落してゐる所が此處かしこにある。其一つだ、堆雪が刳れて岩壁との間に六七尺の隙間が作られ、其處から臼を挽くやうな音と共に一團の霧がむら〳〵と舞ひ上るのを見た。下へ廻つて覗き込むと暗い奥の方にたぎる水音が聞えて、冷い風が習々と顔を撫でる。雪の厚さは二丈餘りもあらう、夫が三四尺宛層をなして堆積してゐる、層と層との間には土や小石の混つた幅二三寸の汚れた雪の縞が織り込まれてゐる。此一つ一つの層が年々消え殘る雪の量であることは慥だ、恐らく下の部分或は寧ろ岩壁に接した横の部分が溶ける量の少ない年には、雪溪がずり落ちぬ爲に全體の殘雪の量が多く、其反對の年には少ないのであらうと思はれる、少くとも此小窓裏の狹い雪溪では、さう考へても間違はなささうだ。

大窓から續く雪溪との出合に達して、雪の上に腰かけながら例と違つて物足りない晝飯を濟した、此處には最う夥しい人の足跡が雪の上に殘されてゐる、私達も其足跡に跟いて右側の尾根に造られた新らしい道を登つた、二人の人足がせつせと道普請をしてゐる。途中横一文字に雪溪を截ち割つた二

つの大きな斷裂が望まれた、この裂目がある爲に道が造られたものらしい。暫くして道は雪溪に下りて左側の尾根に移ると登りが急にえらくなる、だれ切つた體にはこの登りが相應にこたへた、木立の中を通り拔けていつか向ふ側に廻る、此處でも五六人の人足が道普請に忙しい。左下に見えてゐた深い溪が次第に淺くなり、終には雪が消えてまだ間もない一つの窪のやうになると、道は其中を通つて眞黑に苔の蒸した岩塊の狼藉たる間を登つて行く、昨日降りた草原に出て、向ふを見上げると南日君と長次郎が薄い霧の中に立つて、用たしの爲に二十分も遲れた私を待つてゐた。

手早く荷物を纏めて、この殘惜しい野營地を後に雪溪を東に向つて下り始める、茫々たる霧は雪と溶け合つて、涯りの知れない鼠色の天地は、眼のあたり尺寸の間に限られて、五六歩の先に立つた南日君の姿さへ搔き消すやうに失せてゐる。雪の上には階段狀に足塲が刻まれ、其に沿ふて十間か十五六間毎に三尺程の鐵の杭を打ち込み、杭の頭には針の孔のやうに輪が造られて、夫へ彼の大きな岩から垂れ下げた鋼索が引き通されてゐる。『カンジキを穿いてあの雪の上をザク〳〵歩いたらどれ程愉快であらう』と、南日君と顏さへ合せれば口癖のやうに話し合つて、親鳥が雛を孵す時のやうに胸に育てゝゐた其樂みの萠芽も、この一條の鋼索と雪の上に印された無數の足跡とに依つて、未だ二葉ならざるにむざと蹂躙られてしまつた。然しこの大霧の日にこの大窓の大雪溪を下るといふことは、私達の萎びかゝつた增長心に可なりの昂奮と滿足とを與へたことは言ふ迄もない。

不意にものゝ氣配がしてハッと顏を上げる、シットリした重い霧の垂幕の中から、鑛石入りの小さな叺を背負つて腕組みをしながら登つて來る人夫の姿が朧ろげに現れる、もう鼻と鼻とが擦れ合ふ程に近寄つてゐる、互に挨拶の言葉をいひ交はして、一歩下りさま振り返つた時には、二人は既に永刧に隔てられてゐた。電光形の足塲は下るに從つて少しづゝ南へ振れて行くやうに思はれたが、終には一段高く積つた平な雪堤の上に出た、昨日大窓から見下した大懸崖の下に來たのであらうと思ふ、雪

堤はいつか南に向つて極めて緩かな登りとなつてゐる、此附近の雪量の多いことは實に驚く可きものであつた、雪堤の端に杖を立てゝ下を覗き込んでゐた南日君は、近づく私を待ちうけて『この雪を見給へ、壯んぢやないか』と顎を突き出して『如何だい』といつたやうな顏付きをする、いつか中央氣象臺の岡田博士が『內地で最も降雪量の多い所は越中劍岳の麓で、二丈も三丈も積る』と話した新聞記事を讀んだことがあるが、今七月下旬の盛夏の候でさへ其位は殘つてゐるのであるから、三四月の頃はこの倍以上もあらうと想はれる。私は『うん、壯んだな』と答へて暫く其壯觀に見恍れてゐた。この前劍へ登つた時連れて行つた人夫の春藏といふのが、よく『鼻頭かたれてあるくな』と言つては私達を笑せたが、今日程續けさまに鼻頭かたれて歩いたことは曾て覺えのないことだ。そして鼻頭かたれて歩くことも思つたより氣持の好いものであると考へた。恐らくわが生涯の憧憬の對象である山や谷は、登山者本然の欲望に驅られ、望む可くして容易に立ち入ることを許されない域にまで侵入することを大目に見て置いて、益其執念の募り行くやうに、そつと鼻頭かつたのではあるまいか。果して私は三たび大地を搖かして近く耳元に響いたダイナマイトの爆音に對してさへ、またしても鼻頭かたれたと痛快に感じた程とりのぼせてゐたことを後に氣が付いた。

右から頽れ落つる急な雪溪を横切つて、山腹に造られた新らしい道の傍の新らしい小屋の前に荷を卸して休む、昨日白兀の頂上から瞰下ろした道であらうが、大窓の雪溪から湧き上る濃い霧の幕は、對岸の山々を深く閉ぢ籠めて、其處に今どのやうな神秘劇が行はれてゐるのか、舞臺の片端をだに覗き見ることを許さなかつた、時折薄い霧の翼が汗ばんだ私達の額を撫でながら音もなく悠々と舞ひ連れて行く。

此道は小黒部鑛山の事務所まで山の等高線に沿ふて殆ど平坦に通じてゐる。おどろの霧の中から虛氣た顏をして出て來た私達は、薄日を浴びて暖かい黃な感じのする濶葉樹林の穩かな空氣を一口吸つ

ては、身體中に欝積した灰色の毒素を吻とゆるやかに吐き出した。頭が靜まると氣が輕くなつて足も自づと早くなる。山の鼻を幾度か廻つて二度三度雪溪を横切つた、最初の一つは五六丈の瀑が雪の洞穴からたぎり落ちて、また雪の洞穴に隱れる前に思ふさま躍り狂ふてゐる姿を見せた。樹は小さいが今を盛りに咲き誇つた山櫻の花蔭では、大伴の旅人も一枝かざして何か舞ひたいやうな氣も起る。雪消の名殘を止めた小石交りの斜面には、目も醒るばかりに鮮かな深山毛茛の群落に交つて、大櫻草のくれなゐが口紅濃やかな御達等の面影を偲ばせてゐる、其中に轉がつて見たいやうだ、この日頃嚴つい偃松の枝や荒い山上の風にのみ撫でられ晒されて、骨の髓までザラ〳〵に荒け切つた體には、斯うした溢れるやうな柔い色彩の感じは、最も懷しい者の一である。

ぐるり山の鼻を廻ると打ち開けた岩の多い緩傾斜の窪地に、入口を此方に向けて建てられた見窄らしい鑛山の事務所が現れる、其下の方にも二つほど可なりの建物があつた、飯場であらう。附近には大櫻草、南京小櫻、深山毛茛、大葉の黄堇などが、空疎ではあるが思つたより水氣のある地膚の所ごころを美しく飾つてゐる。筧の水をうけ入れた桶の中には、見事な山櫻の枝が無造作に投げ込んである。直ぐ側には下葉を摘み採られて莖の伸びた五六本の青菜がそれでも花を着けてゐる。米と味噌が少し不足して來たので、是非ともそれだけ買ひ入れる必要があつた、長い間懇願の末漸く『餘分に貯へてある譯ではないが、こんな山の中で御困りになつてゐるのを斷るのも御氣の毒であるから、米の五升位はお讓りしませう』といふ返事を聞いて安心したが、味噌の方は諦めなければならなかつた。家の中は片側が土間で、片側は板敷の上に薄疊が敷いてある、其奥は事務所であらう、隔ての障子が締め切つてあつた。一脚のテーブルが淋しく入口に据られて、煙草、酒など丶書いた傳票が散ばつてゐる、土間では色艶のよくない四五人の女が金鎚でコツ〳〵鑛石を選り分けてゐた。私は樽の底でも叩いて味噌を選り分けて呉れた方がどの位有難いか知れないのにと思つて情なくなつた。長次郎達は頻

りに鑛石の屑の中を引搔き廻して、これも水鉛よりは寧ろ立派に結晶した石英を拾ひ出しては喜んでゐた。

家の前の新らしい道を右斜に辿つて、岩間を走り出た豐かな水のだぶ〳〵流れてゐる窪を横切ると、左に折れて岳樺や深山榛の繁つた尾根をひたすらに急ぎ登つた。朽葉の殘骸を止めた粘り氣のある黑土は、たつぷり水を含んでつるりとよく滑る。一條の細徑が右に岐れて二三町の彼方に崖の中腹を穿つた暗い坑道の入口が二つ許り覗かれた。間もなく雪溪を渡ると草原を斜に稍やなだらかな道が私達を一の峠の頂上に導いた。偃松や小笹の茂みが霧の中に濃淡の陰影を織り出した堤のやうな尾根の上に立つて、其處らに散らばつてゐる草鞋切れや古新聞の屑など〻不思議な對照を表はしてゐる前面の光景に對して、私は二つの異つた世界を一度に見たやうな氣がした。

脚元から起つた大雪田は霧を吐くのか霧に吸はれるのか、曇りを帶びた鋼のやうに冷たく沈んだ色を見せて靜に霧の底に横たはつてゐる。それを匝つて山の裾らしい朧ろの線が、雪田の緣に固く凍み付いて上の方は有耶無耶に化けてゐる。茫漠たる雪の高原、すべてが灰色の冬で、すべてが寒さの權化である、纔に目に入る偃松の綠さへも蒼黑く凝つて、葉末からは垂氷のやうな雫が滴つてゐる、生命といつては微塵もない雪の白無垢に掩はれた墓原を眺めて、私は世の終りを見たと思つた、これが生ある者の一度でも足を蹈み入れたことのある場所であらうかとわが目を疑ひたくもなる、この荒寥たる池の平に再び『春』が訪づれて、彼女の墓を涙の雨に綠ならしむる時はいつのことであらう。

誰を見ても皆寒さうな顏をして、立つた儘碌に口もきかない、思ひ切つて雪田を下り始める、表面はザラメのやうに堅く凍つてゐるが、足が吸はれるやうで少しも滑らぬ。雪田の中央には二坪たらずの池がある、深さは一丈餘りもあらう、藍靛色の水が大きな渦を卷いて、よれ〳〵になつた奇怪な尾を伸ばしながら、雪の下で氣味のわるい音を立てる、半以上水に浸つた雪田の端は美しい瑠璃色に冴

えて、池の周りをぐるりと取り圍んでゐる。小窓の方面で二度爆聲が聞えた。

雪田を横切つて南に行くと、五六の巨岩が重り合つて水の落ち口を示してゐる、渦を卷いて雪の下に走り入つた池の水は、滾々として湧き上る潰泉の如くに一度に迸り出て、澎々と其處を流れてゐる。此溪流に沿ふて下れば劔澤へは近いのであるが、溪は頗る峻しい、殊に水量の多い時は困難で危險である。右に廻つて一段高い稍や平な窪地に登つた、道がある、枝の裂けた岳樺や膚のすりむけた深山榛の叢立ちは、殘雪に押し窘められてまだ生命の閃きを見せない、八九人の鑛夫が小窓の方からぞろぞろ下りて來た。此附近に野營して小窓から劔へ登ることを强く主張した南日君も、見るから寒さうなこの野天に天幕を張つて一夜を過すことだけは、餘り氣乘りもしてゐなかつたらしい、小窓を登ることは私も熱望してゐたが、この冷い物の怪に充ちた原中に野營することは思ひも寄らぬ、明日三窓を登つて時間に餘裕があつたら小窓へ廻ることに決めて、輝水鉛の露出した岩徑を傳ひながら小窓の雪溪に下り立つた。

雪溪は幅の廣い堤防狀の段を斜に幾つか形作つて、右から左へ左から右へと入れ違ひに緩やかな勾配でノヘホッと續いてゐる、表面をすべるふくやかな線のうねりが如何にも美しい。陽炎の樣な淡い水蒸氣が其上に輕く漂ふて、末は遙かに雲の中に沒してゐる。兩岸の岩壁は殆んど垂直に近い凄まじい崩壞面を見せたのみで、低く垂れた雲に掩はれてはゐるが、私達の心を惹き付けるには充分であつた。

下るに從つて崖は高くなり谷は狹くなつて、終には左からのり乘した山の裾で袋のやうに閉ぢられてゐる、――閉ぢられてゐるとよりは思へない、不安に騷ぐ胸を押し鎭めながら、脅かすやうに突立つた窄い岩壁の間を少し左に行くと、谷は俄然右に開けてまた長い雪溪が始まる。兩崖から崩れ落ちた岩屑や土くれで著しく汚れてはゐるが歩くには反て樂である。鬱陶しい霧や雲はもう遙か後になつた池の平のあたりをまだ暗く包むでゐる、何處かに日のさす氣配がして谷の空が明るくなつた。久振

りで濃い翠に紫の影をやどした針葉濶葉の混淆樹林が行手に顯れて來た時には、疲れに疲れた私の神經は不意に與へられたこの慰安の前に全く新たなる快よさを感じた。

三窓の大雪溪との出合に達して、尙も雪の上を二町程下ると雪溪は茲に盡きて、眞白に霧を吐く奔湍と雷のやうな瀨の音とが續いた、河原は次第に開けて樺の木立の上に屋根ほどの大きな岩が幾つか顯はれる、其一の南に面して砂地を抱へた大岩の根方が私達の今宵の泊場所劔澤の岩屋である。

痺れるやうな水に漬つて汗に汚れた體を洗つた、餘り冷いので一分間とも入つて居られぬ。下着を着換えてサッパリした氣持になつて歸つて來ると、賑やかな食事が始まる、變化に富んだ今日の旅もこれで終りを告げたのかと思へば、何だか不思議なからくりでも覗いて來たやうな氣がする。日はとつぷりと暮れて薄曇りのした空には、弱々しい星の光がそれでも冷たく冴え出した。皆より先へ天幕に這入つて工合のよささうな所へ横になる、うるさい程高い瀨の音もいつか眠を誘ふ子守謠のやうに快よく耳に響いて、それが次第に遠ざかつて行く、體が端の方から溶けて安らかな心臟の鼓動のみが殘る、私達の穩かな夢は靜かに枯草の枕を傳つて岩から小石へ小石から砂へと河原一面に泌み込んで行くやうに想はれた。この後幾年或は幾十百年の間に此谿谷を旅してこの岩屋に一夜を明かす多くの人の中には、懷ひを此岩屋に泊つたことのある前人の身の上に馳せて、其多感なる心と電流の如く交通するなつかしい夢の跡を偲ばうとする者がないとも限らぬ、其時こそ恐らく河原の砂や小石の一つひとつから強く印象された私達の夢の囁きを聞くことであらう。

七　劔　岳

七月三十日。午前六時十五分、劔澤の夜營地出發。三窓の雪溪を登り、八時十五分、三窓著。八時二十五分、出發。左に崖腹を傳ひ、直に急峻なる登りとなり、九時二十五分、三窓の頭に達す。此峯は長次郎谷の雪溪が最も右に分岐せる者の上に聳立

せる岩峯にして、峯頭二裂し、東南に向つて八ツ峯と稱する山稜を派出せるもの也。是より危岩錯立、登攀困難を極む。主として南側を搦み、十時二十分、長次郎谷の登路と合す。十時四十分、絶巓著。晝食。十一時四十五分、出發。十二時、長次郎谷の雪溪を下り始む。午後一時十分、劒澤の出合。劒澤を下り、二時十分、岩屋歸著。再び野營。

快晴の日、後立山山脈の雄峯鹿島槍ヶ岳――數多い日本北アルプスの山の中でも、殊に此山と黑部五郎岳との名が私には最も懷しい、そして最も快い響を與へる――の絶巓に立つて、西の方立山山脈を展望したことのある人は、正面に黑部川の大峽谷を隔てゝ右には仙人山、左には黑部別山が佛菩薩の金剛座下ににじり寄る怪獸のやうに蹲つてゐる其背を蹈まへて、壞裂した金字塔を押し立てゝゐる劒岳の右の肩から稍や斜に山腹へかけて、宛も天蟠たる白龍が銀鱗を輝かしながら昇天するのではないかと怪しまるゝ長大なる雪溪が懸つてゐるのを見られたであらう。其尾は丁度仙人山と黑部別山とが劒澤を擁してY字形に裾を交えてゐる中央に近い處で隱れてゐる。此雪溪は劒岳の南及東に面した山腹にかゝれる幾多の雪溪中の最も長大なるもので、劒の三窓に續く谷底を埋めてゐる所から、三窓の雪溪と呼ばれてゐる。私達は此雪溪を辿つて三窓から劒の頂上へ登りたいと思つたのである。

朝燒の美しかつた空はいつもと違つて雲が多かつた、黑部の谷からは絶えず薄い霧が奔騰してゐる、それが東の風に吹かれて眼の前に大きく立ちはだかつた黑部別山の半腹をもく〳〵匐つてゐる中に、眞黑に繁つた針葉樹林の木の間に吸ひ込まれてしまふ。しかし私達が晝食とカンジキの外は、一切の荷物を岩屋に殘して、早めに雪溪を登り始めた時には、霧の運動もしばらく靜穩になつてゐた。

河の左岸に沿ふて昨日の道を一町も行くと雪のある所に達する、こゝまでは近頃人が通つたものらしく新らしい足跡がある。振り仰ぐと脚元から起つた長大な雪溪は、怒濤の潮頭が白く碎けてッッーと汀を浸すやうに岩壁の根を流ひながら、三窓の凹所を目掛けてまつしぐらに谷を驅け上つてゐる、上つて視線の窮極に達すると、遙かの空際に三日月形の弧をくつきりと描いたまゝ其後に沒してゐる

が、弧の兩方の尖端は尙も上へと延びて岩壁の間に鋭く喰ひ込んでゐる、まるで白銀造りの冑の大鍬形を押し立てたやうである。小窓の頭の最高點から南に突き出して、三窓の北の窓枠となつてゐる大岩柱が、鍬形の右の內面に鮫の齒のやうに尖つた黑い頭をポツンと見せる。續いて五つ六つの峯頭が狼牙を刻んで、最後に挾蟲が尻を擡げたやうに雙鈎の尖りを對峙させた峯から始めて偃松の蒼黑い綠が、溶けて滴つて更に凝つて鮮かな綠を敷き延べた美しい若草の斜面に續く、深山毛萇、大櫻草、四葉鹽竈などの黃や紅の花が、もうひた〳〵と雪溪の側まで歩み寄つて、尖つた神經に寬ろぎを與へる。

左側の岩壁は一層尖り方が甚しい、大小幾多の峯尖が殆んど皆直立してゐるので、劒戟冲天の有樣を呈してゐる。雪溪の中央に立つて、この牙のやうに駢立して鋭く突立つた兩側の岩崖を見上げると、何かしらん地質時代の或る巨大なる動物が、胴體を地下に埋沒された苦し紛れに大きな口をカツと開いて、上顎と下顎とをむき出したまゝ化石となつてゐる其中へ飛び込んだやうな氣がする。風雨氷雪幾百萬年、肉の落ちた齦のあたりには、それでも幾種かの高山植物が纔に培はれてはゐるが、堅い硬い岩骨は恐らくは遠い未來まで、その悲痛な最期を語るにも似た凄慘な光と色とを失はないで、此三窓の雪溪の上に突立つてゐるであらう。

緩やかであつた雪溪は登るに從つて傾斜が次第に增して來る。私達は餘り物も言はないで足元に目を配りながら、思ひ〳〵の方向を取つて靜かに歩を運んだ。雪の表面は平ではない、波紋のやうな凸凹の外に雪溪の全體に亘つて河が合流する際に起る水脈のやうな大きなうねりがある、それが左右から中央に向つて一つに合するらしく想像されぬこともない。私達は多くこのうねりの痕に蹤いて斜に登つた。雪が溶けかゝつて表面が水氣付いて來ると上滑りがするので、眞直ぐに登ると足がこけやすい。この急な雪溪の途中で一尺跨いで八寸滑つて見せても、何の功德にもならないと思つた。

突然私達の行手に溪を横切つて大きな岩礁が顯れた、草書の『以』の字に似てゐる、丸く盛り上つ

た全溪の雪は四つに岐れて狹い口からドッと迸り落ちてゐる、構はず中央の最も急なものを勢ひ猛に登つて行く。此下は深い瀑だと先に立つた金作が敎へる。登り切ると雪溪は再び左右に擴まつて傾斜も稍や緩かになるが、息を繼ぐ間もなく前よりも激しい急勾配で全溪の雪が大なき堤のやうに高まつてゐる。一樣に平滑である斜面には、波紋のやうな凸凹はもう見られない。私は額を掠めて眞白に輝くこの瀧のやうな雪の高まりを振り仰ぎさま、暫く立ち止まつて目を瞠らない譯には行かなかつた。長次郎と源次郎が先に立つて登り出す、見たところでは格別疾いとも思はれないが、足が竦むやうで容易に跟いて行かれない。三人の中では比較的足の遲い金作の側を離れまいと努めても、一歩一歩に深い注意を拂ひながら、目の前に顯れた雪の上にちらと視線を投げて、刹那に足掛りのよさうな所を選んでは其方へ足を運ぶので、いつか横の方へそれて後になつてしまふ。この急坂で旨く滑ればあの岩礁までは一氣に轉げ落ちるから全く油斷はならない。南日君はと見ればいやに落ち著いて右の方を登つてゐる、實君は盛に鳶口を打ち込みながら一町許り下から登つて來る。ほんの一瞬間にこれだけの事實を慥めて、獨り取り殘されなかつた安心の胸を撫で下ろす。

漸く雪堤の緣に辿り著いて前面を見渡すと如何だらう、急直なること更に甚しい雪の洪濤が襲ひかかるやうにそゝり立つてゐる、先へ登つて早くも波頭に足を蹈み掛けた長次郎と源次郎の體が今にも仰向けに倒れるかと想はれた。鉛のやうに重い足を引摺つてやつと半ば過ぎまで登る、斯う暇取れては面白くない、カンジキを穿いて此急傾斜を一息にグン〳〵登つたら、どれ程好い氣持であらうとよせば好いのに、あたら時間を費して腰に著けてゐたカンジキを穿いて見る。今度は鉛のやうに重かつた足が鐵塊のやうに重くなつた。素知らぬ顏をして横目もくれず登つて行く南日君を驅拔いてやらうと思ふが、反て後れる許りだ。これまでカンジキさへ穿けば疾く登れるものと信じてゐたのは大馬鹿であつた、其馬鹿を今始めて三窓の雪溪で發見したのだ。しかしこんな急な雪溪を上るには、脚上體

なく脚下雪なしの妙諦に到らないとカンジキなしでは心細い、それを草鞋の儘で登つた南日君は、確にこの妙諦に片脚を突込んだ者といふてよからう。

長い〳〵雪溪は終つた、湖面を亘る蓮のやうな雪田を蹈んで二十間も行くと三窓の若々しい草の緑が私達を迎へた。珍車、岩黄蕃、深山鹽竈、青栂櫻、岩梅、雪間草、黒百合などの咲いてゐる中に交つて、深山小田巻草の花が薄紫の香を吐いてゐる。背後は谷が急に抉れ落ちて、危く根を下ろした偃松はべつたり崖に食ひついてゐる、底は見えやうにも餘りに深いのだ。

北には小窓の頭が四五十米突もあらうと思はれる將棊の駒を幾つか横に並べ、それを眞二つに截ち割つたやうな背面を谷の向ふ側に見せて、凄まじい赭色の大峨壁を懸け列ねてゐる。その一つ此窓の大岩柱は直ぐ目の前にがつしりと根を張つて、曇りを帶びた朧の雪が燻し銀の金具の樣に根元を飾つてゐる。最高點は其北に在つて赤錆びた圭角が鑿のやうに鋭い。南の三窓の頭はオベリスク狀の峯尖をいら立たせた一列の竪壁を礎と胸先に突き上げてゐるのが目に入る許りで、最高點は何處に在るのか見えやう筈がない。此の恐ろしい山を後に深い谷間を逃れ出た早月川の流が、富山平原を貫いて日本海に走つてゐる。

三窓の眺望は東に向つて『盡きない情緒の喜び』がある。其處には鹿島槍ヶ嶽が空翠濃かなる黒部の大谷の上、蒸し返す白雲を褥に懷しみのある鷹揚さを以て、威儀儼然と端座してゐる、藍緑の衣を綾どる數條の銀線のみは流石に冷たい光を放つてはゐるが。少し離れて南に祖父岳、北に五龍岳、唐松岳が眞先に進み出た嘆美者の如くに額を伏せて寄り添つてゐる。祖父岳のひだり目も遙かに續く雲海のたゞ中に、獨り青磁の香爐を捧げて天外の風流を樂しんでゐるのは淺間山であらう。

南に向つて偃松の間を縫ひながら草原を十四五間登つた。それから下り氣味に岩壁の根方を廻つて、片麻岩の大塊が古城の石垣のやうに孕み出したり脱け落ちたりしてゐる藥研を立てたやうな窪に衝き

當つた。掩ひかゝる岩の下を潜り拔けたり、緣にそつと手をあてがつて突き出した岩の鼻を後向きに通つたりして、草も碌々生へてゐない山腹を踰えると、赭茶化た破片岩の石瀧が個々の稜角を尖らして、互に嚙み合ひながら底なしの池ノ谷を目懸けて頽れ落ちてゐる。其上の高い岩の狹間から烟のやうな霧が下り始めたかと思ふと、見る間に四邊はぴつたりと鎖されてしまつた。

一しきり其處らを縺れ廻つてゐた霧がうつすり剝がれると、荒廢した急な山稜が石瀧の向ふ側に顯れる。瀧の緣に沿ふて靜に登つてゐた長次郎は、之を見ると直に其斜面に移つた、倔强な彼にもこの斜面を攀ぢ登るのは容易ではないらしかつた。三窓で僅か許りの記載をしてゐた爲に一行に遲れてゐた私は、石瀧を横切ると猶豫なく其斜面に嚙り付いて、遮二無二匍ひ登らうとしたが、頭上三尺の高さに垂れ下つた偃松の枝を捉へるまでに幾度かずり落ちた、一度は漸く捉へた枝が體の重みにポッキと折れて、仰向けさまに倒れやうとしたのを顏を地面に埋めるやうにして、危く免かれることが出來た。當藥龍膽、岩梅、栂櫻などが目先に寂しい花を綴つて霧に搖れてゐる。

矮い偃松を蹈み亂つて、ぼろ〳〵に岩の崩れた山稜を登つて行く、脚の下は霧の罩めた深いガレのやうだ。斯ういふ處では迷ふ氣遣ひもないが、どうかすると右にも左にも岩間を古苔の綿でふつくりと埋めた足觸りの好い平らな尾根が顯れて、一行を誘き寄せやうとする、そんな時に限つてうつかり其方へ足を向けた私達は、屹度長次郎に呼び戻されて、ひどい崖の横を匍はされなどした。私は其度毎に尾根の方に心を殘しながら、疑惑の歩みを續けることを餘儀なくされたが、霧の中にゆら〳〵と突立つた尖塔の突端に辿り着いて、此處が頂上だといはれた時には、四邊を見廻して外に取り付き端もない此尖塔に、不思議に迷ひもせず私達を引張り上げた長次郎の腕前に感心せずにはゐられなかつた。それは今始めての事ではない、曾て別山から尾根傳ひに登つた時は、今日にも增して遙かに濃い霧の日に、生路であつたにも拘らず少しも迷はず頂上に導いたのである。山に入つては自ら確めた上

でなければ容易に人の言葉を信ずることの出來ない私も、これにはすつかり我を折つてしまつた。

山稜は一曲して西を指すやうになる、生々しい赭色の大岩――尖つたのや角ばつたのが亂杭の頭を駢べて、音もなく流れ寄る霧の中に沒しては又顯はれる。私達は一昨日赤谷山の頂上から眺めたあの凄まじい岩峯の登りに懸つたのだ。斷崖の絶端から右の谷間を覗いて見るが、母體を離れた岩屑の薄氣味惡い音を霧の底に聞くのみで、眼に映るものは一樣に灰白の色である。左には長次郎谷の大雪溪が途切れ〳〵に姿を見せて、霧を吐いてはトツトと驅け下りて行く、怖ろしい敵から身を暗まして逃れるやうに。唯一列の嶄岩――或者は縱横に切りさいなまれて創だらけの胴體が今にも一片々々剝がれ墜ちやうとし、或者は堅硬な岩面に加へられた風雨の鑿氷雪の鉋に抉られ削られて、滑かな膚が鋭い菱角を尖らせ、伏すもの、峙つもの、横に長きもの、縱に平たきもの、紛然と入り亂れた上を、兩手に石を抱いておづ〳〵辿つて行く。偃松はどうに姿を匿してしまつた、いつも壞滅の岩間に纖細い根を下ろして、生の敎義を力强く宣傳してゐる麗しい高根の花、それさへも影を見せない。この酷たらしい山の殘骸！

しかしこんな光景も次第に目慣れて來た。崖頭が行けなくなると左に廻つて、岩間を塗り固めた雪の壁に鉈で足塲を刻み、其内緣を傳ひながら岩峰の横を搦んだりなどする。一度岩の狹間が相對して幅三四尺高さ一丈二三尺の峭壁を突き出してゐる處にぶつ付かつた、私達の立つてゐる岩壁の中途には約一尺幅の平らな段がぐるりと取り卷いてゐる、向ひの岩壁には斜に五六尺を隔てゝ夫よりも心持ち高いかと思はれる位置に厚さ五六寸大さ三尺に近い四角な岩片が附着してゐる、岩と壁面との間に裂目があるから附着してゐるとしか考へられない、其横には屋根ほどの大きな岩が傾斜の緩い好い斜面を此方に向けて擴げてゐる。私達は此の急崖の緣に孤立した岩壁の中途の段の上に立つて暫く躊躇した、南日君は狹間を下りて崖上りを試みやうとする。下りるのは左程でもないが登る段になると危

險であるから強いて留める。私は壁面に蝸付した彼の岩に飛び移らうかと思つた、これが低い方へなら五六尺は思ひ切つて飛べもするが、向ふが少し高いのであるから心配だ、其上人の重みであの岩が脆くも剝がれたら……、考へただけで止めにする。ドサッ！だし抜けに物音がしたので驚いて振り返へると、長次郎が早や屋根程の大岩の斜面に立つてニコ〳〵してゐる、岩は落ちなかつた、しかし彼の早業では落ちても心配はなささうだ。續いて金作が飛ぶ、源次郎が飛ぶ、猫も杓子も飛んだ。長次郎が大手を擴げて一々油斷なく引張り上げる。面白くなつて私達も飛ばふとする、金作が『旦那方に間違があつては濟まない、少し待つたぞ』と言ひながら、ずつと近く寄りさま雨膝を突いて身構へた、一尺下れば背後は絶壁であるとは其時知らなかつた。源次郎が右の方から金作の帶を確と握つて、片足を岩角にかけて反身になる、長次郎はしつかり〳〵と懸聲しながら矢張ニコ〳〵して樣子を伺つてゐる、『サア旦那、死なば諸共だ、旦那方一人や殺しやしない』金作が聲を掛ける。『諸共でも死ぬのは厭だせ、大丈夫かい』こんな戯談を云ふだけに餘裕の出來た私達は、小さな窪を目懸けて手足に吸盤を持つた雨蛙のやうに壁面に飛び付いた、同時に金作が兩腕を攫んで易々と次から次へと送つて呉れる、大岩の斜面へ出て皆ホッと緩やかな息を吐いた。

動もすると霧の中に姿を見失はふとする長次郎の足早いのに驚きながら、割合に樂な登りを續けて、小山のやうな巨岩の堆積を向ふ側に下ると、平な雪溪の上端に長次郎が休んでゐる、長次郎谷の下り口に來たのだ。この附近の岩は眞黑な色に苔が蒸して、偃松が綠の毛氈を敷延べる、其間に珍車が咲く、岩梅が咲く、さつきのやうに荒けた光景はもう何處にも見られない、丸で嘘のやうな感じがする。不用になつたカンジキは重いから此處に殘して、頂上を指して急いだ。

亂石の急階段を躍つて一歩一歩絶巓に近付く、此處まで來ると何とはなしに一種の親しさが胸の奥から湧いて、それがあたりの空氣と溶け合つて懷しい聲——山の囁きが心耳に聞えるやうだ、暗い不

安の影は幻のやうに消えて跡もない。山稜はいつか草と偃松とを粧ふた高原狀の緩い斜面となつて、眼の前にポーッと雪田が顯はれる、雷鳥が一羽それを横切つて向ふの岩蔭に雪白の翼をちらと覗かす。雪田はいつの間にか又私達を狹い山脊に導いた、巨巖の上を躋つて間もなく岩を敷き詰めた些やかな平らに出る、そしてそこに見覺えのある一本の標木と、三年越しの顏を合せた時には何でも構はず嬉しかつた。

茫漠たる霧は一度僅に五色ヶ原あたりの雪と綠とを垣間見せたのみで、終に再び開かなかつた、それも好い。私はあたり一面に算を亂して横はつた片麻岩の大塊、其一に軀を凭せたまゝ、眼はいつしか三千米突の天空に今年のこの夏の唯一日であるかの如くに今日を矜つてゐる高根の花を趁ふて、その純なる姿にうつとりと見入つた。花は何か歌つてゐるのではあるまいか、さうだ、大地の偉大なる力の其一の表象である永遠不滅なる山の生命！それを歌つてゐるのだ、遠い過去の生涯の悲み――それが何であつたにもせよ――を忘れて、現在の喜びを歌つてゐるのだ、自然の微妙なる耳を除いて、幸福なる山の囚人のみがこの歌の心を體得しうるのではあるまいか。誰れを見ても皆樂しさうな顏をしてゐる、若し人が何かの折に飾りなき自己の心を見出し得る場合がありとすれば、今が絶好の機會である、悲みを忘れ痛みを忘れ、純潔と慰安とを抱いて、雪に埋もれた火口の如くに心は沈默の底に靜に横はつてゐる。私の目は涙を催した、そして油然として湧き來る遠く離れた親しい友の身の上を懷ふの情に堪えなかつた。劔ヶ岳の絶巓！私は此絶巓に三度幸福なる足跡を印するの日が遠からざらむことを心に盟つた、それに何の不思議があらう。

早晝飯を濟して其處らを歩き廻つた、岩窟へも下りて見た、そして登山した人の名刺を新らしい紙に包み直して新らしい罐に入れた。衆ては早月川方面からの唯一の登路である可く思はれた尾根――早月川の本流と白萩川とに挾まれた――と絶巓との續き工合を探る積りであつたが、霧が深いので止

めた。しかし白兀の頂上から雙眼鏡で望み見た樣子では、尾根と頂上との連絡點附近が稍や險惡なる塲所であるが、其處には多量の雪が懸つてゐるから、登るに骨は折れまいと思はれた。果して所見の通りであれば、尾根傳ひに劒へ登る路の中では、これが一番安全な路で、多少の風雨多少の荷物があつても危險はなささうである。

別山裏の野營地附近から尾根傳ひに大窓へ出るには、少くとも十五六時間を要するものと思はなければなるまい。最少限に見積つても別山乘越から劒の頂上まで三時間、頂上より三窓まで二時間半、三窓より小窓まで二時間、小窓より大窓まで六時間、合せて十三時間以上を要するであらう。別山方面の登路は、平藏谷の雪溪の上部を環る長い岩壁を辿るのが尤も危險で、惡い塲所が三ヶ所程ある。岩壁に取り付くまでゐも、突き出した岩にちよいと體を打ち付けた反動だけでも刎ね落されさうな足塲の惡い急崖を絶えず横に搦まなければならないから、恐怖心と油斷とは此塲合絶對に禁物である。一山を上下するに此の如き險惡なる山稜の長く續く所は、唯一の穗高山を除いて、南北日本アルプスにも類はあるまいと思ふ。

直ぐにも出發して元の路を三窓に引返し、山稜を傳ひて小窓に出で、逆に當初の目的を遂行しやうと强く主張する南日君をなだめて、長次郎谷の雪溪を下ることに同意させるには、劒へ登るよりも骨が折れたので、南日君が澁々とカンジキを穿いて雪溪を下り始めるまでは、其行動から目が放されなかつた。私も小窓へ廻ることには大に心をそゝられたのであるが、夫よりも長次郎谷を下つて見たいといふ望みの方が少し强かつたのである。

驚いたのは雪溪を下る際、源次郎は仁王立ちに突立つたまゝ、輕く杖をあてがつて、あの急峻な雪上を一氣に二三百尺宛も滑り下りた手際である、或は足際といふ方が適當かも知れぬ、夫にも拘らず見て居て少しも危氣がない、而も進止自在である。私達は勿論、流石の長次郎もこれには驚嘆の聲を

洩らした。あの勢で下つたなら恐らく二十分ならずして劔澤に達するであらう。後で聞くと雪溪を上下したのは今度の旅行が初めてゞあるといふ。滑稽であつたのは、長次郎が一足餘分にあつたカンジキを草鞋切れの紐を拾つて無造作に絡げつけ、よた〳〵しながら下りたことである。長次郎がカンジキを穿くのさへ少しく滑稽の感があるのに、その風體が可笑しいので皆笑つた、自分でも笑つてゐたやうだ。私達は初の間はよた〳〵下りて行く長次郎にさへ續けなかつた。しかし此四日間一日として雪溪の登降を缺かさなかつた練習の効果は漸く顯れて來た、面白いやうに驅けられる、中にも南日君の如きは脫兎の勢である。途中大きな斷裂が雪溪を半ば横切つて、斜に奥へ八尺許の口を開いてゐる下の緣に佇んで、雪から滴る水を飲みながら一息入れる。純白なる雪の斷面が水淺黃に冴えた色の美しさ。此裂目はいつも七月下旬になると深く全溪を横斷して顯はれる爲に、少なからず登降を阻碍するさうであるが、今年は雪が多いのだと長次郎が說明する。少し下ると私は紐が切れたのでカンジキを手に持つて驅け下りた、三四回滑つて兩足を宙に投げ出したが、手に提げたカンジキが其度毎にグサと雪に刺さるので、苦もなく止まることが出來た。今迄に此雪溪を下つた人の數は少なくはあるまいが、手にカンジキを穿いて下つたものは、多分私一人であらう。蓋し源次郎の偉大なる滑走と共に特筆大書す可き空前の壯擧たるを疑はぬ。

六人十二本の足並を揃えて劔澤の雪溪に滑り出た、いつの間にはづしたか誰れもカンジキを穿いて居らぬ、金作が腰の煙草入れを拔き出して、歩きながら雪溪を煙に捲く。今日は實に面白い日であつた。『これだから山登りは止められない』誰かそんなことを言ふ。私達が絶えず口にする登山の趣味といふことが、朧げながら長次郎達にも解せて來たやうである、それが又嬉しかつた。

雪は何處までも續いてゐる。長次郎谷の出合から二三十間下ると劔澤が三四丈の瀑をなして雪の下に狂つてゐるのが、岩壁の横合から瞰まれる。急な下りに向ふと私達は源次郎の眞似をして、立つた

儘滑り下りる稽古をした、幾多か筋斗打つて倒れたが、稍や慣れて來た頃には梯子坂の落口に着いてゐた。雪は尙ほ二三町の下流まで續いてゐたが、厚薄不定なので上は歩かれない、左岸の雪田を蹈んで更に二町許り下ると雪は茲に全く盡きて、徒渉四回の後、岩屋の前の河原に辿り着いて大きな岩の上に攀ぢ登りさま、再び三窓の大雪溪を濃い綠と冴えた綠との入り交つた山の裾越しに仰ぎ見た。

此河原は周圍を峻しい山々に取り卷かれた峽谷の中としては、思の外に打ち開けた處で、劔澤は南のはづれを一段深く穿貫してゐるから、恰も河成段丘のやうな觀がある。水楊や樺や大虎杖などが茂りに茂つて、こゝは若々しい靑葉の綠が流れてゐる。南に面した岩屋の背後は東側が四五尺の高さに深く刳れて、十餘人は樂に泊れる洞窟を形造つてゐる。稍や薄暗い感じはあるが如何なる暴風雨をも凌ぐことの出來る完全なる泊塲所である。更に其奥の方にも四五人は泊れる岩窟があるさうだ。長次郎が何處からか山獨活と根曲り竹の筍を採つて來る、晩にそれを味噌汁に作つて香りの高い豐脆な味を賞美した。暮方の空は靑く澄み初めて、夜は滿天の星が痛いやうな光を投げ出す、折々流星が長い尾を曳いて黑部別山の上を飛んだ。（未完）

中村君の話に據ると、音澤村の佐々木助七は吾々が劔澤と稱してゐる澤のことを西五稜（宛字、吉澤君に據る）の澤と呼び、小窓三窓兩溪の合流北股（吉澤君に據る）を劔澤と云ひ、之をツルガザワと發音してゐるさうである。由て思ふに大山村の人夫が鶴ヶ御前（宛字、登山地圖劔岳號參照）と稱するは即ち劔ヶ御前にして、元と劔岳の尊稱であつたものが、いつの間にか轉移して其前面に續く二千七百七十六米突の峰名となつたものであらう。

雜錄

淺間山より男體山まで

山　岳

曾てこんな事を想像して見た。

『二月より四月。此頃晴れたる日には四方の山能く見ゆ、富士筑波はいふも更なり、秩父、淺間、赤城、日光の山々まで鮮に見え渡れり。塲所は駿河臺、牛天神、愛宕山、道灌山などよし』

などいふやうな二三行の文字が、若し東都歳事記とか又は江戸遊覽暦とかいふやうな本の何處かの欄に發見されたとしたならば、吾等山岳宗徒は如何に驚喜の目を瞪つて、之を再讀三讀したであらうかと。

實際昔に在りても數多い人の中には、山を見て樂しんでゐた者が尠くはなかつたであらう、唯だ惜むらくは詳しい記事が吾等に殘されてゐないのである。然し其種の記事が絶無といふ譯ではない、内閣文庫所藏の村尾正靖の嘉陵記行（近頃此書は江戸叢書第一卷の中に收められて、江戸叢書刊行會から出版された。）を見ると、必ず各所から眺望される山名が記載されてゐる許りでなく、わざわざ桶川まで淺間山を見に出懸けた事さへ記してある。（尙別項『嘉陵記行』を參照されたい。）自分は之を讀んでこの隔世の同好者を懷しむの情に堪えなかつた。斯樣な熱心家は別としても、江戸から見得る山の事を書いた本は決して乏しくはない。江戸名所圖會は、道灌山から日光の山が見え、柳島の妙見から秩父山が見えるやうに書いてある。墨水遊覽志は眺望の遠山を擧げて『筑波山、二荒山、赤城山、榛名山、秩父山、高尾山、雨降山、足高山、箱根山、富士山、以上十山なり』としてある。文化十二年版の武藏野話は卷首に『武藏野は十郡に跨りて、西は秩父根東は海北は河肥（川

越）南は向が岡都築ヶ原にいたるとなん、東北に筑波山北に二荒山、赤城山、吾妻山、西北に淺間山、西南に多摩山、不二山、箱根、大山を眺め、東に山を見ざるのみにて、曠々たる高原の地なり』と記してある。更に遡つて江戸開府より十年とは後れてゐない三浦淨心の慶長見聞集には、次のやうな記事がある。

吉祥寺門前に草木佛事をさえづる事

見しは今江戸吉祥寺の境地在家離れたる古跡、此住持洞谷禪師と申て、法令世に超へ釋迦達磨の變化かと沙汰せらる。或日愚老此寺へ參詣せしに、人倫たえたる閑居物さびたる異地、山高うして上求菩提をあらはし、谷ふかきよそほひは下地衆生を表せり。四神相應の地をしめし、後に淺間山日光山そびえ、東に筑波山、西に富士山箱根山軒端につらなり、和光の影に曇りなく佛法を守護し給ひ、月眞如の光をかゝげ、前には生死の海まん〳〵として波煩惱のあかをすゝげば、無始の罪障も消滅すると覺えたり。（下畧）

都人待乳山一見の事付宗齋事

（上畧）扨又宗齋江戸にて、もろ人の山の詠をしらざるや、見渡せる山々には、安房にもとな山、上總に鬼海山（一本鬼涙山）、下總に海上山、常陸に筑波山、下野に日光山、越後に三國山、信濃に淺間山、上野に赤城山、甲斐に白根嶽、相摸に箱根山、伊豆に御山、駿河に富士山、此十二ヶ國の名山なり（一本なりをを作る）武藏二十一郡のめぐりにたて、軒ばに立て『武藏野もさすがはてなき日數にや富士のねならぬ山も見ゆらん』と宗久法師はよみ給ひぬ。云々。

吉祥寺は其頃今の本郷元町の高臺に在つたのであるから、眺望の好かつたことは勿論であらうが、淺間山や日光山が見られるなどは嘘と思ふ人があるかも知れぬ、然し同じ本に『昔は江戸近邊神田の原より板橋まで見渡竹木は一本もなく皆野らなり』とあるから、眺望の廣濶なること推して知るべしである。尙ほ閑暇に任せて渉つたならば、或は多くの材料を蒐めることが出來るかも知れないが、夫は他日に讓ることにして、茲には自分が本

◎雜　錄　淺間山より男體山まで

誌十年一號に載せたスケッチに就て、少し許りの説明を加へたいと思ふ。

東京から見得る山の中で最も遠いのは、今の所では越後の苗場山であらう。北越雪譜の著者鈴木牧之君は、苗場山に遊ぶの記を書いて、其中に『爰に眼を拭ひて扶桑第一の富士を視出だせり、其樣雪の一握を置くが如し、人々手を拍ち、奇なりと呼び妙なりと稱讃す』といふてゐるが、其時若し江戸の友人であつた曲亭主人から、『苗場山は江戸の近郊赤羽臺といふ所より望むに、其樣俎の片足無きが如く、そゞろに奇と呼び妙といはまくのみ』といふやうな通信でもしたならば、牧之君は夫こそ手を拍つて、どんなにか喜んだ事であらうと思ふ。苗場山に次で遠いのは大井川奥の聖岳、信州の岩菅山といふ順である。夫にしても苗場や岩菅などは、二千米突を超ゆること僅に百か二百米突に過ぎないに拘らず、關東平原の一隅に位する首都東京の市中から、啻に頂上の一部ばかりでなく、殆んど中腹まで望むことが出來るのは、低い前山との距離が近い割合に、前山と東京との距離が遠い所爲であらう。吾等に取つては勿怪の幸である。

東京市中又は近郊から山を望む好季節は、二月から四月稀に五月上旬迄である。其他の時季では如何に好晴の日でも、遠い山を識別することは困難である。而も好く晴れて少くとも北西の風速八九米突を超えてゐなければ、地平線上に鬱積せる煤烟を一掃することが不可能であるから、從つて遠い雪の山は望めないことになる。二月は強い風の吹く日は多いが、其頃は未だ山といふ山に雪が降るので、得て雲が懸り易いから、容易に全容を曝露するに至らぬ。櫻の咲く三月下旬から四月にかけて好く晴れた日に、強い北西の風が都大路の塵を吹き立てゝ、浮かれ心地の花見客が顏をしかめるやうな時こそ、吾等には斷じて見逃すことの出來ない好機である。殊に此頃は前山の雪が消えて遠い山だけ白く殘るから、紛糾した尾根が明瞭に識別され、重り合つた糸のやうに細い雪線すら手繰り出すに困難でなく、化の皮を剥ぐに尤も都合が好い。自分がセバト川の上流に蟠るセバト連嶺（假名）から、苗場山を識別し得たのは丁度此

頃の風の强い晴れた日であつた。

秩父の群峯は東京から西望すると、鐵兜を伏せたやうな形をした武甲山を最後として、最早千米突以上の山を崛起しない。夫からは八九百米突の山が一段低く連なつて、高原狀を呈してゐる。若し東京の地が何かの變動で八百米突も隆起したと假定すれば、此連嶺の上に常念山塊あはよくば鎗ケ岳の尖頂をも望み得ることであらうが、今に於ては北アルプスの一座をすら見る由も無いのは甚だ遺憾である。此連嶺の北端には處女の乳房によく似た笠山が聳えてゐる。舞臺は之から始まるのである。

明治二十九年の六七月頃であつたと記憶する、雜誌太陽の第二卷第拾貳號の地理欄に、當時學士であつた山崎博士の『飛烏山頭の眺望』と題する文が載せてあつて、中に田端から遠望した『赤城山から日光の赤薙山まで』の畧圖と、赤羽臺續きの袋村の崖頭から見た『淺間山から赤城山まで』の畧圖とが挿入してある。當時の拔萃帖を探つて其中の一節、袋村の崖頭から望んだ說明の文を左に抄錄する。

◎雜　錄　淺間山より男體山まで

榛名赤城兩山の間に當り、更に遠く亦圓錐形の孤山を認む、是れ子持山にして亦消火山なり。子持赤城の間なる谷は即ち關東第一の大河坂東太郎利根川の注ぐ所にして、東京より北越新潟に達する國道此間を通ず。其遙かに見ゆる山嶺は沼田以北の諸山にして、彼の國道は此を踰え、所謂清水越なる坂路を造る。此山嶺は子持山の後より左（西）に連り、榛名山の遙か後方を過ぎ、其左に現る、信越上三國の境なる三國峠は其恰も榛名に隱るゝ邊にあり。此一帶の山脈は實に本邦の脊梁を構造せる一大山脈の一部にして、太平洋と日本海の間に立てる分水嶺をなす。陽春四月榛名赤城は既に靑黛色濃かなるも、此等の山嶽は猶皚々として白帽を戴くを見る。（中畧）榛名の左を見れば峨々たる奇峯あり、上毛の奇勝妙義山即ち是なり。妙義の西に當り淺間山あり。（中畧）淺間妙義の前面に當り綿亘せる山嶽は、甘樂秩父の地方に蟠るものなり、其峯頭稍高きものを御荷鋒山と荒船山とす。（下畧）

自分は多大の興味を以て此記文を讀んだ一人である、そして東上州に生れて日夕此等の山を望見してゐたので、多少推定が誤つて居りはせぬかと疑つた點もあつたが、精確な地圖としても無く、亦少數の外は山といふものに興味を持つた人も無かつた時代に、これだけの文を發表して世人の注意を惹き起されたのは、流石に山の研究に熱心な博士だけあると首肯される。然し恐らくは其當時此文に感興を持つた人は、矢張極めて少數であつたに相違あるまい。自分が本誌十年一號に臆面もなく彼の拙いスケッチを載せるに至つたことも、半は博士の此文に刺戟された爲めであるといふてよい。

笠山の北には口元秩父の山々が、更に一段低くなつて遠く北方に走つてゐる。此連脈の殆んど中央に當つて上信國境の淺間山が、裾さばきゆたかに玲瓏玉の如き姿を顯して西上州の野に君臨してゐる、南を取り卷く雪堤の如き隆起は、劔ヶ峯から牙山に連なる外壁の山々である。淺間山の三角點は丁度頂上の左の肩の突端に位してゐる、即ち二千四百九十三米突の地點で、絶頂より五十米突ほど低い。五月頃になると雪が村消えして、玉の膚にも奇怪な竪縞が幾つか現れる、東南面が殊に甚しく、中にも彌陀ヶ城岩のあたりに現れるものは、濃藍色の帶のやうに幅が廣い。淺間と笠山との間に低く頭を擡げてゐるのは、地質の上から名高くなつた御荷鉾山の連嶺である。凌雲閣から望むと西御荷鉾は笠山に隱れて、東御荷鉾の頂上から右の斜面へかけて見えるだけだ、愛宕の塔からは淺間山しか見えない。山崎博士が荒船山と推定されたのは或は雨降山の事であつたかも知れぬ。

アソといふ語は馬來語？の火を意味する言葉で、阿蘇淺間は皆同一語原から來たものであるといふやうな記事を何かで讀んだことがあると覺えてゐる。果してさうであるとすれば、富士山の淺間神社なども、今は木花咲耶姫を祭つてゐるが、其本體は火山を崇めたものなのであつたらう。そしてフジはアイヌ語の火を意味する語であるさうだから、アイヌ語の富士は山の名となり、馬來語の淺間は神社の名となつて、センゲンと音讀され、

茲に富士淺間大明神なる熟字が出來上つたものであらう。上信界の淺間山なども昔の人が火を崇めた習慣からでもあらうか、隨分古くから可なり多くの登山者があつたものらしい、當代記慶長三年四月八日の條に次のやうな記事がある。

一、淺間山へ參詣衆八百人程燒死云々

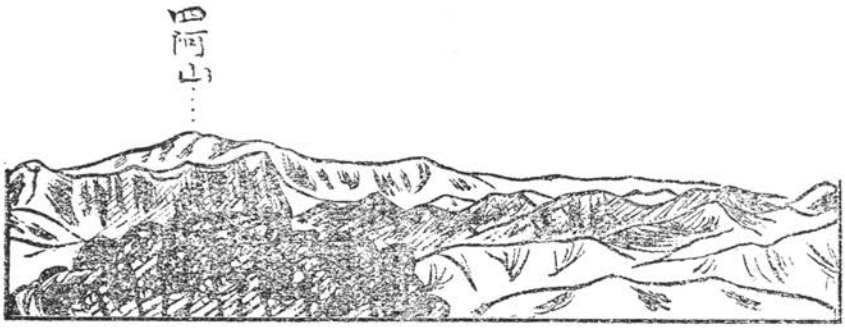
昨日大小ノ違ニテ不緣日ノ由山巓ニテ呼ト云ヘトモ只人間ノ所謂也ト心得不用ノ參詣ノ處如此

當時富士山が噴火したといふ記錄はないやうであるが、之に反して淺間山は二三年來盛に活動してゐたらしい證據がある、天寛日記にも

慶長二年三月朔日淺間山噴火

慶長四年二月廿日淺間山鳴動

などの記事があり、其他當代記慶長年錄等にも同樣の記事が見えてゐるから、淺間山へ參詣衆とあるのは富士の淺間神社へ參詣したのではなく、上信界の淺間山へ登山したものと見て差支ないやうである。之等から推しても我國の登山の歷史は可なり古くから始まつてゐることが知られる。



淺間の北には長大な四阿山が大魚の背を浮べたやうに横はる。碓氷峠から北に續く連脈は、一之字山、千五百九十突の一峯、鼻曲山、八栗山の劔ヶ峯、角落山となつて、四阿山脈の下に紛糾してゐる。殊に三段鼻の形をした鼻曲山は、雪の白い四阿山の直下に藍色の影となつてへばり付いてゐるので、識別するに困難であるが、白い雪の山が隱れると、急に鼻を尖らしてのさばり出す。山崎博士は

之を上毛の奇勝妙義山と推定されてゐるが、東から眺めた妙義の三山は形に於て大なる相違がある許りでなく、妙義も荒船も御荷鉾の連嶺に隱れて東京からは望まれない。

鼻曲山の直ぐ右に續く二峯は、霧積温泉の北に聳ゆるもので、南麓に懸る二三の小瀑布が温泉附近に景致を添えてゐる。角落山と劔ヶ峯との間に見ゆる一峯は、淺間隱の南方に在る千五百二十米突の地點であらうかと思ふ。角落山は頗る急峻な山で、頂上には角落權現が祭つてある、所謂天狗樣だ。土人は之を尊崇して登拜者は木刀を奉納することになつてゐる。

淺間隱といふ名は、大群山に富士隱の名がある如く、榛名山の西麓萩生、大澤、長井などの村民が便宜上呼び慣してゐたものが、其儘山名となつたのである。此山は東南の方向に狹い頂上を展開してゐるので、東京からは眞竪に望む爲に鑿のやうに鋭く尖つて見えるが、少し東北から眺めると可なり秀麗な富士形を呈示する。右の肩の三峯は北に續く主脈中の千六百米突前後の隆起である、

其右には更に千四百七十三米突の頂の平な峰が續く。此脈の最北端に位する寒峯(大洞山とも稱す、高さ千四百七十三米突)は、笹塒山の右に尖頂を現してゐるが、スケッチに此二山が聯絡してゐるやうに畫いたのは、其當時識別することが出來なかつた爲である。

淺間隱から東に走る尾根は、角落山の東の尾根に遮られて、前記の千四百七十三米突の峯の右に千四百十米突の峯が初て姿を顯はしてゐる。其右は即ち笹塒山である。四阿山から北に走る上信國境の山脈は、一度淺間隱の後に沈下するが、其右には三つ許の峯頭を白く見せて、笹塒山の上に一座の雄峯を崛起する。此峯はいつでも影の樣に藍色を呈してゐる。或は黑湯山ではないかと思つたが、容易に白い斜面を見せないのは、山を縱觀する爲であらうから、恐らく御飯岳に相違あるまいと思はれる。此山は極めて稀にしか姿を顯はさない。

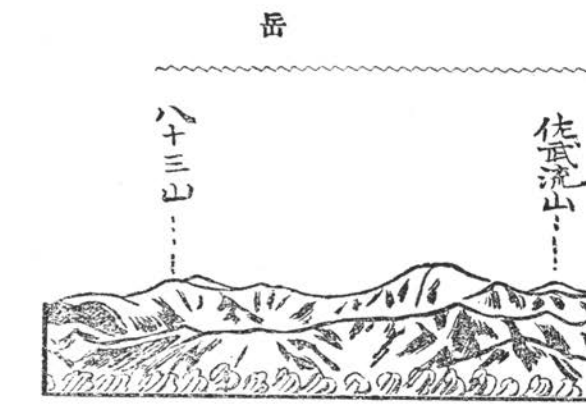
白根火山塊は皺襞の甚しく錯綜した、夫でゐて何處かゆつたりした處のある氣持の好い山だ、裾野がよく見渡される所爲であるかも知れぬ。山塊

の中央に當つて一と所裾野の色が雪の上に大きく紫インキでも潑した樣に美しく染つてゐる、これはモノヌギバの池の下手に在る針葉樹の大森林であらう。北端の最高點は横手山、其左下の峯は二千二百米突の地點、此二山の間を澁峠の舊道が通じてゐる。峠から横手山の頂上まで四十分で行かれる。白根山へは葭ヶ平の一軒茶屋の手前から左に細徑を辿つて、最高點の地藏岳でも下駄履きで草津から樂に日歸りが出來る。山崎博士の略圖には淺間隱も白根山塊も描かれてあるが、共に山名は記載してない。

白根山塊の東に横はる群巒は、上毛三山の一に數へられてゐる榛名火山である。中央火口丘の榛名富士は榛名湖の東に聳立して、其前面（南）は平な高原をなしてゐる。相馬山は一に黑髮山とも唱へて、頂上には御宮が在る。富士と其北に位する烏帽子山（スケッチでは此山が恰も相馬山の突起のやうになつてしまつた）との間からは、上信界の大高山（二千七十九米突）がちらと覗いてゐるが、更に高い前岩菅山が後から重つてゐるので、見分るのが困難である。裏岩菅山は赤羽臺の東端からは、相馬山の尖頂に巓を遮られるが、五六町西の方へ行けば、比較的平な頂上が相馬の西に現れる。淩雲閣ならば殆んど烏帽子山の眞上に望むやうになる。相馬山の右の斜面に寸白を露はした岩菅の山脈は、二ッ岳の右に長大な烏帽子岳を起して、其最高點は八間山の眞上に重つてゐる。

八間山の西には恐らく火口原に潴水したものではないかと想はれる野反池が在る、草津から日歸りに行けるさうであるが、遂に探る可き機會を得なかつた。八間山から右に見える尾根は、鍋を伏せた樣な形をした千九百四十米突の一峯を起して八十三山に續いてゐる。スケッチの八十三山は誤りで、其左の突角が夫に當つてゐる。八十三山と記載した高い方の突起は、其山の直ぐ北に聳えてゐる二千百二十米突の峯頂であることが後に判然した。此附近から右の方苗場山に至る迄は、木戸山の連脈や其他幾多の前山が縱横に起伏して、縺れた糸のやうに入り亂れてゐるので、どの尾根がどの山に續くものか、遠方からは到庭識別するこ

◎雜　錄　淺間山より男體山まで



浅間山より男體山まで

とが出來ない。

八十三山の一峯とも見る可き二千二十米突の地點から尾根は一度低下し、上信越三國の境に至つて、一座の雄大な山を聳起してゐる、即ち白砂山である。古くは稻包山が上信越三國の界と信じられてゐた。それで其東の國道に三國街道の名が與へられた譯であるが、これは實地を精査しなかつた爲の誤りであらう。四萬圖幅には三國街道の東北に千六百三十六米突の三國山が記載してあるが、其謂れを知らない。白砂山の右下に重つてゐる一峯は木戸山であらう。白砂山と上ノ間山との間で尾根が二つ許り波を打つてゐる、其一で上ノ間山の左に在る峯の上には、濃い藍色の影が鮮に望まれるが、之は二千百九十一米突の佐武流山である。佐武流山から東南に延びた尾根は、清津川の上流に近く二千八十米突の岩峯を崛起してゐる、上ノ間山の右の肩から覗いてゐる峯が夫であらうと思ふが、これは頗る怪しいものであるから疑を存して置くことにする。

上ノ間山から尾根は北方に延びて二千八十米突の尖峯となり、更に二千百二十米突の長大な峯を起して、大黑山で終つてゐる。其前には千八百米突を超えてゐるセバト連嶺が南北に足を伸して、南は木戸山に北は遠く笥山に連なつてゐる。此連脈の山々は孰れも記錄を有してゐないといふ點に於て處女の山である。自分も實際に蹈査した譯ではなく、曾て赤城山や榛名山に登つた時、遠く展望したに過ぎない、其上東京からは形も大分異なつて見えるから、右の斷定が皆正しいとは思はぬ、然し大體に於て甚しき誤りはないと信じてゐる。

此連脈は畧ぼ西南より東北の方向に走つてゐるので、午前と午後では山貌に著しい變化を起すのが特色である。午前には日を正面に受ける爲に、横に派出された小尾根も谷も、唯だ一樣に穩かな雪の斜面を見せて、凸凹などは少しもなく極めて平滑なやうであるが、日が西に傾くに連れて、横尾根の日蔭になつた半面と谷とが、濃藍色の太い竪縞を山の肌に織り出し、而も明暗の境界線がレムブラントのエッチングのやうに鋭い。何の奇もない穩かな山であると思つてゐたのが、忽ち骨だらけな矹々した山と變つて行く。其變化の樣を靜に觀てゐると堪らなく面白い。

セバト連嶺は大黑山の下に千八百二十米突を超えてゐる長い頂上を展開した後、一段低くなり、更に二つ許の峯を小野子山の上に擡げてゐるが、其平な頂上が將に低下しやうとする所から、稍圓味を帶びて殆んど直線に近い空線を描いた一座の山が、前記の二峯の上にのり出してゐる。この特異の相貌を有する山は、曾て赤城山から眺めて見覺のある苗場山に相違あるまいと思つたのであるが、未だどの山にも雪の多い二三月の頃には、恰もセバト連嶺と一脈の峯頂であるが如くに連續して、到底識別することが不可能であつた爲に、奇異の感に打たれてゐたのみであつたが、更衣の時季も近い五月中旬に前山の雪が殘りなく消えて、此山獨り白妙の衣に包まれてゐるのを見た時、始めて苗場であることが慥められた。苗場の右下で小野子山と子持山との間に重り合つてゐる山々は、尤も低い前山が尻高山であることだけは判然したが、其他の雨見山、稻包山、筍山、神樂ヶ峯

等は、猶ほ精探した上でなければ夫と推定することが不可能である程幾重にも重り合つてゐることを發見した。右の次第であるから彼のスケッチに記載した筍山及神樂ヶ峯なる山名は一先づ抹消して戴きたい。

子持山の右には雄渾な仙ノ倉山が聳えてゐる、此山の西方の一峯と子持山との間にある小突起は、四萬圖幅の大源太山（千七百六十四米突）とあるものに當つてゐる、從つて三國峠は子持山の後に隱れる譯で、山崎博士が榛名に隱れる邊にあると書かれたのは、子持の誤りであらう。スケッチの子持山は他と比較して少し高過ぎてゐる。上越國境の山脈は仙ノ倉山の東に萬太郎山を崛起して赤城山の後に隱れたまゝ、終に再び其姿を現さない。

黑檜山、地藏岳、荒山、鈴ヶ岳、鍋割山を赤城五山と稱してゐる、其中尤も鋭い鈴ヶ岳は、荒山の左の肩に遮ぎられて東京からは望まれない。大沼は中央火口丘なる地藏岳の北麓に、小沼は其東南麓で長七郎山の北に在る。赤城の氷は大沼から伐り出すもので、二十年も前の冬の大洞はなかなか賑かであつた。小沼の水は南に流れて瀧澤で十二三丈の不動瀑を懸けてゐる、國定忠次の隱れ塲であつた紫藤洞は此附近をさしていふたものださうだ。黑檜山は梅鉢草、蟲取菫、雪割草の產地で、中にも梅鉢草の咲き盛りには頂上の東の斜面は實に美しい。

赤城山の東には、根張りの大きい武尊山が幾んど全容を露してゐる、信州の穗高山と同じ神が祭つてある所から察すると、何か其間に因緣があるらしい。其東に當つて袈裟丸山の左の裾の上に、夫こそ雪の一握を載せたやうな白い尖頂は、正しく笠科山であることが後に判然した。赤羽臺を五六町西の方に行くと、秀麗なる笠狀の峯頂が全部望まれる。

袈裟丸山から溫泉岳に至る上野州國境山脈の山山は、僅に奥白根と庚申山とを除く外は、自分には盡く未知の山である、其上幾多の前山が錯峙してゐるので、五度や六度見た位で尾根の續き工合を識別するのは困難であるから、少なからず誤り

あらうと想はれる、熟知の讀者諸君は幸に訂正の勞を惜まざらんことを希望する。

袈裟丸山は地方では澤入（ソーリ）の袈裟丸と呼ばれてゐる、何でも其村から登れるといふことであるが、判然したことは知らない。此山の前には二子山が重なつてゐることが後に明瞭となつた。スケッチでは二山の區別が無くなつてしまつた。袈裟丸の右に見ゆる稍や高い一峯は、其北に連なる根利山の最高點千九百五十八米突の地點である。其右の一峯から右に引いた尾根は即ち庚申川の南を限るもので、原村から一條の登路が其上を通じてゐる、主脈は此尾根の後に姿を見せて、皇海山の前に庚申山の奥の院大嶽山を崛起してゐるのであるが、當時之を識別することが不可能であつた爲に、スケッチには顯れてゐない。

庚申山の右には笠ヶ岳、續いて錫ヶ岳の秀麗な姿が宿堂坊山かと想はれる者の左上に顯はれる、積雪の有樣から推すと、笠も錫も大分木が繁つてゐるらしい。錫ヶ岳へは中禪寺湖西岸の柳澤川に沿ふて遡つたならば、容易に登れさうに想へるが、實査した譯でないから何とも保證することは出來ない。

奥白根の圓錐頂は、十月初旬から五月下旬まで眞白な雪の綿帽子を被つて、群山の上に屹立してゐるので尤も目を惹き易いが、雲に掩はれてゐる時の方が多い、此山は西から北に望まれる山の中で最高位を占め、奥秩父の雁岳金峯奥仙丈の諸山と雁行して遙に雄を爭ふてゐる。上州では之を荒山と唱へ、頂上に荒山權現が祭つてある、蓋し山

◎雜　錄　淺間山より男體山まで

體を崇めたものであらう。見聞雜錄に明治五年の噴火の記事が載つてゐるから左に拔萃する。

利根郡荒山噴火之儀ニ付群馬縣ヨリ大藏省ヘ御屆之寫

當縣下上野國利根郡東小川村地內荒山西面山腹ヨリ硫黃氣燃立候趣、別紙之通圖面並燒場石共相添、屆出候ニ付、直ニ官員差遣シ、見分爲致候處、右屆之通相違無之ニ付、此段御屆仕候也。

壬申(明治五年)六月廿三日

別紙大意

右荒山ノ儀ハ、絕頂ニ荒山ノ神社鎭座アリテ、每年六月十八日村役人一同登山スルノ例有、右荒山原來硫黃氣多ク、東西南麓ニ温泉アリテ、山六七分以上ハ草木生セサル程ノ燒山ナリト雖モ、硫黃氣燃立、煙リ吹出ス等ノ事ハ古キ傳聞モアラサルヲ、當四月頃俄ニ山腹ヨリ烟リ相立初メシカ、其後時トシテ鳴動シ、追々燃、

吹出候箇所多分ニ及ヒ、曾テ聞天明年中淺間山燒燃セシ災難ヲ追懷ノ思ヒヲナシ、近傍爲ニ恐怖シ、村役人共申合、登山トシテ見分ナスニ、中央ノ拜所ト唱ヘル場所ヨリ凡三四十間上ノ方ニテ竪二百間餘、横百五十間餘ノ場所、少々煙リ吹出シタルニゾ、萬一往時淺間山ノ如キ變災ヲ蒙リ候事モ哉ト、一同心痛ナシ、右圖面ヲ以其縣廳ヘ屆ケシト也。

白根山塊の前面には、中禪寺湖の南に連亘せる半月山、社山、黑檜岳、太平山等を含む最高二千米突に近い峯巒が臥牛の如く横たはつてゐる、左の端の最も高い地點が太平山である。半月山から左に曳いた尾根がちよいと前山の頂に隱れて、再び高まつた所が千八百二十六米突の社山である。足尾から中禪寺湖畔に踰える阿世潟峠は、此二山の間の最低所を通つてゐる。

奥白根の右には前白根から外山に續く連脈が長く延びて、上野州の國境山脈を遮蔽してゐる、其右には溫泉岳の尖頂が、主脈と直角に交叉した尾根の上に聳えてゐるのが見える。其右の二山は刈込湖の西に聳ゆる二千二百三十二米突の峯と、其西の二千二百八十米突の圈を有する峯とに相違あるまい、從つて更に其右に見ゆる一峯を高薙山と斷定したのであるが、自分は此山の形に就ては何等の知識も有してゐないから、多少怪しいものだとは思つてゐる、然し先づ誤りはなからうと思ふのである。

男體山は群山を離れて獨立高聳してゐるので、奥白根より百米突近くも低いに拘はらず、見た目には餘程高く感ぜられるのみならず、形が美しいのでどうしても此方面に於ける王者の趣きを備へてゐる。前面の低い山は細尾峠の東南に續く夕日岳、地藏岳などの連脈である。

自分は東京市の西から北にかけて見渡すことの出來る山々を、關東の兩大關とも云ふ可き淺間山と男體山との間に限つて了つたが、男體の東には大眞名子、小眞名子、女貌、赤薙などの日光山彙が續き、稍や離れて高原山、其右に大佐飛山、更に最も右に離れて東北方に那須火山塊が見られるのである。此方面の山は赤羽臺よりも寧ろ凌雲閣

の方が能く望まれるやうである。此等は他日或は補足して東京から見ゆる山岳の展望觀を完うしたいと思つてゐる。若し讀者諸君の中に同好の人があつて、之を補つて下されば非常に幸である。（木暮）

嘉陵記行

嘉陵記行は徳川幕府の頃三卿の一であつた清水家の用人村尾正靖の著である、號を嘉陵と稱した所から其記行文を嘉陵記行と唱へるが、實は後人の名付けたものである、非常に旅行が好きで、暇さへあれば江戸附近の名所舊跡を探つて樂しんでゐたことは、其記行から推知することが出來る。殊に吾々に取つて懷しく思はれるのは、大の山岳宗徒であつたことである。府中道の記の一節には次のやうな記事がある。

下石原上石原などを過行、この邊路に石多し、故に石原と名付しにや、こゝより西南林木のはづれに玉川の向山見ゆ、夫より少し行て下染屋上染屋に至る、こゝに原あり（上下染谷のあいだ也）江戸よりこゝ迄は路林木の際を出沒するのみにて、目にとまるながめなし、こゝに到て初て濶達として山巒の美を見る事を得、南に大山見ゆ、夫より山々連綿して富士の根を遮ぎり峙つ、西北を顧みれば八王子の櫨現、秩父、武甲諸山を見る、こゝにて富士の根方の山々を望み、山の皺あるを見る、其やゝ近づきたるを知る可し、秩父諸山は猶更なり、其外は江戸にて見るよりは高く山巒え、富士は江戸の觀にくらべば、根方の山に遮ぎられて五六合を見る心地す、玉川向山も間近く見渡されて、かたわらの民戸に腰かけてこゝの風景をうつす。

これだけ讀んでも如何に山が好きであつたかゞ推量されるが、更に驚嘆す可きは、中仙道の桶川までわざ〳〵淺間山を見に出懸けた事である、其記行の冒頭には斯う書いてある。

中山道上尾のあたりより、秋冬の間空晴れば淺間の嶽見ゆると、過し年伊納澤吉がいひしに、いつぞは行ても見まほしく思ひしかど、仕る道のいとまなみ、今日明日ともだし侍りける、今年は神無月たちぬれど、まだしぐれの雨も間遠にて、朝夕もさまで寒からねば、とみにおもひ

たちて寅の一點許宿を出て、火ともして行。其熱心には全く恐れ入るの外はない。而も上尾では見えなかつたので、更に桶川まで行つて日光赤城榛名妙義などを眺め、夢のやうに淡い山を見て、百姓に敎つて夫が淺間山であることを知つた、其時のスケッチに題せる詩に

郊原驛路適相連　行望名山隴畝邊
試問農夫頷且笑　樹梢遙指淺間巔

といふのがある。歸路に蕨の附近で淺間山を望見した記事が亦おもしろく書いてある。

元蕨村の繩手にてふりかへり見れば、日はすでに富士の北の裾の山の端に入なんとす、返照みわたしの山〳〵をてらして數十里の外も毫末を望むべし、

山と見し雲はあらしに吹たへて
くもと見へつる山ぞのこれる

繩手の內人家ある處（即蕨村內）にしばしたゝずみて、日の入をも忘れて猶かへり望めば、秩父の武甲の山の北の屋の棟たてならべたらんやうにいくらもうね〳〵つゞきたる山の上に淺間山見ゆ、其東に妙義も榛名も又よく見ゆ、かたへに人あるにとへば、いかにもかしこは淺間山也、こなたは妙義なりなど答ふ、今朝こゝを過る頃はまだいとくらかりしかば、こゝより淺間のみゆるをもしらで過しに、桶川にて見しにもこゝの啄めまさる許成をおもへば、かしこまで行しは□□□□たらんやうなれど、はたおもひかへせば、かしこに行て淺間をそれとしればこそ、かへさにも又こゝよりも見ゆやと思ふ心をしるべにて、ふたゝびあかぬながめをもすとやいはましし

云々。

又飛烏山の眺望、志村（赤羽）の臺、上目黑の富士の眺望とを擧げて

三つながら甲乙なし、山水にあそぶことを好むもの、一度は行て見よかし。

と結んである。

此記行は一篇から五篇まであつて、主に文化文政天保頃に亘つた記行を集錄したものである、之を讀むと江戸即ち東京附近の名所を知ると共に、其地が山岳展望に適してゐるか否かも察すること

が出來る、もと內閣文庫に一本しか無かつたのであるが近頃江戶叢書刊行會から出版された。著者の口吻を眞似る譯ではないが、山を望むことを好むもの、一度は讀んで見よかしとて、茲に紹介した次第である。詳しいことは本を讀めば分る。(木暮)

遭難記

慘ましき四友の死を悼みつゝこの記事を書く。

一行の日程

七月二十一日藤井君が詳細なる日程、準備に關する事項を認めた葉書を寄越す。

日程　七月二十四日午後十時飯田町驛集合。十一時出發。

二十五日午前五時鹽山着。同日笛吹川に沿ひて溯る事五里甲武の境なる雁坂峠にて露營。

二十六日雁坂峠より峰傳ひに甲武信ヶ嶽に至り宿す。

二十七日國師ヶ岳に至つて露營。

二十八日金峰山に至り宿す。

二十九日下山增富ラジウム溫泉に宿す。

三十日歸京。一日平均山路五里。

携帶品　飲食三度の食事等は共同とし罐詰等の用意あり。二十四日夜には翌朝及び翌晝の握飯持參の事、各自に携帶す可き品々は眞田紐二三尺以上、箸、氷砂糖、辨當箱（瀨戶引或はアルミニウムの四角なやつ一個茶碗に代用するに就き必ず忘れぬやう）スルメ或は鰹節、手拭三本、冬襯衣二枚、或は毛布一枚、或は懷爐二個の何れか一つ、洋傘或は油紙或は糸立或はマント（マントあれば毛布不用）の中一種、仁丹に類するもの、ヘルプ、古新聞、服裝は大抵霜降が多き樣に候、若し參加御見合はせの節は本日中に大手町小山方迄御通知被下度候。

記事　藤井君は既に雁坂、國師、金峰を攀ぢた事があるので、一つ之を一度に峰傳ひに突破して見たいとは兼ねてからの希望であつた、其處で稍大仕掛な天幕旅行を企てる事になつたのである。

彼は今まで何處へでも單身出掛けて行つたもの

である。その中でも彼の金峰山巓露營の話などは聞く人を魅せずむば止まない、自分もその豪膽なのには常に敬服してゐたが、他の三人も、さながら彼の風を望むで馳せ參じたかの觀がある。山窩などは殆んど跡を絶つた相だが狼や蛇の本場であつて見れば、何か得物と考へた揚句大ナイフときめる。マント水筒は例の如く、自分の雜囊には次の品々を詰め込む。牛肉罐詰一個、パン二食分、箸、瀨戸引辨當箱(此の中にドロップスを詰める)鰹節一本(洗つて直ぐ舐められるやうにしたもの)手拭三本冬襯衣一枚、古新聞(蠟燭三本マッチ三個を包み込む)、仁丹、實丹、ヘルプ、石鹼、マントには外に冬襯衣一枚を卷き込み、水筒は若し溪流の水で十分ならば不要かも知れぬと思ひ、ウイスキーを詰めて置く。陸地測量部五萬分の一地圖は鹽山金峰山のみ求め得たが、三峰は生憎無かつたので大した事も無いとその儘にして置く、それに小形の磁石一つ。萬事幹部に一任はしてあるが、用意としてそれだけを持つて行く事にした。

二十四日　朝來雨である、一寸悲觀させたが午後霽れる。

『二八月と言つて暴れるかも知れぬぞ』と父が言ふので『なに空模樣が惡かつたら引き返します』と言つた然るに當日に。

『先に申し殘し候へ共出發は天候の如何に關らざる事に相成居候へば今夜十時間違ひなく飯田町驛に御參集相成度候』藤井が言つて寄越す。『こんな日和はまだ續き相ですから少しの雨位なら山の麓まで往つて霽れるのを待つてゐた方が得策と云ふ譯なんでせう』と父に斷つて置く。

替足袋、替草鞋、燒握飯二食分を學校で使つた脊負袋に詰め込むで、是を腰にぶら下げ眞黑に焦げた臺灣バナマの鍔廣の奴を被つて出發、折々細かな雨が降る。

十時五分前飯田町着、時計の下にキャラコ帽の藤井君と小山君とが立つて自分の時計を合せてゐる。後方のベンチの隅にハンチングの一人がゐる、その傍に堆い荷物が一間半程塡處を塞げてゐるのを見て喫驚する。

直ぐ一高の夏帽に大きな風呂敷包を脊負つて又

一人來る。夫々小山君藤井君の紹介でハンチングは山室。麥藁は安川と云ふ人だと分る。兩方とも中々丈夫相である。人員が揃つたので藤井君が各の携帶品（但し公共物のみ）の點呼を始める。小さなノートを出して鉛筆嘗め嘗め一々記入する。

安川君の分擔した分は味噌一包、つくだ煮一包、鐵の大鍋（徑一尺餘）一個、藥罐（徑六七寸）一個。

山室君の分　アルミニウム中鍋小鍋各一個。

藤井君小山君の分　大磁石一個、地圖、五萬分の一甲州信州附近十七八枚板目紙の袋に入る、ウイスキー約二オンス、大形西洋蠟燭一ダース、マッチ一包、一箱は油紙に他はブリキ罐に入る、白砂糖二斤ブリキ罐に入る、茶一包み、太き鐵線（約三尺（炊事用）、木綿袋二枚（各米一斗を入れるに足るもの）、ちりれんげ大小二個、軍用パン五十枚、罐詰、五日分（數不明）、自分は最後に參加した故格別割り當てられる物も無い、ウイスキーを提供する位のものだ、提灯と鉈とを忘れたと言ふので小山君が飛んで行つて小田原提灯の蓋と底とが鉄

力の奴を買つて來る、鉈は向ふで買ふ事にする、荷物を四つに纏める、天幕、大雜囊、大鍋（その中に味噌其他を入る）、中鍋小鍋藥罐その他、其内の仕舞ひの二つは風呂敷包みである、その外に各個人雜囊、水筒、マント（但し山室君だけは糸立）と中々大變である、恐ろしく澤山の荷物と邊り憚らぬ大聲とで車中を驚かす、人いきれと煤烟とに攻められて寢られぬまゝに曉方近くまで語り明かす。

藤井君は幼友達で嘗て十幾年の昔には學校への往復に手を引張つて行つて貰つた事もある。稀に見る苦學力行の人で其の上非常に温みのある人である。自分には正に兄貴分の格である。

小山君とはかつて向陵生活の最初の一ヶ年を同じ中寮二番室に送つてゐる。

中寮二番解散に際して入口の戸に書き殘された同室者の名の下に各々の徒名を記して有たが、彼の下には皮肉家とあつたと思ふ、彼は實に哲人を以て且一流の皮肉家を以て自任して居たのであつた。無駄話の内に、新に二人の友にも親しくなる、

山室君は小山君が只『これは僕の友達山室君』と言つて紹介したから後で何處の學校だか聞いて見やうと思つたまゝ忘れて仕舞ふ。極て元氣な快活な人だ、話の種が暫く盡きるとトランプを持ち出す。

藤井君のキャラコ帽には柏葉と二本筋とが墨で無雜作に書いてある。大分それが人相を惡くすると安川君が笑ふ。嘗てこの爲め不良少年と間違へられた事があると藤井君が白狀する。即ち或日、大森あたりを通ると鐵道線路を横切る道があつた、それを通ると巡査が後方からよび戻して叱つたから歸りに署長の所に出掛けてあべこべに說諭した積だつたがやがて罰金の請求書が來たさうである。彼の帽子は不良型と云ふ新な名稱を得る。

寢苦しくて詮方が無いと山室君は決然として通路に糸立を敷いて横になり大いに勇猛の名を博す、漸く二三十分眠る。

二十五日、黎明の空は一片の雲影も止めぬ。

我等が旅路幸多かる可きを想へば相顧みて喜悅を禁じ得ぬ、五時鹽山着。

『さあ荷物を量るんだ。』

藤井君が斤量計を借用に及ぶと大荷物、小荷物一切を片端から量に載せて天幕何斤、大雜囊何斤一々報告する。例のノートにどし〳〵書留める。すつかりの荷物を同じ重さに分けて脊負んだと云ふ。マント何斤、雜囊何斤『おいその雜囊が五斤ぢや重すぎるぞ俺のが二人前詰まつて居ても五斤しか無いからな』。

自分の雜囊は兎角重くなる傾向がある。

檢査官怪しいと睨む自身出張して量ると半斤位減つて仕舞ふ。總斤量を五で割つて各々に脊負はせる。何處までも几帳面な處は彼の遠大の計畫と見るべし。大體は(一)天幕。(二)大雜囊。(三)大包一つとマント三つ。(四)雜囊四つ、マント二つ及洋傘、洋傘は安川君が持つて來たものである。大體同じ目方になつたが擔ぎ良いのと惡いのとがあるので休息の度に巡繰りに廻す事にする。一切彼の發案である。鹽山の町を出て五六町、漸く街道らしく成つた處で掛茶屋に腰を下して朝飯。爺さん婆さんが居るが山の樣子は此處では一切分ら

ぬ。涼しい風に當つて横になつてゐると思はず華胥の國の入口まで出掛けてはハッと思つて引き返す。藤井君の後を只飛ぶやうに追ひ掛ける許りだ、これからはぢりぢり照り付けると左手に笛吹の河原が白く輝いて眩しい。一里も行くと木蔭に山室君の糸立を敷いて貰つて休む。天幕が脊負ひにくいのでは一番だ、この番の者が眞先に休まうと云ひ出す。荷物を持ち替へる順が藤井君の例のノートに面白い符號になつてる、夫々の名前の下に半圓三角四角十文字が夫々風呂敷包、大雜囊、天幕、マント雜囊の包を表はすと云ふ譯だ。四角が回つて來ると大概の者は『實際僕の番かな』とノートをのぞきたがる。河岸が畑雜木林數桑畑と次第に變つて行く、脊負子を脊負つた村の人達が通るばかりである、遙か行手には透明な空の下に連山が目に染むやうな色をしてゐる、十一時近い頃松里村に入る。激流を前に見て二の釜と云ふ處に掛茶屋を見出して晝餐を認める。岩を嚙む流れが飛沫の濛々たる中に數間を奔下するのが釜ださうだが、上からは見えぬ、凄まじい音を聞くばかりである。道の漸く嶮くなる邊で左手のとある農家で鉈を讓つて貰ふ、一金七十五錢也とノートにつく、一の釜と云ふのは上から見える、荷物を投げ出して見物する。鉈は手拭でくるんで腰に差して來たが物騷に見えると云ふので、天幕の袋に入れる、道が次第に歩き惡くゝなる、左大嶽山道と云ふ杭の立つてゐる下で休む、右の秩父往還は嶮しさうだが左は樂な樣に見える。皆大分うんざりした模樣である。

街道を馬を牽いて下つて來る馬子に雁坂の樣子を聞くと此の一二年手入をせぬ樣だから餘りよくないと云ふ、峠までまだ容易ではない、雲行も少し怪しくなつた樣だ、皆殘らず腰を据ゑたのを見て『どうだい豫定を一日延ばす事にして雁坂は明日にしたら』

藤井君が切り出す、我意を得たりと許りに一度に可決される、宿屋も直ぐ傍に見える、すると『泊るには餘り早いぢやないか、まだ二時にならない』と小山君が疲れも忘れたらしく言ひ出す、急に風向きが變つて大嶽山に登る事になる、時々煙のや

うな狭霧に遭ふと俄に小雨になつた樣に汗が冷えて冷氣が身に沁む、『四角』の番に當つてゐる自分は社殿に達する高い半ば頽れた石段の急傾斜に全く參る。眞中の鎖に縋つて石に嚙み付く許りになつて登るが稍もすると後方に引き倒され相になる。携帶品を山の樣に積み上げると留守居の爺さん婆さん目を圓くして居る大嶽山は去年だか藤井君が未だ山開きの無い內に國師嶽に登ると單身遣つて來た時此の爺さんに頻りに止められたが如何しても行くと言ふので『天狗に浚はれるぞ命が惜しくなけりや行くがいゝ』爺さん憤然として言ふと『命は惜しいが行く』と頑張つて出掛けた處が途中大雨で散々の目に遭ひ此處まで引き返して大に膏を絞られた處である。藤井君が『おい己の顏を覺えてるか。己が袴を穿いて遣つて來た事があるのを』と云つたが返事もせず變な顏をしてゐる。いざ泊らうとなつて又計畫が變る地圖の上に額を集めて居た藤井君と小山君とが『是れからは直ぐに國師に出る徑がある許りだが折角來て、甲州武州信州を始め遠く諸國の峰々迄眺望を恣にしやう

と云ふ甲武信を棄てるのは如何にも惜しい、是れから一旦下山して例の岐路から更に本街道を上り廣瀨から眞すぐに甲武信を差さう』と提議する。そこで又大分疲れた足を引き摺つて漸く廣瀨部落に入る。『何處かに山に登る道を聞く處は無いでせうか』と藤井君が道を行く人を掴へて尋ねると林業所を敎へて呉れる、往來より一段高い處に一寸大きな家に市川林業所とある。上り框近く切つた圍爐裏に一人三十恰好の金縁目鏡の人が煙草を喫して居る大久保と云ふ人であつたと後に判つた。藤井君が地圖を擴げて詳しく敎へて貰ふ、『秩父往還と云ふ此街道をまつすぐに五町許り行くと左側に大きな檜の一本木がある、其處から左に下りる細徑がある。其れに附いて下ると子酉川の岸になる、此の子酉川を徒渉して行くと彼岸の丁度甲武信に至る尾根の最終點に出るが其處で地圖にある樣に澤が東澤西澤と二つに分れて居るので能く判る。二俣と云ふ處である、是から頂上迄は地圖には通過困難の部とあり徑は格別無いが伐り開きがある。是を傳へば破風山の頂上に出る、是は地圖

に名が載つて居ないが破風で破不とは違ふから注意せねばならぬ、破風山には陸地測量部の三角點の石標がある、此處迄一里と云ふが實は其上大分ある、それから甲武信になるが甲武信から國師迄の峰傳ひは左迄の難事では無い、尤も明治四十三年の伐り開き以來手を入れぬが此の地圖に就て能く磁石と相談して行けば大丈夫であらう、此國境線（即ち傳ふ可き峰續き）の屈曲の工合は歩いて見た處に依ると此の地圖より餘程激しい曲り角では十分に磁石で行先の方向を研究する必要がある、山の中では良く落ち著いて決して狼狽てはならぬ、甲武信と國師との間に信州の梓山に出る新道がある、道が良いので釣込まれ相になるかも知れぬ、氣を付ける樣に、尙ほ此の伐り開きには諸處に目標となる可き物があるから人夫を呼ばせやう』何處までも親切に態々人を呼びに遣つて呉れる。人夫の來る間茶の御馳走に預る。

敷島を拔き乍ら金緣の親爺さん（一行の間には大久保氏は爾來此の名で通つた）が色々訊く、藤井君が一々答へる。『貴方がたの學校は』『皆今年から帝大です』『東京のですか』『えゝさうです』『科は』丁度訊問と云ふ風だ。

『是が（と自分を指して）工科で外の者は皆法科です』『私は駒場の實科を出ましたのです』『はあさうですか、もう餘程此處においでですか』『もう七年此の山を管理して居ます』『僕等は金峰から增富迄出るんですが彼方の方へおいでになつた事はありますか』『いや未だ無いですが其の内に人夫を一人二人連れて甲武信から大山を通つてぐるつと廻つて見やうかと思つて居りますです』やがて脊の低い痩せた男が遣つて來て草鞋の儘どかりと圍爐裏に踏跨がる、地圖に就て『此處が三角とすると此處いらにづつと新道がある、大きな石があつて其右が新道。此處を間違へずに石に附いて右に曲る』中々詳しい、藤井君が一々細かく赤鉛筆で記入して行く、いざ出發と皆立ち上ると金緣の親爺さんは顏を上げて一人一人の顏を眺め乍ら

『磁石は良いのをお持ちでせうな』

『えゝ僕が大きいのを持つてゐます』と小山が出して見せる『小さいが僕も一つあります』自分が

言ふ。

俄に後方で村人や人夫などがが や〳〵騒ぎ出す。

『熊だ』と言ふ聲がする飛んで行つて見ると、今向ふの崖を下つて來て谿で水を飲むで居た相だがもう姿を隱して仕舞つてゐる、聊か驚いて『日中熊が出るんですか』と聞くと『時々遣つて來る』大分閉口して、一同荷物を脊負ふと金緣の人に『我々の行く山にもあんな獸が多いでせうか』『えゝ野獸は居る事は居ますが、こちらが温和しくして居さへすれば危害は加へませんな』これで少々安心する、荷物を搖り上げ乍ら傍の小山君に相談する『あの男は賴もし相だが賴む必要は無いだらうか』『さうだな皆に相談しやう』皆圓くなる。此時分一行は疲れたと言つてもまだ今朝から歩き出した許りだ、天幕は少し有難く無かつたが其他は少しも苦にはならぬ、强力に用は無い、唯、甲武信から國師迄の二里餘りを案内を賴まうかどうかと云ふ丈である。

『要るもんか』山室君と藤井君と昂然として云ふ、安川君が『藤井が居るから澤山だらう』と云ふ。小山君は『どつちでも宜いんだ』考へて見れば思ひの儘の旅には他人の入らぬ方が勝手で良からうと自分にも思はれる。其儘で要らぬ事になる。

『國師まで行くのに、どの位懸かるだらう』

人夫に聞いて見る『つい先頃行つた時は此處を朝五時頃出たが二俣から登つて丁度國師へもう半里と云ふ處で日が暮れて仕舞つたから、いゝ加減に焚火して寢た』『國師迄一日で行かうと云ふのは一寸六かしいかな』『さうでも無いが大分狼狽てなけりやなりません』『處が狼狽てると飛んでも無い方へ行つて仕舞ふと云ふんだから到底も駄目だ』自分が云ふと大久保氏が『お前は朝此處から出たからぢや無いか二俣からならば譯は無い』それから再び懇切に我々に注意される『斯う云ふ深山では能く落ち著いて、決して狼狽てぬ事ですぞ』と云ふ。禮を述べて今夜は二俣に宿營と急いで出掛ける。廣瀨部落の出口で米を一斗購ふ、一斗入の袋を二つ出して五升づゝ入れて貰ふ『京桝でたつぷり上げやう』米屋の爺さんは曩に林業所を敎へ

て呉れた人だつた、藤井君と自分と一袋づゝ擔ぐ、此部落から街道が眞つすぐに南へ走つて遙かに目差す甲武信が正面に聳え破不山も續いて見える、赤い夕雲が既に空に湧いて居る。道の左側は子酉川が靜かに流れて對岸は見上げる許りの急峻な山が眞黑に木に蔽はれて居る、右は製材會社の干板所が緩い勾配の上に數多立ち並むで居る、とある農家で草鞋を二足買ふ、山室君は四足求める、序でに鹽を一掴み新聞紙に包むで貰つて行く、握飯に付ける爲だ。三人は遙か先を急いで行く、飛ぶ樣に歩いて漸く追付いた時分敎へられた檜の一本樹の下に出る、暫時其處に休むで藤井君袋の五升を四分して四人が夫々脊負袋などに入れて身に付ける。五升は自分が脊負つて行く事にする、細徑を下ると茅葺の一軒家の傍を通つて川邊に出る、日の暮れぬ內にと心忙しい、一行はこんな處で荷物を置いて地圖を出して見る餘裕は無い、此の家の人と覺しい婆さんが子供を連れて岸に立つて居る、二俣を尋ねると『此處だよ』

と云ふ、對岸は生ひ茂る笹藪に登る隙間も無い向岸に入る徑を聞くと『五六間流れを上に涉ると笹の中にある』

實際は豫期した尾根に入る迄には十五六町溯る可きであつた、此處は下俣と云ふ處で實に破不山への途である、遂に知らずして之を登る、徑と云ふ徑は無い、上も下も密生した雜木林に蔽はれて日の目も見る事の無い懸崖に唯一條の草を踏み付けた跡が徑である、滑つてはならぬと足を踏占め踏占めして行く、諸處目も眩み相な絕壁が足下遙かに續いて見える、瀧が此の小徑を遮る、辛うじて無事に渡り終へると冷汗がにじみ出る、夕闇が迫つて來る、小徑の途中に稍々平らな二坪程の處を見付けて天幕を張る事にする。藤井君が何時の間にか拵へて置いた籤を引いて役割が定まる。藤井君小山君が薪拾ひ、山室君安川君が炊事、自分が天幕、豫め焚火をして地面を乾かしてから其上に天幕を張らねばならぬ、火を燃やしに掛かつたが地面も薪も總べて濕つて居て容易な事で無い。遂に藤井君の應援を得て辛くも役目を全うする。闇が既に周圍を蔽ふて仕舞つた爲此の焚火で直ぐ

に飯を炊かねばならぬ事になり天幕は其の傍に入口を火の方に向けて張る、その代り下に山室君の糸立を敷いて濕氣を防ぐ、安川君が盛んに丸木を投げ込む、山室君が巧者に飯を焚く、味噌汁も出來る。但し身に肉を入れる筈だつたのを誤つて牛罐を全部あけて仕舞つた爲め恐ろしく鹽辛くなる。それから福神漬に佃煮の副食物だから叶はぬ、飯だけうまく出來るお手際を賞め乍ら瞬く間に一粒殘さず平げる。『是からデザートコースに入るぞ』小山君が白い紙袋を出して來て、小鍋で暫く何かごと〳〵遣つて居たが前に置いたのを見ると葛だ、鹽辛い後だから混つた枯葉も關はず大いに賞美する、此の間天幕の後方に杖を立て丶吊つて置いた提灯が突然風に吹き倒されて四面がパッと明るくなつたと思ふと盛んに燃え出す、狼狽て揉み消したがもう間に合はぬ、殘つた上下の金具だけ燭臺にもならうとポッケットに大切に仕舞つて置く、火に體を温めて居ると直ぐ睡氣が差す、宿營の準備が此夜は晩過ぎた爲、飯が濟むと十時に近い、自分が一人殘つて火を出來るならば明朝まで燃え續けさせる樣にする事にきめる、尤も狼にでも見舞はれる樣だつたら一人づ丶交代で火を守る筈だ、疲れた連中がすぐ足踏み延ばして寢込むだと見え一同天幕に入ると直きに鼾が聞える。濕氣の甚だしい爲火は到底燃え續き相も無い、遂に消える、人氣の無い山の夜の物凄さ、果し無く深い闇が幾重にも周圍を圍むで仰げば絶えずざわ付く梢と梢との間に僅に空の薄明りが浮いて見える許りだ、パッと天幕の中で誰か明りを點ける、三角形の燈籠である、四邊が併し依然たる眞闇で、昔古い湖を潜つて底に灯る行燈を見たと云ふ怪談を思ひ出すと無氣味で堪らなくなる、中に飛び込むと安川君が蠟燭を點けてゐる、四人づらりと横になつて向ふの隅から小山君藤井君安川君山室君とぎつしり詰まつてゐる、山室君が盛んに鼾を搔いて居るのだ、山室君で糸立が盡きてゐる、マントを折り疊むで敷き冬襯衣二枚重ねて寢る、冷たさはマントも通して地面から傳はり骨に沁み入る、『狼が來たら誰が眞先に食はれるだらう、先づ入口が危いな』とまだ寢ぬ安川君が云ふ『そんな事が

あるもんか、すつかり閉め切つて仕舞へば何處が入口だか判ら無いから誰が外からいきなりがぶりと遣られるか判つたものぢや無い、閉め切つて窒息でもしては堪らないから一二寸開けて置くぜ、狼の奴不意に飛び込むから眞中あたりが苦手と云ふ譯さ』負惜しみを言ひ乍らも流石に薄氣味惡い。樹々が轟と鳴り渡る。時々變な厭な叫びがその間から漏れて來る『聞えるか』『うん』安川君は蠟燭を吹き消して『明るいのが目標にでもなつては堪らない』夢に入るか入らぬ内に突然明るい影と暗い影と飛び違つて寢てゐる體に輕く撫でるやうに觸り乍ら横切つて行く驚いて飛び起き樣とすると蠟燭持つた藤井君が自分等二三人跨いでゐる『どうしたんだ』『うん小便に行つた』と自分の塲處へ横になる『喫驚したぜ』隅の小山君も目を覺してゐる。

二十六日　腰から肩にかけて凍るかと思はれて目が覺める、外は冷たい狹霧が一面に籠めてゐる、火が燃え出すと、飯の出來る迄に徑の工合を見て來ると藤井君が出て行く、昨日餘り非道い途なので間違つたのでは無いかと誰か言ひ出したからだ、米の多過ぎた所爲か不味い飯が焚ける。

藤井君が歸つて來る『此の途でいゝ、五六町先に素的に良い塲處があるから辨當の用意は其處でする事にしやう』簡單の朝餐が濟む、互に最初の露營の夜の恙なく明けたのを喜び合ふ藤井君が笑ひ乍ら『先づ今朝は朝飯が食へた、こつちが朝飯にでもされるかと思つて昨夜は心配したよ』『僕は蠟燭と燐寸と抱へて寢たんだ』安川君が白狀する『時々地響がする樣な氣がしたから熊かと思つてびく〳〵ものだつた』山の中の第一夜は誰にも氣持ちの良いもので無い、昨日にも增した嶮路を行く、崖が今にも崩壞し相な處が多くて幾度か膽を冷やす、見付けた平地に漸く辿り著いて又飯を焚く、辨當箱に詰め終つて出掛けると既に十時、空は半ば晴れである、水筒には以後出來る限り手を付けぬ事とし藥鑵に水を滿したやつを折々五人が飲み回す、自分の水筒のウイスキーも惜しまれ乍ら捨てられて水が代る、遙か南に甲武信と覺しい峰が屹と峙つ、此平地の東側の尾根の端を昨日來

廻つたのだ。白樺の多い林を拔けると蔽ひ被る熊笹を推し分け推し分け遮二無二登つて行く、登り盡して下ると反對の側に下りて澤に出るが切り開きに會はぬ。復た引き返して笹藪の中を彷徨ふ內漸く標高柱を見出して之を傳へば直ぐ伐り開きになる、一同ほつとする、足枷を外した思ひである、伐り開きと言つても尾根を蔽ふ密林の中の不完全な一條の空隙に過ぎぬ、時折樹々の間から僅かに鷄冠山の崩れが見える許りだ、以來一行の內、自分だけは折々『金峰山』を擴げて不審を打つたが、四人は全く此の徑を甲武信に至るものと確信して疑は無かつたのである、自分と雖も徑の屈曲の餘り激しい所は、甲武信までは登る許りの筈であるのに、丘を下る樣になる處に出遭ふ度に、頭を傾けたが結局地圖の精密度が低いものと見做して解決を付け樣と試みた爲遂に四人と同じく呪ふ可き誤信に全く陷つて仕舞つた、破不と甲武信と同一の地圖にあつたならば此の粗漏を免れる事が出來たかも知れぬ、兎に角『三峰』を携帶して行か無かつたのが不覺である。是を擴げる事でもあつたら或は眞の道程を圖上に見出せたかも知れぬ、同じ方向に二つの並行した尾根の走つて居る事を一行は終り迄知らずに居たのである。自分は素より、藤井君も亦既に二俣を出發點としたと信じた爲に『三峰』を鞄に收め『金峰山』をのみ賴りにしたのに原因する。獨立標高點（一千八百七十五米突）の石標が叢の中に見出される、此の山中で低地に向つて展望の利くのは此の地點たけである。間近く子酉川の磧が眞白く輝いて其の左の稍々開けた地には、點々として干板所のあるのも判る、其の遙か上に雲を拔いて富士が美しい、眞の甲武信に續く尾根にもよく似た處に獨立標高點（一千九百五十米突）が設けられてある。地圖『金峰山』に依つて我々は全く此點を過ぎたものと思ひ込むでゐたのである。荷物の多いのと、徑らしい徑の無い事とが絕えず地圖に注意を拂ふ事を大いに妨げる。地圖を見るには一々立ち止まらねばならぬからである。又一人々々が地圖を持たぬ爲か一行は地圖を見るのを臆劫がりもどかしがる傾向がある。斯う云ふ意見が大多數を占める。

『二俣から登れば甲武信より外に行く處は無い、怪しい處があると思つたら、こんな周圍のさつぱり見えぬ處で徒らに頭を惱ますのを止めて、頂上に著いてから見れば何處に來たか一度に判つて簡便此上も無い、特に甲武信からの峰傳ひが此旅行の主眼ぢや無いか、それ迄の途を一々地圖に合ふのどうのと考へる必要はあるまい』斯くて一團擧つて、何時の間にか、確かに甲武信に向ひつゝありと妄信するに至つた、徑意外に嶮しく、且出發迄に手間取つた爲、甲武信に迄も達せず五時、第二の宿營地を定める。標高約二千米突、雨露を凌ぐ可き用意の全く終つた頃、天候漸く險惡になつて間も無く大粒の雨が落ち始める。見る内に瀧の樣な大雨になる。併し天幕は位置も良く十分念入に張られ、且つ裾は苔で埋め、その周圍に溝を掘つて水はけを良くしてあるので、中は廣く、防風防雨の準備にも間然する處が無い。外は雨であらうと、風であらうと、申し分の無い愉快な露營が出來る。薪は集めてあるが焚火はやめる、入口も閉めてしまふ。蠟燭の灯を圍むで話が彈む、誰も彼も旅の趣を此の一夜に味ひ盡さうとする中にも一人で談り且辯ずるが、降りしきる雨が容易に止み相も無いので遂に『地雨でないといゝが』

天候が氣懸りになり出す『金緣の親爺さん此の雨では心配して居るに違ひないから何處へでも出たら葉書を出さう』

小山君の動議に皆贊成する、明日の行程に就て種々の意見が出る『天候の如何に關はらず出發と云ふ位だつたから少し位の雨は豫期して來たが、この深い山の中でこんな激しい雨ぢや遣り切れ無い、峰傳ひの面白味も遠くが見え無いと來ては零だ、それにあの親爺さんが言つた樣にさう地圖と首引で無くてはならないとすると天氣が惡いと危いぜ。此處に停滯してゐるのも良いが一旦廣瀨へ戻つて、晴れになつてから再擧を企てるのが萬全の策だと思ふ。豫定より二日か三日遲れた處で雁坂へ行つたと思へば何でも無い』自分は引き返しを希望したが、どうも安全で無いと認められて仕舞ふ。

『戻るのは危險だ、彼の崖際の瀧などは到底も渡れないし、谿に沿つた小徑も滑つて歩けつこ無い、それより甲武信から新道を通つて梓山へ下らう』と安川君が言ふ、藤井君は少し悲觀の氣味だ。『雨は未だしもだが風となると峰傳ひは駄目だ。吹き飛ばされて仕舞ふ』併し小山君は『同じ道を下りて又登ると云ふのも詰まらない』と云ふ、山室君も『明日はきつと霽れる、霽れなくても國師まで行かうぢやないか』と溢れる許りの元氣だ『それでは斯うしやうぢやないか、霽れりや文句は無いが駄目だつたら雁坂から秩父へ出やう』藤井君が賛成を求めたが『それも詰まらない。平凡過ぎる。あんな處へ行く氣なら天幕も何も持つて來る必要はないせ』小山君が頻りに詰らながる『それとも籠城してトランプでも遣つてるか』と笑つたがすぐ『停滯も氣が利かない』と自ら取り消す、夫々自分の意見を堅く執つて動かない連中だ、斯う云ふ時は何時も結局藤井君に委せるか或は何とも纏らず、行き當りばつたり主義になつて思ひもかけぬ方に外れる。明日再考と言ふ事にする、『兎に角滅茶は出來ない、危い』

安川君が云ふ、そして今迄に山に起つた事件が談られる、死んだ人々の最後の有樣などを藤井君が話して『まあこんな山で死ぬ事は無いから安心するさ』『赤城の樣な所でさへ死ぬ人があるからな』と自分が言ふと、『何かと言ふとすぐ命に關はる樣な事を言ひ出すから可笑しくなつちまふ』と小山君が笑つて『今死んで堪るものか、漸く大學へ入つた許りぢや無いか』『大丈夫、大丈夫、どんな處へ飛び込むだつて僕等は山で死ぬなんて云ふ事があるものか』山室君は何處までも元氣がいゝ、すると藤井君が急に眞顏になつて。『處が今夜にも死ぬかも知れ無いんだ、こんな高い所では天候の激變で急に寒くなる事があるから、うつかりしたら今夜でお仕舞ひかも知れない、恐ろしいのは此の天候の激變と云ふ奴が、今の内によく顏でも見て置かないと危いぞ』と一同の顏を見廻してから、『嚇かしたな』と笑ひ出す、藤井君がはしやぐが四人は比較的眞面目だ『併し死ぬとしたら此の位の山では凍えるより何處かへ迷ひ込んでだらうな』

自分が言ふと『死ぬなんて事は無いよ、僕だつて僕が働いて食つて居る者があるんだ、死んだつて死に切れる體ぢや無い』山室君は絶對の安全を確信して居る、藤井君は始めから何か嬉しくて仕方が無いと云ふ樣な顏をしてゐる。『此處らで死んだら世間のいゝ笑ひ草だらうな、新聞に出るとしたら『心中五人男』位の處は間違ひ無い、今の內に懺悔でもして置くか』ごろりと横になる、此夜は藤井君が入口の處に枯枝を積むで横になり。殘りの四人は藤井君と直角になつて寢る筈だ、安川君が『藤井は餘程ありさうだな、懺悔する事が』藤井君に言つたがもう半分眠つて仕舞つてゐる。トラムプを持ち出した小山君はあとの三人も膝を抱いた儘睡さうにぼんやりしてゐるのを見て引込める。『こんな高い所では獸も居まいし、それに此の雨の中を出て來る奴も無いだらう』安川君も安心して横になる。內側に折り返した天幕の裾が濕つて來たので替草鞋を竝べ、其上に載せた雜囊を枕に夢を結ぶ。

二十七日　雨は尙ほ止まぬ。

林の樹々も幾間か先からは雨に煙つて見えぬ、昨夜外に出して置いた三つの鍋には雨水が一杯になつてゐる。藥鑵にも半ば溜つてゐる、洗はぬ米で焚いた飯と云ふものを始めて食ふ、餘り不味いものでも無い、焚火の煙の流れる方向が絶えず變つて天候の不穩を示す、しかも凜然として一同立たうとする。この難路を引き返すのは決して容易でない。併し些々たる天候に妨げられて空しく膝を抱いて日を送るにも堪へられぬ。此處まで來たからには兎も角も頂上には足跡を止めぬ內は歸られぬ。多數の主張に愈々雨を冒して山頂を極めやうと云ふのである。冬襯衣二枚にマントでも寒いが歩いて汗になるのを恐れ、二枚共襯衣は脫ぐ。出發の準備が全く整ふと不意に耳元に轟然たる銃聲が起る、驚いて振りかへると突つ立つた小山君の手に拳銃がある。『濕りやしないかと思つて擊つて見た』降り頻る雨を衝いて猛然として突き進む、途は嶮岨を益す計りである、樅や榧の密林を過ぎると灌木林になる。岩石帶に出ると草鞋が滑る、石が滑る、危い事夥しい、這ふ樣にして攀ぢる、

灰色の空が既に四方に擴がつて天氣ならば一望千里の處である。矮松などの密生した處に又入つたと思ふと標柱に第一號とある。俄に身を切る樣な風が正面から吹きつける。絶頂に違ひ無いが視界は數間の先に遮られて、あとは只濛々としてゐる許りである。立ち止ると岩蔭に風を避けても恐ろしく寒くなる。丁度二月頃の寒さだ、マントの蔭に地圖を取り出して此急坂を無視した破風近くの等高線を怪しむだが、偶然『破不』の名を思ひ出す『若しや破不へでも上つたんぢやないか、甲武信の隣にあつた山だ、甲武信の破風としてはどうも變だ、それに彼の人夫が一日で國師の近く迄行つたと云ふが、こんな處をいくら身輕だつてさう速くは行けまいと思ふ』一同は併し二俣を出發したとして理窟に合はぬのを非難する『山の人夫だつて云ふから、どんな岩壘な奴が來るかと思つたら痩せたまるで鼬みたいな男が來たぢやないか、あゝ云ふのは格別なんだ』と藤井君が云ふ、半信半疑だつたが、やがて破風山として在る可き位置に三角點の標石を發見して、疑惑を一度に投げ棄てる。一行が誤信から免れ得る機會が永久に去つたのである。東の方に、新に手を入れたらしい立派な雁坂への伐り開きを見乍ら、決然として國師に向ふ事になる。濡れそぼけた雜草を踏み分けて細徑を辿る内、何時か米袋の口が開いて、大分こぼして來たのに氣が付く。狼狽てゝ紐を締める、直きに緩む、其度に立ち止つて締め直す。先頭と大分離れて仕舞ふ。道が岩石帶に下りかけたと思ふと、忽ち全く徑も無い灌木林に分け入つてゐる。鍋の包を持つ安川君や、米袋を抱へる自分は、兩手を使ふ事が出來ぬ爲、自然遲れ勝ちになる。三人は如何に呼むでも聞えぬのか、どし〳〵下りて行く、高い岩を下りるのが一番危險である。下に足場を良く見定めて置いて、腹這ひになつて滑り落ちる、岩と岩との間を苔が埋めてゐる事がある、踏み拔くと足を挫かねばならぬ。引き懸かる樹々を突き放し踏みしだきして行く。其の内にマントは裏返しになり、裂けて行つて、雨は瞬く間に、上衣も襯衣も通して仕舞ふ。漸く先頭に追ひ付く。西へ向へば伐り開きがある筈だが、遂に無くて、

その內に何時か南の方へ下つてゐるので、立往生の體である。妄動を詰つたが、今更引き返へす譯には行かぬ。下るにも苦しい處である。滑り落ちた處を滑り登れぬ限り、元の徑を辿る事は六かしい。皆慘めな有樣である。此の寒さにすつかり雨が泌み通つて頭からぐしよ濡れになつてゐる。携帶品も殆んど皆づぶ濡れである。安川君のみマントの裾をからげて、僅かに胸の周圍だけ助かつて居る。糸立許りの山室君も、桐油の外套の引き裂けた小山君も、唇を紫色にしてゐるが、藤井君は更に甚だしい。眞蒼になつてぶる〳〵震へ出す、『寒くつて仕方が無い。震へがついて堪らない』と藤井君は、周章てた事の無い人だが、非常な狼狽て方で『早く何でも國師へ行くんだ、國師には洞穴がある、早く暖まらなけりや堪らない』、すつかり寒さに當てられたらしい、少しづゝ登り乍ら西へ〳〵と、矮松などの纏はるのを踏み分け推し分け突進する。切開きを探すが更に無い、中腹を大分廻り、灌木林が無くなつて北に向ふ樣になると、一帶の土地が自然に低くなつて行く、寒い風が折折樹の間を漏れて來る。甲武信を一廻りしたものと信じて遂に避難所を梓山に求める。地圖に依ると、甲武信以西からは北に向ひさへすれば、容易に徑に出られさうである。約一里半で十文字峠から梓山へ通ずる街道に出る。仕合はせよくば五六町で千曲川の上流に沿ふ小徑が見付かる。勇を鼓して割合に緩い傾斜面を北へ〳〵と下りて行く。破不の山巓を廻つて秩父の眞の澤に向ふものとは知る由も無い。雨が小降りになつて稍々遠方迄望めるが、雜木林が限り無く擴がつて居る許りである。一面に地を蔽ふ苔が次第に深くなつて、踏む足の氣味の惡さは一通りで無い。一抱へもある樹々が無數に横はつて、或ものは半ば土に化してゐる、或ものは苔の柱になつてゐる。踏めばづる〳〵と頽れ落ちる。巖があれば大概は苔の塊りである。總て蒼然として陰慘極まり無い天地に入つて行く。澤がある。岸近くは日を見ぬ濕地にのみ生ひ繁る草に埋もれて人の步く徑が在りさうにも見えぬ。澤に沿ふて一里は下つた。左右の山々が迫つて深い谿谷に入る樣になるが、尙ほ徑らしいものも無

い。地圖に依ると、左岸に近く無ければならぬ。試みに左の山を登り詰めて見て、其存否を明にす可く、幾間か登ると、突然『駄目だ』藤井君が寒氣と疲勞とに堪へ兼ねたと云ふ風に膝を突いて仕舞つて居る。激しい傾斜面の中途ではあるが止むを得ぬ。大急ぎで小山君と二人で天幕を張つて取り敢へず藤井君を中に入れる。他の二人は薪を集めに行く。此の邊は地盤が極めて、柔く踏めば土と苔と石片と一度に崩れ落ちて行く。成る可く石の多い處を見付けて、幕營地としたが、二間程眞上に白樺の大木が倒れて、危く隣りの木に支へられて居るのが、絶えず我々を脅かす。今夜の内にも轉落して來るならば、一團の運命知る可きである。天幕の支柱を支へる綱を結び付ける立木が無い。周圍に堆い朽木の中で倒れて間も無い奴に縛り付ける。裾を張る綱の先の杭は打ち込めば打ち込むだけ、いくらでも入つて行く許りで、更に役に立たぬ。少しく大きな石と石との間に埋めて兩方から挾み付けて置く、投げ出した雜囊其他は天幕に入れる時分には水から引き上げた樣になつて居る。天幕の中では藤井君が何から何迄殘らず脱ぎ棄てゝ僅かに寒さを和げ樣として居る。『おれの懷爐、懷爐』と周圍を探したが、それも何處かで落して來たと見えて最早影も形も無い。蠟燭に火をつけ樣と燐寸を探せば、油紙の中のも、鑵の中のも、悉く濕つて仕舞つて居る。一人〳〵に持つて居たのも全く濡れて、更に役に立つものは無い。只安川君が内懷深く秘めてゐた一個が、幸にも無事で、僅かに火を得る事が出來た。胸に抱いた蠟燭の火で暫く體を暖めてゐると、小川君が雜囊から大半濡れなかつた毛布を出して、卷き付けて遣る。が其内に小山君も震へて來たので天幕に入る。上衣と襯衣とを脱いで、藤井君と同じ毛布にくるまる。續いて『僕も休まして呉れ』と山室君齒の根も合はなくなつて逃げ込む。そして支柱に摑まつて震へて居るのである。『おれも震へが止まつたら出て働くから、濟まないが二人で火を焚いて呉れ、直ぐ代るから』と、藤井君が矢張り震へ乍ら言ふ。『大丈夫だ、僕等がやる』、入口から二尺程の所へ洋傘をかざしてしつかりと傍の樹に縛り付け

る。安川君と其下で濡れた木を燃やしにかゝる。風がある爲雨が吹き込むで、二本の蠟燭が費されて、なほ燃え付かぬ。『石油を持て來るんだつた』と安川君が云ふ、漸く燃え出す迄二時間もかゝる、一先づ自分は休むで、暫くして代る事にする、辛くも山腹に懸けられた天幕の有樣は、實に慘憺たるものである。傾いた支柱も、石の上に倚たれて居る爲直し度くとも、うつかり動かす譯に行かぬ。中は狹められて、漸く四人を入れるに足る位になつて居る。雨漏りも甚だしく、山の上手から流れて來る水は、遠慮無く天幕の下を洗つてさながら大洪水である。運び入れた荷物は足の下になつて土囊を積むだ樣だ。中では只蹲つた儘である。足下の土が崩れると膝を抱いた儘づる〳〵と滑り下りる。下の方の者はその度に天幕の裾から、下の方へ膝を突き出す。下は崖の樣になつてゐる。此の危險な位置に山室君と自分とが居る。安川君と入れ代つて焚火を續ける。脫ぎすてゝある外の人のマント迄着込む。中では濡れたものは脫いだ方が暖いが、雨風に曝されるときは、濡れて居ても餘計

に重ねる方が樂だ、間も無く藤井君がまだ顏色が惡いのに『代らう、もう大丈夫だ』と云ふのを推し止めて山室君が出る。十分程で忽ち震へ出して小山君が代る。交代の時は天幕の中は大混雜である。成る可く中を廣く取る爲に、杖を三方諸方に突張つて置くが、人の動く度に外れる。支へ直すのが厄介である。小山君もまだ無理だつたと見えて、『睡氣が差して來て堪ら無い』、焚火は安川君に自分とで受け持つ事にする。濡れた襯衣などを乾かさうとしても容易に乾かぬ。氣永に焙る餘裕も無い。此の水だらけの中で木を燃やし續ける事だけでも大事業である。蹲むだ連中が皆うと〳〵し始める、『睡つたらそれ限りだ、コヽアでも飲むで目を覺まして居なけりや困る』安川君が藥鑵に天幕を傳ふ雨水を取つて沸かす。『少し泥臭いが、ココアや砂糖で胡魔化せば飲めるだらう』と注ぎ込むだ辨當箱の熱くて持てぬ樣なのを五六回飲む。中々飲める。藤井君は、雜囊から赤い小さな箱を出す。ハモニカである。『誰か吹いて元氣を付けないか』と言つたが、一人もそれだけの氣力のある者

は無い。空しく投げ棄てられる、前途を如何と云ふ問題で總ての頭は一杯である。『動いたのが間違つて居た、彼處でトラムプでも遣つて居れば良かつた』小山君は嘆ずる。安川君も『あんな良い道があつたのだ、雁坂へ行くのが本當だつた』上も下も悉く水である、立つ事も横になる事も出來ぬ、少しの安息も無い、一個しか無かつた燐寸は一本も殘らず盡されて、是れから先、火を得る望みは無い。雨は當分霽れぬ心算らしい『今夜無事に明かされたら明日はどうしても動かなければならない、此の儘で居れば死ぬ許りだ』小山君が頻りに心細がる。『今日は梓山に向つて來たかどうか判ら無い人も通る筈の千曲川の上流としては餘り非道過ぎる所だ、秩父の眞の澤だつたらどうしよう。甲武信を廻る間に秩父の方へ踏み込むで仕舞ふ事は有り得る』藤井君も悲觀しきつて仕舞ふ。昨夜とは甚だしい變り樣である。難路をのみ豫期して、寒氣の强い事を忘れてゐた結果である。寒さに比較的能く堪へる自分と、割合に濡れ方の激しくない安川君とが健全な許りだ。『未だ取り返しのつかぬ事になつたとは思へ無い、併し最早戻るより外道はあるまい』安川君も藤井君も自分と同じ意見である。小山君は『眞の澤へ來た筈はないと思ふ。明朝此の山を登つて見たら徑があるかも知れない。引き返すのも全く險呑だから、一應は登つて見やう』山室君も賛成する。併し自分は『廣瀬まで大分かゝると思ふから一刻も早く引き返す方がよい。途を見つけるのは斷然思ひ切つて戻るに限る。丈夫な時なら兎に角、皆弱つてゐる時だ、此上勞れては仕方が無い』朝になり次第引き返すのを主張する、結局登つては見るが、餘り時間を費すのだつたら、直ぐ引き返す事にきめる。此間も愚圖々々しては居られぬ。明日からの兵糧を作らねばならぬ。生米は餘り役に立たぬから煎らねばならぬ。脊負袋の米を少しづゝアルミニユムの小鍋にかけて煎る。皆の辨當箱に詰める。自分は旅に出ると飯が餘り食へなくなる傾向がある。此日も朝飯だけで一日歩き續けた。辨當箱には飯が半分殘つてゐるから、煎米は入れずに置く。雜囊の中のパンは、豆腐の樣になつてゐる食ふ氣もせぬ。

冬襯衣もこの中の一枚は、全く水漬けである。只春負袋に替草鞋と入れ替へて腹につけて置いた方には、一縷の望みがあつたが。擴げて見ると、幸ひ大部分助かつてゐる。是のみは濡らさずに置いて萬一に備へる爲、手拭で卷いて腰に付ける。煎米は熱い内に、砂糖を混ぜて食へば、菓子の樣である。四つに詰めて仕舞ふと、出來るだけ各自の腹に詰め込むで置く。牛罐を開ける。一度に三つ食ひ盡す。空罐は尻の臺にして、痺れた足をいたはる事が出來る。胸に蠟燭を當てがひ、新聞紙で其上を覆ふので、僅かに暖を取つて居た小山君が、何時か支柱に凭れてうつらうつらとし始める。『起きろ。おい』安川君に肩を敲かれて目覺めるが直ぐ又眠らうとする。自分の位置では足首が始終水に浸つて、絶えず足踏みをして居ねばならぬ。少し止めれば忽ち感覺がなくなつて來る。十二時を過ぎる。雨が益々强くなつて、天幕は盛んに漏る。外では焚火を續けるのが、頗る困難になる。差し掛けた傘が傾き出す。直さうとすれば何時か倒れかゝつてゐた木に引つ懸つて、骨がぽきぽき折れて行く。天幕が急斜面の中間の平地に在る爲、焚火も丁度濡れた壁に薪を立て懸けて燃やす樣な工合である。薪が多過ぎれば、忽ち崩れ落ちる。これが爲に大きな焚火は出來ぬ、手近の小枝が盡きて、後方に積むだ長い樹を引き摺り上げねばならぬ。併し焚火の前の方二尺程石の多い平な處から一歩も踏み出せぬ。總べて恐ろしい傾斜で誤つて土を踏み崩したらば、何處まで轉げ落ちて行くか判らぬ。薪を引張り上げるのも、容易ではない。凄しい雨や風の音も、火を焚く者の耳には殆んど入らぬ。併し天幕に入つて耳をすませば、限り無く樣々な物音が聞える。確かに生あるものゝ叫ぶ聲、啼く聲も、響いて來る。併し風の音、流れの音に紛れて何だか判らぬ。露營も三日目になる。一團の生死の氣遣はれる場合でもある。如何に近くとも野獸の聲は、何等恐怖の念を持たずに聞く事が出來るが、深山の夜の神祕には思はず脅される。焚火の弱々しい光が四邊を照す時不圖後方を振りかへれば、朧ろな人影が徐に動く。高さは三四間もあらうか、樹々に映る自分の影と知り乍ら、再

び振りかへる事が出來ぬ。

二十八日午前四時。安川君に代つて貰ふ時になる。あとの三人は睡りを恐れつゝ半ば眠つてゐる。天幕が白々と見えて來て、山室君の手にした短い蠟燭の火影が薄れて行く。又陰鬱な朝が來る。安川君が雨水で又洗はぬ米を炊ぐ。雨は依然として降り續ける。天幕の中の慘めさよ、下に置かれて踏み躙られた上衣もマントも幾度か絞つて辛うじて身に著ける事が出來る有樣である。下を流れる水に自分の帽子は何時か持つて行かれて仕舞ふ。手拭で頰被りだ、小山君がまだ支柱に凭れた儘頻りに睡がるのを無理に起して朝飯を始める。福神漬の鑵を切つて鍋の飯の上にぶちまける、歩くには食はねばならぬと只機械的に腹に推し込む。雜嚢が肩に食ひ込み相である、五升袋は少しも口を開けぬ上に水にひたつて益々重くなる許りだ。天幕の跡には竹の皮から半分はみ出した味噌、佃煮、梅干などの食料品や、種々細かな携帶品が投げ棄てられて只雜然としてゐる。

出發となる。草鞋引き締めて寒さと不眠に蒼いより土色の顏の一同が立ち上ると、藤井君が『どうしても今日中に里に出なけりやならない、どんな事があつても里に出るんだ、それでなけりや飛んでも無い事になる』悲痛な聲である、慘として互に顏を見會はす『重い鍋なんか此處へ置いて急がう。火が焚けなければ用は無い』安川君が大鍋を投げ出す、永く此處に殘つて第三日の露營の跡を止めるであらう。白い手袋に、洋傘を杖にした安川君が先頭に立つて登り始める。濡れた海綿を踏む樣な山腹を暫く辿つたが、徒らに苔朽木のみ堆く、一歩は一歩より困難を增すのみである。遂に斷念して引き返す。午前七時。目指すは廣瀨である。今は一刻も早く此の陰慘な谿谷を脫れ出でねばならぬ。再び露營の跡を踏むで、只管に澤を溯つて行く。五人の記憶を蒐めて僅かに元來た處を辿る薄暗い右手の林を電の樣な迅さで走り過ぎる獸が居る、愕然として立ち止まれば、僅かに後半身を樹の間に黑く見せたのみで、何者とも知り難い。澤が盡きてからは、只礫石を賴りに南へ南へと突き進むで行く。『待つて呉れ、少し休むで行かう』

息を彈ませ乍ら小山君が、杖に縋つて如何にも苦し相である。暫し息を入れる內に藤井君が『又震へる、震へて仕樣が無い、今日の內にどうにかならなきや、全く飛んでも無い事になる』『工合が惡いか、體は』と聞くと、『震へるんだ、もう參り相だ』顏の色は誰よりも惡い。小さな丘を幾つか越す。藤井君が立ち止つて、『斯う道が捗取らないではどうかと思ふんだ、重い物は皆捨てゝ身輕にならうぢや無いか』、『よし』山室君は鍋などの入つた大包を投げ出す。米袋だけでも肩が拔け相な自分は紐を引き切つて雜囊を棄てる。鰹節だけは取つて腰のポケットに入れて置く。大雜囊からは鑵詰が大半投げ捨てられる、煎米があるから餘りの鑵詰だけでも節約して食へば、三日は支へられやうと云ふのである。『頂上に着いたら天幕や五升袋を置いて行かう。そして後に人夫を取りに寄越すんだ。廣瀨が見えたら、マントも上衣も脫ぎ捨てて馳け出さう。』三時頃迄には廣瀨へ下りられるぞ』此時分から藤井君小山君の弱り方が目に見えて甚だしくなつて行く。藤井君は脚だけはまだ衰へず、

ずん〳〵歩くが。自身何處へ行きつゝあるかよく判らなくなつて來たと見えて、安川君に引張つて行つて貰ふ。山室君と自分とは小山君を推し上げる樣にして行く。小山君は益々衰弱して遂には二三間毎に胸を押て膝を落す樣になる。『若し途中で日が暮れる樣な事があつては、焚火が出來ぬから天幕などはあつても役には立たぬ。生米も不用だ。其外邪魔な物は何でも目に付き易い處に捨てゝ後で人夫に取つて來させる事だ』藤井君の提議で自分は米袋を棄てる山室君が『天幕だけは僕一人でも持つて行く』と頑張つたが矢張り疲勞に堪へず同じく投り出す。『マントも脫いで仕舞はうか』と藤井君が言つたが、萬一を慮つて廣瀨が見えてからにする。小山君に頭から毛布を被せ顏だけ出る樣にして首を紐で結び、今度は緩くりと推し上げて行く。時々立ち止まつて目は半ば閉ぢた儘『水』とつぶやく、其度に少量のウィスキーを混ぜて飲ませ、甲武信の頂上までは どうにかして連れて行かうとしたが、それも駄目らしい。『こんな高い處で夜を明かすとしたら、一人殘らず凍え死ぬに定

つてゐる。僕は未だ丈夫だし、徑も一人で判ると思ふから、一足先に廣瀨へ行かう。晩までには小山君を脊負ふ人夫を連れて來る。皆は今日一日懸かつても良いから兎に角甲武信迄介抱して來て呉れ』と安川君が言ふと。藤井君が『おれは昨夜もう參るかと思つたんだ。今夜迄斯う遣つて居られるか、どうか判ら無い。行くんなら一緒に連れて行つて呉れ』。二人は直きに丘の彼方に見え無くなる。小山君は十分に休めた所爲か三十分も經つと追々恢復して來て、『緩くり行くのならもう歩ける』と、立ち上り乍ら、『人夫なんかに脊負はれて行き度く無い』、勾配の緩い處に出る。大きな立枯れの木が二本あるのは見覺えがある正しく昨日通つた所である。前に氣付かなかつたが左右の木立に伐り開きがある。『右に行くと昨日の絶頂に出る』小山君は元氣を頓に增す。雜木林、灌木林から昨日と同じく險しい岩石帶に出る。北風が凄じく吹き付けて思はず震へ上る。『もう頂上だ』。小山君は全く恢復して一人で岩を攀ぢて行く。突然下から自分を呼ぶ聲がして南側の灌木の繁みから安川君が顏を出す。藤井君も續いて來る。『下を廻つて變な所へ出たから引き返した』と云ふ。『漸く人夫の厄介にならないで濟むだ』。先程から夫許り心配して居た小山君が始めて安心する。平な岩の上に溜つた水を飲むと更に活氣付く。自分も山室君もほつと一息つく。岩蔭に風を避けて、煎米を賞美する。自分も少し許り殘つてゐた飯を食ふ。小山君は『さつき皆が餘り僕の事を心配するから可笑しくなつちまつた、休めば直ぐ直るんだ』。『可笑しい所の騷ぎぢや無かつたぜ。もう駄目にでもなりやしないかと思つて心配したんだ』。細道に出ると米が二三間こぼれて居る。三角點の石標もある。正十二時。『五時迄には廣瀨へ著くぞ。安心安心』。藤井君も大分元氣が出る。山室君を眞先に滑り落ちる樣に下つて行く。暫くすると安川君が段段遲れ始める。待つて居る間に前の三人が見え無くなつて仕舞ふ。標柱さへ見失はねばと格別心配もせずに居たが、幾ら呼むでも上から下りて來ぬ。返事も無いので、少し登つて見ると、この降り頻る雨の中を徑の眞中の岩に腰を下し傘に凭れて眠

つて居るのだ。漸く呼び覺して、『睡くて睡くて堪らなくなつたと』云ふのを引き摺る樣に連れて下りる。如何に急いでも三人に追ひ付かぬ。二三度呶鳴ると右の林の中で山室が應ずる自分等の下りて來た、道に確かに標柱があるので不審に禁へず、行つて見ると、三人が徑で無い處を下りて行き詰つてゐる。三人共『睡い〳〵』と足元も危い有樣である。驚いて一行を纏めて下りる。漸く第二の露營地に出る。切れ草鞋、破れ扇子など其儘になつてゐる。『もう先は知れたものだ』山室君安川君は大分睡氣が醒めた樣になつて先に勇むで下りて行く。小山君が再び弱り出す。山室君を呼び戻し二人で兩腕を支へ乍ら下りる。その內に又歩くに堪へずなつて膝を折らうとする。『苦しいか』と聞くと、兩手で胸を抱いた儘、『又心臟が惡い』。『苦しいだらうが、もう少しの我慢だ。休み〳〵にでも兎に角下らう。直き廣瀨だ譯は無い』。勵まし勵まし歩かせて到頭獨立標高點の標石のある處まで來る。此處は嘗て廣瀨の干板所の見えた處である。尾根は頂上から此點まで一直線に走つて、此處から五つに分れ。最も西にあるものは途中から更に二つになる。廣瀨への徑は此點から殆んど直角に曲つて、東へ數町の處から南へ向ふ尾根即ち最西のものゝ上にある。併し此のあたり總べて雜木の密林に蔽はれ、且つ熊笹篠竹が一面に生ひ繁つてゐる。我等を導く筈の標柱は、その頂を僅か二三寸鍬の上に出すか、或はすれ〳〵になつて一町置き位にある許りである。晴天の時で無くては到底標柱を傳ふ事は出來ぬ。地圖『金峰山』によれば甲武信より二俣まで一直線である。此邊の屈曲の工合は誰の記憶にも存せぬ。一行は只南へ進まうとして何れかの尾根へ踏み入つたが、暫く下つて見ても標柱は無く非常に險しい。狼狽てゝ戻りかけしが、衰へ切つた小山君は二人が如何に推し上げ樣としても一歩も踏み出せぬ。二人も既に十分疲勞して居る。再び安川君が先に廣瀨に行つて救護の者を向ける事になる。『下の方に居ては見つけにくい、此の尾根へ上つてゐて呉れ。人夫に此處いらで騷がせるから。食物や着物も持つて來さす』。萬一、此處で夜を明かさねばならぬ時の用意

に其洋傘を借りて置く。藤井君を又引張つて出掛ける。毛布の小山君を抱へ上ぐる許りにして少しづゝ登る。容易に捗取らず、例の標石に近く來ると大分暗くなる。突然安川が戻つて來る。『どうも變だ、道が判らなくなつた。南へ歩いてる筈だのに、今下りた徑を又上る樣になる。仕方がない洋傘の下に五人寄つて明日を待たう』稍平な地を求めて腰を下す。藤井君は意識が半ば不明瞭になつたらしい。時々獨りつぶやいて居る。『飛んでも無い事になる、飛んでも無い事になる』。不眠不休で此の二日間奮闘してゐる。皆弱るのも無理は無いと思ふ內に自分も少し睡くなつて來る。『水、水が飲みたい』と口の硬ばつた樣になつて小山君が微かに云ふ。水筒には最早一滴も無い。四面は全く暗いが、下に澤の響が聞える。『直ぐ取つて來る』自分が立ち上ると、『僕も行かう』と安川君も來る。山室君にあとの二人を抱へて居て貰ふ事とし、絶えず相呼應し乍ら下りて行く、次第に瞼が重くなつて來るが、澤の音は容易に近づかぬ。『家が下に見える、柚の小屋の樣だが、社の樣にも見える』。安川君が不思議な事を言ふ。此處は御料林である。怪しみ乍ら睡い眼を出來るだけ引き張つて探すが、さつぱりそんな物は見當たらぬ。『何も見えない。何かの見損ひぢやないか』。『いゝや見える、燈が灯つてる』と後方で云ふ。不思議でならぬ。頭に急に重みが加はつて來る。自分等の話す聲が夢心地で耳に響く。眼を瞑つた儘下りて行くので時々膝ががくりとなる。一切が夢とも現とも判らなくなる。『睡くて堪らぬ、此儘寢る』と云ふと、『僕も睡い、若し紛れでもすると不可いから一層戻らう、皆と一緒にならう』安川君が引返しかける。丁度腦貧血で卒倒しやうと云ふ間際の樣に抵抗し難い睡さが頭に被さつて來て、自分の體が前に傾いたのを感ずると、其儘何事も知らずなつて仕舞つたのである。

二十九日　天幕に寢てゐるとその濡れた布が顏にひた〳〵と冷く觸つて堪らぬ、足で突張ると思ふと目が覺める。マントを頭から被つて横になつて居る。裾が纏ひ付いた足を縮め、延ばさうとしてゐる。只一人である。驚いて飛び起きるとマン

トは如何にも輕い、清心丹の香がする。安川君のだ。自分が雨の中に倒れた儘眠つたのを見、裂けたマントを憐れんで、上に歸れば洋傘もあると云ふので自分のと替へて呉れて行つたに違ひ無い、情誼に感激し乍ら倉皇として登つて行つて見れば、一行は影も形も無い。笹の中の小徑を行くと、標石がある。間違ひは無い確かに昨夜腰を下した處だが誰も見えぬ。大聲に呼ばり乍ら彼方の林へ此方の林へと歩き廻つたが更に應へが無い。藤井君は呼子を持つて居たが其音でもと耳をすませたが其れも聞えぬ。狼狽てゝ時計を見れば、既に七時である。氣が付いて見ると腰に卷いた冬襯衣を手拭と共に何所かへ落して來てゐる。水筒も中實の瓶は無くて底許りである。眠つて居る内に轉げ落ちた事でもあらう。其際こんな物を失つたに違ひない。七時とあれば、一同は笹の中を轉げて仕舞つた自分を見付け兼ねて廣瀨へ下つたのであらう。過勞から來た病氣は、一晩眠れば忽ち恢復する。下りたに違ひない。廣瀨迄は二時間程で行けるから、それから人夫を寄越して昨日の話のやうに、此の近處で騷がせる事になつたのであらう。元氣な山室君か安川君か一緒に出掛けて來るかも知れぬ。併しまだ遠くは行くまい。成る可くならば、小山君では無いが、人の世話になりたくない。追ひ付けるものならば、一刻も早く追ひ付かねばならぬ。咄嗟に決心して此の見當と思はれる尾根を下らうとしたが、俄に渴きを覺えて下に音の聞える澤に下りて行く。水筒の底を椀に代へて幾杯か貪り飲む。腰の鰹節を思ひ出して取り敢へず朝餐に少し嚙ぢらうと取り出せば、連日の雨にぬるぬるとして居る。嚙むで見て容易に齒が通ると思つた刹那、手をつるりと脫けて、はつと思ふ内に下に見え無くなつて仕舞ふ。追ひかければ或は取り返せぬ事もあるまいと思つたが、僅か二時間の我慢であつて見れば、左程の未練も無い。偶然一つの古い記憶が蘇つて、暫くは食はずに居ても空腹を、覺えずに濟む方法を自分に敎へた。北極に近く住む人間達は、長い間獵に獲物が無くて貯へも盡きる事がある。彼等は帶を堅く引き締める事に依つて、飢に堪へ乍ら奮鬪を續けると、嘗て讀

むだ事があつた。兵兒帶を堅くすれば腹に力が入る。磁石は何時か潰れて方向もよく判らぬが、南と思はれる方に下つて行けば何時か廣瀨に出られるであらうと、尾根から澤に入つて日暮まで猛進したが遂に凄然とした幽谷に入つた儘出る事が出來ぬ樣になる。

＊　＊　＊　＊　＊

斯くして友に別れた。其が永遠の別れであつた。六日に至る迄、五つの尾根を殘らず踏むで道を求めて居た。密生した篠竹や熊笹や茨などを搔き分けて行く許りであつたが草鞋は切れ、足袋の底は無くなつて後の數日は全く跣足であつた。足に夥しい傷を負つた。雨は三日目に止むだ。これからは氣温も少し昇つて、濡れた儘でゐても左程の苦痛ではなかつた、空腹を感ずる事は決して無く三日目頃まで體は更に衰弱した模樣は無かつた。食事が生活の一要素である事を忘れて歩いた。

八日目九日目になると刻一刻と衰へて行くのが瞭々と知れて來た。最初は朝起き出てから日暮迄歩いたが、日の經つに從つて睡眠の時間が甚だしく增した。七日目頃からは日のなほ高い午後二時既に眠りに就いて翌朝六時頃迄其儘であつた。大抵山間の澤の傍に寢ねて水は十分であつたが、時に澤まで行き著かぬ內に疲れ切つて倒れる事もあつた。笹の葉の上の點々としてゐる露を嘗めたが、僅に舌をうるほすに過ぎぬ、其時は倒れた朽木を求めた、其上を蔽ふ苔を吸つた。喉をうるほすには椎茸が多い。山葡萄も諸處に見出したが、更に口にする氣は無かつた。胸を抑へて見れば心臟は今にも破裂するかと怪しまれた。九日を歩き續けて最も虐使したのは實に脚と心臟とであつた。六日午前死に垂んとする體を辛くも自ら製板所に運むだが、意識は尙ほ極めて鮮明であつた。此事件に就てまだ何事も知られなかつたので、一切の顚末を詳に話して救援を乞ふ必要があつた。（濱野病院にて中村孝三）

（編者）本編は秩父遭難者の一人中村孝三氏自から執筆されたるものにして、遭難の眞因を語る本編及び遭難前後一切の記事を網羅せる小山博氏編「山之犧牲」は今回東京目黑書店より發賣する事となれり。

秩父遭難に就て

前項所載の中村君の『遭難記』に據て、今夏新聞紙上に喧傳された秩父遭難記事は、大に事實の眞相を誤つてゐたことを發見すると同時に、吾々は又一行の遭難が必ずしも偶然ではなかつたとの感を切に抱かしむるに足るやうな事實をも發見したのである。一行の準備は實に周到を極めてゐたといふてよい、然しこの周到なる準備を有効に使用することを知らなかつた——或は忘れてゐたことは、一行をして益危險地域に深入せしめ、この周到なる準備あるが爲に反て遭難の程度を甚大ならしめたかの感がある、要するに一行は登山に對して未だ素人の域を脱して居らなかつた、若し充分なる登山の經驗と自信ある人が加はつてゐて一行を支配したならば、此不幸なる結果に陷らなかつたであらうと遺憾に堪えないのである。

中村君の『遭難記』を一讀された人は、容易に一行遭難の由て來る所を洞察し得るであらうが、予は一行が幾多の手ぬかりありたるにもせよ、最早二時間にして廣瀨まで達し得る地點に來り、而も充分に其事業を認知しながら終に廣瀨に出ることが出來ないで、四名が悲慘な最期を遂げた最大の原因は、實に荷物の過重と餘りに焦りたる行動とに歸因する過度の疲勞の爲であると信ずるものである。予の經驗から推すと、相當の荷物ならば、朝十時にバラ平を出發しても午後三時には破風山頂上、五時半には木賊山頂上、六時半遲くも七時には甲武信の小屋に達することは甚しく困難なことではない、然るに一行は七時間を費して漸く破風山の頂上より二三百米突下の窪地に達し得たのみである、荷物の過重であつたことは此一事でも推察することが出來やうと思ふ。其上連日の睡眠不足と旅行の後半に於ける焦慮と元氣沮喪とは、更に疲勞を大ならしめて、困憊の極廣瀨まで僅に二時間以内の距離に達しながら、遂に其處まで降ることが出來ないで途中に倒れたのであらう。予は大抵の場合常に自ら荷を背負つて登山することが多いので、荷の重い爲に體の疲れた經驗はしばしば嘗めさせられてゐる。全く體が疲勞し切つた

時には、唯だ少しも動かずに靜止してゐたいのみで、空腹であつても食物を口へ運ぶことすら手が言ふことをきかない程である。想ふに中村君に離れた後の四人は、餘り多くの時日を過さない中に斃れたものと察せらるゝ、左もなければ其中の一人か二人かゞ廣瀨に出て救助を覓めないといふことは、有り得可からざる事と思はれるからである。

予は此事件に就て詳細に研究した上、私見を書いて見たいと思つたのであるが、中村君から親しく遭難の模樣を聽き、且つ遭難の地域を實地に蹈査した一高旅行部員甲藤新君の遭難顚末記事が出版されたので、同君に乞ふて之を本誌に揭げることにした、但し本文の前半は中村君の『遭難記』と同性質のものであるから之を省き、後半のみを載せて予が勝手に題名を附したのである。僭越の罪は許されたい。

茲に一言附記して置きたいことは破不山なる山名である。此山は其形が家の破風に酷似してゐる爲にハフと名付けられたのであるから破風と書くのが正當である。秩父ではハフと唱へ廣瀨ではハブと呼んでゐるが、共に破風と書いて差支ないのである、然るに測量部では此由緒正しい字を棄てて、破不なる字を用ゐたのは如何なる理由に據つてかは知らないが、予の與する能はざる所である。又廣瀨では秩父の木賊山をハフと呼んでゐる、これは廣瀨からは此山が正面に見ゆる爲に東隣りの破風山と混同した爲に起つた誤りで、終に東をハブ西をハフと唱へて苦しい區別を付けるやうになつたのであらう、斯樣な例は他にも乏しくない。故に若し甲州方面（主として廣瀨の林業所）の稱呼に從つて文字を充てるならば、二千三百十七米突の峯には、由緒正しい破風の字を用ゐ、二千四百六十八米突の峯に破不なり或は其他の字を用ゆ可き筈であつたのである。況んや此峯に山名を記載しない以上は、二千三百十七米突の峯に破風の字を用ゐて毫も不都合を感じないこと、思ふ。予輩は舊記に從つて依然此峯に破風なる字を用ゐ、二千四百六十八米突の峯に木賊山なる名稱を與へてゐるが、中村君及甲藤君は地圖及廣瀨の稱呼に從つて前者を破不後者を破風と書かれてゐる、讀

者の疑惑を惹き起される恐があるので一言を附加して置く次第である。（木暮理太郎）

秩父遭難の原因

中村君が一行と分れて後の四人の行動は杳として知る事が出來ない。其遺骸は八月七日午前九時、製板工場から上つた捜索隊の手によつて相次で發見せられた。それは中村君の分れた場所より三四町上の一八七五米の地點から西へ五六町下つた尾根の中腹である捜索に向つた小山兄の兄さんの記錄によると安川君は夏服の上衣を脱いで木の枝にかけ俯向勝に睡るが如く倒れてゐたといふ。それから尾根に沿つて二町餘離れた場所に藤井君が之も上衣を取て胸の上に拳骨を握り上向になつて倒れてゐた。藤井君の遺骸の四五間上に皆の雜囊が纏めて置いてあつた。大きな雜囊には未だ米がアルミニウムの辨當箱に三箱、半分明けた鑵詰が一個、鰹節が三本と空の水筒三個。ハイネの詩集前田夕暮の歌集、トランプ、地圖、卷ゲートル、冬シャツ、楊子齒磨粉、藥類、コップ等が雜然と雨水に浸されてゐた。其他の雜囊には安川君の兩眼鏡が雨の爲に破壞されたのと小遣帳手帳眼鏡が入つてゐた。藤井君の雜囊には新らしいスケッチブックと脚絆が入つてゐた。藤井君から約廿間離れて山室君が上衣を着たまゝ横つてゐた。最後に小山君は其處から五町餘りの下の熊笹の茂つた恐ろしい急な谷間の中で、十數年前倒れた儘の苔蒸した枯木の下に裸體のまゝ發見された。頭部及背を露出して南向に頭を下にして右手は固く握り屈曲して左乳部に當て左手と兩足は伸して僅に臂部にて樹木に支えられ頭部には二錢銅貨大の毛髮が拐り取られてゐる。いづれも死後數日を經過して頗る慘憺たる光景を呈してゐたさうだ。

△死の原因

一行が直接の死因は到底之を解釋する事が出來ない。或は疲勞とも寒氣とも饑餓の爲とも云ふけれども一度中村君が九日間の惡闘の揚句助かつた事に考へ至れば吾々の疑念は愈深くなるばかりである。一行が如何なる原因に基いて死んだかそれ

考究する前に中村君と別れて以後一行が如何に行動したかを研究する必要があらう。

二十八日の晩中村君は安川君と共に水汲みに行く途中眠つてしまつた。其後安川君は引返して果して一行に合したかどうか。安川君と藤井君の遺骸があまり離れてゐない點を見れば安川君は引返して其晩か少くとも翌朝中村君が其處に歸る以前に殘の一行に合したと見るのが至當であらう。而して廿九日の朝中村君が其地點に戻つた時誰も居なかつたのを見れば夫以前に四人は行動を起したものと見られる。其時萬一中村君と行違ふ場合を慮つて何か書殘して置けばよかつたのだが夫迄に氣がつかなかつたものと見える。而して此際一行が一刻も早く廣瀬へ出て中村君捜索の人夫を差向ける意志を持つて動いたか或は中村君を探す目的で動いたかは解決に苦しむが而し遺骸の發見された場所が中村君の別れた場所から少し登つた上の方であるのを見れば廣瀬へ出やうとしたものとも思はれない。且又藤井君の遺骸のすぐ上に一行の荷物がまとめて置いてあつた事、山室君が手に繃帶してゐた事（中村君はそれを知らない）、安川君の持つてゐる中村君のマントが中村君の記憶以上に裂けてゐた事等によつて總合すれば一行の行動が微かに想像せられる樣に思はれる。安川君は三人に合して後廿九日朝の一同は猛雨を冒して中村君の往方を訪ねたが遂に見付る事が出來なくて引返す途中、道を誤つて一八七五米突の丘へ上つてしまつた。而して評議の結果中村君を見付ける事は到底難しいから一旦廣瀬へ出て改めて捜索の人夫を寄越す事に決して廣瀬へ出る道を求めた。其丘から西南へ出てゐる頗る歩きよささうな大きな尾根がある。一同はそれを廣瀬へ出る道と思ひ誤つて下りかけたが途中で道がなくなつてゐるので仕方なしに引返して藤井君の遺骸のあつた場所附近に塊つて休んだのではなからうか。其處で前日から甚しく弱つてゐた藤井君が再び苦しみ出したので山室君は藤井君に附添ひ安川君は廣瀬に急報せんとして南に走り小山君は水を汲まんとして谷へ下つていづれも極度の疲勞困憊により吾しらず昏倒してしまつたのではあるまいか。（之は死體の

位置によつてさう想像する丈で眞僞は無論分らない)。二十九日は猛烈な嵐だつたといふから寒氣も餘程甚しかつたらうと思はれる。かくして何時とはなしに眠るが如く此世を逝つてしまつたのであらう。死體を發見した當時既に腐敗して蛆さへ生じてゐたといふから、何日頃亡つて誰が先へ亡つたかは判然しないが食糧が案外減つて居らぬ事、中村君と別れた場所からあまり遠く離れて居らぬ事等より察すれば二十九日か三十日に亡つたものと推定される。尙參考までに其頃の天候を云へば二十六日から降りつゞけて二十九日には大風雨となつた而して三十日の晝頃から雨が止んで急に暖くなつたといふ、其夕方大雷雨があつた三十一日には多少雨が降つて午後から霽れたさうだ。

此所に吾々が疑問は何故に皆上衣を脱いでゐたか、又中村君が何故もつと早く廣瀨へ出られなかつたかといふにある。寒さが身に浸み渡つて身體ががた〳〵震へ出し殆ど凍死の狀態に入つてから再び氣が付くと急に熱を回復して身體中が火のやうになるとか、饑餓の極度に達すると苦しさのあまり無意識的に衣類を脱するものだとか云ふから恐らく其等の原因によつたのだらうと想像される。小山君は其後頭部に受けた傷が生前の傷か死後の傷かによつて色々解釋の方法があらう。若し生前樹木か岩石に打つけて受けた傷とすれば其爲めに發狂して衣類を脱ぎ棄てたものとも考へられる。死後に受けた傷とすればやはり前述の理由によつて殆ど無意識に跪き廻つて倒木の下に滑り込む際打つけたものではあるまいか。其他色々說をなすものがないではないが要するに臆測に留るので、發見の當時既にあまり時日を經過してゐたが爲に、例へ手遲れであつたにしても、も少し知り得らるべき死因の端緒を失つてしまつたのは止むを得ない。兎に角一行が密林の中に彷徨して力竭きはて倒れてしまつた其瞬時を思ひ起せば胸中忽にして無限の感慨漲るを覺ゆるのである。

次に一行は二十六日宿營地を發し破不山の尾根に取ついてから恩賜林の三角點(一八七五米よりも下)を經て破不の頂上に達してゐる。然るに二十八日の晩其三角點まで辿りついておきながら

（中村君は此所で水汲みに下りたのだ）何故廣瀨へ出る事が出來なかつたか又中村君が八日の間歩き廻つてゐる間三度其三角點に出たと云ふのに何故廣瀨へ出る道が分らなかつたか。三日前に現在通つた道が見つからなかつたのは如何にも不思議に思はれるけれども、實地を踏んでみれば大に同情すべき點がないではない。破不の頂上から南に突出した其尾根は、左右が谷に臨んでゐて如何にも立派な尾根の形をなしてゐるが、最後に此三角點のある丘を起すと急に途切れてしまつてゐる。而して實際の尾根は一段と低く平に開けて、今迄來た方向と殆ど直角に東に向つて延びてゐる。あたり一面に三、四尺もある熊笹が密生してゐて頂上からの標木はある事はあるけれども自然木を利用した頗る不完全なもので、間隔等も一定してゐないし高さも三尺位しかないから笹藪の中では目標とするに足りない。而して實際の道は一八七五米の高地と此三角點の丘との間から斜に左に逸れて此笹藪の中を横切り尾根に沿つて東に走つてゐるのである。破不の方から尾根をつたつて眞直に下りて來ると左に折れる道のある事に氣がつかずに兎角此丘に上りたがる傾がある。一旦此丘に上つてしまふと前方遙に谷を隔てゝ廣瀨の干板所に並べてある製板が白く光つて見えるものだから、うつかりしてゐれば或はをかしいと思ひながら前方の谷へ下りないとも限らない。一行が上つて來る時にどういふ道をとつたか知らないが、例の三日前に歩いた所にしても、まるで見通しのきかぬ霧の中を、而も金峯山圖幅の甲武信から南へ出た眞直な尾根と思ひ込んで上つて來たのでは、道が是から殆ど直角に左の方に當つてあるのだと氣がつかなかつたのも、まんざら無理がないと思はれるのである。

而して中村君がよくまあ八日間何も食はずに歩けたものだとは一般の驚嘆した所である。乍然之には實際に敬服すべき理由があつた。中村君は獨りになつてから、四人は既に廣瀨に歸り着いてゐると信じてゐた故に、自分ばかり山の中で死んでしまふのは殘念だといふ一念から、飽くまで理性に基いた行動をとつて、兎角かゝる場合に陷り易

い棄鉢的の感情に走つた行動を執らなかつた。最初は溪間を下つて行けば何れ廣瀨に出られると思つたので溪間に沿つて可成下つたらしい。然しあの附近の溪は兩岸が絶壁をなしてゐて下るに困難であるのみならず所々溪川其者が瀧となつてゐる所が多い。雨の激しい此際にかゝる溪間を下る事は危險であるばかりでなく、一方自分を捜索の爲め人夫が追つ付け上つて來ると思つたので、今度は晝間は人の眼の付き易い山の背を選んで歩く事につとめ、夜になると溪間に下りて草の茂みに入つて眠つた。此事は寒氣を防ぐ點に於て餘程効果があつたと思はれる。其際に脊髓を冷しては身體の爲によくないと感じたのでごろりと仰向けて寢る事をさけた。マントはぼろ〳〵にちぎれてしまつたがそれでも多少の防寒にはなると思つたので、邪魔ではあつたけれども首のまはりや腰のまはりにくゝりつける事を忘れなかつた。而して機會のある毎に飯を食ふ代りと思つて腹一杯水を飲んだり、歩いてゐる際に空腹を感ずる事があると腹に卷いてあつた兵古帶を出來るだけきつく引締める事を心掛けた。一旦志した方向が愈々行けないとなると再び引返して三角點の所迄戻り更に方向をとりなほして下りて行つた等は實に至れり盡せりと云ふ可きである。かゝる危急な場合に當つてよく之迄に沈着な合理的な行動を執る事が出來たものだと唯感嘆の他はないのである。

△失敗の原因

大學生行衛不明との報に接した時私の胸に浮んだ第一の問題は準備はどうであつたかといふのであつた。最初はやはり準備が足りなかつたのだらうと想像してゐたが其後事情を調べてみると用意は頗る行屆いてゐる。食糧品は豐富であつたし燐寸蠟燭提灯も充分であつたやうに考へられるし、附木代りに古新聞を携帶して行つた事や、往き掛に荷物の目方を量つておいた事や、隨時に焚火を得る爲に消炭（焚火の燃え殘り）を用意しておいた事等到底普通人の氣のつかぬ細い注意を怠らなかつたのである。然らば何故に四人は死んだらうか。かく迄の準備かく迄の注意をして行つても世人のある一部の人が云つたやうに青年の血氣に走

つた結果であると云へやうか。其言は吾々青年にとつてあまりに酷である。然らば全く暴風雨の威力に壓倒せられた結果であらうか。其言も恐らく當を得て居らぬ。今に至つて失敗の原因を穿鑿批評する事は亡き友に對して禮を失する嫌あるかも知れないが、原因を明白にしておく事は今後山に入らんとする人の爲に決して無益でないと信ずるが故に、暫く其事情を述べてみたい。

一行の準備は頗る周到を極めてゐる、然乍ら其處に多少の缺點はあつたのである。其缺點たるや多くの旅行にも有勝ちである。けれども幸にして格別の影響を齎らさずに濟んでゐた位輕微なものであつた。今度の場合に於て其缺點が一々暴風雨の影響と相俟つて一行の行動に頗る大なる障礙を與へたのである。其缺點を數へてみれば

第一に目的地の研究が充分でなかつた。一行は藤井君が曾て雁坂峠を超え又大嶽山から國師金峯に縱走した其經驗に萬事を信頼してしまつて何等其附近の地理に就て知る所がなかつた。それは或は無理でないかもしれない。日本アルプスに行くと云へばこそ深山幽谷に入る事と心得て色々支度もし調査もするのだけれども、秩父に行くと云へば直近所の山に登る事と考へて、何等特別の注意を拂はぬ場合が多い。然し秩父だと云つて馬鹿に出來ない、殊に奥秩父に至つては日本アルプス以上に恐ろしい幽谷もあれば密林もある。從て如何に地圖が正確でも、如何に磁石が精良でも唯夫のみに頼つて行く事は危險である。須らく詳しい紀行文か其道の大家によつて一應は地形を調べておく必要があらう。今回の如き若し破不山と甲武信岳の樣子さへ知つてゐたならば之を區別する事は至つて容易な事であつたのだ。

第二には天候の不順を顧みなかつた事である。天候は全く其時の運不運と而も程度の問題で、此天氣は大丈夫霽れる、此天氣は屹度荒れるといふ性質のものでないし、又一般に餘程激しい天氣でなければ多くの場合には霽れを見込んで出發する傾のあるものであるから、之に就て云々する事は不都合かもしれない。殊に此度の場合の如く朝方になると空が明るくなつて霧が動いて如何にも霽

れさうな模樣があつたと云ふに於ては前進をつゞけて行つたのも無理はないと思はれる。乍然一行の行程を誤らせたものは實に天候の不良であつた。若し天候があれ迄惡くなかつたならば破不と甲武信の間違を地圖と引較べて容易に發見する事も出來たらうし尾根傳ひの道を完全に通過して增富に出る事も出來たらうと思はれる。兎に角今後山に旅行せんとする人は前以て天候に注意して出掛ける可きだらう。

第三には荷物の過重である。山を歩きつけた人夫こそ八貫目乃至十二三貫目の荷を背負つて平然としてゐるけれども、吾々にしてみれば一日三貫目の荷を擔ぐのは相當に苦痛だ。殊に連日の雨天とあつては荷物は容赦なく水分を含んで重量を增す。天幕米等に於ては特に甚だしい。一行の疲勞困憊は全く此三貫餘の荷物を擔ぎながら猛雨を冒して歩きまはつた事に起因するやうだ。登山に當つて携帶する荷物は二貫目を超える事は餘程考へ物だらうと思はれる。

第四には雨に對する用意の不完全。一行は雨具としては多くはマントを携帶して行つたやうだ。而しマントは登山には絕對に不適當である。マントは雨水を吸收して重くなる、草木の茂つた中を歩くに不便である、濕つたマントは防寒具として何等の用をなさぬ、荷物を擔ぐに適してゐない等缺點を數へ上ぐれば限りがない。遭難の地點に發見されたマントの如き三つに引裂けた其裂目を結び合せて辛うじて被つてゐた其結目が又引ちぎれてゐるのを見ても、如何に籔の中を掻き分けて歩くのに邪魔になるか想像されるだらう。登山の雨具としては雨合羽か桐油紙に如くはないのである。

次に荷物はぜひ共桐油紙に包むか防水を施した袋に入れるなりして濡らさぬ事を心掛けねばならない。シャツ、マッチ等は殊に其注意が肝心である。

第五は荷物の携帶方法が幼稚であつた事である。一行は多くは雜囊を肩にかけて行つた。而し雜囊は山路にかゝると前にブラリと下つて來て如何にも歩き難いものである。殊に米袋天幕等を唯

擔いで行つたのはあまりに亂暴すぎる。既に人夫を雇はずに荷を背負つて行くと決心した以上は、背負袋に入れるなり背中にくゝり付けるなり完全な手段を採るのが至當であつたらう。

第六は地圖の見方が粗漏であつた。一行は正確な地圖と磁石を持ちながら、第一夜の下俣と其處から更に十四五町上の二俣とを取換へたのは、如何にも不覺と云ふ可きである。例へ道を敎へて呉れたお神さんが『此處だ』と云つたにしても（お神さんがかく敎へたに就ては色々說がある）若し其夜天幕の中で地圖を擴げて現在自分の居る場所を確めたらば其誤は容易に發見せられたらうと思はれる。お神さんが何故かく敎へたかと云へば元來此方面から甲武信に攀づる人は絕無と云つてもいゝのである。從つて此邊から山に登ると云へば破不山に限るのだから一行が恐ろしい子酉川の二俣を目的としてゐやう等とは思も寄らずに單に破不に登るものと心得て二俣だと返事してしまつたのではあるまいか。（此處も峠澤が子酉川に流れ込むので二股にはなつてゐる）。或は『ふたまた』を『したまた』と聞違へたのだらうとも云はれてゐる。兎に角此一言が一行の運命を支配する重大な分岐點とならうとは夢にも知らずに唯漫然と答へたものに違ない。次に尾根を登つて行く途中如何に霧が深くとも其狀態が餘程甲武信の尾根と異つてゐるのに氣がつきさうなものだつた。（中村君は其點に多少の疑を抱いてゐたらしい）。それを地圖の精密度の足りないものに歸して何等の疑問を起さなかつたのは殘念であると云はねばならない。乍然地圖がどれ丈け精密であり實際に於て一里がどれ丈の長さに現れてゐるかと云ふ事を知るのには、多年地圖と磁石とを持て歩いた上でなければ判らないのであるから、一行が出發に當つて果して地圖を賴にして歩く準備が充分に出來てゐたかが問題になる。要するに案內者を雇つて行かない以上は、もう少し地圖を信賴して詳細に氣をつける事が必要であらう。

第七に案內者を連れて行かなかつた事。吾々が案內者を伴ふに就ては二つの缺點がある。第一に肌の異つた人間を山岳旅行のやうな家族的團體に

伴ふ事は多少の不快を感ずる事、第二に適當な案内者の得られない事である。殊に第二の適當な案内者を得ると云ふ事は實に難かしい。人はよく山に入るには獵師を連れて行けばいゝと云ふけれども獵師は谷の道こそ詳しく知つてゐるが吾々の選ぶ尾根の道は殆ど知らない不便がある。樵夫は附近の山を知つてゐる丈で今度のやうに幾つかの山を縱走する場合には全く役に立たない。現に吾々が遭難地を探究した際につれて行つた人夫の如きは、測量部の測量に從事した事もある廣瀨一流の樵夫であつたがそれでも破不山の頂上から甲武信の大な頂を眺めて『あれは何山です』と聞いた位である。然乍ら準備を完全にしやうとすれば勢ひ携帶品が多くなる。從て如何に地理に通じてゐる人でも單に荷を背負はせる目的を以て人夫を連れて行くのが普通である。況や荷物も相當にあり附近の地理をよく知つて居らぬ一行がせめて天幕と米を擔がせる人夫一人位伴ふのが至當だつたらうと思はれる。

第八には記錄の作製である。之は一般に行はれてゐるかどうか知らないが今後旅行せんとする人の爲に切に希望しておきたい。即ち旅行の途中休んだ時とか村落を過る際等に時間、附近の地形其他要領をポツ〳〵と記錄しておくのである。殊に案内を連れて行かない場合には萬一引返す必要の起つた時に役に立つし、後になつて紀行を作るに當つては有力な材料を供給して呉れる。若し一行にして此注意が屆いてゐたならば三角點から廣瀨へ出る事も至つて容易であつたらう。

私は今迄に幾つか遭難の原因と見做さるゝものを擧げた。然乍ら之等の缺點を完全に除いた旅行の團體は恐らくあるまいと思はれる。けれども之迄かゝる悲慘な結果を齎らした例をきかない實に此度の慘事は稀有の特例にすぎないのである。高價なる山岳の犧牲である。此を以て直に登山は危險なりと解し登山は奬勵すべきにあらずと云ふは當を得たものと云へない。登山は寧ろ青年の元氣を鼓舞し身心を練磨する上に於て大に慫慂すべきものだらうと思ふ。

嗚呼四人の青年は逝て遂にかへらない。今更返

らぬ繰言を述べるにすぎないが出發に先つて其地方の記事（雜誌山岳九年二號に詳細なる記事あり）を讀んでゐたらば破不と甲武信を間違える事はなかつたらう。出發前に天候がもう少し不穩であつたならば或は思ひ止まつたかもしれない。路傍の婦人に道をきかなかつたらば恐らく二俣と取換える事もなかつたらう。土地の人を一人でも連れてゐれば無論廣瀨に出られたに違ない。而て若し天候があれ迄に惡くなかつたら或は金峯を超えて增富に出られたに相違なからう。圖らざりき一行が前途に於ける運命は悉く閉されてゐやうとは。私は先に旅行部關係者山口中塚櫻井三君と共に一行が遭難の跡を訪ね今茲に遭難の眞相を述ぶるに當り萬感交々胸に迫つて同情の涙禁ずる能はないのである。（甲藤新）

山案內者に對する批難に就て所感

この頃時々山案內者に對する種々な批難を聞く事がある、併しその中には往々案內者の罪よりも寧ろ之を使用する人の罪なる場合があると思はれるのである。何故かといへば、一體今の日本の狀態では山の案內といつても特に案內者としての教養を受けてそれを職業とするなどゝいふ如きものに非ずして（近時大町附近の山案內者は多少にしろ專門的山案內の色彩を帶びたるが如きも）彼は一個の獵夫であり或は一個の農夫であり一個の樵夫である、竟にこれ山間の遊牧者流であつて固より組織的の頭腦、科學的分析綜合の活作用を逞くする理智の機能を缺いて居る、宛然原人的人格なのである。勿論彼等も一種の地理に通じて居る、それだからこそ（唯普通の荷擔ぎは別として）山案內者として傭はれる資格があるのだが、その地理たるや彼等の職業に附隨して彼の頭腦に入りたる客位の知識であつて、嘗て鹿を射りしが故に忘る能はざる谷筋である、熊を求めんが爲めに發見したる洞窟である、藥草を尋ねて通行の可能を確かめたる峯脈である、固より目的は彼にあつて之に無いのだから、その親疎の別一目して明らかである。最も幾度か山案內として傭はれる中には自

然地理を主として考察もするであらうが、それとても彼の知識は山間の低き一局地を中心として周圍の高き不明なる土地への演繹的知識に過ぎない（而して彼に貴ぶべき所は實にこの知識に外ならないのである）到底登山者の有するが如き（寧ろ有すべく擬せられて至當なる）歸納的鳥瞰圖的系統的な知識は有して居らないのである。それであるから登山者は彼に求む可らざるものを求めてはいけない、即ち彼の不得意とする綜合的鳥瞰的の知識を彼に求めるのは間違つてゐる、それは寧ろ登山者彼自身に求むべきであつて彼等山人に求むべきはその局所的斷片的一種浪漫的の知識乃至人格にのみ存する。故に大局に通じて終始すべき知識即ち峯頭谷川の位置、方位地相天象等の概念は登山者が登山に先つて第一に蓄へざる可らざる要件である。殊に先年日本山岳の未だ暗黑未開であつた時代は知らず（その時代には仕方なしに山人に求むべからざるもの迄も求めたのは、日本登山史先驅者の苦心であり又悅樂であり且又滑稽である）今日は記錄地圖等、歐洲のそれの如く完備とは行かない迄も、かなり具足してゐるのであるから出來得る丈けの知識準備だけはして行かねばならない。かくして後始めて登山者は猶且彼の豫め求めて得られざりし知識をかの山案內者より得べく、茲に於て彼の登山は完全に遂行されるであらう、言を換へれば彼は山案內に對して同情を有する（彼に求むべきものと否らざるものとをよく辨別するが故に）善き登山者として愉快に收獲多く登山を果すことが出來るであらう。之に反して豫め自ら備ふべきものを怠つて猥りに之を山中荒蕩の旅の切迫つまつた場合に於て、かの憐むべき迄に無智なる而かも貴き迄に單純粗野なる彼等山人に向つて求むるならば、その結果は察するに難くないのである。固より筆者と雖も決して彼等山人に全然罪がないとは言はない、彼等とても一個の人間である、單純であり粗野である丈け又露骨な虛榮心もある（或は登山家の虛榮心以上に！）殊更徒らに登山者の信任に對して受身になるやうの場合には心にもない當座間に合せの虛言も繕らふ場合があるのである、此の場合之をゆるし之を憐

れみ自らを救ふのは登山者の餘裕ある頭腦より外にない。之なくして彼等を一朝の錯誤虛言の爲めに責めるならば、而して自ら顧みざるならば（一度顧みたならば彼は果して冷汗の湧くを覺えないであらうか）彼は耻を知らざるの譏を甘受しなければならない。

勿論之は案内に就て固有の知識の點から言つたのでこの他の點で登山者に對し惡意を有し又は害を加へるやうなのを批難攻擊するの至當なるは全く言ふ迄もないことである。兎に角實に準備（廣い意味の――必ずしも食料品や何か許りではない）の有無は登山の運命に大影響を與へる、殊に案内者の無い場合の如きはその報復一層甚だしいものがあるであらう。今次の秩父の慘事の如きにも亦多少この點に不備があつたかに聞き及ぶのは誠に殘念である、その他例はいくらもある、餘り例がある樣なので思はず一言を述べたまでゝである。（はひまつ）

立山温泉の新設備

會員今村幸男氏の齎らせる報道に由れば、

（イ）立山温泉より芦峰寺迄常願寺川の右岸（舊道は左岸にあり）に立派なる縣道開通せる由行く〳〵は温泉迄人力車を通ずる樣にすると申居れり（此點は温泉の希望）。

（ロ）富山より温泉迄警察電話開通せり萬一の場合にも便利なり。

（ハ）來年より縣廳より醫師一名を同温泉に常詰にする計畫なり。（岳雄）

伊藤德之助君へ

本誌十一年一號所載『劒岳に就て』なる文中、私が五月十日一高旅行部の例會で、劒岳の登山談を試みたる際、劒岳の案内者としては音澤村の佐佐木助七ほど信頼す可きものはないと推奬したといふやうに書かれて居りますが、これは貴方の聞違ひ若しくは思ひ違ひであると思ひます。當時私

の話を聞かれた人は少なくなかつたやうでありますから、其方々に問ひ合せれば直ぐ判然することですが、私は唯だ山や澤の名稱及その由來等に就てお話しする毎に、助七は黑部の谷に長く住んでゐる獵師であつて見れば、舊記に載せてない山澤の名稱は、彼の稱呼に從ふは當然の事であり、又從ひ難き場合にも紹介して置くだけの必要はあると信じて、度々助七を引合に出しました。然し劍登山の案内や人夫としての可否に就ては一言も申しませんでした。私は助七とは面識もなく又人夫として雇用した事もないのですから、信頼することも推奬することも出來やう筈がありません。況や助七が劍岳に關する知識經驗に乏しいことは、同人を案内として三窓から登山を企て、霧の爲に失敗した大木君の直話も伺つて居りましたし、又同人を案内とした吉澤君の記行を讀んで、三百米突も低い小窓の頭を劍の頂上と誤つたことや、八ツ峰の最南端に懸れる雪溪から前劍（此山は劍のどの峰を指すか不明なるも）へ登れると話したこと等に依り、且つ自分が二度登山した折の所見から推して、充分承知して居つたのですから、間違つても信頼す可き人夫など丶推奬することはないのです。貴方は恐らく私が考證の際に度々『助七に據ると云々』と言ひましたので、話が下手な爲に私が同人を信頼し且つ推奬してゐるもの丶やうに聞き取られて、あのやうに書かれたものと察してゐます。劍岳の案内者としては宇治長次郎の右に出るものはありません、此者ならば私は充分信頼して差支ないことを斷言します。つまらぬ誤解を招くのも不本意でありますから、一言御呈示の疑問にお答へして置きます。（木暮理太郎）

圖書紹介

日光の栞（日光案内書）

牧　駿　次　著

日光町で散策のついでに。鉢石町の十字屋で案内記や地圖の各種を見た時、最手頃で最體をなして居ると云ふ頭書の書一冊を購ふた。大正三年五

月二十日發行の本書を今頃批評するのはちと遲蒔と云ふ非難があるかなれど、紹介旁々それに關する感想を記して見るも無益ではあるまい。

四六版百二十二頁の小冊子に收めたる處のものは、日光の位置。社、廟、寺院沿革の概要。社廟、寺院の略說。日光町附近の名所古蹟。日光の山嶽。名山の案內。原野。湖及沼。川と澤。瀧の主なるもの。日光山管轄の略說。日光の氣候。日光に於ける四季の眺。日光の植物。宇都宮より日光迄。日光より湯元迄。日光植物分園。幸湖上の遊覽と壯觀。幸湖畔の養魚場。日光入湯元の溫泉。日光見物の費用と其時間。見物の方法と順序。日光町より湯元方面の道路及霧降道。旅舍と晝食所及其料金。日光の土產物。日光に於ける郵便事務。日光の宗敎。日光近傍の名所案內。遊覽臨時汽車。各地よりの汽車哩數及其賃金の外に附錄として汽車時刻表及電話に關する概略迄收めてあるのは、一地方の案內記としては、到れり盡せりと言つてよい。さればにや、當代の名士坪谷水哉、巖谷小波の兩氏が、內容まで知てか知らでか、銘々をし氣もなく賞贊の辭をならべた序文を書いて居らるる。それによると著者はもと帝室林野管理局に職を奉じた人とかで、訪問に流布する案內記が社殿寺院に厚くして、山野湖沼に薄きに失すると異れる本書がさてこそと肯かれる。卷頭には三十個の網版圖と一葉の地圖が挿んであるのは、用意の周到なるを示すと共に、其價只の二十錢と云ふに至つては、購讀者の少からざらんを思はせる。

神社佛閣は姑くおきて、吾々に直接關係ある山岳と植物とに就いて些氣付いた點を擧げて、讀者の參考にすると共に謹で著者に申上ぐる。そは『はしがき』に『書中誤謬あるを發見せられたるもの又は本書に就き高見を存せらるゝ讀者にして之を著者にまで告げ王はらば尙仕合で著者は歡んで之を迎へ版を重ぬる每に之等を參考として完全なる良書たるを斯せんとす』とあるからである。

口繪の第二圖に『日光かへでの內』と云ふ題で十枚の葉の實物の寫眞がある、多少なりとも自然に對して趣味のある讀者の興をそゝること少くあるまいが、其の名稱にはいかゞはしいものがある

やうだ、例へば、第一のオホハウチハカヘデと第七のハウチハカヘデとは同物らしく、而も第一の方が小形であるのも一寸おかしい、第三カラコギカヘデとあるはミネカヘデかコミネカヘデと思はれるし、第六アサヒカヘデと稱するはエンカウカヘデと吾々が呼ぶもの、第八コウリハダカヘデは通稱メウリノキて、第十ウリハダカヘデとあるはイタヤカヘデであること疑ない、最もモミヂの類を葉の朧氣な寫眞のみから判斷するのは危いことであるからこの位で切上るとして次に移るが、第三圖『日光町入口の杉並木』と號する寫眞は誰が見ても山内の公園の北側で、東照宮の方から大猷廟の方へ通ずる道であると疑ない、つい間違つたと言つた位ですまぬ誤謬を以て卷頭を飾る抔とは案内記として實に奇拔なやり方だ、無責任と云ふのだか誤魔化しと云ふのだか、こういふ處の心理に立至つては殘念ながら專門家に一任して解決して貰ふより致方がない。裏見の瀧の寫眞をわざわざ二枚掲げて一は現今のもの、一は昔のものを示し、水害の爲めの損傷を對照させた所は結構だが、其の『昔』のと稱するものも明治三十五年の水害後の寫眞であるのはもの足らない、せめてその前のものを示してくれたならばと思ふが、これも望蜀の念とでも云ふのであらうか。霧降の瀧の寫眞は坊間に見るものとは大に趣を異にして居るが、自分は之を霧降だと裏書するに躊躇せざるを得ない、斯の種の著書には寧ろ典型的の寫眞を出して貰ひたいものだ。寫眞について言ひ度いこともまだあるがこの位でやめて地圖にうつる。一葉の上に下野略圖、日光明細圖、及日光町略圖の三つが收つて居るが、十五萬分の一の日光明細圖と號するものは實は略圖にすぎぬもので『明細』といふ字の意義とは正反對である。加之慈觀瀧を慈眼瀧と記した位は弘法も筆の誤りの類と見のがして置かれまいものでもないが、三山掛の路が大眞子の頂上を通つて志津に出ないで、小眞子を降るや大眞子と太郎山との間を行つて居るのは前代未聞の事柄である。日光から足尾行の牛車道などは本書發行の頃には既に業に取除かれて存在しなかつた筈である。日光町略圖は眞の略圖であるが、電車

もなし、植物分園が依然として佛岩にあるのはあまり迂遠な話ではあるまいか。

さて本文に入て先づ日光の山岳と云ふ標題の下を見れば、第一赤薙山の條に『此附近に產する植物の重なるもの』として種々列擧せる中にイハウツギ、ハクサンオニナヘシ、ヘビノシダ等の聞なれぬ名もあり、又イチゲサウなど殊更に揭ぐるは如何にや。第二女貌山に產する植物として列擧せる中イワキリンドウ、オイヘランなどは何かの間違にはあらずやと思はれる。男體山上にアメザクラと云ふが產するとしてあるが、これも首をひねらねばわかるまい。太郎山にソガザクラなるものがあると云ふがこれもあてものゝ一つ。第十温泉ヶ岳の登路と來たら到底此案內書の通りに實行するは不可能と申すより外ない。『西澤金山道を一里半程登り、金精峠より右折して峯通苅拂の跡を登』れとしてあるが、金山路から金精峠の頂上まで一足飛びとは恐入らざるを得ない。しかし次に『名山の案內』なる一項を設けて、案內人夫を紹介してあるは登山客にとりては便利なること疑ない、但し湯本の吉藏は最早故人となつて居る。

原野を記する項中戰場ヶ原に產する植物中クコ、フジウツギなどを擧げたるは如何にや、又シヤコヲチドリと云ふ奇草もありといふ。又蓼ノ湖の條下にタデノコヽンロンサウと云ふものが記してあるが、これはヒロバノコンロンサウの一名なるタデノウミノコンロンサウと云ふを湖をコと讀んで書いたものに相違あるまいが、蓼ノ湖はタデノウミでタデノコではなく、殊に一端植物の名に用ゐられた以上は字は湖でもウミと讀んで貰ひたい、左もないと徒に混亂を起すにすぎない、例へばハゴロモサウとハゴロモグサとは草の字の讀み方の外變りはないのだが、實物に於ては似てもつかぬ植物で、一はキク科に屬し、一はイバラ科に隸して居る。此他植物名の誤と思はしきものを擧ぐれば、ヨロヒカン、サンカイソウ、ヒソジヤジン、ウツギキク、グレナイフウロウを初め、カゲカヘデ、シデカヘデ、ヤマシデカヘデの如き殆ど盡くる所を知らないから此邊で中止するが、誤謬も斯樣に多いと愛嬌を通り越して冷汗が出る。植物專門

の書物でないからと強いて辯護して見ても、專門、のものでない以上はどんな誤謬があつても差支ないことになるから、其筆法で推せば書肆の店頭を賑はす圖書の千中九百九十九迄は誤謬に滿て居る無責任極まる者と評價されても否めまい。それはさて置き、本書の專門なる案內的記事を更に吟味すると、七十四頁猿ヶ茶屋の條に『之より湯本まで二里に近しされど此間茶屋もなければ云々』として三本松の茶店を一言の挨拶もなく行過ぎた上、直に『古賀谷の冷水茶屋』を紹介する處などは常識を以て判ず可からずとでも申すより外はない。

以上は强て本書の瑕瑾を列擧して批評を試みたのであるが、大體の結構に於て大に我意を得た本書をして、益々完璧に近いものにしたいと云ふ微意あるに過ぎないのだ。（H・T・）

各地の山岳會彙報（四）

各地山岳會の狀況計畫に就て報道を乞ふ、本欄は廣く同志諸君の使用を待つ。

一高旅行部

本年は昨年のやうに南洋や支那方面へ海外旅行がなかつたので、專ら內地の山岳跋涉に活躍するつもりであつたが、何分天候不順の爲に、思ふやうな發展が出來なかつたのは遺憾であつた。然乍ら此春以來八班百六十餘名の部員が或は南に或は北に、愉快な旅行を了る事が出來たのは、部員諸君が眞面目な努力と、先輩諸兄の熱心な誘掖にあるものと、偏に感謝する次第である。破不山中に起つた慘事に對しては先輩とし又同好者として、我部は心から哀悼の意を表するものである。

三月三十一日より春期休暇を利用して部員二十六名は富士冨野に、二十一名は伊豆半島に小旅行を試みた。

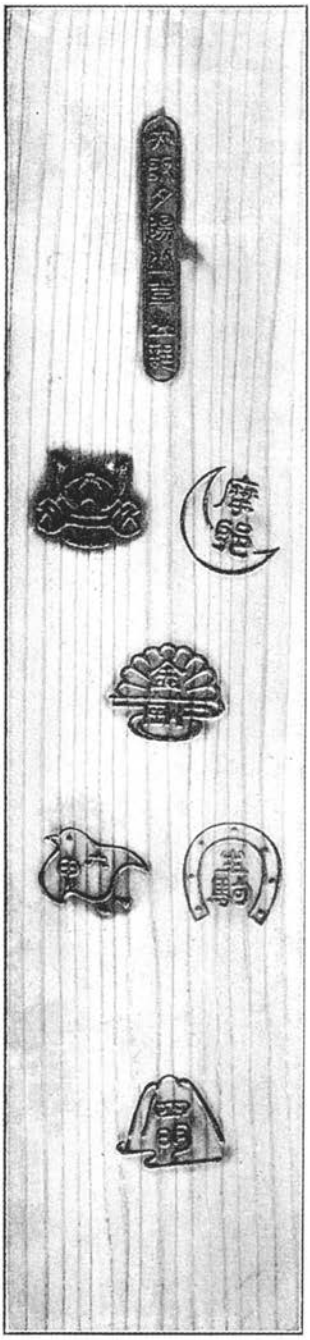
第一班　富士冨野廻り

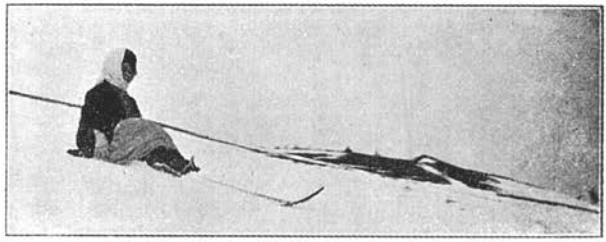
第一日　午後十一時東京驛發。
第二日　午前三時御殿場着—籠坂峠—山中湖—吉田泊。
第三日　河口湖渡船—西湖—春木ヶ原—精進湖畔泊。
第四日　本栖湖—波高島—身延泊。
第五日　富士川下り—岩淵着解散。

費用　約參圓八拾錢

第二班　伊豆半島橫斷

第一日　午後十一時東京驛發
第二日　午前三時半沼津驛着—渡船—戸田—達磨山—修善寺—湯島泊。
第三日　天城山萬三郎—萬二郎—遠笠山—奈良本泊。





女學生の登山振り

（大阪夕陽丘高等女學校登山部記事參照）

第四日　八幡野—大室山—伊東泊。
第五日　熱海—小田原—國府津着解散。
費用　參圓參拾錢

四月二十九日部員三十名所澤に夜行遠足を行ふ。十一時新宿發翌三十日午前四時所澤着。氣球研究會を訪問し午後狭山丘陵に遊んで夕刻歸京した。

五月十日午後五時半より物理學講堂にて春期講演會を開く。共に幻燈を使用し頗る盛會であつた。

一、鋸岳登山に就て　　水暮理太郎氏
一、氷河學より見たる谷　　大關久五郎氏

六月二十三日より七月二十五日に至る迄夏期休暇を利用して我部は盛に活躍を試みた。日程を示せば、

第一班　赤城尾瀨日光方面
第一日　午前八時淺草驛發—午後一時水沼着—赤城登山—大洞泊。
第二日　黑檜山登山—五輪峠—追貝泊。
第三日　戸倉—三平峠—尾瀨沼長藏小舍泊。
第四日　燧岳登山—沼山峠—檜枝峠泊。
第五日　引馬峠—川俣泊。
第六日　山王峠—戰場ヶ原—中禪寺湖畔泊。
第七日　男體山登山—馬返—日光町解散。
費用　五圓五拾錢

二十三日出發以來雨の日ばかり續いて、とう〳〵燧岳には登れなかつたが、それでも豫定を變更する事なく、二十九日部員二十四名元氣よく歸京した。

第二班　秩父奥山御嶽方面
第一日　午前七時上野驛發—十時半秩父大宮着—影森鐘乳洞—三峯山泊。
第二日　栃本—白泰山—十文字峠—梓山泊。
第三日　國師岳登山—梓山泊。
第四日　甲武信岳登山—梓山泊。
第五日　金峯山—水晶峠—黑平泊。
第六日　御岳金拔神社—昇仙峽—甲府市解散。
費用　約五圓

二十五日十四名出發。此隊も雨の中を豫定を押通して三十日甲府に解散した。但あまり强行した爲か最後の日に病人を一人出したのは遺憾であつた。

第三班　甲斐駒仙丈岳方面
第一日　午後十一時飯田町驛發。
第二日　午前七時日野春着—柳澤—黑戸山—屏風小舍泊。
第三日　駒岳—摩利支天—朝與岳—北澤小舍泊。
第四日　仙丈岳—地藏の頭—市野瀨泊。
第五日　高遠—伊那(電車)—長野解散。
費用　約七圓五拾錢

此隊は初めから希望者が少なかつたが、色々事情があつてだんだん減つてしまひとう〳〵唯二人になつてしまつた。天氣がよかつたので寂しいながらも、愉快な旅行をする事が出來たのは幸である。人夫は柳澤の水島春吉と弟の林八をつれて行つた。いづれ

も親切でよい人夫である。

第四班　日本アルプス中部方面

第一日　午後十一時飯田町驛發。

第二日　松本驛乘換—午後零時半有明着—中房泊。

第三日　燕岳—大天井岳—二俣小屋泊。

第四日　常念岳—二ノ俣池—赤澤岩屋泊。

第五日　鎗ヶ岳登山—上高地泊。

第六日　燒岳—大正池—田代池—上高地泊。

第七日　穂高山登山—上高地泊。

第八日　德本峠—島々（馬車）—松本市解散。

費用　拾參圓

希望者多數の爲に四つの隊に分つた。第一隊十一名は七月七日出發以來連日の雨天で頗る困難した。二度燕岳に登つて雨の爲縱走の目的を達する事が出來ずに引返し、三度目に二ノ俣迄潛ぎつけると今度は又、一日滯在を餘儀なくさせられた。而して最後迄踏み留つたのは五人であつたが、此連中は日本晴の十五日に鎗ヶ岳の頂上から日本アルプスの全景を擅にして、充分之迄の苦心を犒ふ事が出來た。第二隊九名は十一日東京出發。之も中房で一日滯在したが後は豫定をつゞける事が出來た。第三隊八名は十六日、第四隊十一名は十八日東京出發。豫定の行程を辿つたが、いづれも霧の中を歩く日が多かつた。

第五班　日本アルプス北部方面

第一日　午後十一時飯田町發。

第二日　松本驛乘換—午後二時大町着—大町泊。

第三日　籠川谷—針木峠雪溪下泊。

第四日　針木岳—針木峠—針木澤泊。

第五日　黑部川徒渉—佐良峠—五色原泊。

第六日　龍王岳—淨土岳—立山室堂泊。

第七日　雄山—大汝山—別山—劔澤泊。

第八日　長次郎谷—劔岳—池平峠—小黑部谷泊。

第九日　猿飛—祖母谷溫泉—大黑鑛山泊。

第十日　大黑岳—飯森—青木湖—木崎湖—大町解散。

費用　約貳拾參圓

七月十一日東京出發人員六名。雨の爲め一日大町に滯在して十四日大町發。前に百瀨慎太郎君が架け切れず棄てゝ來た黑部川の籠渡をかける人夫共人夫六名。案内は玉作と靜馬を連れて行つた。十五日に蓮華岳と針木岳と兩方に登つて針木澤泊。十六日平ノ小舍に滯在して籠渡を完成して針金を支へる樁の側の楊の木の幹に「大正五年七月十六日架線工事を完成す、一高旅行部」と彫つけた。十七日雨と風の強い中を强行して雨の五色ヶ原を見て室堂まで潛ぎつけた。十八日豫定通り劔澤泊。十九日劔岳絶頂を極め雄大な眺望を擅にし小黑部鑛山に下る。廿日祖母谷溫泉泊。二十一日豫定を變更して白馬へ出る目的で祖母谷の難路を溯り中ノ谷と西ノ谷との合流點に一泊。二十二日西ノ谷から清水平に出て朝日岳の南の谷間に露營し翌二十三日白馬の頂上に登つて日本晴の上天氣に數日間の雨と霧の旅を忘れることが出來た。葱平、白馬尻を經て細野に下り猛烈な夕立を犯して長驅大町に歸つて無事解散。

こんな具合で夏期の旅行は成功を以て終つたので漸う一段落つ

いたのを喜んで居つた八月の初旬突然破不山の慘事の悲報に接した。我々は遭難した一行の人々が多少我部に關係のあつたことや我校出身の先輩であつた事からあの事件に對して多大の同情を表し出來得る限り盡力した。四人の死―實に高價な山の犧牲であつた。

終りに臨んで旅行や講演會の度毎に多大の御援助を賜つた木暮高野兩幹事に厚く御禮を申上げます。又旅行中は大町の百瀨愼太郎氏、中房の百瀨玄三松氏、上高地の井口良一氏には大變御厄介になりました。信濃鐵道株式會社の今井折井兩氏からは色々御心配に預つたので大變便宜を得ました。此等の諸君には部員一同深く感謝して居ります。

二高山岳會

我二高山岳會も地方山岳會として設立新しき事に候へども、追追に發展し來り候、昨年十一月初雪後には泉ヶ岳（一一七二、〇米）登山を行候山頂に立ちて船形山より不忘山に到る國境連山を眺め候時は、折から山の凹所又は澤は悉く白雪を以て埋められ甚だ美事に候ひき、且は小生等の樂園のなほ人にも害はれず秘密の内に存せるを喜候ひき、明けて大正五年の春五月には不忘山及屏風岳の登山を行ひ候、不忘山はその山腹に、山躑躅イハカガミ、ハクサンイチゲ、ユキワリサウ、シラネアフヒ等殊に美しく、山頂は僅か千七百米餘の標高にて有りながら偃松黑く這ひ甚だ高山的に候、又屏風岳尾根は偃松を見ず小潅木を生じ居れども、東面の急傾斜に落ちむとばかりに積み寄る殘雪の樣美事に候ひき、又今年夏季休暇には我山岳會最初の日本北アルプス團體旅行を行候、團體と申候も、十人未滿の有志者の集りに過ぎず、第一班は豫定は針木越え、佐良峠より五色ヶ原に到り、鬼、龍王、淨土、雄山、別山を縱斷して劔澤に下り劔岳登攀を行ひて小黑部谷より祖母谷に到り、更に大黑岳に上りて白馬まで尾根縱走致す筈に候ひしかど、御存じの如く今年七月末は北アルプス北部は天候不良にて、大町にて既に二日滯在、籠川に入りて一日滯在、五色ヶ原もあらしにて遂に鬼ヶ岳を越ゆる能はず、一旦立山溫泉に下りて、立山に登候も、丁度二十九日の夜、ひどい暴風雨にて人夫宿泊用の綿油紙天幕は中央繩のあたる處より切斷するの悲慘事などあり、終に自重して立山以北を斷念し五百石に下申候、されど、天候につきて又天幕に付ては恐らく最良の經驗を得申候、然るに第二班即ち中房より燕、大天井、東大天井、常念の諸岳を縱走して、梓川に下り、餘ヶ岳に往復して上高地に到り、之を基點として、穗高岳、燒岳等に遊び、更に霞澤岳を上下して白骨溫泉に到り、乘鞍岳登山をなす豫定の一行は同日に出發し、旅行して何等天候の不良に遭遇せず、眺望、經濟すべて佳良なりし點は、聊か奇異とすべし、何せ、今年度の二高山岳會の旅行隊は半ば成功し半ば失敗したる者に有之候、而して第一班は斯くの如き始末に候ひしも、甚だ快く感じたる事は對山館の營利專門ならざる事、及大町邊の人夫の八貫目以上もある重荷を擔ひて、聊か の不滿をも洩らさず、所謂「お客樣」に忠實なる事に候ひき、前者は言はずもがな百瀨氏父子の御骨折には小生等感謝の他無之候、殊に愼太郎兄

の如き僅々二時間の睡眠を爲さるゝに過ぎず、小生等の爲に奔走し下されしより「いつそ對山館に行くのをよさうか」とも存ぜし處に有之候、大町は斯くの如くして次第にアルプス縱走橫斷の根據となるべき氣運盛に候、上高地の俗化せし今日、寧ろ大町に、對山館にありて、蓮華と蓮華を結ぶ山脈のアウトラインとに眼を走せ、鹿島鎗の雪溪に心をとめて、夏の一日（冬ならば更によき）を清き遊びに耽くるに如かずと存ずる次第に御座候。

東北人間には未だ山岳趣味少きものゝ如く候、鳥海山、岩手山、岩木山、早池峯山、八甲田山、栗駒山、月山、朝日岳、飯豐山、吾妻山、盤梯山、藏王山と名山は少からざれど、そは單に名山として登攀するに限り（學生間にありても）新しき美的研究、科學的研究等一般には見受けず、況や其他の諸火山、峽谷、山脈等はなほその大部分は秘密の鍵をとかれざるに於てをや、一例をあぐれば藏王山及烏帽子、屏風、不忘山等の二個の火山群を單に刈田岳といふが如き、又仙臺市より泉ヶ岳、北泉ヶ岳、三峯山、後白髮山、船形山等の一群を見て根ノ白石岳（泉ヶ岳の別名）と簡單に稱するが如き最も近き者に候、從て又、山麓の里人も「泉ヶ岳の後になほ山あり」と云ふに過ぎず、此邊山岳を跋涉するに際し、好案内者を得らるゝや否やも頗る疑問に候。

二高山岳會にては、元より東北山岳の研究を主とするものに候へども、前記の所謂名山のみにても容易に踏破するチャンスを得ず、とりわけ幹事及會員にありても殆ど東京方面の者のみにて、夏季、東北地方にとゞまりて靜かに山を見、谷を歩く者恐らくなき恨み有之、されば、自ら次の如くに成居候、即ち夏季休暇の始め（七月上旬）は東北山岳短期旅行、七月中旬より八月上旬にかけて、日本アルプス旅行、每學期に一回若くは二回仙臺市より一日半或は二日間にて往復なし得る山岳の登山に候、もつとも今後は、能ふ限り休日を利用して、一日も早く、少くとも宮城、山形兩縣境の山岳を片づけたき希望に候、その內、三日以上を要する者は、或物を犧牲にしてまでも、足跡を印したき、幹事等の意見一致いたし居候。

仙臺市より見え得る又は其の範圍內に於ける國境の連山中、二高山岳會にて注目し居る處を擧ぐれば、

(1)「栗駒山」最高點大日岳（一六二七、七米）及馬蹄森、鋸山、コクゾウ岳等。

(2)荒雄岳（九八四、二米）及山麓を圓形に取りまき荒雄川、小鍋山（一二六一、七米）大柴山（一〇九六米）間近傍。

(3)船形山（一五〇〇、二米）蛇（ジャ）ヶ岳（?）三峯山（一四一七、六米）後白髮（ヒゲ）山（一四二二、五米）北泉ヶ岳（一二五三、一米）泉ヶ岳（一一七二〇米）等の一群。

(4)白髮（ヒゲ）山（一二八四、二米）楠峯（一二一〇、五米）仙臺カゴ（一二六〇米?）最上カゴ（一二〇〇以上）柴倉山（一二七六、七米）鼎伏山（一二二六、七米）の一群。

(5)北面白山（一二六四、四米）南面白山（一二二五、四米）大東岳（オホアヅマ）（一三六五、八米）の一群。

(6)藏王火山群、最高點熊野岳（一八四〇、六米）。

(7)杉ヶ峯、後烏帽子岳、馬ノ神山、屏風岳、不忘山の一群、最高點屏風岳は一八一七、一米。

此等の内關東及以西の人士には元より東北人一般にすゝむべきは、栗駒山、藏王山及不忘山の三個に候、他は大抵路なく且林叢、谷の徒渉、偃松等に苦しめらるべければ趣味的登山には如何かと存候、もつとも泉ヶ岳は容姿の秀麗眺むべく、又仙臺市及附近の人には積雪時の登山よろしかるべし、今迄、二高山岳會又は會員等が登攀したる者は栗駒山の大日岳、泉ヶ岳、大東岳、藏王山の熊野岳及刈田岳、不忘山、屏風岳の數個に過ぎず、船形山附近と不忘山刈田岳間の如きその内にても早く實地踏査すべきものに候、いづれその内、此邊の記事等まとめて山岳誌上に發表致度存居候。

先は右二高山岳會につき御一報まで斯くの如くに御座候（二高山岳會幹事）

三高山岳會

三高山岳會の仕事を少し申上げておきます。個人の登山はさておいて三高山岳會として行つたのは三組北の方へ行きました、何しろ始ての人が多いので唯簡單な所ですませました。

第一組大町（七、一九）發。四谷（二十日）發。項上泊。朝日、杓子鑓（二十一日）。下山（二十二日）。

第二組大町（七、二一）發。

第三組大町（七、二九）發。白馬、天狗不歸、大里銅山。

此二組の道順と時間が記錄されて居すま。

第二組		第三組	
四谷發	二二、前七、〇〇	三〇、前八、二〇	
白馬尻	後一、四〇	同二、〇〇	
項上著	後五、四〇	同五、二〇	
		一日滯在	
項上發	二三、前八、〇〇	八、二 前六、二五	
朝日へ行き元の尾根に	一〇、〇〇	朝日には行かず	
杓子	正午一二、〇〇	同七、〇〇	
鑓	後二、一五	八、一五	
天狗露營地	三、三〇	九、〇〇	
	雨に打たれつゝ野營		
同	發二四、前七、〇〇	一〇、一五	
	著一〇、一五	一〇、四〇	
	發一一、〇〇	一二、二〇	
不歸の手前	著後一二、三〇 一時間餘午睡	一、五〇	
不歸の頂南面	二、三〇	三、三〇	
唐松岳	五、〇〇	六、一五	
大黑鑛山著			
同	發七、二五、前八、二〇	八、二 前九、二〇	
大黑尾根	一一、〇〇	一一、三〇	
	（雨）	發一二、〇五	
同下の倉庫	後二、二〇	後三、一五	
四谷著	三、三〇	—	

不歸の事はすでに吉澤氏の記事に記されてますが四谷の案内共の云ふが如くに大袈裟なものでない樣に感じました、しかし人夫は此處を通る爲に第二組には二日分を第三組には三日分を要求しました。四谷の山木主人は前に定めた通り一日五拾錢の人夫賃金を續けて行く爲に盡力せられて居るのは結構ですが人夫の中には

金の安いのを時間で引延して利する考へからか故意におそく歩んでたとへば頂上まで行ける所を白馬尻で腰を下ろす樣な事がないでもないやうです、生活費の騰貴につれて勞銀の昇騰も當然ですから昔定めた賃金に固執せずに相當の賃金は納めてそしてエフィセンシーを高める方が宜しい樣に思ひました。此感想は私の經驗からでなくて第三組の會員松代氏の話に基づいたのです、第二組の私共は軍隊生活の經驗がある細野の丸山德司が頭で外に三名働き振りも云分無いとほめておきます、しかし此の仲間を其前につれて行つた慶應の某々君の非難は無根と思ひました、しかし人夫も感情の動物ですから出方次第でどうにもなる、其邊の消息は今更私より申上ぐ迄もありませぬが人夫の非難は餘程其の雇手と對照して考へぬと隨分不當な事があるやうに思ひました。(三高山岳會山本宣治)

慶應義塾山岳會

寂しい小枯に落葉が、そちこちに、掻き集められる頃となりました。

皆樣には、會務御多忙の折から、別に御變りも御座いませんか。

今更、夏の登山の御報告もお耻しい次第ですが、皆樣の御指導に依つて育つた者、逝かんとする此年の結果を申し上げないでは氣が濟みません。

今年の私等最初の山行きは三月に富士の裾野廻りのテント旅行でした、五月には大會を催し、木暮さんの劔岳の幻燈講演は、夏期の劔岳登山隊の人員を愈增した程に、登山熱をあふりました。

夏休には、(一)白馬岳より大黑岳へ(二)常念山脈縱走(三)針木峠を越へて劔岳へ(四)穗高岳より槍ヶ岳蓮華を經て藥師岳へ(五)穗高明神岳より前穗高への五隊凡四十名の塾生が是等高峯に行く雲と共に、青春の凱歌を高唱しました、此隊は十名を越えてなりましたので、對山館の眞太郎樣には一方ならぬ御骨折に預りました。十月初め數日の休日の續きました時一隊の者は日光から赤城の方へ旅行をしました。其時、去月寫眞月報社主催の山岳寫眞展覽會へ拙なき寫眞を、又第一高等學校旅行部大會には右の外穗高槍間縱走の幻燈板等を出品致しました。

かくして今や冬を迎へんとしてなります、新しく白衣を纏ふた山岳は、盛夏には親しく語り合ふたものとも思へない程に壯嚴に沈まり反つて碧空に聳えてゐます、私等まとゐの者は人事繁き巷から此姿を仰いでは、限りなき係戀に胸が燃えるのを覺えます。

今宵餘りに靜かなものですから、年末の御報告には少し早すぎるとは思ひ乍ら右御便り致します、いつぞや、「山岳」の雜報欄に、夏期登山の報告を出してはとのお詞のあつた事を覺えてゐますが、私の怠慢から遂々、それも申し上げずに濟んでしまつたことは如何にも慚愧に堪えませぬ。(慶應山岳會員一同に代りて槙有恒拜)

京都一中山岳會旅行概況

【一】日本アルプス方面

京都—松本—稻核—乘鞍—白骨—燒岳—上高地—松本

松本―大町―四屋―白馬―四屋―松本―京都

七月廿一日午後一時、炎熱やくが如き都の空を後に急ぎなつかしき信山の地を指して立つた。そこには過ぎにし一年前に笑て迎えた、常念や槍穂高のけだかき姿は巍然として同じ姿でほゝ笑みつゝ吾等の一行に接した時の感じは謂ひ知れぬ愉快さを覺ゆるのであつた。朝露繁き五里の坦道を過ぎて梓の谿谷へかゝる頃は西の雲行が恠やしく時々は驟雨の襲來を受けたのであつたが稻核で馬車を下り六時には新道を白骨温泉に着いて初旅の疲れの脚を温泉に延ばすことが出來た。

廿三日。心元なき夏の空もだん〳〵霽れ渡り笹窪峠を越え、大野川登山道に合しアーラ峠を經て霧木帶の中で晝食をすまし。午後一時に漸く雪田に出た。そして乘鞍の鞍部に着いたのは二時、右に摩利支天、鶴池火山を見つゝ左に一の池火口壁の最高峯飯ヶ峯に達したのは二時半、思の外の好天氣であつたのでスケッチをするもの寫眞を撮るものがあつた。時間が遲いのですぐに下山することに決し一擧アーラ峠の麓に達し之れより提灯を點じて温泉に歸着したのは大分夜更けであつた。乘鞍は一萬尺の高峯であるのに係らず、途頗る平易にして富士や御岳に比して殆んど苦痛を感じないが道路其他の設備が良くない爲めに多少困難するものがある。小林區署員の話に由れば一兩年の内には白骨から鶴ヶ池火山の麓に硫黄の採掘が始まると共に林道が出來るとのことである。今日の所では平湯登山道が距離も近く亦登り易いから之れから登り白骨に下るのが順路であらう。尤も野蔘、大野川等の登山路はあるが多數の團體としては旅宿其他に適當なる所がないのは遺憾である。

廿四日。霞澤岳と安房山との間、深刻なる梓川の谿谷に沿ひつつ、燒岳の新噴火口、そして前年の噴出の爲めに、慘憺たる白樺の枯林などをレンズに收め大正の池の畔より熊笹の間を分けつゝ上高地に着。此の日燒岳に登る豫定であつたが時間が遲れた爲めに果さなかつた。

廿五日。上高地高原の朝の景色―それは吾等一行の憧憬の的である。田代の池に映る霞澤岳の姿、變幻極りなき穂高のピークに懸れる雲、そして是等靜寂無限の原始的空間に暫しも絶えざる活動の煙を吐く燒岳の貌。吾等は此の自然のそして太古そのまゝなる空氣を一呼吸する毎に、血管を循りてはかへる血潮の鮮やかさを覺ゆるのである―河童橋の畔に古代の氷河が持參したと稱する堆石の小丘など見つゝ去年と同じ道を辿りつゝ德本峠から島々を經て松本へ着いたのである。來年頃から上高地より南安島川の谷へ出る林道が出來るとのことである。

廿六日。十日の旅行の中で最も快晴なる日和であつた。新しく出來た信鐵の車窓より一々日本アルプス連嶺を指點しつゝ、是れより再び新らしき鋭氣を以て北海の雄、白馬に向て突進せんとするのである。

廿七日。四屋より白馬尻迄三里餘は今年から林道が出來て何の不自由もなく登ることが出來る。昨日は唐松、大黒、鑓、白馬の連山が手に取るやうに見えたが今日は天候恠しく雪渓へかゝつた頃には、頂上は密雲深く鎖し、風は時々雨を齎して中々寒い。一歩は一歩より急。愈平に出た頃は雲漸く散じゥルップ草、コマク

サ、タカ子シホガマ、ナンキンコザクラ等の麗はしき植物で胴亂は忽に滿ちて仕舞つた。六時に頂上小舍に辿り着き。濡れた偃松をたいて漸く暖を取たが外は雨と風とで大騒であつた。

廿八日。四時に起きて絶頂三角點に至り日出の光景を見樣としたが雲が紅に彩られたのみで見ることが出來なかつたが西の方には黑部の谷を隔てゝ立山群峯から北方一帶を見ることが出來て一同撮影す。頂上の溫度九度。小舍の西北の泉の水溫一度。歸てから朝食をすまし八時に出發幸に霽模樣ではあるが多少危險の恐があつたので杓子鎚方面は中止することにして雪渓の側にある氷河の遺跡を觀察して白馬尻で溫き晝食を認め、三時に四屋に着し。夫れから途中雷雨を冒して大町まで徒步で進擊をしたのであるが、後で聞けば甲武信破不山の遭難は此日であつた。

廿九日。今日は最後の日である十一時迄靜養、十二時の瀛車で松本を經て翌日京都へ無事歸着した。

旅行者は全部廿五名（健康診斷其他所要の爲參加せざりし者十六名）

金井、吉居、二先生、卒業生　塚本純一、林廣一、千代間光二、細見暨、松井悅二、上砂平次。

平塚正俊、岡野義雄、小野尙次、篠田統、岸本卯之助、神谷仙一郎、相馬伴臣、谷村鐵三郎（以上五年）

瀧川儀一郎、岡本就將、橋本四郎、前田東作（以上四年）

山田忠次郎、瀧川末三、大谷保、大瀧雅雄、藤江永次（以上二、三年）

【二】富士登山

初めて登山するもの又は初年級者又奬勵せんとの目的であつたのであるが、此の方面には個人として登山するもの多きが爲めに比較的少數であつた。

七月廿二日。早朝京都を出發して夕刻御殿場に着し、翌日は拂曉に山麓帶を越えた。火山としての形態。優容たる裾野の美觀に接した事のない青年には誠によい旅である。二合五勺頃よりは火山礫、灰等より成り、登るに從ひ眼界次第に廣く八合目九合目の險路を踏んで五時半頂上小舍に到着、こゝに山頂の一夜を明かした寒氣は中々强い。

廿五日。拂曉淺間神社に詣で劍ヶ峯に登る、高は一萬二千尺本洲の最高點である。風は横に雲は顏を掠めて長く立つことが出來ない、七時半大宮口を指して一擧下山、三時に大宮より瀛車に投じ翌日無事京都へ着いた。植物、火山彈等を採集して歸つた。

岩森先生、露木陽三、三吉道定、增澤健美、大橋理三、今西錦司、湯口寛二。

京都一中山岳展覽會

九月十四日より三日間。校內生徒圖書館なる靜思館に於て開催せらる、主として在校生、卒業生の出品を目的としたる會であつたのであるが、場所が割合に狹くて充分に陳列が出來なかつたのは甚だ遺憾であつた。其の內主なるもの

旅行方面の寫眞　塚本、岡野、岸本、大谷諸氏。

何れも黑人も及ばぬ見事なものばかり、特に目立たのは全紙

大に撮影せられた乘鞍劒ヶ峯及一の池附近。田代の池の朝景色。德本峠よりの穗高、夏小屋附近よりの燒岳。大正池。白馬岳及雪溪等で、大谷氏の白樺の皮で表裝せられた美はしきブックは一同の眼を曳いてそゞろに高山的趣味が味はれた。白馬、乘鞍、槍ヶ岳、御岳等の高山植物標本。相馬、大谷、大瀧諸氏、其外學校で採集せられたもの二百餘種。

富士火山彈。小形なるも可なり、露木氏。

吉野群峯、寫眞、歐洲アルプス寫眞帖、繪葉書五十枚、亞米利加各地寫眞帖。卒業生比企元氏の出品にして、昨年父君が實際觀察せられた面白き說明が附けられ、殊にアルプスの氷河の寫眞などは非常に注意せられた。

槍ヶ岳、穗高、燒岳新噴火口寫眞及歐洲アルプス氷河の地形寫眞。田中氏。燒岳噴火口の如き眞に吾人をして悽愴の感を起さしむ。槍の穗先の如き尖峯は如何に自然の力の偉大なるかに驚かざるものなく。アルプス地方U字形の地形の立派なる見るものをして其處に在るを思はしむ。

墺國式スキー用具。卒業生松井氏。同氏が比良に伊吹に毎年遠征せられたる時乘用せられたるもの。吾人をして夏は山に冬は雪に其技を練り心を養ふべき念の湧き立つを覺えしむ。

其の外館外の入口に山岳用天幕二個笑て觀覽者を迎ふるが如く、尙各自夫れ〴〵記念の日誌、繪端書、寫眞、旅行用具スケッチ、山岳に關する圖書、寫眞、幻燈器、日光男體山登山記(堀氏)櫻島火山彈、富士熔岩。

展覽會の最終日には茶話會が催され講演、談話、等が行はれた。(了)

臺灣登山會

臺北基隆淡水在住の重なる官民紳士は先年當時の民政長官內田嘉吉氏を會長とし登山會を創立し登山の催をなし來れるが去る十月八日第四回登山會を催し臺北の北三里餘の大屯山(三千六百尺)登りを企て午前五時十分臺北發瀛車にて五時二十五分士林着下車之より徒步にて緩傾斜の坂道三里を進み草山溫泉に憩ひ大雨を冒して之より二里の山道を猛進し午前十一時山頂に達す雲霧四塞風强く雨激しかりしが一行元氣にて雨中に辨當を喫し高廣縱橫道を轉じて急坂道なき處を直下し北投に向ひ午後三時北投溫泉場着雨衣を脫して入浴勞を醫し酒を酌み飯を喫し快を盡して午後七時散會せり當日會する者二十七名壯なりと謂つべし因に此日更に會則の一部を改正し新に來會せる民政長官下村宏氏を會長に推選し入會希望者に移檄し目下會員の申込取纏中にて現在會員百餘名改正會則は左の如し。

登山會々則

一、本會は本島の山川を跋涉し精神の修養と體驅の鍛錬に資するを以て目的とす

二、本會は每年適宜の時に前項の行事を實行す

三、行事實行に伴ふ實費は參會者の負擔とす

四、本會に會長一名副會長一名及幹事若干名を置き本會の行事を擔當せしむ

◎雜　錄　各地山岳會彙報(四)

五、會長は會員の公選とし副會長及幹事は會長の指名とす

會長　下村宏　副會長　新元鹿之助

幹事　賀來佐賀太郎　幹事　野呂寧

幹事　菊池武芳

大阪府立夕陽丘高等女學校

登山部近況

本誌第拾年第一號雜錄欄『女學生と登山』なる題下に我が校に於ける登山趣味の皷吹より登山部設立に至るまでの概略を記載せり、幸にして校内に於ける登山の氣風は日と月と共に益々向上して啻に教室にて學習する諸學科の外毎月の登山によりて其精神を修養し其身體を鍛練して、校内訓育と相待ちて其効果を收めつゝあり。

第七回卒業生在學中登山調査統計表

(大正五年三月廿四日)

山名	所在地	標高	登山人員	一人が同一の山に登りし最多回數	回數延人員
富士山	駿河	一二四六七	三	一	三
金剛山	河内	三九七三	一九	二	二七
比良岳	近江	三八七五	一	一	一
六甲山	攝津	三〇五九	一〇四	七	二一三
愛宕山	山城	三〇四三	二	一	二
高野山	紀伊	二八五八	五	二	七
比叡山	山城	二七九九	一四	三	二七
摩耶山	攝津	二二九〇	二五	二	三一
鞍馬山	山城	二二〇一	一	一	一
成相山	丹後	二一八一	一	一	一
妙見山	攝津	二一三七	六	二	八
生駒山	河内	二一一二	一六	四	二二
二上山	河内	一八九八	一	一	一
信貴山	大和	一七〇三	二三	三	三三
如意岳	山城	一六六三	一	一	一
笠置山	山城	一二二八	三	二	四
甲山	攝津	一〇一三	五	二	八

右は本年三月廿五日卒業せし第七回生の在學中一千尺以上の山に登りしを調査せるものにて本誌第十年第一號二〇三頁の表と比較すべきものなるが更に大正四年四月登山部を設立し本年三月に至る一ヶ年間に於ける登山部の狀況は次表の如し。

大正四年度登山部登山人員調査統計表

日時 / 山名 / 組別	四月十八日	五月九日	六月廿七日	九月廿六日	十月十日	十一月廿八日	十二月廿五日	一月三十日	二月廿七日	三月十二日	計
比叡山											
六甲山											
比叡山											
愛宕山											
比叡山											
六甲山											
春日山											
六甲山											
金剛山											
六甲山											
補習科				三	二	三			三	二	一〇

四年月組																		一四
四年雪組	二			八	三	三											二	一五
四年花組	六				一													五
三年月組	二			四	四	二												六
三年雪組				一	九													八
三年花組	二	三		一	二	三											三	四
二年月組																		
二年雪組	一	四	三	六	三	三	二	四	六	六	三八	二六						
二年花組		五	二	四	四	六		三	九	一五	四六	三四						
一年月組		九	一	四	五	五	一	六	一	一七	四九	一三						
一年雪組		一七	二	一二	七	五	三	五	三	二五	七八	四五						
一年花組		一三	一	七	四	六	三	三	四	一三	五四							
合計	三	六一	一三	四九	六一	三三	九	四四	二	一三	四五							
附添職員	一	三	二	四	四	二	二	三	六	七	三四							

本表により十回登山の内六回以上登山せし左記五名と、

七回　一年雪組　佐々木　俊
七回　一年雪組　井上　文
七回　一年雪組　森　千代
六回　二年雪組　山本輝子
六回　二年雪組　宇治治子

尙在學中を通じて一千尺以上の山に十回以上登山せし左記七名、

十九回　補習科卒業　岩田吉子
十二回　同　上　宮嶋絹
十四回　本科卒業　田村美子
十三回　同　上　中尾花子
十一回　同　上　竹腰とも
十回　同　上　八尾ひな
十回　同　上　河合美子

に對しては日本山岳會より寄贈にかゝる日本及歐洲アルプス寫眞各二葉づゝを與へて其行動を表彰し後輩の奬勵に資したり。

更に本年度初め即ち四月上旬に於て今年度に行ふべき例月登山の豫定地を選定し左の如く決定し

大正五年度月次登山地豫定表

四月二十三日　生駒山　五月廿一日　六甲山
六月十一日　比叡山　七月十六日　摩耶山
八月十二日　笠置山　九月十七日　中山縦走
十月二十二日　六甲山有馬越　十一月十二日　比叡山
十二月十七日　金剛山　一月二十八日　六甲山
二月十八日　六甲山　三月十八日　六甲山縦走

既に此のプログラムによりて毎月一回登山を行ひつゝあり。

今年暑中休暇中生徒の行動を調査せしに海水浴に行くもの、單に親類縁者を訪問の旅行をなすもの、或は避暑地に赴くもの、或は溫泉に行くもの等多數なりしが、登山せしものを調査せしに左表の如き結果を得たり。

山名	所在地	標高	人員
春日山	大和	一六四六	一
信貴山	大和	一七〇三	六
笠置山	山城	一二二八	一五
五劍山	阿波	一二二一	一
六甲山	攝津	三〇五九	六
高野山	紀伊	二八五八	三
生駒山	河内	二一一二	一四
愛宕山	山城	三〇四三	一
多武峯	大和	一六五七	一
妙見山	攝津	二一三七	三
甲山	攝津	一〇一三	二
摩耶山	攝津	二二九〇	二
金剛山	河内	三九七三	一
笠形山	播磨	三一〇〇	一
成相山	丹後	二一八一	一
箱根山	相模	二八二二	一
身延山	甲斐	三七八八	一
富士山	駿河	一二四六七	三
鷹取山	攝津	一〇九〇	一
燒ケ岳	信濃	六七七五	一
檜ケ岳	信濃	一〇二〇四	一

今九月に至り從來生徒の登山に際し春より秋にかけては多く蝙蝠傘を携帶する風習なりしも峻阪を上下するには是非登山杖の必要を見たるにより種々協議の結果登山用金剛杖を制定し更に當校の登山する山岳の夫々のスタンプを作り登山毎に之を金剛杖に烙印し同一の山に二回以上登らば其スタンプの下部へ數字を烙印して其回數を明かにし一ケ年間毎月缺かさず登山せしものに對しては賞として銀のリングを一個金剛杖に卷き與ふることゝし尙金剛杖には一本毎に番號を附し學校には金剛杖臺帳を製作し一々之を明記することゝし十二月十二日の六甲山有馬越へより之を携帶することゝせり今日まで既に百五十二本の記入を見、六甲比叡のスタンプを押捺せり。

金剛杖

一、用材、檜の柾、重量石付共一本八十匁乃至百匁

一、形、八角形にして上部に圓味を保たしむ、長さ四尺五分

握り得る邊に紐を通す小穴を開ける、

（竹下英一、朝鮮記太留）

（記者）本號に入れたる『女學生の登山振り』なる寫眞版は去冬當登山部員の攝州六甲山に雪中登山せる時の寫眞、左端に現したる印譜は本篇に誌されたる、登山記念の烙印譜なり。

雜報

會員鵜殿正雄氏は、本誌の爲め雜報欄の資料を寄與せらるゝ事多く、特に茲に銘記して謝意を表す。（係り）

燒岳と淺間山

●活動終期の燒岳　燒岳の活動は明治四十一年末に始まり同四十四年六七月に於て最盛となりしも其後淺間、大噴等と同じく次第に靜穩に歸したり、然るに大正三年霧嶋、櫻嶋等九州地方火山活動の休止と共に富士火山帶南部の南硫黃嶋『ベヨネーズ』礁等の附近海底より噴火あり之に伴ひ燒嶽も昨年六月六日更に稍顯著なる破裂をなし同山東側上部に沿ひ十町餘に亘れる狹長なる噴孔を生じたりしが山頂附近從前の爆裂火口及び西側の大硫氣孔と略一列をなすものにして硫黃岳、燒岳等を連結する北々東南々西の火山脈走向に殆ど直角なる破裂線を完成し爰に愈燒岳活動の終期を畫するに至れり。本年に入りては三月十七日乃至二十日、並に四月十二日に燒岳より多少の降灰あり又附近にて爆音を聞きしとの說あるも確實ならざりしが、去る七月下旬登山して調査せるに、新噴口の成生、舊噴口の擂破等なく、爆發に必ず隨伴すべき岩塊拋射等の形跡も更に有らざりき、唯山頂大噴孔壁東部が數十間に亘り辷り落ちたるあり、爲に從來其の崖壁に存したる硫氣孔の岩塊一部分を崩壞せしめたり、又此變動の地響きに由るものなりと見へ山頂孔壁兩端に於ても少しく岩塊を落下せしめたるあり蓋し此等變動の結果として稍や多量に灰を飛散せしむべく、又大なる雪頽の如くに音響を生ずべきも素より少しも噴火的活動の現象と認むべき點は無きものとす。然るに昨年と著しく相違せるは燒岳と硫黃岳との間なる中尾峠の道路南側に於ける地熱の變化なり、此個所は徑約十間にして從來地熱の爲め苔類を除きては草木を生ずることなかりき、其地熱は昨年七月驗測せるに最高溫度攝氏六十七度なりしに、今回實見せる際には高熱區域は徑約二十間に擴大し最高地溫は攝氏八十八度となり、前年に比して約二十二度の溫度上昇を示すに至れり。地熱現象は櫻嶋にも其の例ありて、同嶋西北部西道區の輕石地層徑約二町の地域內に地熱の增昇惡臭瓦斯の發生あり爲に同區域內の樹木悉く枯死するに至り、地熱は攝氏六十四度に及びしが、此の地變の始まれるは昨年三月頃櫻嶋の破裂餘勢が全く終熄せる際に當り結局其の關係より生ぜる終期現象に外ならざりき。燒岳の場合にありても破裂的活動が昨年六月を以て終れる爲山腹舊來の裂罅に沿ひ熱度を散出せしめて地熱を增昇せるものなるべく、敢て活動再始の前兆などゝ見做すべきものには非ざるなり。且燒岳噴孔の白烟が本年に及びて甚だしき亞硫酸瓦斯の臭氣を帶ぶるに至れるも大嶋、淺間、櫻嶋と等しく目下の噴火活動期が終局に達せる特徵を示すものなりと思はる。

（五、八、一三、信、每）

●淺間毒瓦斯を吐く

震災豫防調査會の大森博士は長野測候所神林技手と共に廿八日淺間山に登りたるが廿九日三十日は暴風雨の爲め頂上に登る能はず三十一日漸く登山し一日下山直に長野縣廳に來りて赤星知事を訪ひ最近の淺間山に關する報告を爲したるが同博士が登山して直に殆ど知れる範圍に於て例なき異現象として驚きたるは噴火口より常に見ざる多量の亞硫酸瓦斯を吐き居る事にて夫も平常の淺間山は多くは群馬方面に煙を噴出し信州方面即ち淺間微動觀測所の方に煙或は瓦斯を噴出する事は殆ど稀なる例なるに近來に至りては觀測所の方へ來り惡硫酸瓦斯は每日とは限らざるも多くの場合には芦の平邊まで來り爲に强き刺戟性を有する亞硫酸瓦斯の臭氣は鼻及び咽喉を冒し呼吸困難なるのみならず觀測所附近の草は皆枯れて生色なく湯の平附近に生たる白樺及び淺間槐の葉も悉く枯れて褐色を呈し目も當てられぬ慘狀を呈し居れり亞硫酸瓦斯の毒は尙之のみに止まらず夫より以下に在る落葉松の本年伸びたる新芽も昨今は稍硬くなり居るにも拘らず之も亦凋落して生色を認めずと云ふ大森博士は風の容子を測りて辛ふじて頂上に至り南西の口壁に湧き出て居れる湯の溫度を測らんと種々に苦心したるも亞硫酸瓦斯の爲に遂に觀測を爲す能はず其まゝ下山したりと斯く昨今多量の亞硫酸瓦斯を噴出する事は大森博士の說に依れば火山の活動が衰へ活動期の末になりたる爲なるべく又噴煙は活動期にありては噴煙は勢よく噴出すれども急に切れ煙も早く消滅して其切れ間より口內を望見し得れども昨今は濛々たる煙は不斷に口內に漂ひて切るゝ事なく容易に望見し得ずこれ噴煙の力の甚だしく弱りたる爲にして活動の末期に入りたる他の一證左なり而して更に又考ふる所に依れば霧嶋、櫻嶋、大島、燒岳、淺間等日本に於ける火山は今より百三十年前に於て相前後して大活動を爲し夫より百三十年を經過したる數年前又もや各火山の大活動を見たり是れ各火山とも皆聯絡あるが爲にして百三十年は其週期と見るべく今各火山に次いで淺間も活動の末期に入れる事は當然の如く思はる之を見れば淺間は今後更に百三十年を經過したる際には再び活動を開始するやも知れざれど夫までは茲數年來の如き大活動は無かるべきかと、尙同博士が本縣知事を訪ひたる際知事に對して淺間は前記の如く近年稀なる亞硫酸瓦斯を噴出し居れるを以て登山するものは爲に咽喉を害すのみならず其多量なる襲來を受くる時は窒息する事も無しと云ふべからず然らずとも之を避けんとして逃げ惑ひ岩角に倒れて負傷するもの頭を割るもの等を出すべければ登山には極めて不適當にして斯る際には成るべく登山して實ひたくなしと然るべき周知方を依賴し去りたりと。（五、八、四、信、每）

御嶽山

●御嶽山萬年雪消ゆ

木曾御嶽山頂一の池二の池間に東北に面した斷崖下の積雪は例年酷暑の候にも尙ほ厚さ一丈餘長さ數十間に亘りて氷結し古より萬年雪と呼ばれて有史以來消え盡したることなしと傳へられ登山者は何れも神の雪として押戴き或は瓶に詰めて持ち歸るを常とし來たのであつたがそれが本年は昨冬來

の降雪の少かつたのと盛夏から引續き殘暑の酷しかつたとにて過般の雨に溶け盡して全くその跡を止めざるに至つたので土地のものは頗る殘念がつて居るとのことであるが來年からは萬年雪でなくて大正雪とでも名づけなければなるまいと言つてゐる、因に七月十五日開山以來九月二十日の閉山當日迄に王瀧黑澤の兩口を經て上つた人員が實に六萬餘人に達し昨年に比して三割近くの增加を示して居るが一萬尺以上の高山として斯の如き多數の登山者を有するは殆ど絕無と言つて宜からうとのことである。(五、一〇、六、信、每)

●御嶽頂上の物價　十五日に開山された御嶽山は今年は例年よりも增して登山者多き模樣なるが昨今頂上物品販賣所の物價を聞くに麥酒四十錢サイダー二十二錢味噌汁二錢五厘卵六錢草鞋六錢餅六錢甘酒四錢夜具一枚七錢なりと。(五、七、二八、信、每)

八ヶ岳の高山植物採取と取締

八ヶ岳の高山植物を採取せすとする者は南佐久郡臼田小林區署長宛採取願を差出し其許可を得たる者に限り一種類一莖又は一株を限度とし採取し得る筈なるが『八ヶ岳シノブ』『八ツ岳ヨモギ』『黑花のヘウタン木』と『雲間金風草』とは嚴禁されあるが本年は高田師範學校の平野、宮嶋、荒川、小林、土居の諸教諭を出願の第一に出願者非常に多く已に昨年の夏期を通じての總數に比する程に達せる由、猶八ヶ岳山中本澤溫泉に投宿せる前年の人員は九千人の多きに達し此中の約三分一即ち三千人は登山を試みて植物を濫採する者に屬し斯ては高山植物の絕滅せん虞れあるより明年は或は保護林に編入さるゝやも知れずと。(五、七、二〇、信、每)

◎雜　報　八ヶ岳の高山植物採取と取締

赤城山中の遭難

久米助手の死體　日光赤城兩山の植物採集の爲め登山し行方不明となりし東京農業大學博物實驗助手久米政民氏(八二)は群馬縣勢多郡富士見村字篠輪赤城山御料林日向松と稱する小高き所に於て慘死し居るを四日發見せり前橋警察署長安間警視は本紙に依りて久米氏に似寄りたる青年あるを知り記者の勸告を容れて健脚なる渡邊巡査部長清水巡査の一行をして捜索の爲め出發せしめたり一行は三日夕刻勢多郡敷島村大字深山に赴き取調べたるに政民氏に似寄りの青年去月二十三日午後四時頃大雨に惱まされ悄然として深山を距る一里半の赤城山御料林間杉原の炭燒小屋中島德吉方へ一泊し二十四日午前七時頃赤城山大洞に赴く道を詳細に聽きて出發せりとの事實を確めたるより一泊の上勇を鼓して四日未明雨を冒して大洞に赴き該所は勿論大小沼尻並に靑木旅館等を取調べたるに似寄りの者は宿泊したる形跡なきに落膽し所々を捜索せる後勢多郡敷島村大字深山方面を捜索すべく下山せり然るに深山二〇河井清吉が四日午前十時頃栗拾ひを爲さんと同村の人家より約十數町を去る赤城山大洞へ行く道より約三町を隔たりたる赤城山御料林日向松と稱する小高き尾根に行きしに一個の死體あるを發見し驚きて同村區長阪田唯次郎に屆出で區長は騎馬にて午後七時前橋警察署に急報せり一方渡邊巡査部長の一行は深山に下山せる

赤城山中の遭難

◎雜　報　赤城山中の遭難

に死體を發見して大騒ぎを爲し居る所に差蒐りたる爲め直に現場に出張して檢視を遂げたるに青年の死體のありし場所は赤城山西南方に當り勢多郡橫野村大字溝呂木より登山する道と同郡富士見村箕輪より登山する道の中央にて同所は尾根續きにて十八町下れば箕輪に出で二三町歩めば赤城山に登る馬道あれば迷ふ筈のなき處なるも久米氏は深山を出でゝより大洞方面に到り有名なる鈴ヶ嶽に登りて植物の採集を爲し下山の途中同所附近が馬道に近く附近一帶牛馬の放牧地なる故馬道の馬の足跡と放牧牛馬の足跡とに迷ひ窮地に陷りたるものか或は濃霧深くして道を迷ひしものか二途何れかに因るものなるべし死體は洋服を着せる儘惨死し居たるが外套の襟に久米と縫込みあると傍にありたる鐵葉製の採集鞄及び新聞紙と深山に泊りたる青年の服裝其他に似寄り居る爲め正しく久米氏なること判明したるが死體は一先づ富士見村役場に引渡したり惨死せる原因に就ては不明なるも死體を檢したる醫師の談に據れば他殺にもあらず又餓死にもあらざるが附近の狀況より見れば非常に苦悶したるらしき形勢あれば多分癲を起し悶死せるものなるべしと。

▲炭燒小屋の一夜　政民氏は山中に迷ひ寒威に襲はれ一夜の宿を乞ひし炭燒小屋の主人中島德吉氏は語つて曰く久米氏は午後四時頃大雨中に來り赤城山に登山する者なるが困難せる故一夜の宿を賴むとの事に一家は喜んで宿をせしに同氏は東京の者にて植物採收の爲二十二日午後東京を出發し同夜澁川町に一泊し八崎溝呂木を經て之より赤城山に登山するなりと語りたるが其他の事は何も語らず翌朝に至り五十錢を宿料に出し無理に與へ立出るより德吉は案内せんと言ひたるもいらずと斷り一人で行くと答へたるより詳細に道を敎へたるに喜んで立出でたり以上の談話に依つて見るも政民氏は日光に行かず二十二日夜上野驛を發し高崎驛にて下車し澁川迄徒歩し同池に泊りたるものなり。

▲俯伏の儘絶息　捜査主任として赤城山を突破し死體を發見せる渡邊巡査部長は其惨狀を語つて曰く、久米氏が惨死せる所は森林にもあらず密林にもあらず十七八町を出れば箕輪村の人家あり鷄の聲さへ聞ゆる程の處にて死體は栗の木と檜の木の下に下向きとなり伏し居り外套を脱しあり採收せる植物鞄新聞包の植物は帽子と共に一間程死體より隔れたる一段小高き所にありしを見れば同所より落ちたるものなるべし兩手には土を掴みたる痕あり面部並に咽喉部に擦過傷あるは落る時に傷つきたるものならん所持品は現金六圓三錢時計一個地圖一葉にて一品も紛失し居らず全く病氣の爲死せる事明かなり。（以上前橋電話）（五、一〇、六、東、朝）

▲某文學士も橫死した場所　久米助手惨死の報を携へて下澁谷なる私立東京農業大學を訪れたるに一職員は愁然として語るやう『四日の朝突然群馬縣勢多郡敷島村大字深山村の石田龜衛と云ふ村民から伊吹庶務主任宛で一葉の端書が舞込ました、其文面には『廿三日午前十一時頃お尋れの久米さんらしい洋服を着た廿八九歲位の青年が深山村まで來て、赤城山へ行く道を尋れましたから其の道を敎へましたが青年は洋傘と鞄を持ちその晩は同山の炭燒小屋で一泊すると言つて居りました』とあつたのです、仍で學校では打棄てゝ置けないと、職員の秋山博氏及び久米氏の同鄕生である岩塚某と云ふ二人が四日の正午取敢ず高崎へ行き警察

と捜索上の打合せをすることにしました、其の矢先き其地の管轄警部が箕輪附近で死後六日程經過した屍體を發見したと云ふ電報が、秋山氏から來たので、更に學校から代表者を現場へ急派しやうと協議中、五日の正午に前橋の警察から學校宛に「澁川から赤城方面へ出る途中の敷嶋郡附近の箕輪山中で捜索隊の巡査が死後六日位經た青年の屍體を發見したが、廉の洋服を着て胴籃を携え、洋服の裏には久米と記してある」と云ふ電話が掛りましたので、茲に全く久米氏の死が確實になつた譯です」云々と又右に就き同地方の地理に精通せる某氏は語るやう『久米氏の經路は日光方面から中禪寺へ出て湯呑溫泉を經て利北郡赤城根村方面へ出で、絲之漸、久呂保兩村を過ぎて深山村へ這入つたものであらう、赤城は甲信國境のやうな深山ではないが、案内者なしでは跋渉に困難である、山路以外は梅林や雜草が身を沒する位で、此の地方は雨天になると濃霧の爲めに咫尺も辨じないこともあります、且つ冷氣は初冬の感じがする位で、四五年前にも某文學士が案内者を連れて居たにも拘らず、苦惱の結果横死した例もあります、久米氏は飢餓と寒氣のために身體の自由を失つたものでせう』。（五、一〇、六、時事）

涼榻閑話

▲野呂寧君　私は山が好きで隨分登山もしてみたが、臺灣の山岳美は恐らく天下に多く類例を見まいと思ふ。これが未だよく世間に知られて居ないのは遺憾な事である。斯ういふ熱帶地の殊に東洋への中繼所たる臺灣に於て山地の遊樂場を設け、永住者に慰安を與ふると共に、之を名所として香港上海あたりに居る西洋人を集め其富を吸收するは最も快心のことゝ思ふ。

▽場所として選ぶならば好い處は多數あるが、高山峻岳は交通も不便だし登るにも骨が折れるから差當り霧社附近が可からうと思ふ、あの邊は櫻の名所で春一二月頃には蕃舍の周圍畑地及び溪底から山腹にかけて緋櫻が咲き、溪谷其地には白い李や梅が咲いて之等が紅白入り亂れ、其間を清い溪流が縫つて居る景色は何とも云はれない、加ふるに、近くは能高、蒿萊主、合歡の諸山が聳え、遠く南には巒大群山、新高山を望み、北の方遙かにシルピヤ山を白雲模糊の間に眺むる景色の雄大なるは畫にも筆にも及ばない。三月には白櫻が咲く、之れは内地の山櫻に似て、中腹と云はず谷間と云はず峯にも尾にも雪を欺き、五月には白と薄桃色の石楠花が針葉樹の間岩角に初夏を彩る。

▽夏になれば綠が深くなつて、其處此處の山腹斷崖に素練を懸けた大瀧小瀧が松、檜、偃松の間から隱見されるのが如何にも涼しい、中でも合歡の瀑布は高さ千三百尺日本第一を以て稱せらるゝ、高山植物の目を歡ばすものも到る處にあつて之を摘むの樂しみも盡きない。何しろ霧社支廳の所在地が四千尺、立鷹で七千三百尺、櫻ヶ峯が八千百尺、合歡山が一萬千二百尺といふ高さだからその涼しさは格別で、立鷹に於ても七十度以上に昇ることは稀なり、極暑中と雖も夜は厚い裳を重ねなければならぬ、健康狀態も至極好い。

▽若し夫れ合歡山上の朝暾、守城大山より埔里社平原に沒する落

◎雜　報　涼榻閑話

日の眺めに到つては天下一品平地にのみ住する人の夢想だも許さざる大觀である。月夜は殊に空が澄んで四邊が寂としてゐるから仙境にでも入つた氣がする。朝は早くから空が紺碧に晴れ渡り、九時十時頃になると谷間々々に靄が立籠め、それがみる間に卷き上つて山を閉ち込めるが、高山の上から視てゐると一面雲の海となり山頂のみが點々突出してゐる樣宛も島のやうにも見える。

▽此の立應附近には七八町の平地があつて池だの林だのもありホテルを設けるには絶好の場所である。道筋を云へば、埔里社——海拔千五百尺——から三里半トロに乘つて眉溪を溯り霧社の溪底に出で、其處から山を登ること一里にして支廳、三里餘にして立應、一里半にして櫻ヶ峯に達する順序だが、此間先年太魯閣蕃討伐の際に道路が出來溪には鐵線橋が架かつてある。傾斜がさう急でないから特に氣の弱い人でない限り繞に來て婦人小兒と雖も登る事が出來る。

▽又霧社から東に行つて濁水溪に出ればタロワンの溫泉があり、尙其先二里にはマヘボの溫泉がある、現今は假小屋が設けてあるに過ぎないが少し手を入れゝば良い溫泉場になる。蕃人に繞を昇がせて山路を辿る趣も面白い、此邊の蕃人は以前は馘首したものだが今では全くそれもない。吾々始終蕃山に入るものからみると蕃人は土人よりも親しみ易い人種なることを感ずる。

▽若し他日私の希望の如く相當の金をかけて大遊園地を設けることゝするならば上述の溪流又は瀑布を利用し水力電氣を起して埔里社立應間七里半に電車若くはケーブルカーを架設することも極めて容易である。本島に來遊の西洋人にして日月潭の名を聞いて探勝に出掛ける者はちよい〳〵あるが景觀遙かに雄大なる霧社に遊ぶものゝ少いのは返すがへすも恨事だ、尤も日月潭も霧社に大遊園地を造る場合には沿道名所の一つとして相當の設備を施す必要があらう。（五、六、一六、臺灣日日）

會報

信濃鐵道割引乘車券發賣の事

信濃鐵道全線開通するや、同社は本會々員の爲めに同社線全線に於て會員に限り割引乘車券を發賣せらるゝの厚意を寄せられたり、本會は同社と協議の結果左記の如く會員諸君に通知を發したり。

拜啓

今般信濃鐵道株式會社線全通致し候に付ては同社の厚意に由り、同社線全線に對し左記規定に由り、本會々員に限り割引乘車券發賣致さるゝ事と相成候に付き此段此通知申上候

右信濃鐵道は信州松本市と大町間に布設されたるものに有之從來白馬岳、針ノ木峠、高瀨川、中房溫泉方面に登山順路としては院線明科驛に下車馬車にて大町其他の方面に向ひたる所右信濃鐵道開通の結果中房溫泉方面は同社線「有明驛」に、白馬岳、高瀨川入り、針ノ木越へ等は「信濃大町」驛に下車相成候はゞ宜しく、時間の經濟と便利は、其比なしと云ふべき次第にて候

◎會報　信濃鐵道割引乘車券發賣の事

右鐵道沿線の案内書は左記の册子發賣され居候につき就て見られ度候

信濃鐵道案内　金參拾五錢　郵税貳錢

發行所　松本市白板　信濃鐵道株式會社

追て右割引券は七月一日より發賣さるべく候

信濃鐵道乘車券割引證交附規定

一信濃鐵道株式會社は本會々員に限り同社線内片道三割引を以て割引乘車券を發賣致し候

一右割引乘車券購求の節は本會の發行せる信濃鐵道乘車券割引證に各事項記入の上右と引換に購求せられたく候

往復乘車券御求めの節は割引證二枚を御渡し相成度候

一右割引證は記名御本人に限り表記期限内有効に有之候

一割引乘車券に就ては同鐵道規則其他一般鐵道に關する諸規定に準據する儀と御承知願上候

一本割引證は他の割引乘車券に就ては無効に有之候

一會務上又は信濃鐵道株式會社の都合上右割引證の御交附を御斷り致す事之れあるやも計り難く候

一右割引證は本會々員諸君に限り御交附致すべきものに有之御姓名年齡及御所用の枚數御記入の上三錢郵便切手（返送料）御同封の上本會事務所に御請求相成度同一人に對し一

◎會　報　山岳寫眞展覽會　會員登山報

時に四枚以上御交附致さず候

今回の割引は七月一日より九日末日迄實行したりしが、割引券發行總數百六十餘枚にして、同社の厚意は本會の最も光榮とし喜ぶ所にして茲に銘記して深く感謝の意を表す。

山岳寫眞展覽會

十月十二日より二十日迄寫眞月報社主催の許に東京市日本橋區本町小西本店樓上に開かれた。

此れより先き本會へも出品の依囑を受けたので、喜んで出品する事にし、寫眞、圖書登山用具等一般に渡りて出陳した。

開期中十七日夜『針の木越えて劍へ』と題する四十枚及び『穗高槍の縱走』十餘枚の幻燈映寫ありて何れも原撮影者たる慶應山岳會々員槇氏、宏氏の說明あり、多大の感興を以て迎へられたり。

今回の此計畫は、山岳趣味の普及、登山趣味の傳達に云ふべからざる貢献をなしたりと云ふべく、吾人は斯る同じ道に歩まんとする道づれの現れたる事を嬉悅以て迎へざる可らず、吾々は吾々のみにて歩むべからず、必ずや世と共に進まざるべからず、斯る事を企てられし方々の勞を多として、斯る非世間的の仕事に努力を吝まざりし方々に感謝の意を表せざるべからず。（岳雄）

會員登山報

△仙臺附近も例年になき不順の天候にて秋らしき日も無之、折角の休日には雨降りて登山旅行も失敗多きがちにて候、先月二十七日吾妻山に初雪降ると新聞に報道せられてより、又この新雪が昨年より三十日、例年よりも二十日早しとの事に、急に登りたく相成り、今月十四日より三日間の休日を利用して學友市瀨氏と二人にて仙臺を出發致候、庭坂驛に下車、吾妻山の雲にかくれたるを危みながら高湯に向へば、果して姥ヶ堂あたりより降雨あり、この夜は兎も角も高湯溫泉信夫屋に一泊候も翌日はなほ劇げしき雨にて終に歸仙の止むなきに到候、信夫屋の黑澤米太郎氏によれば、一切經山より西大嶺迄の縱斷は雪ある時に行ひ得る由、東大嶺迄は、一切經山より一旦谷地平（ヤチ）に下り登攀するものゝ如く言ひ居り、且、高湯より檜原に到るには三日を要すべく候、案内者は黑澤米太郎氏の他には、高湯にはなき樣なるに、黑澤氏も、商賣の方忙しければ、吾妻山縱斷も常に可能とは申されず、高湯溫泉は硫黃の含有量多く、銀側時計、會員章なども、丁寧にしまひなきたる

にもかゝはらず、變色致候、尾瀧の事ども乃至佛山の記事簡單粗雜ながら何かの參考にもならんかと存じ同封致候間、左樣御承知被下度候。（十月十九日沼井鐵太郎）

二伸、市瀨氏は一人高湯より微湯（スルユ）湯泉に到り翌日（十六日）霧と風とをつきて一切經山迄決行すべく登山せしも、案内者の注意により遂に噴火口より下山され候、聞く所によれば吾妻山はその前一週間ばかりも天候不順なりし由、微湯は湯泉ぬるく且、西吾妻の方迄案内し得るもの皆無と申候、先日初雪と言はれしも或は例の霧の花に非るかと我々二高山岳會の連中は申居候、但事實の有無ば未だ確め候はず。

△實は山より歸り直ちに報告旁御禮を申上ぐる筈でしたが竹下君が出しておくとの事で終無性を致しまして相濟みません、會員東君の希望を入れて（日數上の）大町から這入るのを止めて芦峅寺から參る事に致しました處が東君は急に桑港へ轉任する事と相成爲めに竹下、山口、小生の三人にて七月廿日の夜汽車で出發し廿一日芦峅の佐伯忠胤氏宅に參りました、前以て劍登山に堪能なる人夫を依頼しておきましたので翌日五名の人足と巡査と共に彌陀ヶ原から室堂に參りました、翌廿三日は長次郎谷の入口までの豫定ですから朝ゆる〳〵と地獄廻りをして其北方の尾根を無理に登つて別山乘越まで行き此にて晝食し更に劍の尾根に行く考で登山地圖に示された、芝草の良好なる露營地に向つて進行中急に大雨にあひまして人足共は殆んど全身餘す處なきまでに濡れて此で人足がもう行く事は堪忍してくれとの弱言をはく事になりましたので種々と口のすくなる程おどしもし激勵もしましたがだん〳〵取調べて見ますと五人の内一人も劍へは登つた事のない人間ばかりなので實は此に初めて自分共は一本佐伯氏にかつがれた樣の氣持が起つて參りました、或は佐伯氏も何も知らないで誰れでも案内の出來るものと思つて居たのかも知れませんが、登山口の日本山岳會員としては餘りに賞めた事ではないと思ひます要するに越中の人足共は（大部分）立山參詣者の中繼をした經驗こそあれ他の山でしかも雨と戰つて進むと云ふ術を知らず又防寒防水の準備も殆んど知らないと言つて差支えないと思ひます、こんなことで何だか三人とも劍行にけちがつきましたので今年は登らないと決心して其日別山富士の折元大海雄山とこれ丈けを歩んで又々室堂に歸りました、處が幸ひ大町の直吉が人夫二人と丁度明日針木から大町へ歸ると云ふので（客は室堂まで送り越せし八高の學生）早速越中人足は免職させて廿四日から直吉等をつれて淨土から龍王鬼ヶ岳ザラ峠を越して五色原に初めて天幕生活の一夜を試み翌日午前中此に滯在（寫眞と植物採集に）平の小舍に下り此で針木峠を越さんとて道に迷ひたる金澤商業學校の學生三名を助けて吾が一隊に入れ翌日針木峠の頂上に幕營翌朝蓮華へ登らんと存ぜし處濃霧の爲め果さず大澤洞まで下りて此にて朝食兼晝食をとゝへて午後三時對山館に着仕候芦峅の方を餘り自分共が信用しすぎたのが源因かそこは少し分明いたさず候へ共今年の登山はさつぱりお話になり申さず候、劍岳に登らんとして登れざるの記でも書かんかと存候。（朝輝記太留）

△岡野德之助君と二十一日に東京を出發栃本に宿り二十二日荒川を溯り眞の澤の上の木賊平の廢屋に野營致候翌日三室山甲武信岳

木賊山を極め破風山を越えて雁坂嶺の頂上へ着きし頃は日は全く暮れ倒木亂堆の中を暗中模索し雁坂峠の上へ降りし時は六時過ぎに相成候ひたゝと打寄せる雲海を突破し遠く東天に聳えたる富士は眞黑に候ひき連嶺を吹き荒れて來る雁坂風雲海の下より綿々として響き來る鹿の鳴聲に心往く迄深山の秋を味ひ午後八時になつて漸く舊丸善製板所第一工場に辿り付き候。

峯渡る雁坂風は鹿の聲
雁坂を出て西山の時雨かな

何れ原稿出來候節は御送り申上候。（十月廿八日冠松次郎）

高山深谷第八輯の豫約募集

高山深谷第八輯は例年の如く明年春、若葉の香る頃机上を飾るべし、總て豫約に於てのみ頒布さるべき事毎輯の如し、詳細なる事項は本誌廣告欄に就て見られたし。

第九回大會豫告

毎年五月最末の日曜日を以て、本會大會開催し來りつゝありしも、講演上の便宜と、來會者諸君の便利を考慮して約一ヶ月を繰り上げ四月下旬となすべきの議あり、諸事決定次第御通知はすべきも、豫め御承引あらん事を乞ふ。

「山岳」編輯所

本會幹事小島久太氏渡米不在中「山岳」編輯所を左記幹事木暮理太郎氏方に設置せり、原稿に關する用務一切は編輯所に御申越を乞ふ。

東京市本郷區駒込蓬萊町三一
木暮理太郎方
「山岳」編輯所

編輯係より

漸く本號を御送附致す事になりました、前號を發行致しましてより約二ヶ月かなりの努力を致しました、幸にして會員諸君の御援助に由りまして

內容外觀共に茲に一冊とする事が出來ました。

山岳界多事なりし大正五年も本號を以て送り、山の幸多かるべき六年を次號を以て迎へんと致します、會員諸君の年新たなると共に益々山の爲めにも健かにいよ榮えん事を祈つて茲に大正五年を送ります。

本號は挿畫の都合と調査の爲めに次號に廻したる原稿が一、二御座います、筆者諸氏及び會員諸君に御詫びを申上ます、本號には成る可く多數の挿畫を入れました、然しどうも一方に偏して居りますが、此れは本誌の性質から申しても止むを得ません事で御座います、從來共に山岳の挿畫はさうで御座いましたが、成る可く普偏的に入れますつもりで御座います、惡しからず御諒承を願上ます、其代り挿畫は出來る丈け精選して居ります。

原稿、寫眞、繪畫、山に緣あるものゝ總ての御寄贈、御貸與を切望致します。

本號に轉載致しました、遭難記は秩父遭難者の一人中村孝三氏の自記されたもので、特に本誌に轉載致しました、そして木暮氏の一文は其れの註釋とも云ふべきで御座います、兩々相待つて秩父の慘事の眞相を語つて居ります、今更らに遭難者諸氏を憶ふて止まざる次第で御座います。

本號の挿畫の內木暮氏の記文の中に入れたる三種の繪は何れも會員茨木猪之吉氏の執筆で御座います、又『山に登る人三人』の崖を攀ぢて居る所は、アルプスの Wilde Frau で御座います、南日木暮兩君の登山振りは其當時茨木君からの畫信を拜借致しました、（本誌田部（南日）氏の記行參照）表紙は會員富田溪仙氏に畫いて頂きました、例の如く印刷にすると原圖の筆趣が出ません、筆者に對して申わけが御座いません。

訂　正

本誌前號に附して會員諸君に配布したる會員名簿の內左記の如く訂正す。

長岡市吳服町　特別　松田周平

新入會者

東京市芝區白金今里町一四三　沼井鐵太郎
紹介者　今村幸男　高野鷹藏

東京市京橋區南傳馬町二ノ五　目黒四郎
紹介者　齋藤直一　宮本璋

東京市本郷區駒込林町一九五　宮川久雄
紹介者　箕作新六　伴野清

東京市小石川區水道端町二ノ四三　田中薫
紹介者　齋藤直一　宮本璋

横濱市山手六十四番　Dr. Paravicini
紹介者　F. Mendelson　近藤茂吉

東京府荏原郡目黒村大字中目黒十番地　高畑棟材
紹介者　塚本丈助　高野鷹藏

校正者　木暮理太郎
高野鷹藏

大正五年十二月廿三日印刷
大正五年十二月廿八日發行

定價 金七拾五錢

著作權所有

發行兼編輯者 新潟縣三島郡深才村深澤 高頭仁兵衛

印刷者 横濱市太田町五丁目八十七番地 村岡平吉

印刷所 横濱市山下町百〇四番地 福音印刷合資會社

發行所 横濱市本町四丁目六十七番地 高野鷹藏方 日本山岳會事務所
(振替貯金口座東京四八二九番 電話特長百七十一番)

發賣所 東京市神田區表神保町 東京堂

山岳需供欄

會員及び讀者の爲めに本欄を設けて、無料にて其使用に便せんとす、仲介すべき物品、事件は山岳に關聯したるものたるべし。

供給

△登山用として、最も適當なる、テッサーレンズ附小形佛國製双眼寫眞器、（ペラスコープ）チェンチングボックス、燒枠、スクリーン、三脚、鞄一切附屬、賣却したし。

（姓名在事務所）

需要

△雪國の雪中旅行具及び登山用具を集めつゝあり、便宜を供されん事を、各位に望む。

（高野鷹藏）

△會員諸名の爲めに、東京美濃津商店は、其發賣に係る登山用具を割引すべし、本會は右の爲め會員證明書を提供すべし、往復はがきにて申込れたし詳しくは本誌前號を見られたし。

（事務所）